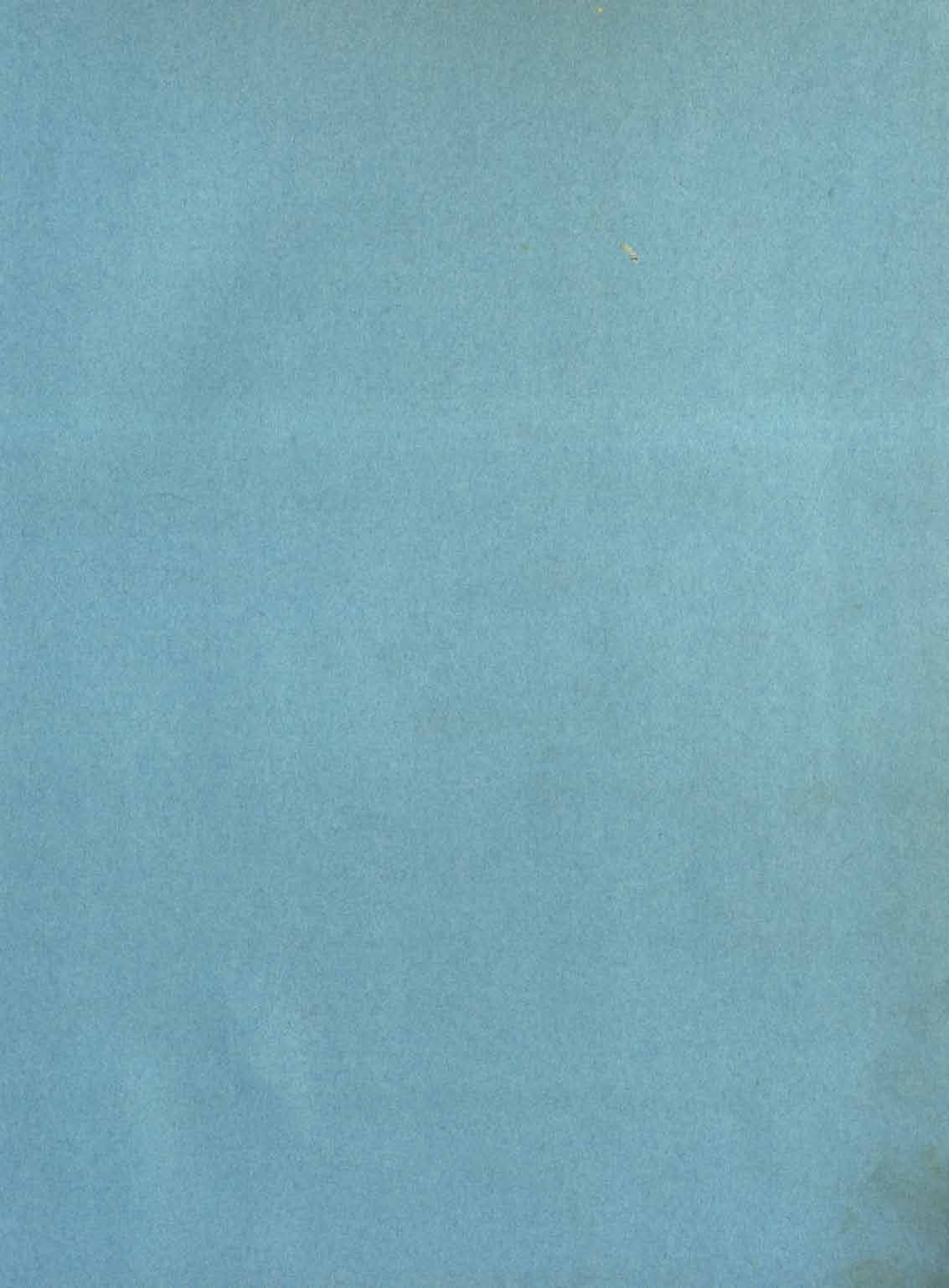
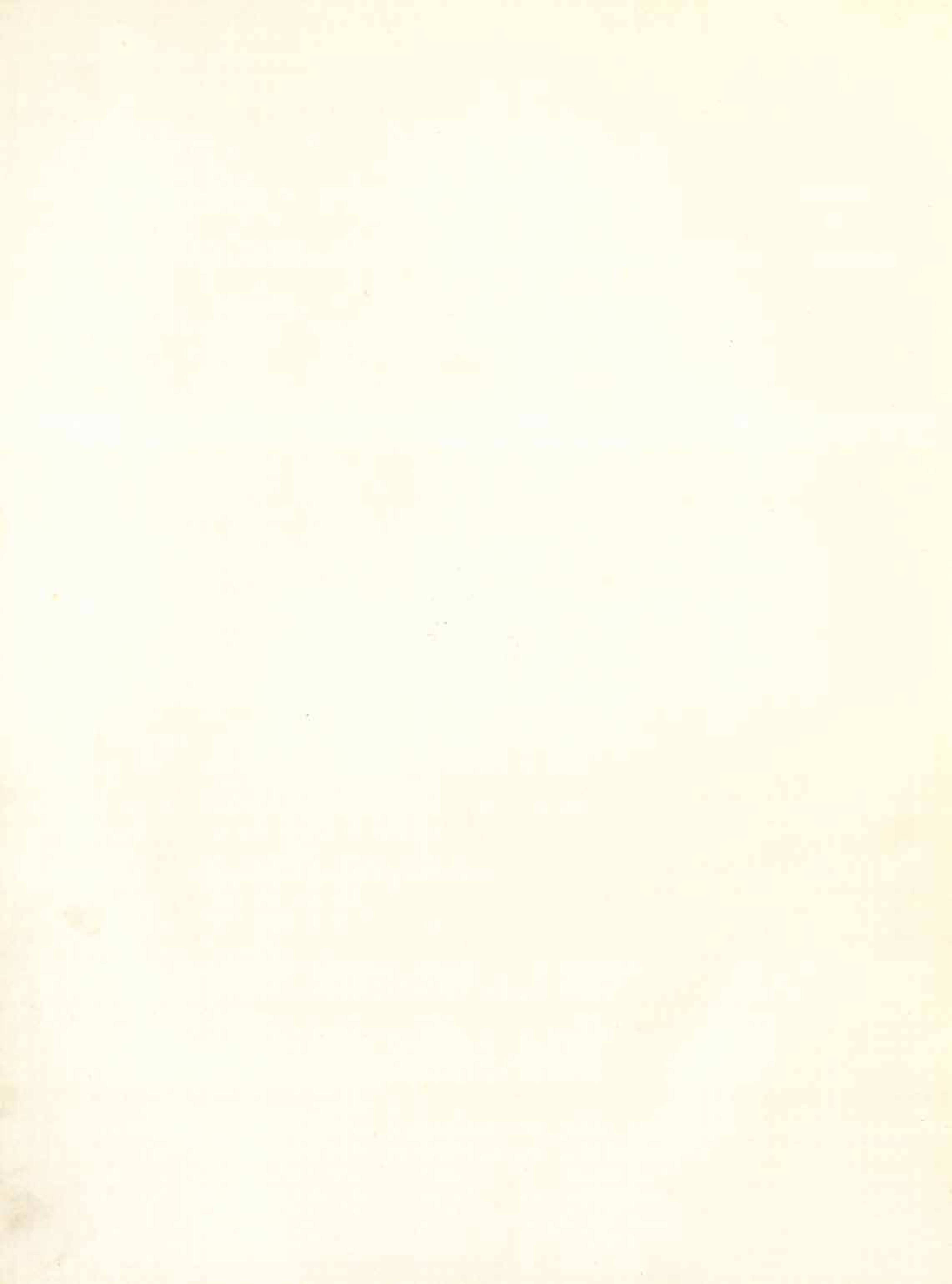
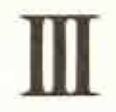




デ リ ー

DELHI



III



PUBLICATION OF THE TOYOBUNKA KENKYUSHO



ARCHITECTURAL REMAINS OF THE DELHI SULTANATE PERIOD

DETAILED REPORT OF ARCHAEOLOGICAL SURVEY
CARRIED OUT BY THE MISSION
FOR INDIAN HISTORY AND ARCHAEOLOGY
THE UNIVERSITY OF TOKYO

By
TATSURO YAMAMOTO
MATSUO ARA AND TOKIFUSA TSUKINOWA

PHOTOGRAMMETRY
TAICHI OSHIMA

VOLUME III
WATERWORKS

TOKYO
THE INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE
THE UNIVERSITY OF TOKYO
1970

東京大学東洋文化研究所研究報告



デリー諸王朝時代の建造物の研究

山本達郎

荒　松雄　　月輪時房

写真測量

大島太市

第三巻

水利施設

東京大学東洋文化研究所

1970

東京大学インド史跡調査団報告書

写真撮影

三枝朝四郎

PHOTOGRAPHS BY

ASASHIRO SAEGUSA

PRINTED IN JAPAN BY
THE UNIVERSITY OF TOKYO PRESS
東京大学出版会

序

東京大学インド史跡調査団は，1959年春に結成され，同年10月末から翌1960年3月にわたって現地調査を実施し，13世紀初頭から16世紀前半にいたる，いわゆるデリー諸王朝時代の建造物に関する研究に着手した。その後，1961～62年に短期間の補足調査を実施し，現地において蒐集した各種資料の整理を行なうとともに，それに基づく研究を続けてきた。この調査団は，東洋文化研究所を中心に組織され，測量および作図作業の一部については，本学生産技術研究所の協力を得てきたものである。

以上の調査・研究の成果の上に立って，山本達郎・荒松雄・月輪時房の諸氏により，1967年，東洋文化研究所研究報告として，『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』，第一巻「遺跡総目録」が刊行された。これは，デリー地域に現存するサルタナット時代に属する各種の建造物を網羅的に取り扱ったもので，おそらくは，わが国のみならず，インド・パキスタンあるいはイギリスを始めとする海外諸学界においても，これまでその例をみなかったものと思われる。これに次いで，1968年には，第二巻「墓建築」の公刊をみたが，これは，「遺跡総目録」においてとりあげた各種遺跡のうち，とくに墓建築についてさまざまの観点から考察したものである。

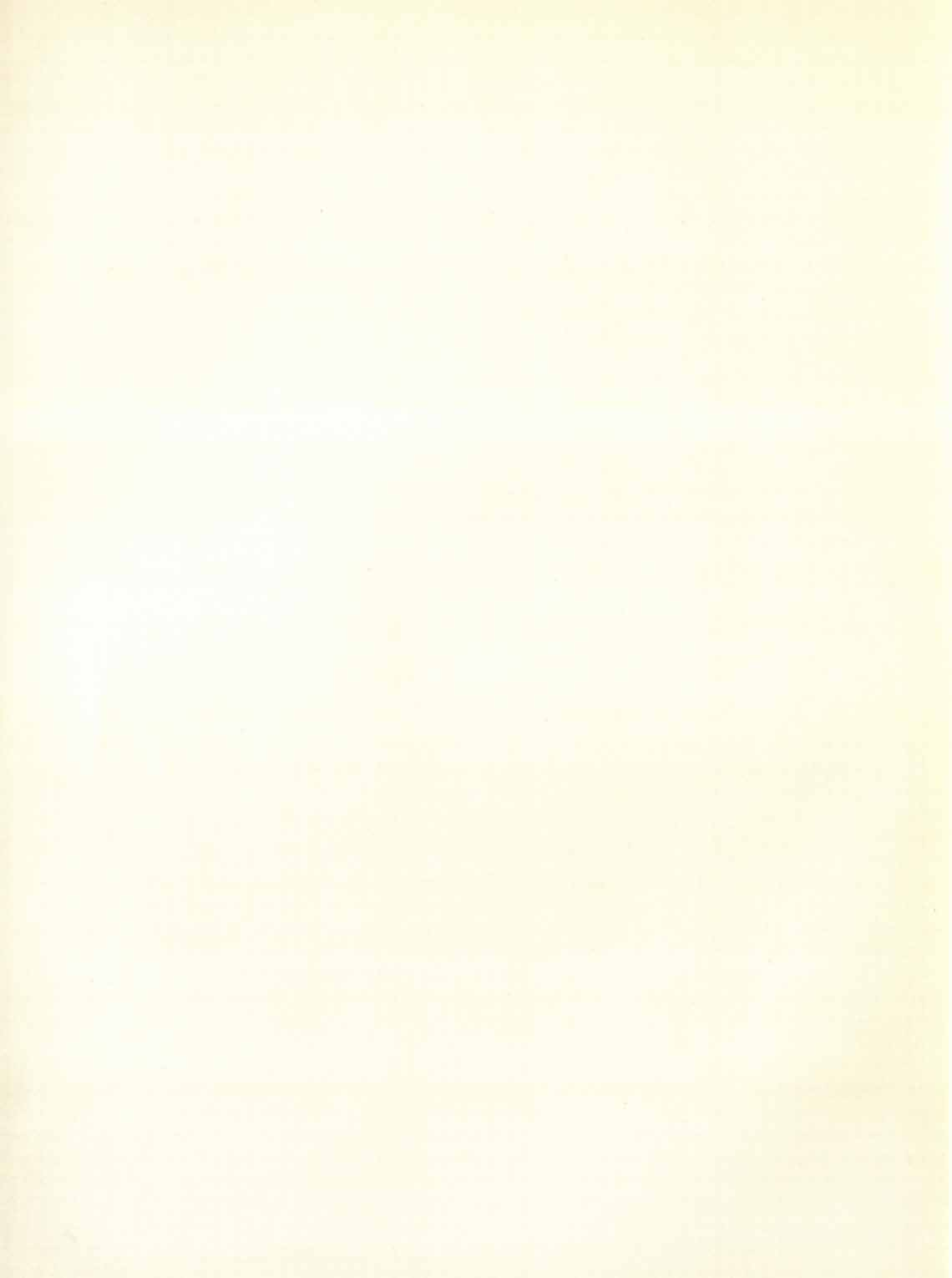
ここに，同報告書第三巻として，水利施設に関する研究の成果を世に問うことができたことは，まことに慶びにたえないところである。本巻もまた，前二巻と同じく，ひろく学界を稗益するところがあれば，幸いこれに過ぎるものはない。

これらの報告書について，当初の出版計画としては，モスクに関する報告を含めて全4巻として完結される予定であった。しかし，研究対象が尨大であり，かつ，出版についての時間的制約もあって，本研究所としては，この第三巻の刊行をもって，一応の区切りをつけることになった。この10年間に蒐集・整理された各種の関係資料は，本研究所に保管される予定になっており，将来においても，これらの資料を基礎とする研究の成果があらわれることを望むものである。

このような長期にわたる調査と研究は，もちろん，関係者の努力に基づくところが大きいのであるが，一方，本研究所内外における多方面の方がたの援助と協力なしには成就されないことはいうまでもない。この点に関して，関係者及び研究所を代表して深く謝意を表する次第である。

1970年2月

東京大学東洋文化研究所長
小　口　偉　一



序　　言

1959年度に最初の現地調査を実施して以来，われわれは，約10年間にわたって，中世インドのデリー諸王朝時代の建造物に関する調査・研究を行ない，すでにその成果の一部を2冊の報告書において公けにしてきた。『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』の第一巻「遺跡総目録」(1967年刊)と同第二巻「墓建築」(1968年刊)とがそれである。

ここに公刊する第三巻「水利施設」は，さきの第二巻「墓建築」および未発表のモスクに関する報告とともに，諸王朝時代の建造物に関する種類別研究の一環をなすもので，デリー地域に現存する水利建造物を研究対象としたものである。この時代の遺跡のなかで，水利施設は，研究対象としてはこれまでほとんどとりあげられなかった。しかし，これらの建造物は，本来，民衆の生活様式や生産関係にかかわりをもつ性格のものであり，当時の支配層による経済・社会政策と密接な関連をもって建設されたものが多く，他の建造物に比して特異な歴史的意味をもつものである。われわれが，水利施設の遺跡に一巻の報告書をあてた理由の一端も，またそこにあるといえよう。

ところで，既刊の報告書においても述べてきたように，われわれの調査・研究は，専門分野を異にする少数の研究者・技術者による協同作業に基礎をおきつつ，新しい視点と方法とによって，さまざまな研究領域にまたがる未開拓の分野に挑むことでもあった。従って，資料の作製，研究あるいは出版などの面で，各方面の方がたの協力と援助とに依存しながらも，それらの作業の実際の過程においてさまざまな困難に直面することとなり，そのため，当初は予想もしなかったほどの著しい精力と時間を費消せざるを得なかった。報告書第一巻が，当初の計画の予定を超えて1967年に至ってはじめて刊行の運びとなったのも，このような事情によるところが多かったのである。

当初の出版計画においては，第一巻たる「遺跡総目録」につづいて，モスク・墓建築・水利施設をとり扱う種類別研究3巻を含む少くとも4冊の刊行を1969年度末までに完了する予定であった。しかし，一年一冊の報告書出版は，限られた人員をもって研究ならびに作図その他の資料作製作業を並行して行なう場合，決して容易なものではなかったのである。結局，われわれは，東洋文化研究所における出版事業としては本巻の刊行をもって終結し，インド史跡調査団を解散することとした。もちろん，モスクに関する研究をはじめとして，われわれにはなお多くの問題が残されている。当面は，本研究に関係してきたものは，各人の問題意識と方法とに基づいてこれらの諸問題の解明に努力し，研究成果をさらに拡大していかなければならないと考えるものである。

近年，わが国の学界においても，共同研究の必要がつよく叫ばれ，またその反面，従来の学問研究の内容および研究体制のあり方についても再検討が要請されてきた。われわれは，約10年に及ぶ共同研究の過程で，専攻分野を異にする研究者の交流と連帯とがいかに必要かつ有益なものであるかを学んできたが，同時に，それを推進するためには，少くとも共同研究に参加する研究者個々の主体的な責任に対する厳しい認識が前提にならなければならないことをも痛感した。この点に関して，われわれの側に反省すべき点があったこと

を銘記しておく必要があると考える。

本巻の執筆については，これまでと同じく，荒と月輪とがこれを担当した。山本が総括した図面の作製作業については，巻末に「附録」を設けてその経過と内容とを明らかにしておいた。この作図作業に関しては，第二巻の場合と同じく，本学生産技術研究所の丸安隆和教授をはじめ写真測量研究室の方がたの協力を得たことをとくに記しておきたい。

最後に，われわれの調査・研究と出版事業とに協力され，あるいは種々の点でご教示をいただいた多くの方がたに対し深く感謝の意を捧げるとともに，われわれの研究内容に対し，今後とも各方面から忌憚のないご批判を寄せられることを期待するものである。

1970年2月

山本達郎
荒　松雄

インド史跡調査団の構成

山本達郎　団長
荒松雄　副団長（歴史学）
三枝朝四郎　団員（写真撮影）
大島太市　団員（写真測量）
月輪時房　団員（考古学）

今城治子　（専任事務）
木村源蔵　（図面作製）

技術協力
東京大学生産技術研究所
写真測量研究室

目　次

序　論

第一編　個別的研究

第二編　総合的研究

本報告書の執筆の分担は，つぎのとおりである。

冒頭の「序論」は，第一章・第二章とも，荒がこれを担当した。

第一編「個別的研究」については，第一章から第四章までは，第一節を荒が，第二節を月輪が執筆した。第五章については，第一・第三節を月輪が，第二節を荒が担当し，第六・七・八の各章については，第一節の歴史的背景に関する部分を荒が，地理的環境の部分および第二節を月輪が執筆した。なお，本編における月輪の執筆分については，山本との討議を経た結果が含まれている。

第二編「総合的研究」については，第一章および第四章を荒が，第二章を月輪が担当した。第三章については，第一節の2，第二節の2・3および第三節の1・2を荒が執筆し，第一節の1，第二節の1および第三節の3は月輪が分担した。

図版に用いた写真は，三枝氏の撮影になるものである。図版および挿図に使用した図面については，山本が総括し，大島氏と月輪とが作製作業を推進してきたが，具体的製図作業には木村氏に負うところが多い。なお，この詳細については，巻末の「附録」を参照されたい。

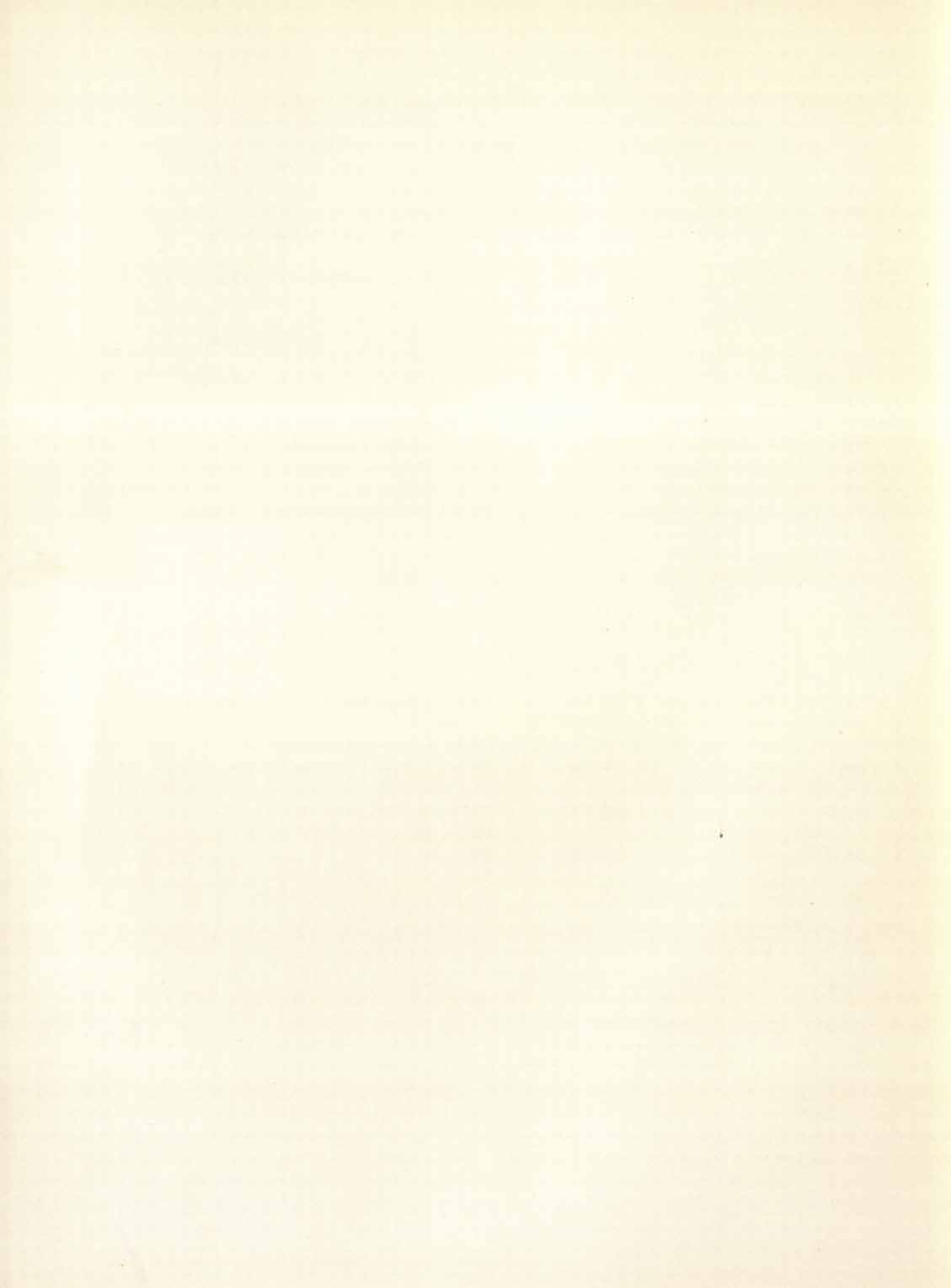
「デリー」の題字は山本の筆になるものであり，表紙の押型文様は，デリーに現存するベーガンプーリー＝マスジッドのディスクの一つの漆喰文様を写したものである。

図 版 目 次

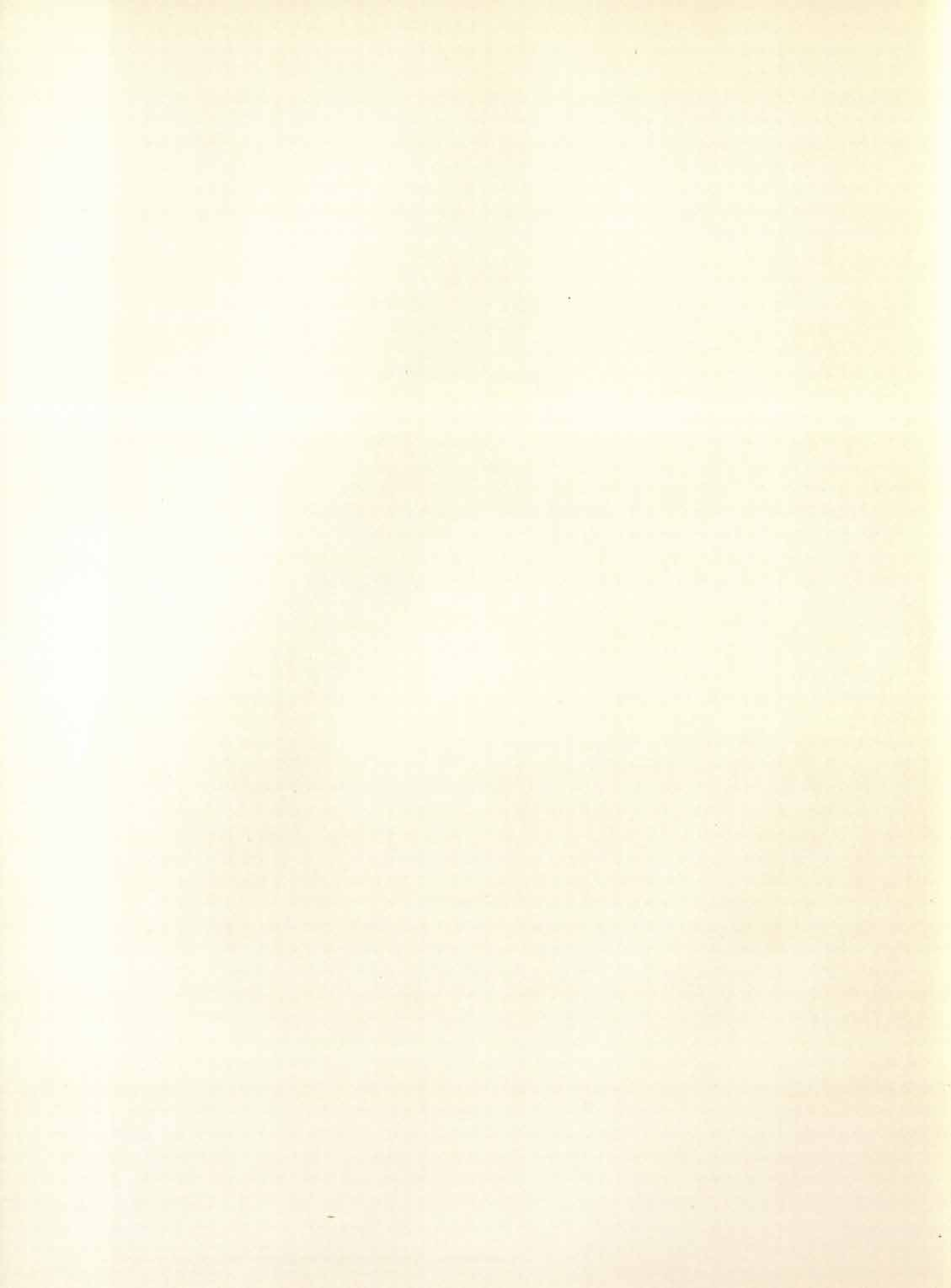
遺 跡 写 真

実測図

挿図目次



序　　論



はじめに

1967年にわれわれが公刊した報告書第一巻「遺跡総目録」は，デリー地域に現存する，サルタナット時代に属すると推定される建造物を網羅的に載録したもので，そこでは，すべての建造物を，モスク・墓地・墓建築・水利施設，およびその他の建造物に分類し，形態別に小区分した上で年代順に整理し，それぞれの遺跡について，その形態と構造，および歴史的問題点を記述した。ついで，われわれは，これらの建造物に関する種類別研究の最初の成果として，1968年に，第二巻「墓建築」を公けにしたが，ここに刊行する第三巻は，水の確保とその利用とに関するさまざまの施設をとり扱ったもので，今後の研究の結果，将来あらためて発表したいと思っているモスクに関する報告とあわせて，種類別研究の一環をなすものである。

本巻は，序論，第一編および第二編の三部から成っている。冒頭の序論は，個々の水利施設の把握に必要な前提的諸問題をとりあげたもので，デリー地域の歴史的背景と地理的環境，および水利施設の種類とそれに関する歴史的資料について概観している。第一編「個別的研究」は，井戸，バーオリー，堰堤と水門などの異なった形態と機能をもつ水利施設のなかから，とくに，二つの円井戸，二つのバーオリー，三つの水門，および一つの堰堤を選んで，それぞれについて，形態と構造の細部にわたって詳細な叙述を試み，あわせてその地理的環境と歴史的意義とを明らかにしたものである。最後に，第二編「総合的研究」においては，まずサルタナット時代の水利施設の全般にわたって，その所在と現存状態とについて述べ，その形態と機能との特徴を指摘した。そのなかで，サルタナット中期に建設された堰堤と水門とを利用する水利計画は，その規模と構想，および歴史的意義においてとくに注目に値するものと思われるので，現地における調査記録と同時代の文献資料とに基づいて，復元的考察を試みた。また，当時の政治・宗教・社会と水利施設との関連についても，若干の問題点を指摘した。

さて，序論においては，まず，サルタナット支配の変遷と首都デリーにおける諸城市の移動および宗教施設の発展について概観した。ついで，当時における都市と農村の実態，地勢・気候その他の自然的条件，および文献資料から知られる同時代の農業事情などに関する問題の一端を述べて，これを第一章とした。また，第二章においては，デリー地域に現存する水利施設の種類について，その名称と形態および機能を紹介し，あわせて，サルタナット成立前にデリー地域に建設されたものと推定されるいくつかの水利関係の遺跡に言及した。最後に，建造物に残る碑文や，当時の支配層による水利計画，およびそれと関連して構築された建造物にふれた同時代の文献資料について解説した。

ところで，従来，さまざまな遺跡のなかでも，水利施設は，他の建造物に比して紹介されることが少なく，研究対象としても，ややもすれば軽視される傾向がないでもなかった。中世インドの遺跡についても，遺憾ながら，このことはあてはまるといわざるを得ないのである。ここに報告する，デリーにおけるサルタナット時代の水利施設に関する研究の成果が，他地域における同種の建造物についての研究を促す一因ともなり，比較研究のための一資料としてひろく利用されることになれば，幸いこれに過ぎるものはない。

第一章　デリー地域の歴史的背景と地理的環境

第一節　ムスリム支配と首都デリー

1　サルタナット支配の変遷とデリー

デリー諸王朝時代に建てられたさまざまな水利施設を研究の対象とする本巻のはじめに，デリーにおけるムスリム支配の変遷についてふれておくことは，デリー地域の主要な水利施設の多くがサルタナット中央およびその支配下の地方権力によって建設されたと推測されることからみて，意味のあることと思う。ここでは，とくに水利施設の建造の歴史に関連する面を重視しながら，デリー＝サルタナットの支配の変遷について，簡単に述べてみたい。[1)]

12世紀末葉に，クトゥブッディーン＝アイバク（Quṭb al-Dīn Aibak）がラホール・デリーを拠点としてムスリム支配の基礎を固めたとき，デリーにおいては，旧ラージプート王の城砦をその宮廷の所在地とした。この城砦は，それを造営したラージプート王の名をペルシア風に訛って，「ラーイー＝ピトーラーの城砦」(Qilā'-i Rāī Pithaurā) と呼ばれるようになり，奴隷王朝時代はもちろん，その後，サルタナット中央権力の拠点がデリー地域の他の場所に移ってからのちも，さまざまな階層を含むデリーの住民の主要な居住区域の一つとして存続してきた。13世紀の北インドにおけるムスリム支配は，このようにして，デリーの旧ヒンドゥー王城を中央権力の拠点とすることによってはじめられたのである。

さて，デリー＝サルタナットは，「奴隷王朝」の名で知られるアルバリー(Albarī，またはイルバリー，Ilbarī)朝(1206～1290A. D.）にはじまり，そののち，ハルジー（Khaljī, 1290～1320A. D.），トゥグルク（Tughluq, 1320～1413 A. D.），サイイド（Saiyid, 1414～1451A. D.）およびローディー（Lūdhī, 1451～1526A. D.）の４王朝が隆替するが，これらの諸勢力は，ローディー朝時代に，一時，その首都をアーグラ（Āgra）に移したのをのぞくと，いずれも，その中央の宮廷を，デリー地域のいずれかの地に置いたのであった。これらのデリー諸王朝のうち，最後のローディー朝のみはアフガーン人を主体とする政権であったが，他の４王朝の支配層の中核をなしていたのは，いずれも，トルコ系部族である。もっとも，トルコ系諸族が中央権力を掌握していたときにも，アフガーン系諸部族は，その軍隊や支配機構の内部において重要な役割を担っていた。こうした点を考えれば，デリーにおけるサルタナットは，トルコ＝アフガーン系ムスリム諸民族による支配体制ということもできよう。

サルタナットの支配の頂点には，権力の最高の具現者としてのスルターン（Sulṭān）がいた。デリー諸王朝のスルターンのなかには，インド史上，その強大な権力によって知られている数人の君主がいるが，水利施設の建造の歴史に主要な役割を果たした支配者には，これらの著名なスルターンが多い。多量の資材と莫大な労働力とを必要とする大規模な水利施設の構築には強大な権力が必要とされることを考えれば，当然のことといえよう。たとえば，奴隷王朝のシャムスッディーン＝イレトゥミシュ（Shams al-Dīn Iletmish），ハルジ

1)　これについての詳細は，山本達郎・荒 松雄・月輪時房，『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』，第一巻，1967年刊，総論，「第二章デリー諸王朝の支配の変遷」，pp. 10-24 を参照.

ー朝のアラーウッディーン＝マフムード（'Alā' al-Dīn Maḥmūd），あるいはトゥグルク朝前期のギヤースッディーン（Ghiyāth al-Dīn）とムハンマド＝シャー（Muḥammad Shāh），さらにトゥグルク朝後期のフィーローズ＝シャー（Fīrūz Shāh）などは，いずれも，水利施設の建設と水利計画の実施とに大きな役割を演じたスルターンである。

ところで，王朝権力の掌握者にとっては，支配の拠点たる中央の宮廷は，権力の象徴と考えられていた。とくに，新王朝の創始者や強大な君主権を実現しようと欲したスルターンのなかには，新しい城砦・宮廷の造営に努力を払ったものが多かった。アルバリー勢力を倒してデリーの権力を掌握したハルジー朝においては，第三代のスルターン＝アラーウッディーンの治世に，旧ラーイー＝ピトーラー城砦の東北方シーリー（Sirī）の地に，新たな大城砦が造営されたのである。そのハルジー朝を倒したトゥグルク朝の創始者ギヤースッディーンも，旧デリー城砦のはるか東方の地を選んで，トゥグルカーバード（Tughluqābād）と呼ばれた大城市を造営させた。つぎのスルターン＝ムハンマド＝シャーは，この城砦を利用すること数年を経ずしてそれを放棄し，第二の首都を，遠くデカン西部のデーオギリ（Deogiri）の地に営むという大計画を実行させたのである。ただ，このスルターンも，やがて首都をもとのデリーの地に戻すことを余儀なくされている。しかし，すでに荒廃しはじめていたトゥグルカーバードではなしにデリーの別の地に中央の宮廷を置き，さらに，ジャハーンパナー（Jahānpanāh）と呼ばれる新城市の造営を企図したのであった。この城市の造営は，従来の城砦都市の場合とはやや性格を異にするもので，旧ラーイー＝ピトーラー城砦の城壁の北隅および北東隅と，シーリー城砦の西部および東部の城壁の部分とを，新たに構築した長い城壁によって連結するという大規模な計画に基づくものであった。このジャハーンパナー城市の造営は，従来，各地に分散していたデリーの諸城市を相互に結びつけ，デリーの住民の居住圏を拡大する結果を導いた。さらに，トゥグルク朝後期のスルターン＝フィーローズ＝シャーは，従来のデリー諸城市のはるか北方，今日のニューデリーの中心商店街コンノート＝プレイス（Connaught Place）東方の地に新たな宮廷を設け，広大な首都フィーローザーバード（Fīrūzābād）の造営に着手したのである。このように，サルタナット中期にあたるトゥグルク朝は，デリーの宮廷・城市の移動と変遷の歴史のなかでもっとも変化が著しかった時代ということができよう。このことは，デリーにおける水利施設の建設の歴史を考察する場合にも，主要な前提条件の一つをなしていることを指摘しておきたい。

さて，サイイド朝とつぎのローディー朝の支配層は，おそらくは，旧デリー・シーリーの両城砦およびフィーローザーバードの宮廷区域を，そのまま利用したものと思われる。サイイド朝は弱小政権であったにもかかわらず，王朝の創始者たるヒズル＝ハーン（Khizr Khān）とつぎのスルターン＝ムバーラク＝シャー（Mubārak Shāh）とは，いずれも，その名を冠した新都を建設する計画の実現に努めたが，結局は果たし得なかった。一方，宮廷を一時アーグラの地に移したスルターン＝シカンダル＝シャー（Sulṭān Sikandar Shāh）の治世も含めて，ローディー朝の支配者は，既存のデリーの城砦や宮廷，とくにフィーローザーバードの宮廷区域を利用していたらしい。

このように，ムスリム支配下のデリーにおいては，支配権力の中心拠点は，しばしば移動している。トゥグルカーバード大城市造営の場合を例外とすれば，デリー地域における都市の発展は，旧ラーイー＝ピトーラー城砦を起点として，ほぼ，東北および北方に向って移動・拡大していることを指摘し得るであろう。この事実は，次節に概観するようなデリー地域の自然的・地理的諸条件に規制されるところが多いが，同時に，

「ハズラト＝ダールル＝ムルク」(Ḥazrat Dār al-Mulk) すなわち「聖なる首都」としてのデリー[1]の発展とその居住人口の増大とを象徴するものである。デリー地域における水利施設の建造が，それと密接に関連していることはいうまでもない。

2　スーフィーズムの浸透と宗教施設の発展

インドにみられるさまざまな宗教は，その儀礼や慣習の面において，しばしば，水を用いる。とくにヒンドゥー教にあっては，水は，プージャー (Pūjā, 祭祀) を行なうにあたって欠くべからざるものであり，また沐浴の習慣も，宗教的意味をもつものとして，今日なお，ひろく行なわれている。イスラームの儀礼・慣習においても，水は，礼拝のまえに行なう浄式のために用いられてきた。大規模なモスクの前庭に，貯水池あるいはそれに代わる施設が設けられている例は，インドにおいても，しばしば認められるところである。また，モスクをはじめ他の宗教施設あるいはマドラッサ (Madrasah, 学校) などのように，多数の信徒が集まる場所においては，さまざまな理由から，水が必要とされる。こうして，宗教的儀礼や慣習・行事のため，あるいは宗教施設における現実的な必要から，宗教施設の内外に水利施設が設けられるようになったのは当然のことといえよう。そこで，デリーにおける宗教施設の発展とそれに関連する歴史的問題について，簡単に概観しておきたいと思う。

北インドにイスラームが浸透した歴史的要因としては，つぎの二つのことがらが考えられる。その一つは，ガズニー (Ghaznī) およびゴール (Ghūr) 両朝の軍隊のインド侵入と北インドにおけるサルタナット支配の成立である。もっとも，デリーを拠点とするサルタナット体制の確立が，ただちに，北インドにおけるイスラームの浸透を結果したと断ずることはできない。インドに侵入してきたトルコ系ムスリム諸勢力は，北インドの異教徒を征服・支配するにあたって，インド人の宗教的信仰に対しては，寛容かつ現実的な姿勢をもって臨んだのである。北インドにおけるムスリム人口の増加に関しては，少なくともサルタナット時代の初期に関する限り，ムスリム支配体制の確立の直接の結果とみることはできない[2]。もちろん，サルタナット体制の成立という政治的・社会的現実が，それまで宗教的には絶対的優越の立場を保ってきた北インドのヒンドゥー社会のなかに，教理においても儀礼・慣習においても著しく性格を異にするイスラームを浸透させる歴史的条件を整えたことは否定し得ないところである。

しかしながら，そうした歴史的背景のなかで，新しい宗教たるイスラームを北インドの地に定着させる主な要因となったのは，イスラームの宗教者，とくにシェイフ (Shaikh) あるいはピール (Pīr) などと呼ばれたスーフィー聖者による宗教活動であった。北インド，とくにデリー地域におけるスーフィーズムの浸透とその指導者たちの活動については，すでに本報告書の第一巻総論において，また第二巻の序論および第二編において述べた[3]。従って，ここでは，水利施設に関連する範囲においてのみふれておくにとどめる。

デリー地域においては，スーフィー諸派のなかでは，とくにチシュティー (Chishtī) 派の聖者の活動が目立っている。なかでも，シェイフ＝クトゥブッディーン＝バフティヤール＝カーキー (Shaikh Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī)，シェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤー (Shaikh Niẓām al-Dīn Auliyā)，およびシェイフ＝ナシール

1)　この語は，「ハズラト＝ディッリー」(Ḥazrat Dihlī, すなわち聖なるデリー) などの語とともに，すでにサルタナット初期の史書『タバカーテ＝ナーシリー』(*Ṭabaqāt-i Nāṣirī*) のなかに現われている．

2)　荒　松雄，「ムスリム支配成立期における政治権力と宗教」，松井 透・山崎利男編，『インド史における土地制度と権力構造』，1969年，所収，pp. 107–165.

3)　『デリー』，第一巻，総論，pp. 13–14；　同書，第二巻，序論，pp. 16–18.　なお，荒，上掲論文，pp. 134–155 を参照.

ッディーン＝チラーゲ＝ディッリー (Shaikh Naṣīr al-Dīn Chiragh-i Dihlī) の三人のチシュティー派の指導者は，大きな役割を果たしてきた。彼らの宗教活動の拠点や墓を中心とする区域は「ダルガー」(Dargāh) と呼ばれて，次第に，「聖地」に発展していったのである。その過程については，すでに第二巻の序論および第二編のなかで，若干の考察を試みてきた。[1] これらのダルガーの所在地には，その内部や周辺地域に，墓建築や墓地あるいはモスクをはじめとするさまざまの宗教施設が建造され，やがて，それを中心として近隣地域に聚落が形成されるようになっていったのである。デリー地域においては，メヘローリー (Mehrauli)，ニザームプル (Nizampur) すなわち今日のニューデリーのニザームッディーン＝ウェスト (Nizamuddin West)，あるいはチラーグ＝デリー (Chiragh Delhi) などの大部落は，その典型的な例といえよう。また，このような例は，小規模な部落の場合にもみられるのであって，たとえば，シェイフ＝ニザームッディーンの母ビービー＝ズライハー (Bībī Zulaikhā) の墓〔O. 36 参照〕を中心として発展したと思われる，今日のメヘローリー＝ロード (Mehrauli Road) に沿うアードチーニー (Adchini) 部落などは，その一例といえよう。

スーフィーのダルガーをはじめとして，各種の宗教施設が設けられた場所には，井戸やバーオリーなどの中小規模の水利建造物が設けられる場合が多かった。従って，デリー地域におけるダルガーや著名な宗教施設の所在とその環境，あるいはその歴史的背景についての考察は，水利施設の研究にとって重要な前提となるのである。また，本来は別の目的で設けられた井戸やバーオリーに，のちになって，宗教建造物が附設されたと思われる場合も見られる。これらの問題点については，本巻の第二編第四章において，ふたたびふれるであろう。

第二節　デリー地域の地理的環境

1　都市と農村

デリーは，三百数十年間，トルコ・アフガーン系ムスリム勢力の支配の中心拠点として，中世インド史において重要な役割を担ってきた。サルタナット時代には，デリーという地名は，ほぼつぎのような二つの意味で用いられてきた。その一つは，城砦ないしは城壁（キラー，Qilā'）に囲まれた明確な境域をもつ城砦都市をいう場合であり，他は，たとえば同時代の多くの史書や文献の記述によく見られるように，それぞれの時代における権力の消長に応じて，ある程度の地域的限定はあっても，諸城市をあわせた，全般的にはかなり漠然とした地域を意味した場合である。前者にあっては，城砦ないしは城壁の内部の一定区域は，そこにある程度の農地が存在していたにせよ，ともかく都市（シャハル，Shahr）と呼ぶにふさわしい性格のものが多かった。たとえば，旧ラーイー＝ピトーラー城砦やシーリー・トゥグルカーバードなどの大城市はこれに相当する。しかし，諸城市をあわせた地域を総体的に「デリー」と呼ぶ場合には，そこには，都市（シャハル）と呼ぶにふさわしい区域のみならず，諸城市のあいだに散在する農耕地や荒蕪地あるいは村落なども包含されていたわけである。

ところで，サルタナット時代に諸種の水利施設が建造された場所は，南は，今日のニューデリーのはるか南方の農村地帯から，北は，デリー大学北方の地にまで及ぶ広範な地域にわたっている。しかも，これらの水利施設の建造された場所は，井戸やバーオリーなどの中小建造物から大規模な堰堤や貯水池までをも含めて，いずれも，当時における都市区域と農村地帯の両方にわたっている。もちろん，水利施設の種類や建設

1) 『デリー』，第二巻，序論，pp. 23-24；　同書，第二編，p. 125，pp. 146-147，p. 164 参照。

目的あるいはその用途などによって，その建設場所が異なっていたことはいうまでもない。しかし，これらの水利施設の建設地について歴史的に考察する場合，サルタナット時代におけるデリーの都市区域と農村地帯の状況は，今日のそれとは異なっていた場合が多く，その環境の変化は，安易な類推や即断を許さない。この点に関しては，われわれの調査したさまざまな種類の遺跡，とくに中央権力の拠点たる城砦・宮廷の所在地や，宗教者の活動の中心となったダルガー，あるいはサルタナット時代に溯る古い歴史をもつ部落などの所在を的確に把握して，当時の都市と農村との関係，その地理的環境を推定ないしは復元，考察してみることが，重要な課題となるのである。

ところで，デリー地域における諸城市のなかでも，トゥグルク朝時代に造営されたジャハーンパナー(Jahānpanāh) とフィーローザーバード (Fīrūzābād) とに関しては，なお，問題の存するところである。というのは，これらの二城市は，明確な区域をもつ他の城砦都市，たとえばラーイー＝ピトーラー城砦，シーリーあるいはトゥグルカーバード大城砦などの場合とは，都市としての性格とその建設の歴史的背景とを異にしているからである。このうち，ジャハーンパナーは，今日，その城市の大部分の城壁の遺構を辿り得るにしても，それは城砦都市といったものではなく，旧ラーイー＝ピトーラー城砦とシーリー城砦との中間の区域を城壁によって囲んで，外部からの攻撃に耐え得る都市区域の拡張を目的としたもので，同時代の文献のなかには，当時の支配者が現実には着手しなかったトゥグルカーバードの大城市との連結をさえ構想していたことを示唆しているものもあるのである。[1)]もっとも，ジャハーンパナーの全城壁が，すべて完成されたかどうかも，よくはわからない。また，一方のフィーローザーバードは，現在，フィーローズ＝シャー＝コートラと呼ばれる遺跡公園にあたる区域に，その中央宮廷が置かれたことはたしかであるにしても，史書の記述内容を検討してみると，この大城市の場合には，明らかにしがたい問題がなお多い。たとえば，それが，他の城市と同じように，はたして城壁をもって囲まれた都市として計画されたものか，または実際にいかなる城壁がどれほど建設されていたものかということさえも，ほとんど明確にはし得ないのである。こうした点からすれば，トゥグルク朝のジャハーンパナーとフィーローザーバードとを，それまでのデリーの城砦都市と同一視することには躊躇せざるを得ない。ジャハーンパナーおよびフィーローザーバードの場合には，デリーの人口の増大に対応する居住地の拡大と解することはできるが，同時に，その区域内には，なお，多くの農地や荒蕪地あるいは村落が包含されていたとみるのが自然であろう。この二つの「都市」を，いわゆる都市と農村という単純な区別をもって割り切るのは，当時の実情を正しく把握することにはならないであろう。

2　水利施設と自然条件

デリー地域に現存するサルタナット時代の水利施設をとり扱う場合，この地域の自然条件の特徴をある程度把握することが必要である。とくに，地形，地質，あるいは降雨量などに密接な関連をもつ貯水池や堰堤などの建設にあたっては，これらの自然条件や地理的環境が検討されたであろうし，今日，これらの遺跡について研究する場合にも，それについては十分把握しておかなければならない。井戸やバーオリーのような建造物の場合にも，地質や降雨量，あるいは地下水系などと密接に関連しているのである。しかし，デリー地域の自然的・地理的諸条件については，基礎的資料の入手さえ現状ではかなり難しく，また，詳細に述べる余裕もないので，ここでは，デリー地域全般の自然条件や地理的環境の特徴の一端を概観するにとどめ

1) *Voyage d'Ibn Batoutah,* Texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et B. R. Sanguinetti, Société asiatique, Paris, 5me tirage, 1949, tome 3, p. 147 ; *The Rehla of Ibn Baṭṭūṭa (India, Maldive Islands and Ceylon)*, Translation and Commentary, by Mahdi Husain, Gaekwad's Oriental Series, No. CXXII, Oriental Institute, Baroda, 1953, pp. 25-26.

る。

さて，デリー地域の自然条件の特徴の一つは，ヒンドゥースターン平原西部を占める概して平坦な地勢のなかで，中央の一部および東南部に岩盤状の台地をもっていることであろう。なかでも，東南部の，ファテプル＝ベリ (Fatehpur Beri) 部落とその周辺の地域を東西および南から囲むようなかたちをとっている台地の存在はとくに顕著である。これは，いわゆるアラーワリー (Arāwalī) 山系の延長部にあたるもので，上に述べたデリー地域東南部の台地と，グルガーオン部落の東方からニューデリー西部地域を断続しつつ北北東の方向に延びている狭く長い丘陵とに分かれる。後者の丘陵は，「デリー＝リッジ」(the Delhi Ridge) と呼ばれているが，その北端は，ワジーラーバードに近いジャムナー川右岸の地に及んでいる。デリー地域の岩丘地帯の高さは，平地との比高153メートルを超えないとされている。デリー地域は，その大部分が沖積層に属しているが，デリー＝リッジと東南部の岩丘地帯とは，いずれも，インド半島の始生代から原生代にかけ形成されたデリー系 (Delhi system of the transition group) に属するものとされている。東南部の岩丘地帯の表面は，主としてアルワール石英岩 (the Alwar quartzite) の離層からなっている[1)]。

一方，デリー地域の東側は，北から南南東の方向に流れるジャムナー川によって仕切られている。この川の川床はかなりひろいのであるが，水量は，川床の幅にくらべれば，雨期においても，それ程多いとはいえない。ただ，ジャムナー川が，サルタナット時代にも，現在の水流と同じ地点を流れていたと考えるのは誤まっている。このことは，ムガル中期の首都として造営されたシャージャハーナーバード (Shāhjahānābād) の北東隅を占めていた宮廷区域，すなわち，今日，レッド＝フォート (the Red Fort) として知られている城砦の東城壁が，建設当時はジャムナー川に面していたという事実からも明らかである。また，トゥグルク朝後期のフィーローザーバードの宮廷区域の東側の壁も，さきのレッド＝フォートの場合と同じように，ジャムナー川に沿っていたと推定されるのである。サルタナット時代からムガル中期にかけては，ジャムナー川の主流は，今日のオールドデリーあるいはニューデリー東北部においては，現在の水流よりも西側の地を流れていたものと思われるのである。このことは，サルタナット時代の文献史料からも，ある程度，比定することができる[2)]。

ところで，水利施設について考察する場合に，地勢，地質あるいは河川などとともに，自然条件のなかで問題となるのは，雨量である。デリー地域も，モンスーンの影響下におかれており，6月下旬までにもっとも高温の季節を終え，やがて雨が降りはじめる。『インド帝国地誌』(*The Imperial Gazetteer of India*, 1908年刊) によれば，デリー地域の年平均降雨量は，約28インチ（すなわち約711ミリ）で，その内訳は，冬の月に3インチ（すなわち約76ミリ），夏の月に25インチ（すなわち約635ミリ）と報告されている[3)]。なお，同書によれば，1901年に終わる20年間のデリー地域における記録は，つぎのとおりである。

最多降雨量　1884-85年度，48インチ（すなわち約1,219ミリ）

最少降雨量　1896-97年度，0.2インチ（すなわち約5.1ミリ）

また，1965年にインド政府によって公刊された『インド地誌』(*The Gazetteer of India*) に報告されている月間降雨量は，つぎのとおりである（単位はミリメートル）。

1月　20.8；　2月　23.6；　3月　12.9；　4月　9.7；　5月　9.7；　6月　67.6；　7月　186.2；

8月　169.9；　9月　134.9；　10月　14.2；　11月　12.0；　12月　8.6

1)　*The Imperial Gazetteer of India*, New Edition, Oxford, 1908, Vol. XI, p. 224.
2)　荒 松雄「デリーに現存する奴隷王朝中期の墓について」，東洋文化研究所紀要，第34冊，1964，pp. 36-40 参照.
3)　*The Imperial Gazetteer of India*, Vol. XI, p. 225.

ちなみに，同報告書によれば，デリー地域の気温はつぎのとおりである（単位は摂氏。記載の順序は，はじめに最高，つぎに最低温度を記す）。

1月 21.2，7.3；　3月 30.6，14.8；　5月 41.2，26.7；　6月 40.2，28.7；　7月 35.1，26.9；

8月 33.6，26.1；　9月 33.7，24.3；　11月 28.8，11.4

なお，1950年度までの最高および最低温度の記録は，それぞれ，47.2度（1944年5月29日）および－0.6度（1935年1月16日）であったと報告されている。[1)]

20世紀に入ってインド政府によって公刊された上述の二種の地誌報告によって，われわれは，デリー地域における降雨量の特徴を，ほぼ，つぎのように要約することができる。すなわち，月間降雨量の平均値がもっとも高いのは，いわゆる雨期に入って最高気温がやや低下しはじめる7月で，ついで8月および9月の順となっている。さきに記した月間降雨量の年間の総計は約670ミリになるから，7月・8月・9月のいわゆる雨期3ヵ月間の雨量の合計491ミリは，年間総降雨量のほぼ73.3パーセントに当るわけである。この雨期の3ヵ月の前後の月をみてみると，5月は9.7ミリ，6月は67.6ミリとなっており，6月のなかばあるいは下旬ごろから，降雨量は急激に上昇することが，ほぼ明らかとなる。また，10月の14.2ミリ，11月の12.0ミリという降雨量をみると，デリー地域における雨量は，10月に入って急激に減少してゆくことが指摘できるのである。これを要するに，デリー地域においては，6月の後半から9月の後半に至る雨期の間に，年間のほぼ80パーセント近い雨量が集中的にみられるのである。多量の雨水を貯えることを目的とする貯水池あるいは堰堤の存在理由が，デリー地域の雨期における降雨量の集中という特殊な事情に求められることは，ここに改めて指摘するまでもないことであろう。

3　農業に関する諸問題

デリー地域における地勢・地質および降雨量に関する特徴について，上に述べてきたが，つぎに，それらの自然条件と密接な関連をもつ農業事情の一端について，簡単にふれておきたい。

さきに引用した1908年公刊の『インド帝国地誌』(*The Imperial Gazetteer of India*) は，デリー地域を，"Khādar" と "Bāngar" と呼ばれる二つの地域に分けて説明している。前者は，ジャムナー川に近い低地で，その土壌は軽くて砂まじり (light and sandy) の性質をもち，井戸による灌漑が容易なのに対して，後者は，ジャムナー川の影響を受けない台地の部分で，近代になってウェスタン＝ジャムナー運河 (the Western Jumna Canal) の恩恵を蒙るようになった地域であると述べている。[2)] この二つの地域についての呼称は，ヒンディー語の「クハーディル」(Khādir) と「バーンガル」(Bāngar) で，台地と平坦地とを分けるのに北インドでしばしば使われてきた用語である。この地誌は，デリー地域における主食用穀物 (Staple food grains) を春作 (Spring harvest) と秋作 (Autumn harvest) とに分け，前者の場合には，グラム (Gram)，小麦 (Wheat)，大麦 (Barley) などを，後者の場合には，もろこし (Great millet) と Spiked millet などを，それぞれあげている。[3)] もっとも，北インドのガンジスおよびジャムナー流域一帯の地域においては，日本流の春作・秋作という言葉の使い方は必ずしも適当ではなく，一般には「ラビー」(Rabī') および「ハリーフ」(Kharīf) というアラビア語起源の語がよく用いられてきた。ところで，この『インド帝国地誌』は，上に紹介した主要な食用作物とともに，デリ

1) *The Gazetteer of India, India Union,* Vol. I. Country and People, Gov. of India, 1965, Chap. II, Weather and Climate, Appendix B. Monthly temperature and rainfall.
2) *The Imperial Gazetteer of India,* Vol. XI, p. 227.
3) *The Imperial Gazetteer of India,* Vol. XI, p. 227.

ー地域における農業生産物として，棉 (Cotton)，さとうきび (Sugarcane)，およびマンゴー (Mango)，メロン (Melon) などをもあげている。さらに，この地誌が，デリー地域の農業事情に関連して，過去の飢饉 (Famine) についてふれており，1825-26年，1813-14年，1803-04年，1783-84年，1770年などの諸例とともに，ムガル皇帝の治世における著名な飢饉として，1739年（ムハンマド＝シャー治世），1661年（アウラングゼーブ治世），1631年（シャー＝ジャハーン治世）の事例をあげている。その際，1345年のムハンマド＝トゥグルクの治世における飢饉の例を，もっとも古いものとして最初にあげているのは，われわれにとっては興味がある。[1] これは，のちに本巻の第二編第三章第二節の末尾でふれる歴史的事実に関連することがらと思われ，この地誌の執筆者が，なんらかの歴史書を通じて知り得たところを記したものであろう。

デリー地域の農業事情に重大な関係をもつところの灌漑について，ウェスト＝ジャムナー運河とともに井戸が重要な役割を果たしていることは，この『インド帝国地誌』の記述からも知られる。同書は，当時におけるデリー地区 (the Delhi District) の井戸の総数を9, 943と報告しており，そのほか，仮工事の井戸 (Temporary well) その他の井戸の数を1, 279としている。そして，デリー地区の北部においては，いわゆるペルシア式回転井戸 (the Persian wheel) が一般で，南および中部では，綱とつるべ式の桶や嚢を用いる方式が普通であるとも指摘している。[2]

もちろん，ここに紹介してきた20世紀刊行の地誌の記述内容から，サルタナット時代の農業事情，とくに農作物や灌漑などについての状況をただちに推察することは許されないであろう。しかし，サルタナット時代の少数の文書や記録類のなかで，こうしたことがらの詳細を述べたものは，ほとんど見当らない。ただ，トゥグルク朝時代のいくつかの史書，たとえば，ズィヤーウッディーン＝バラニー (Ẓiyā' al-Dīn Baranī) の『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*) や，シャムセ＝シラージュ＝アフィーフ (Shams-i Sirāj 'Afīf) の同名の史書，あるいはスルターン＝フィーローズ＝シャーみずから著したといわれている『フィーローズ＝シャーの勝利』(*Futūḥāt-i Fīrūz Shāhī*) や同時代の貴重な文献『フィーローズ＝シャーの道』(*Sīrāt-i Fīrūz Shāhī*) の如き文献のなかには，運河などの水利施設についての記述とともに，当時の農業事情に関する断片的な記載も，若干うかがわれるのである。これらの文献の記述のうち，たとえばムハンマド＝トゥグルク治世の農業危機にふれた部分や堰堤などの水利施設あるいは人工氾濫などにふれている個所については，本巻においても，のちにその一部を引用し，立論の根拠とした（たとえば，本巻118, 119, 122ページを参照）。しかし，デリー地域における農業事情の詳細については，これらの文献の記述内容からはそれほど期待することはできない。ただ，特定の地域的範囲は不明であるが，たとえばフィーローズ＝シャー時代のこととして，耕作者は，1年に4回，播種し，それぞれ，ラビー (Rabī')，サイフ (Ṣaif)，ハリーフ (Kharīf)，シター (Shitā) などと呼ばれていたこと，[3] さらに，さとうきび (Naishakar)，小麦 (Ḥinṭat)，グラム (Nukhūd)，けしの実 (Khashnāsh)，豆 (Bāqilā) などの穀類や果物および野菜などのものが，この時代に栽培されていたことを知ることができるのである。[4] また，シャムセ＝シラージュ＝アフィーフによると，スルターン＝フィーローズによって多数の農園 (Mauẓa'-i bāgh) がつくられ，「デリーの町の近傍では」(dar jawār-i shahr-i Dihlī)，その数は1, 200にものぼったという。この数をそのまま信頼することはできないにしても，このことは，のちに述べる水利施設の構

1) *The Imperial Gazetteer of India*, Vol. XI, p. 230.
2) *The Imperial Gazetteer of India*, Vol. XI, p. 229.
3) Jamini Mohan Banerjee, *History of Firuz Shah Tughluq*, Delhi, 1967, p. 118.
4) Ẓiyā' al-Dīn Baranī, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, Persian text ed. by Syed Aḥmad Khān, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1860-62, p. 569. J. M. Banerjee, *History of Firuz Shah Tughluq*, p. 118.

築による農業振興の政策と並行して農園整備が行なわれたことを示すものとみてよいであろう。

ところで，サルタナット時代の農業問題については，14世紀にインドを訪れたイブン＝バットゥータ（Ibn Baṭṭūṭa）や他のアラブ人の記録[1]などによっても若干のことを知ることはできる。時代は降ってムガル朝期のことになるが，イギリス人の歴史家モアーランド（W.H. Moreland）は，アクバル時代においてさえも，小麦やさとうきびが東方の諸地方からデリーに移入されていた事実に注目している[2]。彼は，それによって，当時のアーグラ・デリー地方は，食用穀物においても自給自足の態勢に達していなかったと推測し，近代におけるこの地方の農業生産の上昇は，後代に行なわれた運河の構築やその他の灌漑工事などの進展に負うところが多いと断じているのは，英人学者らしい見解であるとはいえ，本稿の観点からも注目すべきことがらといえよう。モアーランドが推測した「アクバルの死の当時のインド」（India at the death of Akbar）の状況さえ然りとすれば，サルタナット時代のデリー地域の農業事情について，同時代の宮廷史家の叙述にそのまま従って，当時の支配層の政策とその成果を過大評価することは慎しまなければなるまい。このことは，本巻において，のちにムハンマド＝シャーおよびフィーローズ＝シャーの治世における農業事情に言及する場合にも，つねに想起されるべきことがらである。

1) Otto Spies, *An Arab Account of India in the 14th Century, being a translation of the chapters on India from al-Qalqashandi's Subh-ul-A'sha*, pp. 48-50.
2) W. H. Moreland, *India at the death of Akbar, An economic study*, London, 1920, pp. 121-122.

第二章　水利施設の種類とそれに関する歴史的資料

第一節　現存する水利施設の遺跡

1　井戸とバーオリー

デリー地域に現存するサルタナット時代のものと推定される水利施設のなかで，もっとも単純な構造をもつものは井戸である。井戸は，地下水を汲み上げる目的をもって地上から開掘した建造物で，インドでは，太古から今日に至るまで，もっとも一般的かつ主要な水利施設である。デリー地域に現存する井戸の遺跡には，円型から，六角・八角・十二角などの角型変型に至るまで，さまざまな形態のものを見出だすことができる。その規模や構造も，きわめて単純なものから，階段や天井・柱列・龕などを備えたかなり複雑な形式のものまで，多種多様にわたる。われわれは，第一巻「遺跡総目録」のなかに，大小あわせて17の井戸を載録しておいたが，そのうち，本巻第一編において，スルターンプルの円井戸〔W. 1〕とフィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸〔W. 17〕の二つについて，詳細な報告をすることにしている。

デリー地域においては，井戸は，「クワーン」(Kuwān)，「クンダ」(Kuṇḍa) あるいはクープ (Kūp) の如きヒンディー系の語をもって呼ばれるのが一般である。サルタナット時代の文献には，一般に「チャー」(Chāh) というペルシア語が用いられているが，この呼称は，本巻でも引用するいくつかの井戸に附せられていたペルシア語の歴史碑文のなかにも見出される。なかには，「チャーヘ＝ハース」(Chāh-i Khāṣ) 〔W. 11〕の場合のように，特異な名称をもって呼ばれていたものもある。[1)]

井戸に階段が備わっている特異な水利建造物を，一般に，「バーオリー」と呼んでいる。この語は，正しくは，Bāwali というヒンディー語で，本来は，サンスクリット語の Bārī あるいは Barikā という語に由来するものらしく，小さな貯水池を意味する言葉から出たものといわれる。[2)] われわれの調査の結果，大部分の遺跡を通じてほぼ共通して指摘し得ることは，バーオリーが，井戸の部分と階段の部分とをもっており，ふつう，後者が貯水池の役割を果たしていることである。しかし，単純な井戸でも，ときにバーオリーの名をもって呼ばれることもあるように，逆に，湧水の有無にかかわらず，大小の階段施設を備えた貯水池様の水利建造物がバーオリーと呼ばれてきたこともある。また，デリー地域に現存する遺跡のなかには，「バーオリー」のかわりに，「バーイーン」(Ba'aīn) という語で呼ばれてきた例も見出される。本巻第一編でとり上げるラージョーン＝キ＝バーイーン (Rājūn kī Ba'aīn)〔W. 26〕の如きは，その一例である。また，階段をもつ大型の円井戸の場合に，バーイーンの名が用いられた例もある。たとえば，ラードー＝サラーイー (Lado Sarai) の円井戸〔W. 14〕は，バーオリーの呼称とともに，かつて「バーイーン」(Ba'aīn) とも呼ばれることもあったという。[3)]

さて，バーオリーに関しては，われわれは，諸般の事情から調査し得なかった遺跡をのぞいて，サルタナット時代に属すると推定されるもの18を，第一巻の「遺跡総目録」に載録しておいた。これらのバーオリーの遺跡は，角型のものがその大部分を占めるが，一方の側に井戸を，他方の側に階段をもつ形式のものが

1) *List of Muhammadan and Hindu Monuments : Delhi Province*, 4 volumes, Calcutta, 1915～22, Vol. III, No. 332, p. 189.
2) 荒 松雄,「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」, 東洋文化研究所紀要, 第44冊, 1967年, pp. 2-3.
3) *Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology*, 2nd edition, Calcutta, 1926, p. 5, B. 7.

圧倒的に多い。しかし，なかには例外的に，ほぼ正方形に近い形のものや，あるいは特殊な部分に階段や井戸をもつものもないではない。

ところで，この特異な形態と構造とをもつバーオリーが，ムスリム征服者たちによってはじめてつくられた水利施設か，または，彼らの侵入前にインド人の手によってすでに建設されていたものかという点に関しては，われわれは，後者の考え方を採ることに傾いている。デリー地域においても，ヒンドゥー＝ラージプート時代に属する可能性を否定し得ない大型のバーオリーの遺跡〔W.33〕が存在しているのである。バーオリーの起源の問題に関しては，たとえば，グジャラート州のアフマダーバード (Ahmadabad) における11世紀のヒンドゥー時代のものと推定される巨大なバーオリーの存在が，ムスリム侵入前からのインド人建設説を裏づける有力な根拠となっているが[1]，これについては，本巻の最後の章でもふれるであろう。バーオリーに特有な，地上から水面に至る階段は，汲水という機能上の必要から設けられたものであるにしても，古代このかた，ヒンドゥー教徒を中心として行なわれてきた沐浴の慣習や，または乗船・水汲みその他の日常生活のために，川あるいは池の水辺に設けられた「ガート」(Ghāt) と呼ばれる階段状のテラスとなんらかの関連をもつものであることを推測させる。

2　堰堤と水門

堰堤は，同じく水利施設とはいっても，井戸やバーオリーとは，その性格をまったく異にする構築物である。堰堤の主な機能は，周辺地域の地形を利用して，長短・高低さまざまな規模の堤防を構築し，それによって，雨水あるいは河川・地溝の水を堤防の片側の一定の地域内に貯え，堰堤の一部に設けた水門の開閉を利用して，ときに応じてその貯水を他の側に放水するということにある。デリー地域の堰堤の場合には，とくに雨期の天水を集め，それを緩やかに傾斜した平坦地に貯えることを目的としたものが多い。ところで，大部分の堰堤には，一ないしは数個の水門施設が設けられているのがふつうであって，これは，貯水量が一定の水位に達したとき，その反対の側に向って放水するための施設である。

井戸や中小規模のバーオリーなどの場合と異なって，堰堤の構築には，土や石を主とする多量の資材と，多くの労働力とを必要とする。また，貯水量が増大した場合の堤防に対する水圧を予想して，それに耐え得る堅固さをつくり出すための技術も要請される。従って，井戸やバーオリーと異なって，堰堤の構築の場合には，一般に，個人によるものよりは，ときの支配権力によって計画され，施工される場合が多いとみてよいであろう。

ところで，サルタナット時代および後代の諸文献では，堰堤は，「バンド」(Band) という語で記されることが多い。この“Band”という語は，おそらくは，ペルシア語起源の同じ語が，そのままインド各地で用いられるようになったものとみてよいであろう（現在では，堰堤を示すものとして，英語でも，“Band”という語が，たとえば，“Embankment”と同じような意味で用いられている)。なお，水門については，サルタナット時代の文献には特定の語は見当らないが，デリー地域においては，ウルドゥー語で，「モーリー」(Morī) という語が用いられることが多いようである。

現地においてわれわれが調査した限りにおいては，今日，サルタナット時代に建造されたものと推定される堰堤には，特別な名称をもって呼ばれているものは，ほとんど見当らない。ただ，最近まで残っていた地

1) Jas. Burgess, *The Muhammadan Architecture of Ahmadabad*, Part. II, with Muslim and Hindu Remains in the Vicinity, London, 1905, Chap. I. Mātā Bhavānī's Step-well, pp. 1-3, Plates II. XIII.

名から判断すると[1]，「狩りの堰堤」(バンデ＝シカール，Band-i Shikār) というような呼称がつけられていた場合もあることが推測される。また，のちに詳述するサート＝プラ水門のように，「七つの橋」(Sāt Pulah) というような特異な俗称をもって呼ばれてきたような例もないではない。

もっとも，のちに述べるように，トゥグルク朝時代の史書には，その時代に建設された堰堤が，その構築された場所と思われる地名や，または人名を附して記載されているのである。たとえば，本巻の第一編第八章で報告するマヒパールプルの堰堤が，トゥグルク朝のシャムセ＝シラージュ＝アフィーフ (Shams-i Sirāj 'Afīf) の『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*) のなかで「バンデ＝マヒパールプール」(Band-i Mahipālpūr) としてあらわれている如きはその一例であり，同様な例は他にも見られる（本巻120ページ参照)。また，人名を冠したものとしては，たとえば，「バンデ＝ファトゥフ＝ハーン」(Band-i Fatḥ Khān)，「バンデ＝シュクル＝ハーン」(Band-i Shukr Khān) などの例が，同じくアフィーフの史書にみえている。このファトゥフ＝ハーンもシュクル＝ハーンも，ともにスルターン＝フィーローズの子の称号をとったものといわれるが，構築物に人名を冠する場合には，これらの例のように，ときの権力者やその一族のものの名をつける場合が多かったようである[2]。今日，その名称がまったく不明である堰堤にしても，かつては，地名・人名，またはその他なんらかの固有名詞や俗称をもって呼ばれていたらしいことは，これらの例によって，ほぼ，推定され得るであろう。

3　その他の水利施設

上に紹介してきた井戸・バーオリーおよび堰堤・水門のほかに，デリー地域には，サルタナット時代に構築されたと推定される他の種類の水利施設も残っている。その主なものは，貯水池と運河である。われわれの報告書では，それらについては，直接の研究対象としてはとりあげていないが，ここで，関連する二，三のことがらに関して簡単にふれておきたい。

サルタナット時代には，デリーの各地に大規模な貯水池が開掘されている。デリーにおけるムスリム支配の成立とともに，初期の王朝の支配層たちが，増大するデリーの人口の必要を充たすために，大規模な貯水池の開掘を行なわせたのは当然なことといえよう。やがて，デリー地域において，宮廷・城砦の移動，新都の造営が進むにつれて，サルタナット支配層は，さらに新しい貯水池の構築に努力を払っている。サルタナット初期・中期に構築されたと推定される大規模な貯水池の遺構は，今日なお，ニューデリー南部の地に残っている。そのもっとも古いものは，シャムシー＝ターラーブ (Shamsī Tālāb) と呼ばれる大貯水池で，他の一つは，今日，ハウズ＝ハース (Hauz Khas) としてデリー市民に親しまれている大貯水池の遺構である。トゥグルク朝の支配者も，トゥグルカーバード大城市のなかに，貯水井戸とともに大規模な貯水池をも造営させている。われわれは，その遺構のいくつかを，大城砦の廃墟のなかに，現在もなお見ることができるのである。しかし，サルタナットの初期や中期につくられたこれらの大貯水池に匹敵するほどの規模をもつ貯水池は，末期には，建造されなかったようである。

スルターン＝フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの治世の西北インドの一部地域における運河の開さくは，インド史の上でも著名なことがらに属する[3]。フィーローズ＝シャーは，フィーローザーバード建設に際して，

1) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. IV, pp. 70-71.
2) 荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第36冊，1965年，pp. 128-142 参照.
3) J. M. Banerjee, *History of Firuz Shah Tughluq*, pp. 118-120, p. 141 ; p. 147, notes 25, 26, 27, 28.

ジャムナー川その他の水脈と関連させて，デリー地域にも運河の一部を構築させたものと思われる。ニューデリー北方のワジーラーバード (Wazirabad) 地区に残るフィーローズ＝シャー時代の橋〔W. 50〕は，ジャムナー川との関連において開さくされた同時代の運河の上にかかっていたものと推測される。今日，デリーやその周辺地域にみられる運河のなかにも，フィーローズ＝トゥグルクの治世にその端緒的な工事の施行されたものがあったと推定してもよいのではあるまいか。これらの運河は，首都デリーとその周辺地域の住民の水利に重要な役割を果たしてきたものと思われる。もっとも，この時代の運河は，灌漑・治水を主とする近代の整備されたものとは異なる性格をもっていたと思われるが，それについては，のちにふたたびふれたい(122ページ参照)。

ところで，貯水池は，今日では「ターラーブ」(Tālāb)，「タール」(Tāl)，「ハウズ」(Ḥauẓ)，あるいは「クンダ」(Kuṇḍa) などと呼ばれることが多いが，サルタナット時代の文献においても，貯水池は，ペルシア語系の「ハウズ」の名称をもって呼ばれている。奴隷王朝時代の文献『タバカーテ＝ナーシリー』(*Ṭabaqāt-i Nāṣirī*) に，すでに「ハウゼ＝ラーニー」(Ḥauẓ-i Rānī) なる地名がみえるが，この「ハウゼ＝ラーニー」というのは，現在，同名の部落の南方に堤防の遺構を残している貯水池で，おそらくは，ムスリム侵入前のヒンドゥー時代に構築されたものと思われる。また，前述したハウズ＝ハースは，ハルジー朝時代には，スルターン＝アラーウッディーンの名にちなんで，「ハウゼ＝アラーイー」(Ḥauẓ-i 'Alā'ī) と呼ばれていたらしい。しかし，つぎのトゥグルク朝のスルターン＝フィーローズの時代には，今日まで伝わる「ハウゼ＝ハース」(Ḥauẓ-i Khās，すぐれた池の意味) の名をもって呼ばれていたことが，それぞれ，当時の文献の記述から知られる[1]。

なお，本報告書の「遺跡総目録」には，サルタナット時代に建造されたと推定される三つの橋〔W. 50, W. 51, W. 52〕を収録しておいたが，それらは，厳密にいえば，水利施設のなかに包含するのは適当ではないので，本巻ではとり上げていない。

第二節　水利施設に関する歴史的資料

デリー地域に現存するサルタナット時代の建造物については，歴史碑文が遺跡自体に直接残っている場合は，きわめて限られている。しかも，その限られた少数の歴史碑文をもつ建造物の大部分は，モスク・墓地・墓建築などであって，今日，デリー地域に現存する水利施設のなかで，その建造物自体に，直接，歴史碑文を残している例は一つもない。

われわれが第一巻の「遺跡総目録」のなかに収録した水利施設のなかで，かつて歴史碑文をもっていたことが確認される建造物は，つぎにあげる三つの井戸だけである。

1) スルターンプル (Sultanpur) の円井戸〔W. 1〕
2) チャーヘ＝ハース (Chāh-i Khāṣ) と呼ばれていた円井戸〔W. 11〕
3) ラードー＝サラーイー (Lado Sarai) の円井戸〔W. 14〕

これら三つの井戸に残っていた歴史碑文は，1910年代に，保全のために現地から移され，今日までレッド＝フォート内の考古博物館に保管されている[2]。われわれも，これらの歴史碑文を見る機会を与えられたが，

1) たとえば，サルタナット時代の文献としては，*Futūḥāt-i Fīrūz Shāhī*，*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī* (Baranī & 'Afīf)，*Ẓafar Nāmah*，*Tārīkh-i Mubārak Shāhī* などに，その名はあらわれており，また，Ibn Baṭṭūṭa や他のアラブ人の記録などにも言及されている。
2) *Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology*, 2nd edition, Calcutta, 1926, p. 5, B. 11. Inscribed Slab of red sandstone; B. 13. Inscribed Marble Slab; B. 7. Tablet.

碑文の石材の表面の部分は，著しく磨滅してしまっていて，内容の解読をきわめて困難なものとしている。なお，本巻においては，それらのうちの一つの碑文の写真とわれわれが採取した拓本一部とを紹介しておいた(本巻23ページ，挿図2，3を参照)。

一方，バーオリーには，今日，歴史碑文が残っているものは皆無であるが，つぎの二つの遺跡については若干のことがらを記しておく必要がある。それは，ラージョーン＝キ＝バーイーン(Rājūn kī Ba'aīn)〔W. 26〕とガンダク＝キ＝バーオリー〔W. 18〕と呼ばれるバーオリーで，いずれも，本巻の第一編で詳細に紹介する遺跡のなかに含まれている。このうち，前者の場合には，このバーオリーに直接連なる西側のモスク〔M. 39〕の前庭に，十二本柱の墓建築〔T. 103〕が立っており，その庇の上方に歴史碑文が残っていて，このバーオリーの歴史的背景を，間接ながら示唆している(本巻40ページ，挿図19参照)。また，ガンダク＝キ＝バーオリーの場合には，井戸の側にある四層から成る部屋の最上層の北側壁面に，明らかにアラビア文字と推定される碑文の痕跡が，最近まで残っていた。のちに紹介するように，今日ではまったく剝落してしまったこの碑文が，歴史的内容をもつものであったかどうかは，まったくわからない(本巻35ページ，および挿図15参照)。

一方，デリー地域に残存している堰堤やそれに附設された水門その他の建造物に文字碑文が残っている例は皆無である。ただ，本巻第一編で詳述するサート＝プラ(Sāt Pulah)と呼ばれる大水門〔W. 48〕に附設された家屋風の建造物の壁面に，わずかに，ディスク文様が残っているにすぎない。

ところで，デリー地域に現存する水利施設のうち，井戸とバーオリーに関しては，サルタナット時代の史書には，その名を載せて紹介しているものはない。ただ，フィーローズ＝シャー時代の史書に，わずかに「井戸」(Chāh)という名が散見するのみである。しかし，堰堤の場合には，わずかではあるが，具体的にその名称と建設の事実とにふれたものが，トゥグルク朝後期の史書のなかに認められるのである。しかし，このような記述は，きわめて例外的であって，貴重な史料といわなければならない。詳しい内容は，つぎの第一編において紹介するワジーラーバードの水門とマヒパールプルの堰堤の関係個所(71，78ページ参照)，および第二編のなかでふれることとする(第三章第三節，119–120ページ)。その史書とは，シャムセ＝シラージュ＝アフィーフ(Shams-i Sirāj 'Afīf)の『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*)であるが，その他にも，同時代のズィヤーウッディーン＝バラニー(Ziyā' al-Dīn Baranī)の同名の史書にも，堰堤(Band)と思われる建造物に関する記述をわずかに数行見出すことができる。[1)]

上にいくつかの例をあげたような，少数の文献にみられる片々たる記述をのぞくと，井戸やバーオリー，あるいは堰堤・水門などについての具体的な記述は，同時代またはサルタナット時代を通じての文献には，まったくみられない。このことは，見方を変えれば，現存する水利施設の遺跡そのものが，同時代の歴史研究の資料として，いかに重要な意味をもっているかを示しているともいえるのである。

第三節　ムスリム侵入前のデリーの水利施設

ムスリム諸勢力が侵入してくるまえから，デリーは，ヒンドゥー＝ラージプート王権，とくにトーマル(Tomar)およびチャウハーナ(Chauhāna)系ラージプート王権の支配の拠点としてその名を知られていた。なかでも，チャウハーナ＝ラージプートの王プリトゥヴィ＝ラージュ(Prithvi Rāj)が建てたいわゆるラーイー＝ピトーラーの城砦(Qilā'-i Rāī Pithaurā)には，すでに，相当数の人口が住んでいたものと推定される。この城

1) 荒，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，pp. 112–127，pp. 128–142を参照.

市とその周辺の住民の生活の必要のために，さまざまな水利施設が設けられたのは当然のことである。小規模な井戸などについては，今日，その痕跡を認めることはできないが，大規模な貯水池や堰堤については，現在なお，この城砦の内外の地に，その遺構を見出すことができる。すなわち，ラーイー＝ピトーラー城砦内部のものについていえば，ヨーグ＝マーヤー寺院 (Yog Māyā Manḍil) の北方に，アーナング＝タール (Ānang Tāl) と呼ばれてきた大貯水池の遺構があり，伝承は，この水利施設をかつてのラージプート王たるアーナング＝パール (Ānang Pāl) 二世の建造に帰している。[1] また，大城砦の東北隅の東方ハウズ＝ラーニー部落の南方に残る築堤の遺跡は，奴隷王朝時代の史書『タバカーテ＝ナーシリー』(*Ṭabaqāt-i Nāṣirī*) にみえる貯水池ハウゼ＝ラーニー (Hauẓ-i Rānī) かもしれない。また，ラーイー＝ピトーラー城砦のはるか東南方の岩丘上には，太陽神を祀った神殿の遺跡に接して，スーラジュ＝クンデ (Sūraj Kuṇḍe) と呼ばれる貯水池の遺構が現存しており，その周辺には，現在なお，階段状の石積みのあとが残っている。さらに，その西南方約２キロメートル，トゥグルカーバード (Tughluqābād) 大城市の遺跡の東南端から南に約５キロメートルの地点のアーナングプル (Anangpur) 部落の附近には，巨大な堰堤の遺跡が現存しており，[2] 伝承は，この構築物を，スーラジュ＝クンデとともに，トーマル＝ラージプートの時代のものとしている。

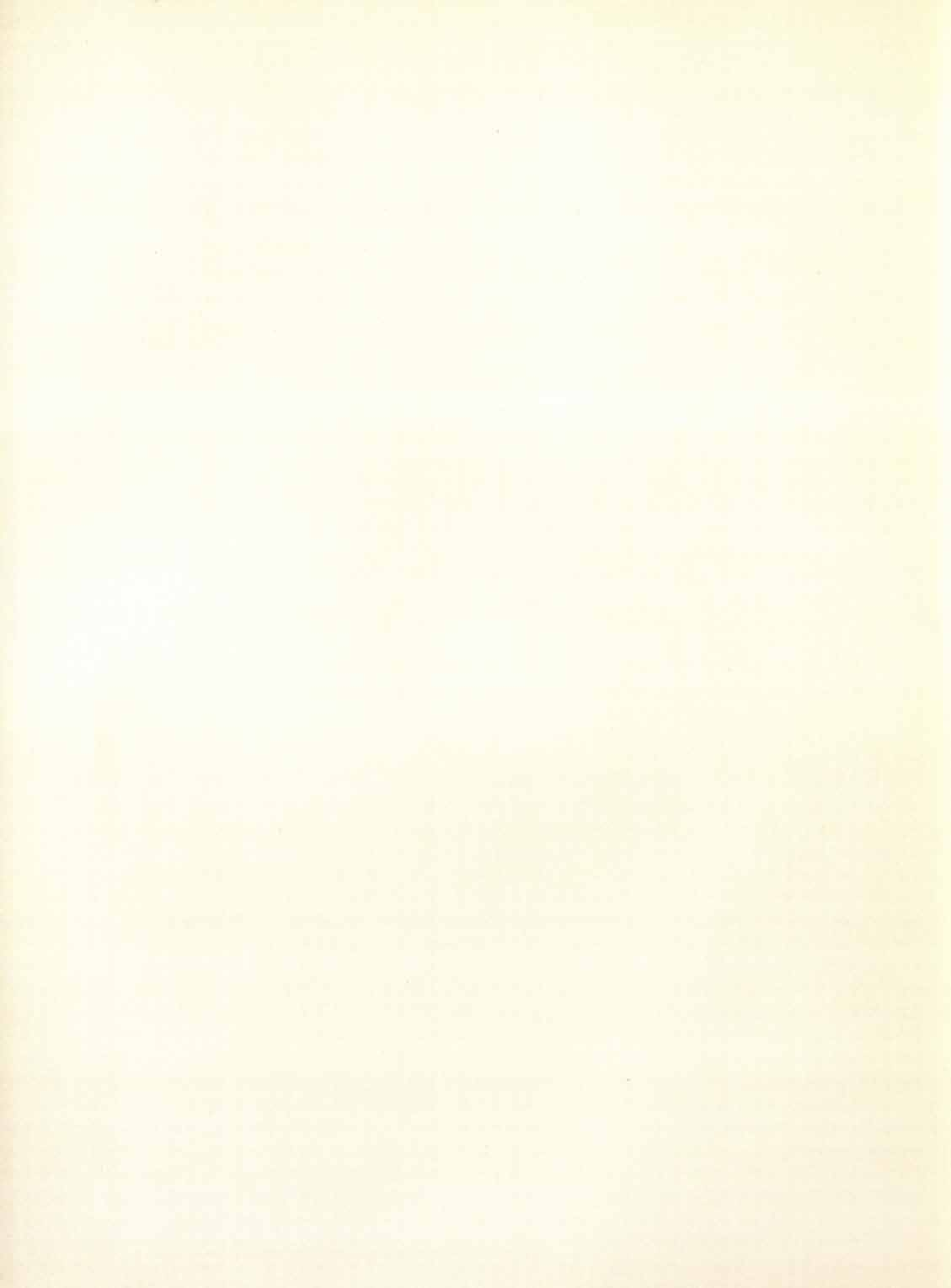
上に紹介してきた水利建造物が，ムスリム勢力のデリー占領よりまえの，いわゆるヒンドゥー＝デリーの時代に属するものであることは，ほぼ疑いないところであるが，これらの建造物のほかにも，ヒンドゥー・ムスリムのいずれの時代のものかよくわからない遺跡も見出される。たとえば，われわれが，第一巻「遺跡総目録」に載録しておいたラーイー＝ピトーラー南城壁北方のバーオリーと呼ぶ遺跡〔W. 33〕は，あるいはムスリム支配成立前の時代に建造された可能性もないとはいえない。

これまで紹介してきたいくつかの水利施設の遺跡から推測すると，ムスリム侵入前にデリーを掌握していたラージプート支配層は，主としてデリー地域南部の各地に，かなりの規模をもつ人工貯水池や堰堤などをつくりあげていたことがわかる。デリーとその周辺地域に君臨した初期のムスリムの支配者が，ヒンドゥー時代からのこれら既存の水利施設をそのまま利用したことは，容易に想像されるところである。

デリー＝サルタナット三百数十年の支配の間に，ムスリムの支配者たちは，数は少ないが大規模な人工貯水池を建設した。井戸やバーオリー，あるいは堰堤・水門などについては，諸王朝の各時期を通じて，さまざまな規模と形式とをもつものが，デリーの諸地域において構築されてきた。しかし，これらの諸種の水利施設は，モスクや墓建築のように，新たに支配者となった外来のムスリム諸勢力によってインドの地にはじめて齎された建造物ではなく，いずれも，ヒンドゥー時代から存在する種類のものだったのである。こうした点では，デリー地域に現存するデリー諸王朝時代の建造物のなかで，水利施設のみは，他の諸種の建造物とはその性格を異にするものということができるのである。ヒンドゥー教やその他のインド在来の諸宗教とは性格の異なるイスラームの教理や儀礼と直接のかかわりをもつモスクや墓建築，あるいは他の宗教施設とちがって，人間の日常生活や生産活動に必要欠くべからざる水の確保と利用とを主要な目的とする水利建造物の場合，けだし，このことは当然のことといえよう。

1) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, No. 140, p. 87.
2) Y. D. Sharma, *Delhi and its Neighbourhood*, prepared by Organizing Committee, XXVI International Congress of Orientalists, New Delhi, 1964, pp. 84-85. 山本達郎「追記」(荒，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」所収 pp. 214-218) 参照.

第一編　個別的研究



はじめに

われわれが現地において調査し，第一巻「遺跡総目録」に載録した水利施設は，17の井戸，18のバーオリー，11の堰堤および三つの水門を含んでいる。この第一編においては，これらの建造物のなかから，歴史碑文や同時代の史書の記述によって，ある程度，その建設の年代および歴史的背景を明らかにし得る遺跡，あるいは形態と構造の上で特徴的なものと認められるもの，さらに，当時の水利計画のなかで重要な役割を果たしてきたものなどを選んで，その地理的環境と歴史的背景について述べ，あわせてその形態・構造・機能などを，細部にわたって詳述した。

本編においては，二つの円井戸，二つのバーオリー，三つの水門および一つの堰堤の遺跡をとりあげた。まず，井戸としては，もっとも単純な形態と構造とをもち，サルタナット初期に建設されたことが確認されるスルターンプル (Sultanpur) の円井戸〔W. 1〕と，中期における宮廷区域内に現存し，きわめて複雑な構造と興味あるメカニズムとをもつフィーローズ＝シャー＝コートラ (Firoz Shah Kotla) の円井戸〔W. 17〕とをとりあげて，それぞれ，本編の第一章および第二章とした。ついで，バーオリーのなかから，現存状態が比較的良好で，その時代的背景をある程度明らかにし得る二つの遺跡を選んだ。第三章でとり扱ったガンダク＝キ＝バーオリー (Gandak kī Bāūlī)〔W. 18〕は，構造上の特徴から初期に属するものと推定され，形態の面からみて人びとの興味をそそる遺跡である。また，第四章で扱うラージョーン＝キ＝バーイーン (Rājūn kī Ba'aīn)〔W. 26〕は，モスクと接続して建てられた複雑な形態をもつ建造物で，サルタナット末期に属するものである。

中期に建設された堰堤と水門とは，サルタナット時代の水利施設建造の歴史において，特異な地位を占めるものである。われわれは，これらのなかから四つの遺跡を選んで，第五章から第八章において，その構造と機能および歴史的背景とを詳述し，これと関連するトゥグルク朝支配層の水利計画について考察を試みた。第五・第六章においては，トゥグルク朝前期の都市の城壁の一部を利用して計画された水利事業のなかで重要な役割を担った水門として，トゥグルカーバード (Tughluqabad) の水門〔W. 47〕と，サート＝プラ (Sāt Pulah)〔W. 48〕とを対象とした。これに対して，トゥグルク朝後期のスルターン＝フィーローズ＝シャー (Sulṭān Fīrūz Shāh) の治世に，農業生産の増大を目的として建設された二つの水利施設，すなわち，ワジーラーバード (Wazirabad) の水門〔W. 49〕とマヒパールプル (Mahipalpur) の堰堤〔W. 44〕とを考察し，これを，それぞれ，第七章と第八章とした。

これらの水利施設を詳細に考察した結果，われわれは，これらの建造物が，当時の政治・経済・社会・宗教などの動向に密接なかかわりをもっており，たとえば，民衆の日常生活や宗教活動の面において，あるいは，支配層による農業政策の遂行にあたって，きわめて重要かつ切実な役割を演じていたことを明らかにし得たのである。われわれは，この研究が，イスラームの波及した諸地域における水利施設の研究，ならびにそれに関連する歴史的諸問題の解明に，いささかなりとも貢献することを期待するものである。

第一章　スルターンプルの円井戸

第一節　遺跡の環境と歴史的背景

ニューデリーの南部にあるメヘローリー (Mehrauli) 部落の南端から南南西へ約3キロメートル，ハイウェーの南側にスルターンプル (Sultanpur) の部落がある。この部落の東南方約250メートルの地に，一つの円井戸が残っている（本巻，図版1a, b参照)。この井戸を，われわれは，スルターンプルの円井戸〔W. 1〕と呼んでいる。

この井戸の遺跡の近傍にあるスルターンプル (Sultanpur) が，いつのころ成立した部落であるかはわからないし，サルタナット初期の文献資料にも，それらしい地名はあらわれていない。しかしながら，ムスリム支配の成立前からデリー＝サルタナット時代の初期にかけて，デリーの中央権力の拠点であった旧ラーイー＝ピトーラー城砦から隔たることわずか数キロメートルのこの地域が，ヒンドゥー支配の末期からムスリム支配の初期にかけて，デリーの支配層や一般の住民たちの生活とかかわるところが多かったであろうことは，想像するに難くない。現在の環境から推定してみても，この部落附近は，おそらくは，ムスリム支配の成立前から，デリー周辺の主要な農業地帯に属していたものと思われる。あるいは，のちにふれるように，デリー南方の主要交通路が，この附近を通っていたかも知れない。



挿図 1　メヘローリー部落周辺と南方地域地図
（建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による）

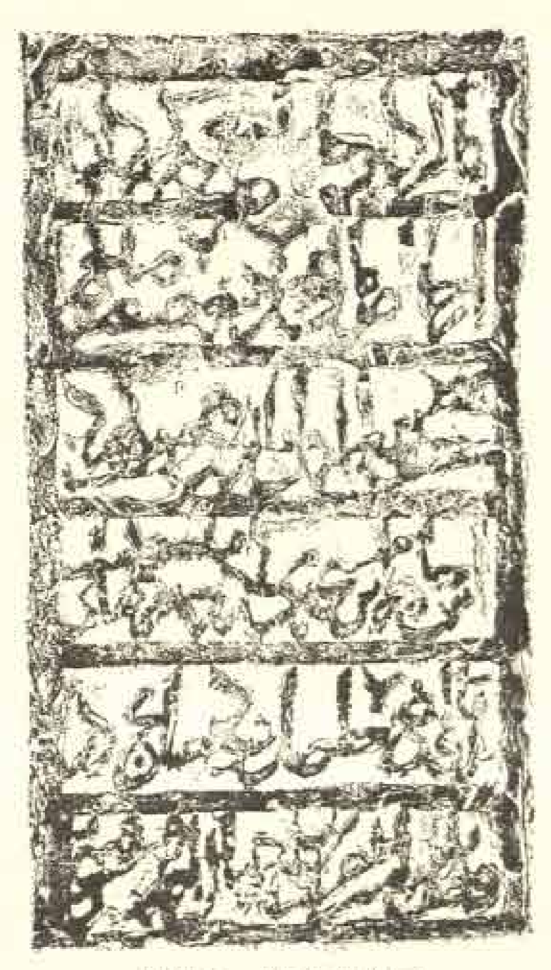
この円井戸は，次節に詳述するように，形態も構造も簡単なものであるが，かつて，その西側の内壁に赤砂岩の碑文の板がはめこまれており，そこに記されている年次によって，デリー地域に現存するサルタナット時代の井戸のなかではもっとも古い時期に属することが判明している。この碑文は，1910年代に行なわれたインド考古調査局による遺跡調査に際して発見されたもので，その後，保全のためにデリー考古博物館 (the Delhi Museum of Archaeology) に移され，今日なお，オールドデリーのレッド＝フォート内の同博物館に保管されている。[1] インド考古調査局の報告書 (Vol. III, 1922年刊) には，その碑文について，読解し得た部分のみが紹介されているが，われわれも，1961年に同博物館に保管されていた碑文の実物をみることを許された。その際に撮影した写真（挿図2）と採取した拓本（挿図3）とを，ここに紹介しておこう。碑文の磨滅した現

1) Archaeological Survey of India, *List of Muhammadan and Hindu Monuments: Delhi Province*, Vol. III, Calcutta, 1922, No. 142, pp. 88–89.　*Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology*, Second edition (revised and enlarged), Calcutta, 1926, B. 11, p. 5.





挿図 2　西側内壁にあった碑文



挿図 3　碑文の拓本

状から，ASI の報告書に紹介された断片的な文面以上に内容を読みとることは難しいので，ここでは，前記 ASI の報告書に紹介されたペルシア語原文を脚註に載せておく。[1)]

ところで，この碑文の読解し得る部分の内容からは，全文の意味を理解することはできないが，6行目の終りの部分に，おそらくはこの井戸の建設の年次と思われる，「661年に」(dar sāl-i aḥadī wa sittīn wa sittami'at) という語句を見出すことができるのである。ただ，文中の「サーリフ＝ムゥタマド」(？)(Sālih M'utamad ?) なる人名が，はたして ASI の報告書のいうように，この井戸の建設者の名であるかどうかについては断言はできない。

また，この碑文には，二個所にみえる「この井戸」(īn chāh) という語とともに，「このモスクに」(ba-īn masjid) という語句が見えているところから，この井戸が建造されたときに，同時に，近傍にモスクが建てられたか，あるいは，この地にすでにモスクが建っていて，それに関連してこの井戸がつくられたかのいずれかの場合が推測され得ると思う。ただし，この井戸の近傍には，今日，モスクはもちろん，他の建造物の痕跡は，なに一つ見出すことはできなかった。さらに，「補修した」(ta'amīr kard) という語句がみえるところから，この井戸も含めて，なんらかの建造物の補修が行なわれたことも推察されるが，よくはわからない。

これを要するに，この円井戸は，おそらくは，661 A.H. 年，すなわち1262–63 A.D. 年に，モスクとともに，あるいはすでに建っていたモスクに附設して，建造されたものと推定することができよう。

ところで，この井戸の建設目的と社会的役割については，明確にはし難い。われわれが現地へ赴いたときには，附近には，排水機械をも使用している貯水池が設けられていて，この井戸は使用されていなかったが，

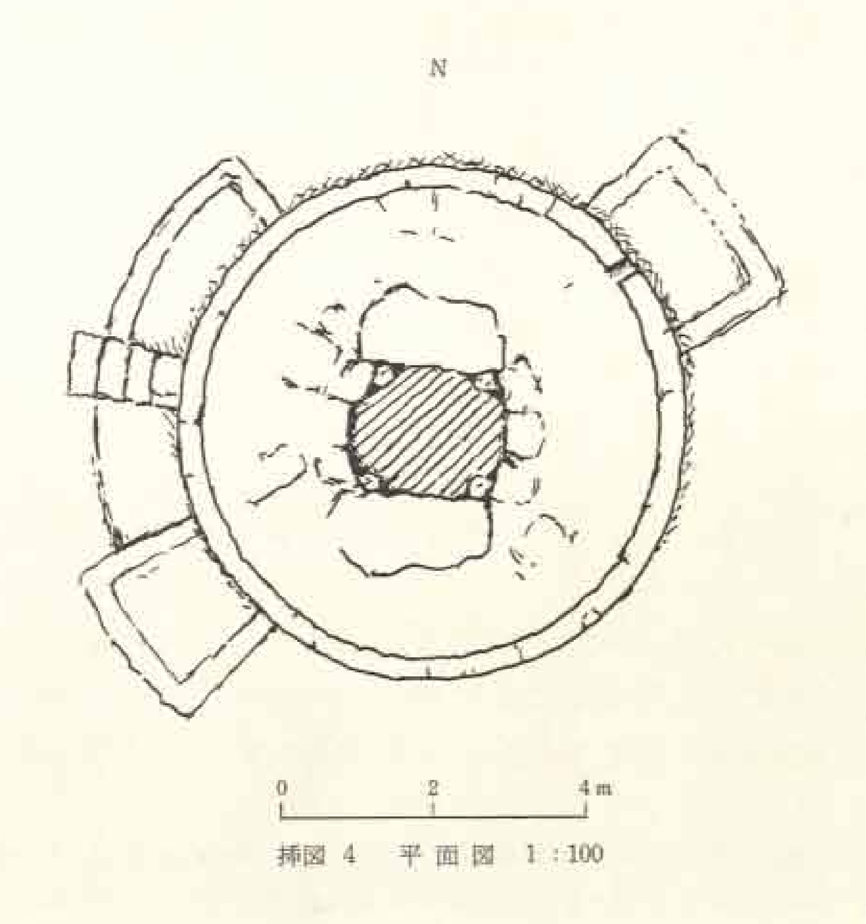
1)　*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, p. 88.

بنا کرد این چاه . . . و تعمیر کرد . . . از خالص مال خود . . . صالح معتمد . . . این چاه
. . . باین مسجد . . . میشود . . . حاصل شود . . . در سال احدی و ستین و ستمایة

ASIの前記報告書では，当時（1910年代）なお，村民によって利用されていたという。この附近の現在の環境からみれば，この井戸は，農業用のものと考えるのが妥当のように思われるが，この井戸が建設された当時のこの附近の環境が，現在と同じであったと断定することはできない。農耕用あるいは部落民の日用のものであったかもしれないが，碑文の内容からみると，モスクと関連して建てられたものであったらしい点も認められるので，後者の可能性も否定できない。のちに述べるように，デリー周辺の井戸のなかには，附近の住民のみならず，旅行者に飲料水を供給するために建てたものもあることが，歴史碑文によって知られている（第二編第四章，134ページ参照）。サルタナット初期におけるデリーの首都の近傍で，おそらく農耕地帯のなかに含まれていたと思われるこの地域は，あるいは，南からの交通路にあたっていて，そのために，モスクや井戸が，この地方の権力者によって寄進されたと想像してみることも，あながち突飛なこととはいえないかもしれない。

第二節　形　態　と　構　造

スルターンプルの円井戸は，外径6.7メートルの円形平面をなしており，その中心に，直径2.2メートルの井戸の部分がある（挿図4）。この円井戸全体は，もともと，整った切石積みによって構成されていたものと考えられ，井戸の内部の壁面や，外壁の下の部分などに，本来のものと思われる切石積みをみることができる。しかし，外壁の上の部分は，粗雑な石からなっており，また，ここには多量の漆喰が認められるので，この部分は，後代の補修になるもののように思われる（図版1a）。



挿図 4　平 面 図　1：100

井戸の開口部分には，その北側と南側とに，大型の板状の石が井戸の内側に張り出して置かれており（図版1b），その石の両端の下方にそれぞれ1個ずつ，合計4個の突き出し石が，井戸の壁面から内部に長くとび出している。これらの突き出し石は，井戸水の汲み上げ装置の一部として使用されたものであろう。井戸の内部には，現在，なお水がたたえられており，井戸の上面から水面までの高さは，1961年末の調査時においては，5.2メートルであった。井戸の周囲をめぐる水汲み場の床面は，もともと，石敷きからなっていたものと考えられるが，中心から周辺に向って下がる傾斜をもっており，その外側に幅0.3メートルの周縁がとりまいている。しかし，この周縁部分は後代の補修になるものである。

さて，スルターンプルの円井戸の外壁の外側には，現在，貯水槽や階段などが設けられている（挿図4）。まず，その西側には，水汲み場に昇るための4段からなる階段があって，この階段の両側には，幅0.8メートルの細長い貯水槽がみられる。また，東北と西南にも，それぞれ貯水槽が設けられており，これら二つの場合には，水汲み場の周縁に溝あるいは穴があって，汲み上げられた水は，これらを通して，貯水槽のなかに

導かれるようになっている。しかし，円井戸の外壁の外側に現在みられるすべての貯水槽は，小さな割石と漆喰とからなる粗雑な壁でつくられており，いずれも，後代になって追加・構築されたものと思われる。従って，この円井戸が，建設当初において，どのような施設をもっており，また，汲み上げられた水が，どのような方法で運ばれたかについては，現在では，ほとんどわからなくなってしまっている。

第二章　フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸

第一節　遺跡の環境と歴史的背景

この大規模な円井戸〔W. 17〕は，現在，ニューデリーの北東部のフィーローズ＝シャー＝コートラ (Firoz Shah Kotla) という名で知られている遺跡公園の北東隅に近い区域に残っており，ムガル中期の首都たるシャージャハーナーバード (Shāhjahānābād) のデリー門 (Dihlī Darwāzah) の東南約700メートル，マトゥラー＝ロード (Mathura Road) の東側約300メートルを隔てた地点に現存している。この円井戸のすぐ東側には，いわゆるアショーカ王の石柱をもつ，階段状をなした三層の宮廷建造物〔O. 7〕が残っており，また，井戸の東南側には，フィーローズの王城内の巨大なマスジッド〔M. 5〕が廃墟の姿をとどめている。現在では，この円井戸の周辺は，樹木と芝生をもって整備され，市民の憩いの場となっている。

挿図 5　デリー市街地中心部における建造物分布図
（建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による）

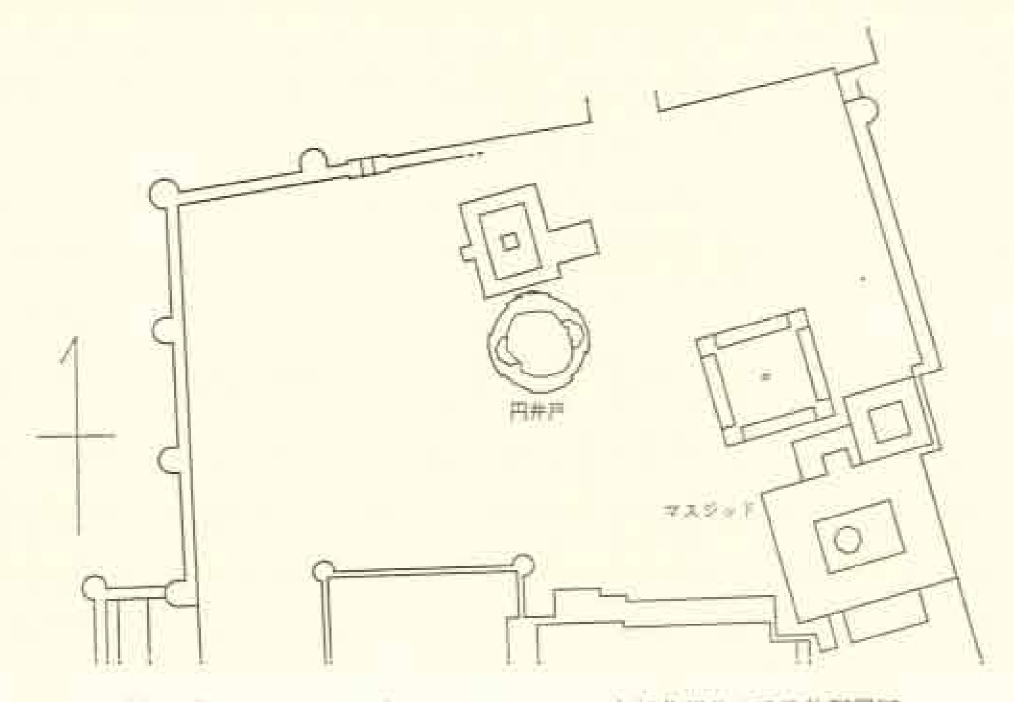
今日，フィーローズ＝シャー＝コートラとして知られている区域は，その一部に，なお巨大な城壁のあとがみられ，内部にはさまざまな建造物が残存しており，いずれも，トゥグルク朝のスルターン＝フィーローズ＝シャー (Sulṭān Fīrūz Shāh) の時代の建造物の特徴を示している。現在のフィーローズ＝シャー＝コートラの区域が，スルターン＝フィーローズの治世に造営されたフィーローザーバード (Fīrūzābād) の宮廷区域にあたることは，ほとんど疑いないところである。[1)]

スルターン＝フィーローズ＝シャーは，北インドの各地に，いくつかの新しい城市を建設させているが，みずからの帝国の首都たるデリーにおいても，新たな都市の造営を企図した。同時代の歴史家シャムセ＝シラージュ＝アフィーフ (Shams-i Sirāj ʻAfīf) が残した『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*) には，この新都の境域内に含まれていたとされる「十八の場所」(hazhdah mawāẓiʻ) の地域名が記されている。[2)]

1) このフィーローズ＝シャー＝コートラの遺跡については，これまで，多くの論著のなかでふれられているが，もっともまとまったものとしては，つぎの報告書がある。　J. A. Page, A Memoir on Kotla Firoz Shah, Delhi, with a translation of Sirat-i Firozshahi by Mohammad Hamid Kuraishi, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 52, Delhi, 1937.

2) Shams-i Sirāj ʻAfīf, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, Persian text ed. by M. Vilayat Husain, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1891, p. 134.
荒 松雄，「デリーに現存する奴隷王朝中期の墓について」，東洋文化研究所紀要，第34冊，1964年，pp. 24-25 参照。

しかし，現在，このフィーローザーバード全域の遺構を辿ることは不可能であり，また，この都が，はたして完成されたかどうか，あるいは，それが，他のデリーの城市のように城壁をもって囲まれていたものかどうかも，よくわからないといわざるを得ない。上にふれた同時代のアフィーフの史書にみえるこの都市の境域には，ニューデリー東部のプラーナー＝キラー (Purana Qila) のあたりと思われるインドラパト (Indrapat) からさらに現在のメヘローリー (Mehrauli) 部落に当ると思われるマフローラ (Mahraūlah) なる地名までが含まれており，そのままでは，ほとんど，デリー地域の相当な部分を占めるほどの広範囲なものとなるので，フィーローザーバードというのは，あるいは，従来の諸城市をも包含した，いわば大デリー (Greater Delhi) ともいうべき地域を意味する名称であったかもしれない。もしそうでないと考えるならば，前記の同時代の史書にみえる境域内の地名は，あまりにも矛盾したものといわざるを得ない。フィーローザーバードについては，なお多くの疑問点が残されているといえよう。しかし，スルターン＝フィーローズの宮廷が，現在のフィーローズ＝シャー＝コートラの地に新しく設けられたことだけは，指摘し得るところであろう。



挿図 6　フィーローズ＝シャー＝コートラ内部北部分の建造物配置図

ところで，問題の円井戸に関しては，同時代の史書あるいは後代に書かれた諸文献にも，それに関する記載はまったく見当らない。また，現存する遺跡の内外にも，さらに附近に残存するいくつかの建造物にも，この井戸に関連する歴史碑文の如きものはなに一つ見出すことができない。しかし，この円井戸の規模の大きさや複雑な構造などから，19世紀以降の旅行記や報告書の類にはこの井戸に言及しているものもあるが，それらの記述からも，この井戸についての歴史的背景を探ることは，ほとんど不可能である。さきに紹介しておいた J.A. ペイジ (J.A. Page) の調査報告書（前ページ，脚註1参照）も，1910年代の ASI による調査報告書[1]の場合と同じく，この円井戸については詳細を記してはいない。この円井戸からかつてのジャムナー川に通じていた地下道についても，次節で述べるように，さまざまな解釈ができるのである。

ところで，この円井戸は，その建設された場所から推して，フィーローズ＝シャーの宮廷に住む人びとのための水利施設であったことは容易に想像し得るところである。そして，次節で述べるように，構造上からして，宮廷区域内の多くの人間が，同時にこの井戸の水を利用することに考慮が払われている点は，デリーにおけるサルタナット時代の水利施設のなかでもユニークなものといえよう。さらに想像をめぐらすならば，この円井戸は，人間のみを対象としたものでなく，井戸の外側周辺は，当時の宮廷内で多数飼育されていたと思われる馬や象などの軍事用の動物のためにも，必要に応じて用いられたものであったかもしれない。いずれにせよ，この井戸は，建造された当時，その構造と機能の複雑なところから，フィーローズ＝シャーの

1) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. II, Calcutta, 1919, p. 71.　なお，この報告書では，「円型バーオリー」(circular baoli) という表現をとっている。

宮廷内でも，相当の話題を呼んだものと想像してよいであろう。そこに，中世インドの支配層の奢侈生活にうかがえるいわば「遊び」の要素の一端を認めることもできるかもしれない。

第二節　構造と機能

フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸は，直径27.2メートルの円形平面をなしており，その東西南北の四つの部分は，それぞれ，1.1メートル外部に張り出している（図版41）。また，北側の張り出し部分には，さらにその外側に1.2メートルのとび出しがあって，そこには屋上にのぼる階段が設けられている。

東西の二つの張り出し部分には，それぞれ，中央部分に一つ，左右両端部分に一つずつ，合計3個のアーチが開かれている（図版42 a）。これらのアーチのうち，東張り出し部分の北側のアーチと西張り出し部分の南側のものとは，建造物の内部に通じる出入り口となっており，その他のアーチは，建物内部に開く窓となっている。南張り出し部分は，現在では，その西半部分が崩壊しているが，その中央附近には地表面まで達する大きな龕を，その東側には小さな龕をそれぞれ残しており，西側の崩壊部分にも，かつては後者と同じような小さな龕があったものと思われる。なお，中央附近の大きな龕の内側には，35センチメートル×30センチメートルの長方形の穴が穿たれており，建物の内部に向ってわずかに下向しながらつづいている。一方，北の張り出し部分においては，中央附近にある大きな龕と，両端部分にそれぞれ一つずつみられる小さな龕の他に，奥行きの深いアーチ形のトンネルが壁のなかに穿たれており，このトンネルは，高さ2.3メートル，幅0.7メートル，奥行き2.3メートルである。

東西南北の張り出し部分が以上のようなものであるのに対し，南西・北西・東北・東南の4壁面部分は，それぞれ，地上1.3メートルのところに，左右にならぶ六つの龕をもっている。これら四つの壁面部分のうち，西南の壁面部分においては，現在，上面を漆喰で仕上げた，高さ0.9メートルの棚状の張り出しがみられるが（挿図7），その中央部分に，屋上から水をおとすための，導水管と思われるものの痕跡（挿図13における a）が認められるところから，この棚状の張り出しは，もともと，貯水槽のようなものであったと考えられる。上述の漆喰仕上げ面は，おそらくは，この貯水槽の底部をなしていたものであろう。なお，上述の導水管は，外側がさしわたし1.1メートルの八角形をなし，内側は，直径0.5メートルの円形であったと推定される。また，この西南壁面部分の西端に近いところに，一辺0.3メートルの四角の穴が壁の内部に向って穿たれているのがみられるが，この穴は，のちに述べる，屋上から建物内部に水を落すための導水孔（挿図13における g）と交わる位置にあるところから，おそらくは，壁の内部でこの孔につづいていたものと考えられる。



挿図 7　西南部分にある貯水槽

一方，西北・東北・東南の三つの壁面部分においては，現在の状態からみて，上述のような貯水槽はなかったものと推定される。西北の壁面部分においては，現在，高さ約0.4メートル，幅0.2メートルの棚状部分


挿図 8　東南部分の縦溝

が壁の外側に認められるが，これがどのような性格のものであったかはわからない。また，東北・東南の二つの壁面部分においては，ところどころに，壁面からとび出た石がみられるので，かつては，これらの場所にも，何らかの棚状のものがつくられた可能性は考えられる。なお，西北・東北・東南の三つの壁面部分においては，それぞれ，その中央に，溝状のものが上下に走っているのが認められ，屋上からの長さは約2.2メートル，幅約18センチメートルである (挿図 8)。

この建造物の内部は，中心に位置する円形平面の井戸と，それをとり囲む部屋の列とからなっている (図版41)。中央の井戸は，本来は，直径8.9メートルの円形であったと思われるが，現在では，井戸に面する部屋の一部がくずれてしまっているために，より一層大きなかたちにみえる。この井戸は，現在，汚濁した水を満々とたたえており，1960年2月の調査時においては，この水のレヴェルは，井戸の周囲をめぐる下層の部屋の床面よりも，0.8メートル前後高くなっていた。

このような井戸をとり囲む部屋の部分は，上下二層からなりたっている。上層部分は，東側と西側とに，直径6メートルの円形平面の部屋をもっており，南側と北側とに，それらを結ぶ扇形平面の部屋がある。すでに述べた，東張り出し部分と西張り出し部分とに設けられた出入り口を入って鍵形の通路を通ると，東西の円形平面の部屋に達する (図版41)。これらの部屋は，現在では，壁および天井部分が半ば崩壊した状態となっているが，かつては，井戸に面する窓と，南側および北側につづく扇形平面の部屋に通じる通路とをもっていたことがわかる。天井は浅いドーム形をなしており，現在では，東西両室とも，二つずつの明りとりの窓を残している。

南側と北側とに設けられた扇形平面の部屋は (図版3 a, b)，現在では，井戸に面する床面部分が崩落してしまっているが，本来は，東西二つの円形平面の部屋の，井戸側にみられる円弧を延長する円周上まで広がっていたものであり，その奥行きは6.9メートルであった。これらの部屋は，現在では，屋根がほとんど崩れ落ち，また，かつてその屋根を支えていたと思われる柱も失われてしまっているが，壁面にのこるピラスターの位置から判断すると，間口9間・奥行3間の，列柱からなる部屋であったことがわかる。現在，礎石と推定される珪岩の切石がいくつか残されているので，おそらくは，切石からなる柱が，もともと，この天井を支えていたものと思われる。

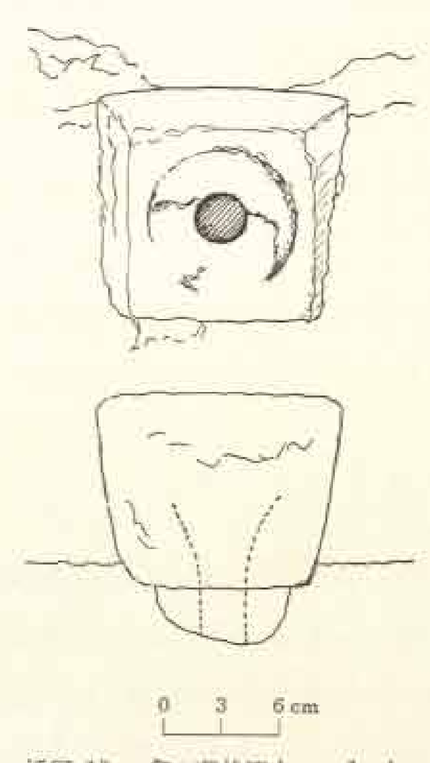
南側と北側とにある扇形平面の部屋の奥壁には，各柱間ごとに1個ずつ，アーチ形の龕が設けられている (図版3 a, b)。これら南北合せて18個の龕は，間口1.2メートル，奥行き0.9メートル，高さ1.9メートルの大きさで，部屋の床面の上方0.6メートルにある。これらの龕においては，底の部分に，厚さ0.3メートル，高さ約0.4メートルの堰がつくられていて，この部分は水受けになっている (挿図 9)。また，これらの堰のなかほどのところには，嘴状の石製流水口がとりつけられていて，水受けに貯えられた水は，水受けの外に向って流出できるようになっていた (挿図10)。さて，南と北とに並ぶ龕列の，それぞれもっとも西に位置する龕の奥壁には，直径11センチメートルのパイプの口が開いている (図版3 a)。しかし，現在では，南龕列西端の龕においては，このようなパイプの口は，後代の補修のためにみられなくなってしまっている。また，隣合う



挿図 9 内部上層部屋奥壁の龕
(南龕列東より3番目のもの)

龕と龕とのあいだには，直径8センチメートルのパイプが通じていて(挿図9)，南側と北側とにそれぞれ並ぶ九つの龕は，このようなパイプによって一つながりとなっている。屋上から建物内部の上層部分に導かれた水は，まず，西端の龕の奥壁に開かれたパイプの口から流れ出て，いったん，この龕の水受けに貯えられ，その後，龕と龕とを結ぶパイプによって，つぎつぎと東の龕へ運ばれるしくみになっている。なお，現在では，南北龕列とも，東から二番目に位置する龕は，底部の水受けがとりのぞかれて，部屋の床面まで達する縦長のものとなっており，水の流れは，一応，この龕で終るかたちになっている。従って，パイプの水は，東端の龕には及ばないことになるのであり，このような改変は，後になって行なわれたものと思われる。なお，東から二番目の龕に流れついた水は，おそらくは，ふたたび，井戸のなかにもどされたものと推定され，北側の部屋の床面には，この龕のすぐ前の場所から井戸の方向に向う，幅約50センチメートルの溝が明瞭に残っている(図版41)。

以上が，建物内部上層部分の状況であるが，つぎに，その下層部分は，上層部分とほとんど同様の平面構成をもっており，東と西とにおいては円形平面の部屋を，南と北とには扇形平面の部屋をそれぞれ設けている。さて，上層部分の扇形平面をなす南部屋の東端と，北部屋の西端とに設けられた階段を降りると，それぞれ，下層部分の東と西とにある円形平面の部屋に達する。これら二つの部屋は，直径5.1メートルの大きさで，その中央に，上層の円形平面の部屋の床を支える，直径1.8メートルの太い支柱が立っている(図版42 b)。この部屋は，井戸の側にアーチ形の窓を開いており，また，その左右には，南側と北側とにある扇形平面の部屋に通じる鍵形の通路をもっている。なお，東の円形平面の部屋から東方へ，幅0.8メートル，高さ2.1メートルの地下の通路が一直線に延びている(図版42 b)。この地下の通路は，フィーローズ=シャー=コートラの東端をなす石積み，すなわち，かつてのジャムナー河畔にまでつづいており，その全長は約110メートルにおよぶ。この通路の機能については，水の動きと関連して，例えば，増水した井戸水の放出とか，あるいは，ジャムナー河の水のとり入れとか，さまざまな場合が考えられようが[1)]，しかし，この通路が，下層部分の部屋の床面と，ほとんど差のないレヴェルにあることや，あるいは，その通路の大きさなどからみて，人びとの秘密の往来のためのものとする方が，より妥当な推測であるかもしれない。



挿図 10 龕の嘴状流水口 1:4

下層部分の南側と北側とには，上層部分の場合と同じく，扇形平面の部屋がある。現在では，奥壁を残すのみで，ほとんど崩壊した状態となっているが，かつては，間口9間・奥行1間の，列柱からなる部屋であったことが推定される。九つの間のうち両端の間には，この部屋と円形平面の部屋とを結ぶ鍵形の通路が開い

1) J. A. Page, A Memoir on Kotla Firoz Shah, Delhi, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 52, p. 9.

ており，中間の七つの間には，奥壁にアーチ形の龕が備わっている。これらの龕は，上層部分のものより小型であるが，後者と同様の形態と機能とをもっており，その底部には水受けが設けられ，嘴状の流出口も取りつけられていた。下層部分においても，上層部分の龕列と同じく，南北龕列ともに，西端の龕の奥壁にパイプの口が開いており（挿図11），また，龕と龕とを結ぶパイプもまた認められる。



挿図 11　下層部屋北龕列西端の龕にみられるパイプの口

さて，つぎに，屋上の状況について叙述してみたい（図版40）。屋上にのぼる階段は，すでに述べたように，北の張り出し部分に設けられている。この建造物の屋根は，現在では，中央附近のかなりの部分が崩落してしまっていて，わずかに周辺部分を残すのみであるが，かつては，直径8.9メートルの円形平面の井戸の部分をのぞくすべての空間は，屋根によって覆われていたものと思われる。屋上は，東西に位置する二つの円形平面の部屋の屋根にあたる部分をのぞくと，概して平坦となっており，屋根の周囲には，幅0.8メートルの低い胸壁がめぐっている。この胸壁の上を，かつては，さらに，石の欄干が走っていたものと考えられ，現在なお，ところどころに，その支柱の一部と思われる石の断片がみとめられる。

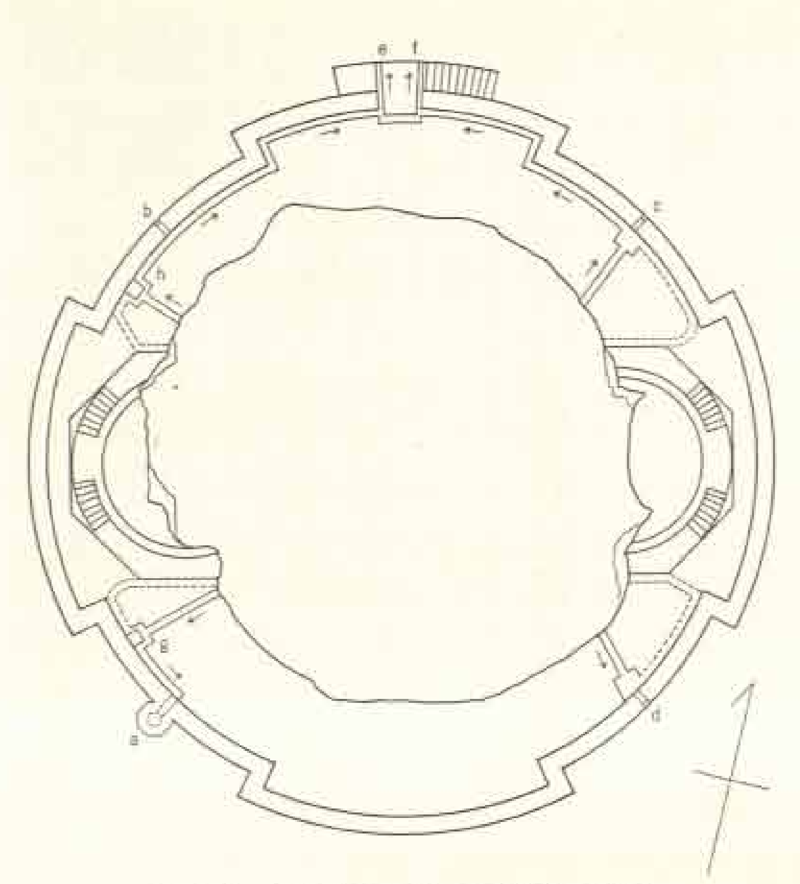
東西の二つの円形平面の部屋の屋根にあたる部分は，他の平坦な屋上部分よりも一段と高くなっている（図版2 a, b）。この屋根の部分は，さしわたし9メートルの八角形平面の低い台の上に，直径7.3メートルの円形平面部分が重なったかたちのもので，二つの階段によってその頂面に昇ることができるようになっている（図版40）。この頂上は，おそらくは，本来，平らな面をなしていたものと思われるが，その上に，かつて，何らかの建造物，あるいは施設があったかどうかについては，現状からはよくわからない。



挿図 12　流 水 溝 と 西 南 の 導 水 孔

南北の平坦な屋根の屋上には，幅0.3メートル，深さ 8 〜 12 センチメートルの流水溝がみとめられる（挿図12）。この流水溝は，屋上の中央附近に汲みあげられた水を，建造物内外の各部分に送り込むためのもので，中央部分から周辺に放射状に向う 4 本の流水溝と，屋上の胸壁に沿って屋根の周辺をめぐるものとがある（挿図13）。一方，これらの流水溝の途中あるいはその末端には，さまざまなかたちの導水施設があって，導水管（挿図13における a）と縦溝（b, c, d）ならびに流水溝の末端（e, f）は，水を建造物の外部に運ぶ施設であり，導水孔（g, h）は，水を建物内部に送り込むためのものである。

しかし，屋上をさらに詳細に観察してみると，上に述べた流水溝の他に，かつては別の流水溝があって，これらは後に埋め込まれてしまったことがわかる。これらの流水溝は，まず，円形平面の部屋の屋根にあたる部分の八角形の台に沿って放射状に走り，ついで，折れ曲って胸壁沿いにつづいており，やがて，現存す



挿図 13　流水溝その他の導水施設配置図

る導水施設に接続しているのであるが，挿図13によってもわかるように，かなり迂回したコースをたどっていることになる。これらの流水溝が埋め込まれた理由については，流水溝のコース変更計画によって，より短距離を走る新たな流水溝がつくられたため，迂回コースをとる古い流水溝は使用されなくなって埋め込まれたものと思われる。

さて，フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸の，形態と構成とについての叙述を終るにあたって，この建造物の取水と給水のメカニズムについて，復元的考察をもまじえて総括してみたい。まず，井戸水の汲み上げについては，水は，いったん，屋上に汲み上げられたことは確かであろうが，その方法については，遺跡の現状からは，確実な手掛りを得ることは難しい。そこで，デリーに現存するサルタナット時代の井戸にのこされた揚水施設や，現在，デリー周辺に住む住民によって行なわれている汲み上げ方法などから類推して考えてみると，もっとも有力な方法としては，屋上におけるつるべ式汲み上げ法がまず考えられるのである。すなわち，現在では崩落してしまった，屋上の井戸に面する部分に，突き出し石や縦材・水平材あるいは滑車などからなるつるべ式汲み上げ施設があったものとする推定である。しかし，一方，建造物内部上層部分の東西両側には，直径6メートルの円形平面の部屋が設けられているので，この部分において汲み上げ作業が行なわれた可能性も否定できないのである。しかし，この場合には，むしろ，人力あるいは畜力による，いわゆる“Persian wheel”の水汲み法が考えられるであろう。これは，垂直軸を中心とする回転運動を，傘形歯車と同じ原理によって，水平軸を中心とする回転運動に変え，これによって水を汲み上げる方法である。しかし，円形平面の部屋が，南北の扇形平面の部屋に至る通路にあたっていること，Persian wheel による方法をこの部屋で行なう場合には，かなり複雑な装置を必要とするであろうと考えられることなどの理由から，このような水汲み法が行なわれた可能性は少ないと考えていいだろう。

さて，屋上には，汲み上げられた水をいったん貯える場所があって，そこには，放射状流水溝に向って適当な分量の水を流し込むような工夫がなされていたものと思われる。放射状流水溝によって屋上の周縁部分に運ばれた水は，ある部分は建物外部に向って流れ，他の部分は建物内部に送り込まれる。まず，建物外部に向う水について述べると，西南外面にある導水管 a（挿図13参照）に落ちる水は，その部分に設けられた貯水槽に貯えられる。しかし，縦溝 b,c,d および流水溝の北側の末端 e,f に運ばれた水が，その後どのように処置されたかについては，必ずしも明らかではない。まず，縦溝 b,c,d についてみると，これらの溝は，挿図8にみるように，壁の外面にむき出しになっており，また，この溝を切断するかのように，水平方向の石がところどころにはめ込まれているなど，導水溝としての機能を疑わせるような事実がみとめられるのである。しかし，それにもかかわらず，これらの縦溝が実際に使用されたものとすれば，おそらくは，その外側に，何らかの覆いがかぶせられていたと考えざるを得ないのである。そして，このような溝を流れる水を，樋あるいは管のようなものに流し込んで，他の容器でそれを受けとめたのかもしれない。また，流水溝の末

端 e,f についても，その後の水の処理について不明の点があるが，やはり，樋のようなものがそれに接続されていたものと考えられる。

一方，建造物の内部に向う水は，導水孔 g および h の中に流れ込む。g の中に流入した水は，内部上層部分の南龕列に運ばれるだけでなく，下層部分の南龕列にも配水されたものと考えられ，同じく導水孔 h の水は，上下両層の北龕列に送り込まれたものと思われる。いずれの龕列においても，すでに述べたように，西端に位置する龕の奥壁に開かれたパイプの口から流れ出て，いったんこの龕の水受けに貯えられ，その後，龕と龕とを結ぶパイプによって，つぎつぎと東の方へ送り込まれたのである。それぞれの龕の水受けに貯えられた水は，嘴形の流出口によって，その外部に流れ出るようになっている。そうして，この水は，何らかの容器によって受けとめられ，使用されたのであろう。なお，上層部分の南北龕列においては，その後，東から二番目の龕に改変の手が加えられ，水受けはとり去られることとなったのである。従って，水の流れはここで終ってしまい，東端の龕には，パイプの水は供給されなくなった。東から二番目の龕に流れついた水が，その後，どこに向ったかについては，断定はできないにせよ，井戸の中に還流したものと推定されるのである。このためのものと思われる溝が，現在もなお，北龕列において部屋の床面に認められる。なお，下層部分の龕列においては，水の流れは，中断することなく東端の龕までつづいていたものと考えられる。

第三章　ガンダク＝キ＝バーオリー

第一節　遺跡の環境と歴史的背景

このバーオリーは，デリー地域に現存するサルタナット時代のバーオリーとしては，もっとも古いものと推定される遺跡である。それにもかかわらず，サイイド＝アフマド＝ハーン（Saiyid Aḥmad Khān）は，このバーオリーについては，その著『アーサールッ＝サナーディード』（*Āthār al-Ṣanādīd*）の初稿本と改稿本のいずれにおいても，まったくふれていない。H. コール（H. H. Cole）は，1884年刊行の報告書のなかで，クトゥブ＝サーヒブ（Quṭb Ṣāḥib）すなわちシェイフ＝クトゥブッディーン＝バフティヤール＝カーキー（Shaikh Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī）のダルガーの近傍に残っている二つの大きなバーオリーに簡単に言及しており，その建立の年次を，一つは1052年，他を1263年のこととしている[1]。このH. コールのいうところの二つのバーオリーが，ここに述べるガンダク＝キ＝バーオリー〔W. 18〕と，次章で紹介するラージョーン＝キ＝バーイーン（Rājūn kī Ba'aīn）〔W. 26〕であるとすれば，彼の年次は完全に誤っている。



挿図 14　メヘローリー部落周辺地図
（建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による）

『デリーの七つの都市』（*Seven Cities of Delhi*）（1906年刊）を著したG. ハーン（Gordon R. Hearn）は，「飛びこみの井戸」（Jumping Well）として，このバーオリーを紹介している[2]。彼が，このバーオリーの南側のヴェランダについて，「ヒンドゥーの柱によって飾られている」と記しているのは，すぐれた観察といえよう。近年のものとしては，1964年の国際東洋学者会議のために準備されたY. D. シャルマ（Y. D. Sharma）編の，デリーとその近傍の遺跡案内書が，このバーオリーを紹介しているが[3]，1910年代のインド考古調査局の報告書の記載に拠ったためか，このバーオリーで行なわれる見世物的なダイヴィングについても記している。しかし，現在，このバーオリーのタンクは，メタンガスの泡を生み出すほど汚染されており，私の知る限りでは，近年，こうした見世物は，もはや行なわれてはいない。

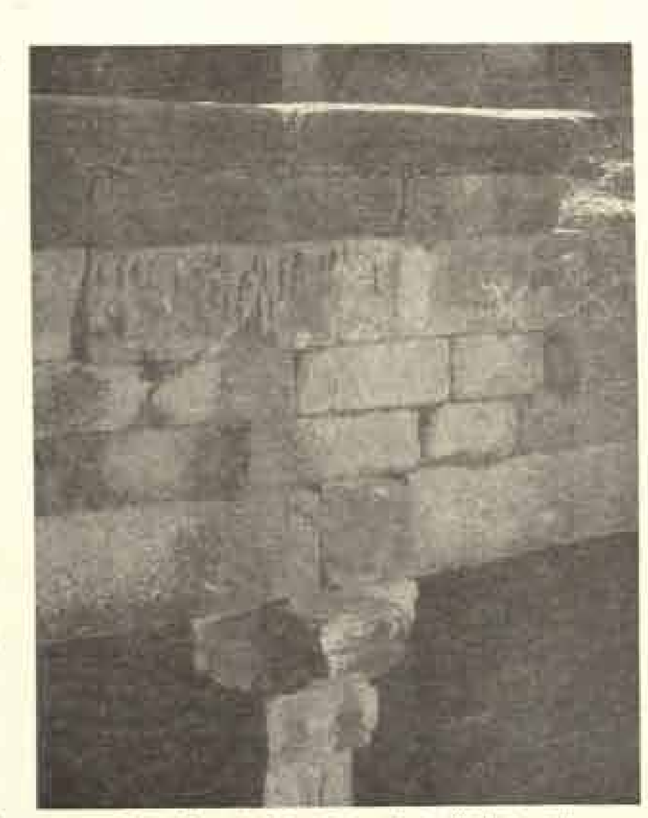
20世紀に入ってからのインド人ムスリムの著作として注目されるバシールッディーン＝アフマド（Bashīr al-Dīn Aḥmad）のウルドゥー語の著書『首都デリーのことども』（*Wāqi'āt-i Dār al-Ḥukūmat-i Dihlī*）は，このバーオリーの水には鉱物質や硫黄分が含まれており，そのため，皮膚病に効くといわれてきたことを紹介して

1) H. H. Cole, *Preservation of National Monuments, India*, Delhi, 〔1884〕, p. 1.
2) Gordon R. Hearn, *The Seven Cities of Delhi*, *London*, 1906, pp. 57-58.
3) Y. D. Sharma, *Delhi and its Neighbourhood*, prepared by Organizing Committee, XXVI International Congress of Orientalists, New Delhi, 1964, p. 107.

いる[1]。ガンダク＝キ＝バーオリーという俗称は，硫黄を意味するヒンディー語の「ガンダク」(Gandhak) に由来するものである。現に，われわれが，1960年にこのバーオリーを調査していたころ，たまたまムスリムの祭日にあたった際，附近のクトゥブ＝サーヒブのダルガーに詣でる老若男女がこのバーオリーに寄るのを，実際に見ることができた。そのなかには，まったく汚濁しきったタンクの水を，自分や連れの幼児の身体の一部にあてがう人びともいた。このことは，このバーオリーの水が病気に効くという俗信が，現在もなお，行なわれていることを示すものである[2]。

さて，このバーオリーの建設の時期に関して，まずふれておく必要のあることは，G.R. ハーンの紹介しているように，井戸のある南側のヴェランダの部分を支える柱として，明らかにヒンドゥー様式をもつ柱が用いられていることである（挿図18参照）。次節で述べるように，これらの列柱は，いわゆるクトゥブ＝モスク〔M.1〕のイレトゥミシュの拡張部分に用いられた柱とほぼ同時代のものと思われる。この列柱の存在は，このバーオリーが，おそらくはスルターン＝イレトゥミシュの時代かその前後につくられた可能性を示す根拠たり得よう。さらに，このバーオリーの壁面その他の部分に用いられている石材やその石積みの方法からみても，このバーオリーの建設年代をサルタナット初期の時代と推定することは，ほぼ妥当なものと考えられる。なお，この点については，次節においてさらに詳しくふれるであろう。

ところで，バーオリーが，ムスリムによってはじめてインドに紹介された水利施設か，あるいは，すでにヒンドゥー教徒によってムスリムの侵入前につくられていたものかについては，本巻でもふれているところである（134～135ページ参照）。しかし，このガンダク＝キ＝バーオリーに関する限りは，ムスリムの建設を裏付ける有力な資料がこの遺跡自体に存在していた。すなわち，このバーオリーの南側の最上層のヴェランダの上部に，アラビア文字で書かれた碑文の断片が残っていたという事実である。それについては，挿図15に明らかにしておいたが，この写真は，われわれが1959年末に撮影したものである。しかし，このアラビア文字の碑文の断片は，1961年末にわれわれがこの遺跡に赴いたときには，その文字づらはまったく失われてしまっていた。おそらくは，このわずか2年の間にデリー地方におきた地震によるかもしれない。従って，ここに紹介する1959年撮影の写真は，きわめて貴重な資料となってしまったわけである。この碑文は，わずかな断片だけなのでまったく意味のとれないものではあるが，このアラビア文字の碑文の存在は，このバーオリーが，ムスリムによって建てられたことを示す有力な証拠の一つとなり得よう。この貴重な資料が，近年，まったく失われてしまったことはきわめて遺憾である。


挿図 15　最近まで残っていた碑文の一部

さて，このバーオリーは，その位置からみて，旧ラーイー＝ピトーラー城砦の外側にあったものと思われる。この遺跡の附近には，サルタナット時代，とくにその末期に属する建造物が，相当数残っているが，附近一帯は，サルタナット初期の時代には，おそらくは，城砦の外側の部落か，また

1) Bashīr al-Dīn Aḥmad Dihlawī, *Wāqi'āt-i Dār al-Ḥukūmat-i Dihlī*, 3 volumes in Urdu, Dihlī (Delhi), 1919, Vol. III, p. 289.
2) 荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第44冊，1967年，pp. 16-17.

は荒蕪地か，あるいは程度のわるい耕地であった可能性もある。しかし，さきにもふれたように，このバーオリーは，後代には，クトゥブ=サーヒブのダルガーへの巡礼や参詣の人びとの寄るところとなった。このダルガー附近は，サルタナット初期から，チシュティー (Chishti) 派のスーフィーの宗教活動の中心地であった。クトゥブ=サーヒブの死後，この地は，彼の墓廟を中心として，インドのムスリムの最大の聖地の一つとして発展していったのである。従って，このバーオリーを，チシュティー派の宗教活動に関連して設けられた水利施設であると想定するのも一理はあるが，それにしては，その建設当時においては，クトゥブ=サーヒブのダルガーからあまりにも距離が離れすぎていたのではないかという疑問がおこる。このように推理してみると，このバーオリーは，クトゥブ=サーヒブの宗教活動やその死後の彼の墓廟とは直接の関係はなく，本来は，部落民や旅行者のための飲用その他日常世俗的な効用や，あるいは農業用水を得ることを目的として建設されたもので，それが，のちになって，近傍の地域の宗教的な環境のなかに包括されるに至ったと考えることもできるかもしれない。その建設当初の目的がいかなるものであったにせよ，後代には，このバーオリーは，クトゥブ=サーヒブのダルガーをはじめ，それにあやかって附近の地に続々と建てられたモスクや墓建築あるいは墓地などの宗教的建造物と関連して利用されるようになったと推定するのは，決して不自然ではあるまい。

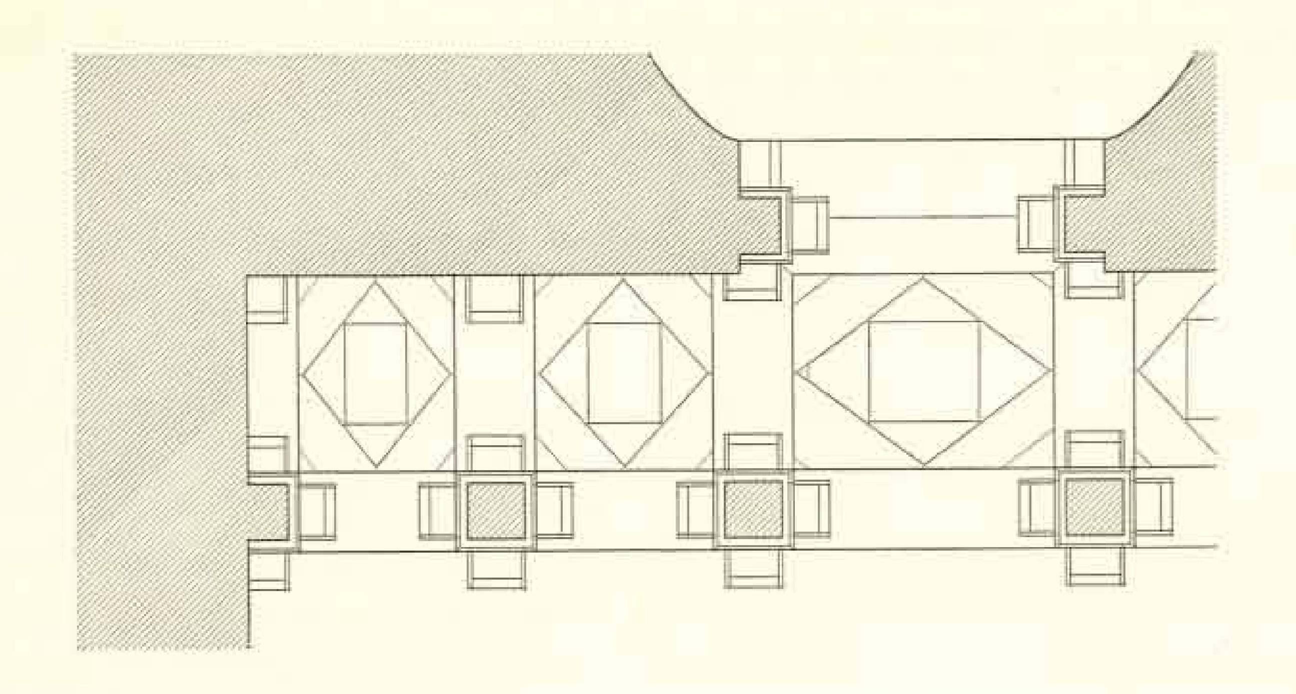
第二節　構　造　と　機　能

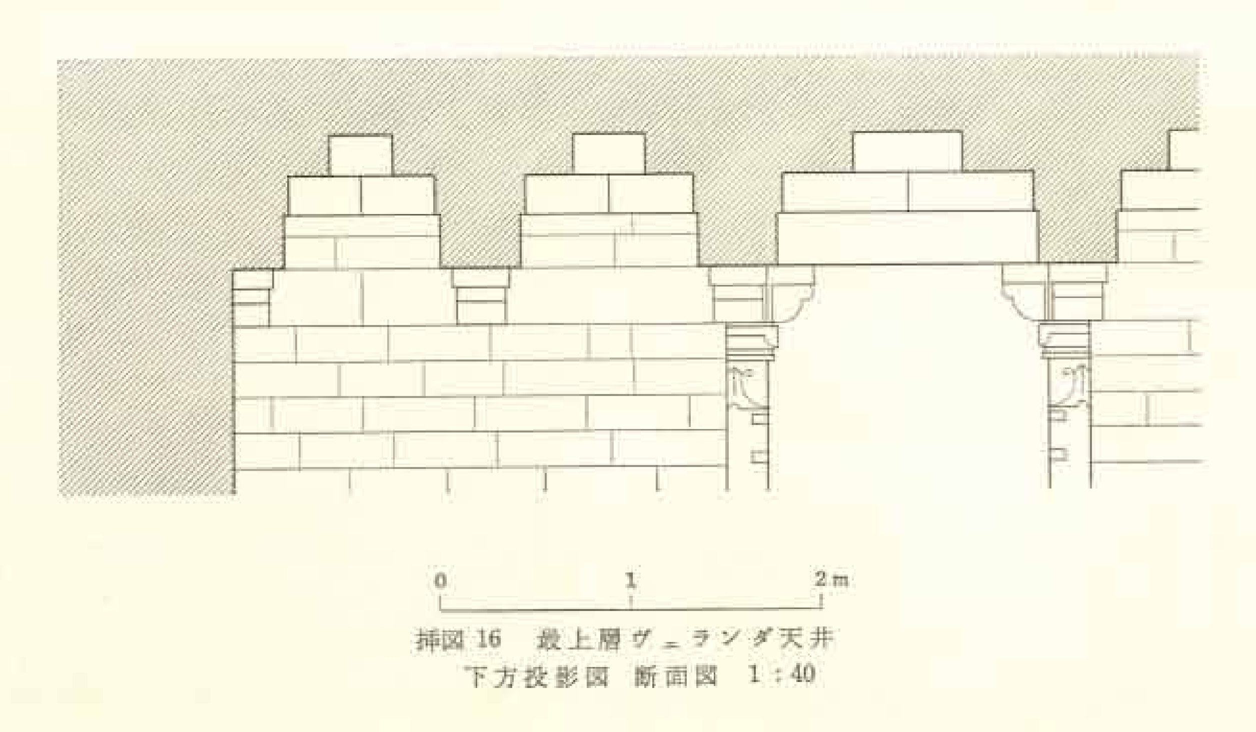
ガンダク=キ=バーオリーは，タンクとそれに降りる階段とをもつ長方形部分と，その南につづく井戸の部分とからなる，南北に長い建造物で，その全長は41メートルである (図版43 a)。長方形部分の南側の底部にあるタンクのなかには，現在もなお水がたたえられており，1960年1月の現地調査に際して測定した結果によれば，バーオリーの壁の頂点から水面までの高さは，18.9メートルであった。

タンクと階段とを備えた長方形部分の内部南側の立面は，現在水面上に現われている部分においては4層形をなしていて (図版8)，その最上層は，6本の柱からなる狭いヴェランダと，井戸に通じる高い窓とをもっている。その下につづく第二・第三ならびに最下層もまた，それぞれ，井戸に通じる窓を開いており，これらの窓は，柱とブラケットおよびリンテルとからなっている。ヴェランダおよび窓に用いられている柱は，デリー=サルタナット時代以前に属する，ヒンドゥー寺院建築にみられる柱と同じ形式をもっており (挿図18)，また，最上層のヴェランダの天井が，一般に，ラテルネン=デッケとよばれる，三角形隅持ち送りの方法によって構成されているのは興味深い (図版10，挿図16)。

地上からタンクに降りるためには，まず，バーオリーの北端部分に東西向い合って設けられた二つの狭い階段を利用する (図版5 b)。これらのうち，東側の階段には，現在，9段認められ，西側のそれには11段みられるが，後者の階段の一部は，後代の補修あるいは追加になるものである。二つの階段にはさまれた部分は，5.5メートル×2.4メートルのおどり場となっており，この場所からタンクに向って長い階段が続いている (図版7)。この階段は，下に降りるに従って次第に幅が狭くなっており，また，調査時においては，水面まで76段を数えることができた。このような階段の途中から，上に述べた南側の各層に通じる通路が，東西両壁に沿って設けられている (図版8)。この通路は，幅が0.6メートルないし0.8メートルあって，その石敷きの先端部分の下面にはくり型がつけられている。

なお，西壁の頂部には，幅0.3メートル，深さ0.4メートルの流水溝が走っており (図版6 b)，この溝は，南側の井戸において汲み上げられた水を，バーオリーの西北外側に設けられたタンクに向って送り込むための





挿図 16　最上層ヴェランダ天井
下方投影図　断面図　1：40

ものである（図版5b）。しかし，現在みられる流水溝およびタンクは，それを構成する壁面の状況からみて，明らかに後代のものである。

バーオリーの南端に位置する井戸は，最上部の開口部分をのぞけば，ほぼ円形平面をなしており，下方にいくに従ってわずかながら小さくなっていく。その直径は，上の部分においては3メートル，水面に近いところで2.7メートルである。井戸の開口部分は，六角形に近いかたちをなしており，その南側と西側との三つの角に，先端に円味をもった1個の石が長く突き出ている（挿図17）。この突き出し石の中央には，直径15センチメートルの円形の穴が上下に貫かれていて，この穴に縦棒をつき立て，さらに横棒をわたして汲み上げ装置が組立てられていたものと思われる。

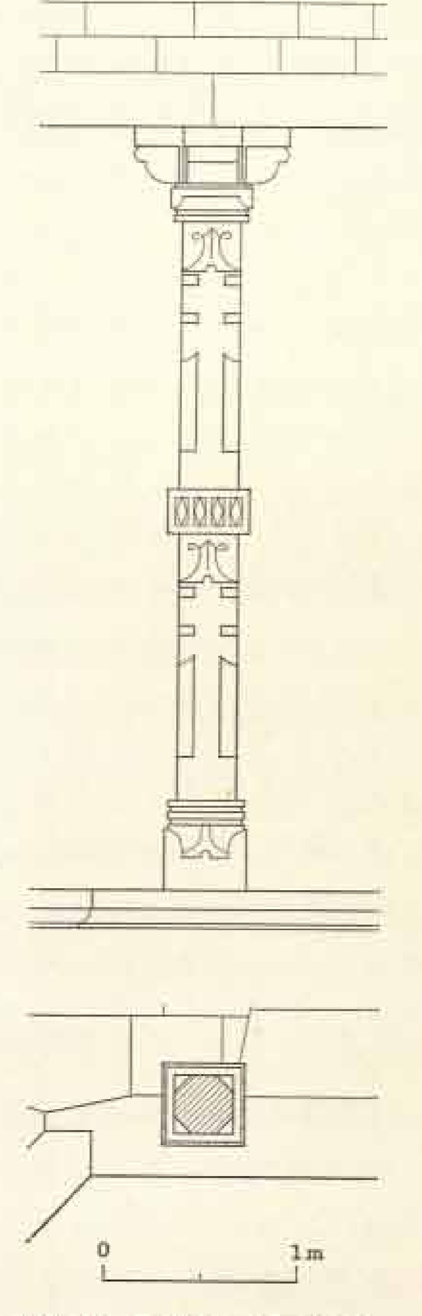
さて，このような井戸の部分の周囲には，水汲み場が設けられている。この水汲み場は，現在では，井戸の西側から南側にかけてひろがる扇形平面をなしているが（図版6a），本来は，さらに井戸の東側にまで延びていた可能性も考えられる。この水汲み場は，周縁に向ってわずかに下る傾斜をもっており，その周囲には，幅0.3メートル，高さ0.3メートルの周縁がめぐっている。そして，この周縁には，現在，10センチメートル×8センチメートルの流出口が1個穿たれている。しかし，現在みられる周縁および流出口は，いずれも後代の手になるものである。井戸のなかから水汲み場に汲み上げられた水は，遺跡の現状から判断する限り，


挿図 17 井戸開口部分見上げ

水汲み場の西北隅に向って流れ，やがては，この場所から，バーオリーの西壁頂部を走る流水溝に流れ込む。また，一部の水は，周縁に穿たれた1個の流出口を通して外部に流れ出る。しかし，上に述べたように，西壁頂部の流水溝も，周縁にみられる流出口も，いずれも，明らかに後代のものであり，従って，建設当初において，水がどのようなコースに沿って移動していたかについては確かなことはわからない。なお，水汲み場の西の外側には，幅約1メートルの低い張り出し部分があるが，ここには，かつて，水汲み場に昇るための階段が設けられていたものと推定される(図版43 a)。

ガンダク＝キ＝バーオリーの建設の時期については，すでに述べたように，この建造物にアラビア語碑文がみられるところから，これがムスリム支配時代に属するものであることは確かであろうと思われる。そこで，この建造物にみられる二・三の構造ならびに様式上の特徴から，この問題についてさらに詳細に検討してみたい。まず，このバーオリーは，もともと，切石積みからなっていたものであるが，本来の石積みは，18〜20センチメートル幅にほぼ統一された石からなっており，この石の表面には，1ないし1.5センチメートルの間隔で縦方向に走るたがねのあとが，かなり明瞭に残っている。このような石積みは，627 A. H. (1229-30A. D.) の碑文をもつ，クトゥブ＝モスク (Qutb mosque)〔M. 1〕のイレトゥミシュ (Iletmish) による拡張部分 (第一巻図版1) や，このスルターンの治世にあたる629 A. H. (1231-32A. D.) の碑文をもつスルターン＝ガーリー (Sulṭān Ghārī)〔T. 1〕(第一巻図版73〜74) などに認められ，また，イレトゥミシュの時代あるいはその直後に建設されたと思われるイレトゥミシュの墓〔T. 2〕(第一巻図版75) や，このスルターンの娘にあたるスルターン＝ラズィーヤ (Raẓiyah) (1236〜40A. D. 在位) の墓とされる墓石をとり囲む壁などにも，このような特徴をもつ石積みが用いられているのである。従って，ガンダク＝キ＝バーオリーの壁を構成する本来の石積みは，奴隷王朝初期のスルターン＝イレトゥミシュ (1211〜36 A. D. 在位) の時代，あるいはそれにつづく同王朝中期の時代に属するものと推定したい。

このバーオリーの最上層のヴェランダ，およびその他の各層の窓に用いられている柱は，すでに述べたように，ムスリム支配以前のインド古来の寺院建築の柱にみられる形式をもっているが，これと同じ形式の柱は，クトゥブ＝モスクの，イレトゥミシュによる拡張部分の廻廊や，あるいはスルターン＝ガーリーの内庭の中央にある地下の墓室にも用いられている。しかも興味あることに，これら二つの例においては，その天井が，バーオリーのヴェランダの天井の場合と同じく，ラテルネン＝デッケすなわち三角形隅持ち送り天井とな



挿図 18 最上層ヴェランダの柱 立面図 平面図 1:40

っているのである。これらの点からいっても，ガンダク＝キ＝バーオリーは，イレトゥミシュの治世の建設にかかるこれらの建造物と，年代的に比較的近いことを感じさせるのである。

さて，奴隷王朝時代に創建されたと考えられるこのガンダク＝キ＝バーオリーも，その後，いくどかにわたって補修・改変を受けたことがわかる。古い時期の補修においては，創建時に属する古い石材が，比較的多量に用いられているのであるが，壁の頂部にみられる新しい時期の補修においては，割石積み・漆喰仕上げが行なわれており，井戸の周囲に設けられた水汲み場や西壁頂部を走る流水溝，さらにはバーオリーの西北外側にみられるタンクの施設などは，このような新しい時期に属する壁によって構成されている。

さて，ガンダク＝キ＝バーオリーにおいては，取水の方法として，主として，つぎの二つが採用されていたものと思われる。その一つは，北側の長い階段を利用してタンクの水面に近づき，そこで直接汲みとる方法であり，他の一つは，井戸においてつるべを用いて水汲み場に汲み上げる方法である。また，時として，各層のヴェランダや窓，あるいはそれに通じる通路などにおいて，水の汲み上げが行なわれたかもしれない。階段を用いて水面から直接取水する方法は，労力の面からいってもまた能率の点からみても，多量の水を連続的に得るのには必ずしも適当な方法ではないであろう。一方，つるべ式に屋上の水汲み場に汲み上げる場合には，多量の水を容易に，かつ継続的に得ることができよう。井戸の開口部分の隅に突き出た三つの石を利用し，この石に穿たれた穴に縦棒をつき立て，さらに，そのあいだに水平材をわたして滑車をとりつければ，つるべによって容易に水を汲み上げることができる。このようにして汲み上げられた水は，遺跡の現状から見るかぎりでは，ある場合には，扇形平面の水汲み場の西北の隅から西壁の頂部を走る流水溝に流れ，さらに，この溝によって，バーオリーの西北外側に設けられたタンクに送り込まれるのであり，また，他の場合には，水汲み場の周縁に穿たれた流出口によって，井戸の外部に流れ出る。しかし，上にも述べたように，これらの流水溝・タンクおよび流出口などは，いずれも後代につくられたものであり，創建時において，すでに，このような施設があったものか，あるいは，当時は，他の種類の施設が設けられていたかについては，現在ではよくわからない。従って，サルタナット時代において，もっとも古くまで溯ることのできるこのバーオリーも，当時の給水のメカニズムについては，遺憾ながら，確かなことをほとんどわれわれに教えてくれないのである。

第四章　ラージョーン＝キ＝バーイーン

第一節　遺跡の環境と歴史的背景

この遺跡は，デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーのなかでも，従来，案内記や研究書の類に言及されることが比較的多かったものの一つである。前節で紹介したガンダク＝キ＝バーオリー〔W. 18〕にはまったくふれていないサイイド＝アフマド＝ハーン (Saiyid Aḥmad Khān) も，そのすぐ近傍にあるこのバーオリーについては，初稿・改稿本ともに紹介している。[1)]

このバーオリーは，われわれが，現地において詳細な測量調査を行なった研究対象の一つであるが，その理由は，遺跡の現存状態が比較的よいという条件のほかに，このバーオリーの建設年代の判定の手がかりとなる碑文が，この建造物に隣接するモスクの前庭の墓建築に残されていたからである。すなわち，このバーオリーのすぐ西側に，ローディー朝時代のものと思われる一つのモスク〔M. 39〕があって，その前庭が，このバーオリーの最上層の平坦な屋根と直接に連なっており，その一角に，十二本柱の墓建築〔T. 103〕が現存している。その墓建築の南側の庇の上方に，912A. H. 年の年次を記した赤砂岩の歴史碑文が残っているのである。このバーオリーの大体の建設の時期については，バーオリー自体から推測することも可能なのであるが，隣接するモスク，あるいは，とくに建設の年次が判明している上記の十二本柱の墓建築の存在によって，その建設年代の想定に関する手がかりを一層よくつかむことができるのである。次節で詳述するように，構造や様式その他から推して，このバーオリーは，上記のモスクおよび墓建築と，ほぼ同時代に建造されたものと推測し得るからである。



挿図 19　墓建築〔T. 103〕に残る碑文

さて，問題の墓建築〔T. 103〕に残る歴史碑文は，ここに掲げた写真（挿図19参照）からもわかるように，かなり明瞭である。[2)] その内容から推すと，ほぼ，つぎのことだけは指摘できそうである。すなわち，

1)　この十二本柱の墓建築は，ローディー朝

1)　Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Lakhnau (Lucknow), 1847 (1st ed.), 1854 (2nd Rev. ed.), Orig. ed. (1895), Pt. I, p. 18, Rev. ed. (1904), Pt. III, pp. 45–46.

2)　*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, No. 165, p. 103には，この碑文の解読し得る部分のペルシア語原文とその英訳とが紹介されている．ここに，われわれが現地で撮影した写真と比較しつつ，その原文を，つぎに引用しておく．なお，Zafar Hasan, Inscriptions of Sikandar Shāh Lodī in Dehlī, *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1919–20, Calcutta, 1924, p. 7 にも，まったく同じ原文が紹介されている．

در عهد همایون سلطان الاعظم المعظم المتوکل علی　الرحمان سکندر شاه بن بهلول شاه سلطان خلد الله ملکه
و سلطانه بنا کرد این گنبد بنده امید وار برحمت پروردگار　دولت خان... حسام خواجه محمد غره ماه رجب سنه اثنی عشر و تسعمایة

のスルターン＝シカンダル＝シャー (Sulṭān Sikandar Shāh) の治世に建設されたこと。

2)　この墓の建設には，ダウラト＝ハーン…フサーム (Daulat Khān…Ḥusām) なる人物が関与していたらしいこと。

3)　この墓の建設は，おそらくは，912 A.H. 年，ラジャブ (Rajab) 月1日 (すなわち1506年11月17日) であったと思われること。

ところで，このバーオリーの建設年代について，従来の諸著のなかには，断定的にその年次まで述べているものもある。たとえば，サイイド＝アフマドは，912A.H.年すなわち1506A.D.年としており，また，カー＝スティーフン (Carr Stephen) は，922 A.H. (1516A.D.) 年としている[1]。この建設年代についての両者の差は，カー＝スティーフンの誤りであるが[2]，両者ともに，さきに紹介した十二本柱の墓建築〔T.103〕の歴史碑文にみえる912 A.H.年の年次にそのまま拠ったものである。また，インド考古調査局の遺跡報告書では，建設年次を918 A.H. (1512A.D.) としているが，これも誤りである[3]。いずれにせよ，このバーオリーの建設年次を，十二本柱の碑文の末尾の年次とまったく同じとみるのは，臆測にすぎない。このバーオリーの建設は，たしかにこのモスクや墓の建設のときとあまり隔たる時代ではなかったにせよ，ダウラト＝ハーン (Daulat Khān) なる人物による912 A.H.年と断定する通説に対しては，疑問を表明しておきたい。

ところで，このバーオリーの「ラージョーン＝キー＝バーイーン」(Rājūn kī Ba'ain) という名称については，この遺跡に言及している書物が，ほとんどすべて，同じようなことがらを記している。それは，サイイド＝アフマドが紹介した伝承によるもので，いつのころからか，このバーオリーの部屋 (Makānāt) に石工 (ラージュ，Rāj) が住みつくようになっていたので，そこからこの俗称が生まれたというのである[4]。ちなみに「ラージョーン」(Rājūn) というのは，ラージュの従格複数形である。

さて，ラージョーン＝キー＝バーイーンの建設目的については確かなことはわからないが，附近の環境と関連して，なんらかの宗教的な役割を果たす水利施設として建設されたものと考えるのが妥当ではないかと思われる。この時代には，クトゥブ＝サーヒブのダルガーも，著名な聖廟としてインド中に知られるようになっており，その境内も拡張されていたし，このバーオリーの近傍にも，モスクや，墓建築あるいは墓地などが，続々と建設されている (第一巻附図参照)。このバーオリーの最上層の部屋やヴェランダは，相当の人数を収容し得る余裕をもっていたと思われるから，この施設が，クトゥブ＝サーヒブのダルガーや附近の宗教建造物を訪れる人びとや旅行者の休憩・宿泊の場として，さらには，ハーンカーの如き役割を果たす場所として用いられたことも十分考えられるであろう。

なお，カー＝スティーフンは，その著書 (1876年刊) において，このバーオリーの階段の部分が66段見え，水上で57段，水中で9段数えることができた旨を記している。この点，ASIの報告書もカー＝スティーフンに拠ったらしく，「1875年には，階段は66段見えており，4層あったが，いまでは，バーオリーが部分的に埋もれてしまったので，3層・41段しか (見え) ない」といっている。この階段の数について，1919年刊のバシールッディーン (Bashīr al-Dīn) の著書が，カー＝スティーフンの名にも，1875年という時期にふれずに，「57段は水面上に，9段が水中に見えており，多分，この階段は，バーオリーの底までつづいているのだろ

1)　Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, Ludhiana, [1876], p. 169.
2)　荒，「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」, p. 42 および p. 101, notes 55, 56 参照.
3)　*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, No. 163, p. 102.　　なお，その誤りについては，荒，前掲論文，pp. 42-43 参照.
4)　Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Orig. ed., Pt. I, p. 68; Rev. ed., Pt. III, p. 46.　　なお，アフマド＝ハーンは，彼自身がこのバーオリーへ赴いたときには，ラージュたちはおらず，チャマール(Chamār)のカーストの集団が住んでいたと述べている.

う」と記しているのは，バシールッディーンの著書の評価にかかわるほど疑わしい叙述である。

第二節　構 造 と 機 能

ラージョーン＝キ＝バーイーンは，南北に長い長方形の建物で，その全長は，南面中央に円形に張り出す廻廊部分をふくめて38.9メートル，東西の幅は24.1メートルである（図版44, 45）。このバーオリーの北方には，南北13.1メートル，東西21.3メートルの石敷きの広場が設けられており，また，バーオリーの西方に接して，高い基壇をもつモスクとその前庭に立つ墓建築とがあって，これらの建造物が，一種の建造物複合体を構成している（図版12 b）。

ラージョーン＝キ＝バーイーンは，その内部北側に，石敷きの広場から地下のタンクに降りる長い階段をもっている（図版13 b）。現在では41段認められるが，しかし，この階段はもっと下までつづいているものと考えられ，1876年刊行のカー＝スティーフンの著作によれば，彼の調査時においては66段が確認されたという[1)]。また，この階段の南には，タンクが設けられているものと思われるが，現在では，まったく土中に埋もれてしまっている（図版13 a）。なお，カー＝スティーフンは，彼の調査の頃は，２月の乾期においてもなお，このバーオリーは深さ９フィートの水をたたえており，また，雨期になると，その水位は一層高まったことを伝えている。

北側をのぞく三方は，現在地上に現われている部分についてみると，三層形をなしている（図版13 a）。しかし，カー＝スティーフンは，壁面が４層からなっていたことを述べており，現在では地下に埋もれてしまった部分にもう１層あったことを推測させる。３層のうちの最上層部分は，東西両側に長い廻廊をもっており，また，南側の両端にも短かい廻廊部分がある（図版45）。これらの廻廊は，奥行きが１間で，各柱間ごとに，前方を走る幅広い通路に向ってアーチを開いている（図版14 c）。東西二つの廻廊の北につづく柱間２間分は，それぞれ，通路に面するアーチが壁によって閉ざされており，その内部は部屋になっている（図版14 b）。また，南側の中央部分は，井戸の施設を備えているために，ここには廻廊も部屋も設けられていない（図版45）。これらの廻廊や部屋の部分，ならびに南側の中央部分などにおいては，通路に面するアーチのスパンドレルは，繊細な植物文様からなる大型のディスクによって装飾されており，また，これらのアーチの上方には，ブラケットに支えられた庇が水平に走っている（図版14 b）。庇の上方の壁面もまた，帯状をなす植物文様とバトゥルメント風の装飾文様，あるいはS字型のくり型をもつ凸帯などによって装飾されており，この種の水利関係施設としては，豊かな装飾をもつ建造物であるといえよう。

このような最上層部分においては，井戸の両側あるいは廻廊の南部分に，鍵型に曲った狭い階段，もしくは通路が合計五つ設けられている（図版45）。井戸の両側にある二つの階段は，それぞれ屋上に通じており，このうち西側のものは，井戸の南側にある列柱式廻廊部分にもつづいている。南廻廊東部分の南壁にみられる通路と，同廻廊西部分の西壁に設けられた階段とは，ともにバーオリーの外部に開く出入口に通じており（図版17 a），東部分の通路においては，その途中から第二層に降りられるようになっている。西廻廊の南部分にあるもう一つの階段は，途中で三度曲折して，第二層の南側廻廊の西壁につづいている。また，以上のような階段あるいは通路とは別に，東廻廊の中央やや北寄りのところにも，バーオリーの外部に開く出入口が設けられている。最上層部分の屋上は平坦で（図版44），その周囲を低い胸壁がとりまいており，上に述べた，

1) Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, Ludhiana, [1876], p. 169.

井戸の両側にある二つの階段の他に，最上層部分の西北隅と東北隅とにそれぞれ設けられた二つの階段によっても，この屋上に達することができる。

最上層部分の下につづく第二層の部分は，南側に，間口５間・奥行１間の列柱からなる廻廊をもっており，また，西側の南部分にも，間口３間・奥行１間の廻廊を，東側の南部分には，幅2.3メートル，奥行3.1メートルの部屋を，それぞれ備えている（図版46a)。この第二層部分においても，アーチのスパンドレルには大型のディスクが認められ，また，ブラケットに支えられた庇が，最上層部分の場合と同じく，廻廊や部屋の部分の外面上方をおおっている。しかし，第二層部分の廻廊に使用されている柱の形式は，最上層部分の柱のそれとは異なっており，ムスリム支配以前のヒンドゥー寺院の柱の形式に類似したものである（図版47)。なお，南側の列柱式廻廊の中央柱間の南壁には，井戸に通じるアーチ窓が開かれており，また，そのすぐ東隣りの柱間には，最上層部分の南廻廊と，バーオリーの南外面に開く出入口とに通じる階段が，そして，同じく南側廻廊の西壁には，最上層部分の西廻廊に昇る階段が，それぞれ設けられている（図版46a)。この第二層部分の東壁には，至るところに自然の岩盤が露出しており，バーオリーの建設にあたって，この附近の地下の岩盤の状況が，少なからぬ作業の困難をもたらしたであろうことを推測させる。

さて，バーオリー内部の最下層部分は，廻廊や部屋を備えておらず，わずかに，東・西・南の三つの壁面に，それぞれ，五つ・五つ・三つの龕をもっているにすぎない（図版46b)。これらの龕は奥行きがまちまちで，もっとも深いもので1.3メートルあり，もっとも浅いものでは0.2メートルである。なお，この最下層部分は，井戸の部分とはまったくつながっていない。すでにふれたように，カー＝スティーブンの述べるところによれば，この下にさらにもう一層あったことが知られるが[1)]，彼の記載の内容からも，また，遺跡の現状についての観察からも，この部分についての詳細はまったくわからない。

バーオリーに附設された井戸は，タンク部分の南側にあって，バーオリーの屋上に開口している（図版16b)。現在では，高さ14.5メートルの部分を残して底部は土砂に埋もれてしまっており，水はまったくない。このうち，上部3.1メートルの部分は，さしわたし３メートルの八角形平面をなしており，その下の部分は円形平面となっている（図版48)。井戸の部分の南側には，間口が外側５間・内側３間で，奥行きが１間の，扇形平面をなす列柱式廻廊部分があるが（図版17 b, 45)，この部分は，水の汲み上げ場であったと思われる。この水汲み場の床面と同じレヴェルのところに，八角形平面の井戸の周壁に沿って，くり型をもつ帯状の石が張り出しており，そのすぐ下方の八つの隅には，それぞれ，一つずつ，先端に円味をもった石が井戸の内側に突き出している。これら８個の突き出し石のうち，水汲み場の近くに位置する五つのものには，中央に穴が穿たれており，これらは，揚水施設の一部として使用されていたものと思われる。さて，水汲み場の床面は，外側に向ってわずかに下る傾斜をもっており，その周囲には，幅と高さとがともに0.3メートルの，切石からなる周縁がめぐっている（挿図20)。この周縁には，２個所に流出口があって，水汲み場の床面に汲み上げられた水は，これによって外部に流れ出るようになっていた。

さて，このような井戸と水汲み場とについてとくに注目されるのは，これらが，バーオリー全体の南北中軸線上に正しく位置しておらず，西側にずれて在存していることであり，しかも，そのうえ，これら両者の南北中心線が，バーオリー全体の中軸線と約9°の方向の相違を示していることである（図版45)。このような井戸および水汲み場にみられる位置のずれ，ならびに中心線の方位の相違が，なにゆえに生じたかについては，確かな原因を指摘することができない。しかし，上のような事実は，井戸および水汲み場の部分が，

1) Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, p. 169.


挿図 20　井戸南側の廻廊部分　西より

バーオリーの他の部分と同時に，しかも，一貫した計画のもとに建設されたものではないことを示しているのかもしれない。もしそうとすれば，まず，井戸とその周囲をめぐる水汲み場の部分とが先にこの場所に建設され，後になってその他の部分が追加建設されたとする可能性が考えられるかもしれない。

ラージョーン＝キ＝バーイーンの西側に接して，東をのぞく三方に龕をそなえた高い基壇の上に立つ，小型のモスク〔M. 39〕がある。このモスクは，基壇の西の部分に，間口3間・奥行1間の礼拝堂をもっており，この礼拝堂の東側は，低い囲壁にとり囲まれた前庭となっている（図版44)。この前庭は，バーオリーがモスクの基壇を斜めに切断したかたちで建設されているために，梯形平面をなしており，この前庭に昇る階段は，基壇の東南隅に張り出して設けられている（図版18b)。モスクの前庭は，バーオリーの屋上とも直接つながっており，この屋上から，階段を2段降りることによって前庭に達することができる。モスクの前庭には，その北寄りのところに，十二本柱からなる四角平面の列柱式墓建築〔T. 103〕が立っている（図版18c)。この墓建築は，内部に1基の墓石をおさめており，すでに述べたように，南面の庇の上方に，912 A. H. (1506A. D.) の年次を記す歴史碑文をもっている。また，この墓建築の東方に接して，割石と漆喰とからなる墓石が1基，前庭の床面に横たわっている。

さて，上述のようなモスクおよび墓建築は，その位置関係からみて，バーオリーと密接な関係にあることは明らかである。そこで，バーオリーの建設時期について一応の推定を得るために，これら三者の建設順序について検討してみなければならない。まず，バーオリーとモスクとの前後関係については，モスクの基壇の石積みがバーオリーの壁にくい込んでいること，とくに，モスクの基壇の一部が，バーオリー最上層部分西北隅の部屋のなかに，完全に破壊されることなく残っていることからみて（図版45)，モスクが先に存在し，バーオリーは，その後に，モスクの基壇の一部を切りとって建設されたものであることは明白である。つぎに，モスクと墓建築との前後関係については，後者が前者の基壇の上面に建てられていることからみて，墓建築は，モスクと同時，またはそれより後に建設されたものであることは明らかである。そして，最後に，バーオリーと墓建築との関係については，おおよそ，つぎのように考えられよう。すなわち，現在，墓建築は，モスク礼拝堂の北入口を塞ぐほどに礼拝堂に近接して建てられているのであるが，これは，墓建築の建設当時，すでに，モスクの前庭が，バーオリーの建設に伴う切断によって，せばめられてしまっていたことによるものではないかと考えられるのである。事実，この墓建築は，モスク礼拝堂の東面と，バーオリーの屋上の胸壁とから，同じ距離のところに位置しており，すでに狭くなった空間において，墓建築の位置が注意深く設定されたことを物語っているように思われる。しかし，他方，すでに別の地点に立っていた墓建築が，バーオリーの建設に伴って，現在地点に移築されたとする可能性もまったくないではない。

以上のように考えてみると，三者の建設順序は，おそらくは，モスク・バーオリー・墓建築の順であったと思われる。もし，このような推定が正しいとすると，モスクならびにバーオリーは，シカンダル＝シャー＝ローディー (Sikandar Shāh Lūdhī) (1489～1517A. D. 統治) の治世にあたる，912 A. H. (1506A. D.) より以前に溯ることになろう。しかし，両者の年代を様式の面よりみれば，アーチのスパンドレルを飾るディスクの文

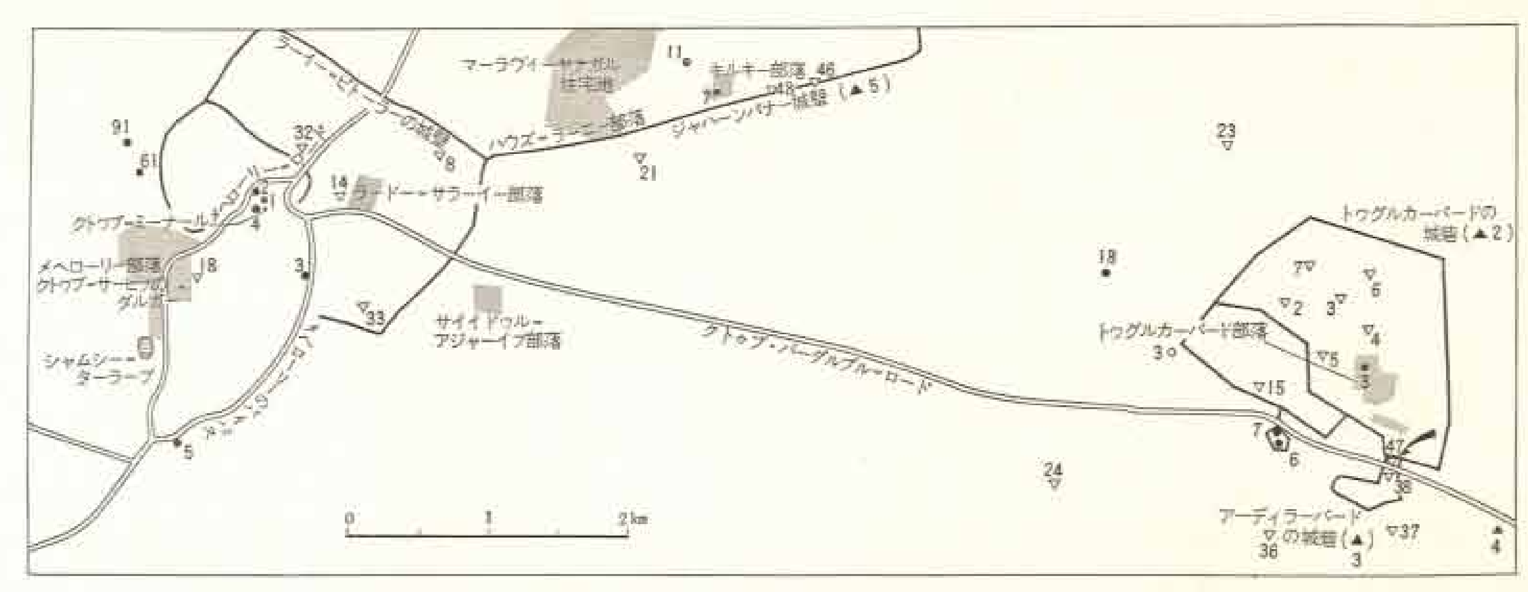
様，軒の上方を水平に走る帯状の植物文様とバトゥルメント風の装飾文様，そして庇を支えるブラケットの様式などは，このモスクとバーオリーもまた，シカンダル＝シャーの治世を中心とするローディー朝の時代に属するものであることを示している。従って，バーオリーの年代は，前記の墓建築のもつ碑文の年次とそれほど隔たっていないであろう。おそらくは，せいぜい10年内外，20年以内の程度のものではあるまいか。

ラージョーン＝キ＝バーイーンについてはなはだ奇妙に思えるのは，このバーオリーの建設にあたって，故意に既存のモスクの基壇が切りとられ，しかも，このバーオリーとモスクとが，斜めの角度で接続していることである。これらの問題については，的確な理由を指摘することはできないが，さまざまな可能な事態を推測することはできよう。まず，モスクの基壇を切断した理由については，モスクの基壇の東側に，このような大規模なバーオリーを建設するのに十分なだけの敷地がなかったからかもしれないし，また，すでに述べたように，井戸の部分のみがすでにこの場所に存在していたとすれば，井戸とモスクとの位置関係が，上のような事態をまねいた原因であったかもしれない。一方，バーオリーが，モスクの基壇と斜めに接する方位をもって建設された理由については，一つには，現在，タンク部分の東壁に大きな岩が多数露出していることからみて，地下の岩盤の状態がその方位を制約したのかもしれないし，あるいは，このバーオリーの建設の際の方位の決定にあたって，占星術あるいはそれに類する方法が採用されたために，このような結果を招いたのかもしれないとも考えられるのである。

第五章　トゥグルカーバードの水門

第一節　トゥグルカーバード城南の水利施設

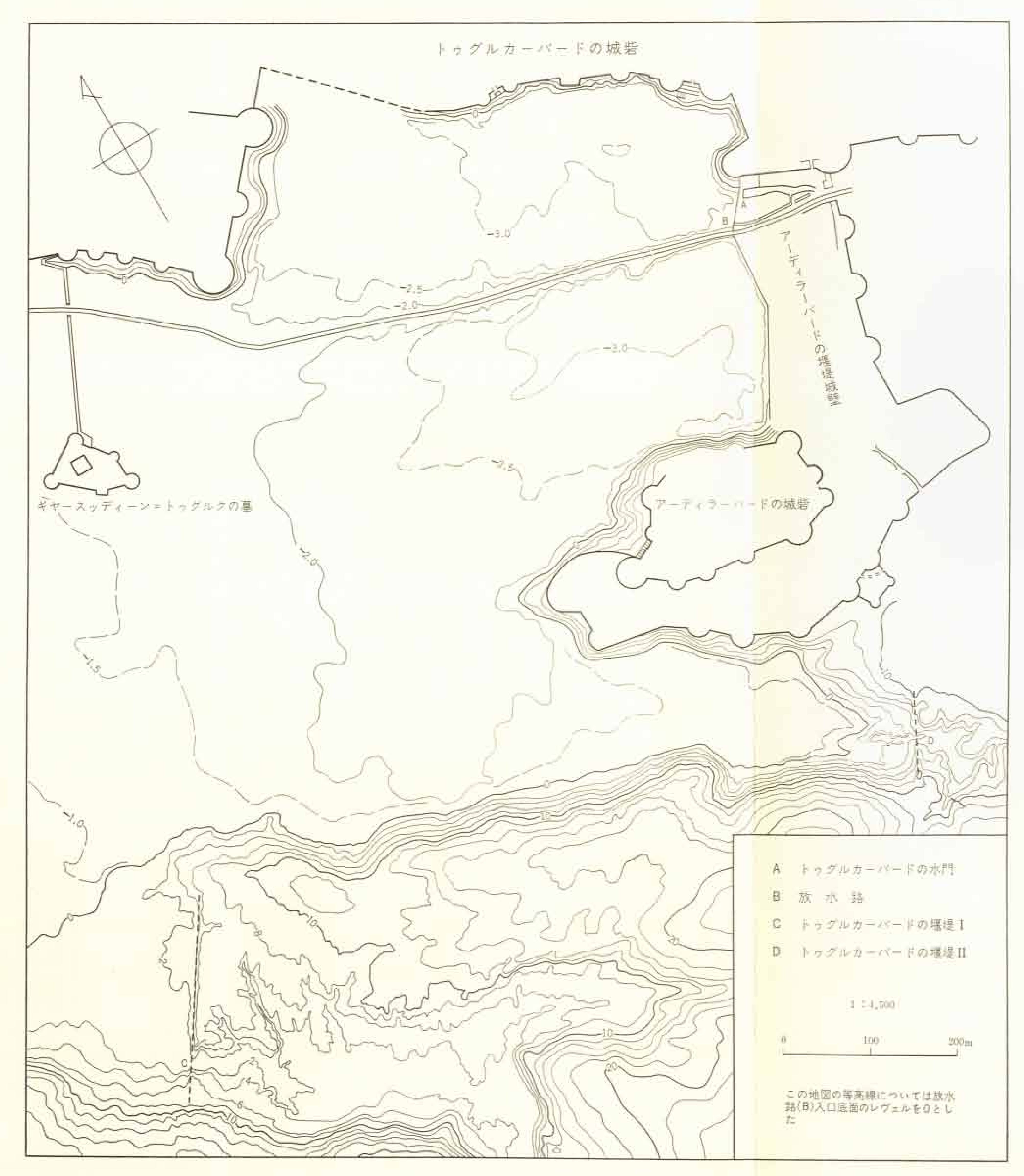
ニューデリーの南郊メヘローリー (Mehrauli) 部落の東北隅に立つクトゥブ＝ミーナール (Quṭb Minār) の附近から，クトゥブ・バーダルプル＝ロード (Qutb-Badarpur Road) を東の方へ約8キロメートル進むと，この道路の北側に沿って，約2キロメートルのあいだ，堅固な石積みの城壁がつづいているのがみえる (挿図21)。これが，トゥグルカーバード (Tughluqabad) の大城砦の南城壁にあたるもので，大城砦〔O. 2〕は，これを底辺とするほぼ梯形の平面をなしている。トゥグルク朝初代のスルターン，ギヤースッディーン＝トゥグルク



挿図 21　トゥグルカーバードとメヘローリー部落附近地図
（建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による）

(Ghiyāth al-Dīn Tughluq) の治世にその建設が着手された，壮大な規模をもつこの城砦は，10余の城門を開く，延べ6キロメートルにおよぶ堅固な石積みの城壁によってとり囲まれている。この城壁は，その頂上にバトゥルメントを備え，強い傾斜をもつその壁面には，多数の狭間を連続してもっており，また，そのところどころに巨大なバスティオンを張り出している。この城砦の内部は，西南隅に位置する宮廷地域とその他の都市地域とからなっており，今日なお，さまざまな宮廷建造物やジャーマ＝マスジッドの廃墟をみることができる。なお，このトゥグルカーバード大城砦の内部には，各所に井戸や大貯水池なども残っており，その若干のものが，すでに，われわれの報告書第一巻「遺跡総目録」において紹介されている〔W. 2～7, 15〕。

トゥグルカーバード大城砦の南城壁中央附近の南方約200メートルのところには，不等辺五角形の平面をもつ小城砦ふうの構築物が立っている (挿図22)。この構築物は，大城砦の南にひろがる平地のなかに突出した，自然の岩盤の上に建設されたもので，その周囲に堅固な石積みの城壁をもっており，また，その内庭には，ギヤースッディーン＝トゥグルクの墓〔T. 6〕をおさめている。この小城砦風の構築物は，幅約3メートルの石積みの通路によって，トゥグルカーバードの大城砦と連結されているが，この通路は，その下部に



挿図 22　トゥグルカーバード城砦南方地域地形図



多数のアーチを開いており，橋としての役割をももつものであった。おそらくは，雨期の季節には，かなりの水がこの通路を横切って移動していたものと考えられる。

トゥグルカーバード大城砦の東南部分の南方約350メートルのところには，アーディラーバード（'Ādilā-bād）の城砦〔O. 3〕が立っている（挿図22)。この城砦は，丘陵地帯の一角をなす小高い丘の上に構築されており（図版20b)，東西約250メートルを長軸とする楕円形平面をなす内城と，この内城の南側ないし東側に，一段低く展開する外城域とからなりたっている。これらをとり囲む城壁は，トゥグルカーバードのそれと同様の規模をもっており，また，硅岩からなる石積みの状況や，バトゥルメントあるいは狭間を備え，随所に巨大なバスティオンを張り出す城壁の外観も，トゥグルカーバードの場合と何ら異なるところがない。

さて，アーディラーバードの外城の南側をほぼ東西に走る城壁は，やがて，東の端でその方向を北に転じる（挿図22)。そして，この城壁の延長部分は，トゥグルカーバード大城砦の南城壁に達しており，これによって，二つの城砦を南北にむすぶ，長さ約300メートル，幅約120メートルの大堰堤〔W. 38〕がつくられるのである〔図版20b〕。この堰堤は，もちろん，その東面の外観が示すように，東方面からなされる武力攻撃に対して，その西側一帯を防衛する役割をもつものであったろう。しかし，他方，この堰堤は，トゥグルカーバード大城砦の南にひろがる平坦地の東を限るものであり，その北の部分に設けられた，トゥグルカーバードの水門〔W. 47〕や放水路の存在によっても明らかなように，この平坦地に水を貯えることを主要な任務とするものでもあった。すなわち，この大堰堤は，本章と，第二編第三章第一節において詳しく検討される予定の，トゥグルカーバード城南の大水利計画において，そのかなめともいうべき重要な地位を占めるものであったのである。なお，この堰堤の北の部分に設けられた水門ならびに放水路については，本章の第三節において，詳細に叙述することとしたい。

さて，トゥグルカーバード城砦の南にひろがる平坦地は（図版19b)，上に述べた大堰堤によってその東を限られるとともに，南方に横たわる丘陵地帯によって，その南も限られており，結局，この平坦地の南北の幅は，700メートルないし1キロメートルに及んでいる（挿図22)。ただし，平坦地の西については，これを明確に仕切るものはこの近くに何もなく，トゥグルカーバード城砦の城壁西端を越えて，さらに西の方へとつづいているのである。この平坦地は，全体として，東に向って下がる緩い傾斜をもっており，この傾斜は，平坦地の現状について測定した結果によれば，大堰堤から小城砦にいたる附近一帯で約500分の1である。

しかし，この平坦地に水利計画が実施された当初から今日に至る長い時間の経過とともに，この平坦地にも多少の地形上の変化があったものと推定される。すなわち，大堰堤の北の部分に設けられた水門は，現在では，相当深く埋没してしまっており，また，トゥグルカーバード大城砦と，小城砦風の構築物とを結ぶ石積みの通路に穿たれたアーチもまた，今日では深く土砂に埋もれてしまっているので，この平坦地では，広い範囲にわたって土砂の堆積が行なわれたものとみなければならない。この場合，とくに，大堰堤に近い平坦地の東部分において，この堆積がもっとも著しかったであろうと推定されるのである。なお，この平坦地においては，現在も，雨期の季



挿図 23　城南平坦地における雨期の氾濫
(中央上部のドームがギヤースッディーン＝トゥグルクの墓，1968年9月山本撮影)

節には多量の水がたまっており（挿図23），また，雨期あけには，この土地は，附近の人びとによって，農耕地として利用されている。

トゥグルカーバード城南の平坦地の南に横たわる丘陵地帯は，なだらかな起伏を示しながら，はるか南の方につづいている。この丘陵には，ギヤースッディーン＝トゥグルクの墓をおさめる小城砦のほぼ南にあたる地点と，アーディラーバードの外城壁のすぐ南の個所とに，それぞれ，深く入り込んだ谷間があって，いずれの谷間においても，その出口をふさぐかたちに，石積みの堰堤が構築されている（挿図22）。小城砦の南方にあたる谷間に設けられた堰堤は，報告書第一巻「遺跡総目録」において，「トゥグルカーバードの堰堤Ｉ」として紹介されているものであるが，この堰堤〔W. 36〕（挿図22におけるC）は，東北から南西の方向に走っており，現在では，その中央部分は崩壊してしまっているが，その左右部分のところどころに表面の石積みを残している（挿図24）。この堰堤Ｉは，幅が上面で約２メートル，石積みの高さは３ないし3.5メートルあって，堰堤を構成する石積みの延長は，本来は，200メートル以上に達していたものと推定される。この堰堤の石積みは，すでに述べた，トゥグルカーバードやアーディラーバードの城壁のそれに比較して粗雑であり，崩れやすい石積みのように見受けられた。すでに崩壊した中央部分に，かつては，何らかの水門の施設があったものと推定されるが，今日では，それを示す痕跡はまったく認められない。



挿図 24　トゥグルカーバード堰堤Ｉの残存石積み部分

アーディラーバード城砦のすぐ南の谷間に設けられた堰堤は，第一巻「遺跡総目録」においては，「トゥグルカーバードの堰堤II」として紹介されている。この堰堤〔W. 37〕（挿図22におけるD）は，中央部分がまったく崩壊しており，その他の部分も表面は崩れ落ちて，きわめてわずかの部分に表面の石積みを残すのみである（挿図25）。石積みの痕跡をたどってみると，この堰堤もまた，東北から南西の方向に走っており，その長さは，80ないし100メートルであったと推定される。谷底から堰堤の上面までの高さは，明確にはわからないが，堰堤Ｉよりもやや高く，５～６メートルはあったであろう。わずかに残る表面の石積みは，堰堤Ｉのそれとほとんど同様の粗雑なものである。この堰堤においてもまた，堰堤Ｉの場合と同じく，かつては水門のような施設が設けられていたと推定されるが，現在では，そのような痕跡はまったくない。なお，この堰堤の南方に，同じような種類の石積みが，上の堰堤と斜めの角度をなして走っているのがみられる。おそらくは，この石積みも，堰堤様の構築物の一部をなしていたものと考えられるが，上に述べた堰堤IIと接続していたかどうかについて



挿図 25　トゥグルカーバード堰堤IIの崩壊の状態

はわからない。

トゥグルカーバードの堰堤Iならびに堰堤IIの年代については，石積みの状況など，堰堤そのものの構造上の特徴から，それを明確にすることは難しい。しかし，これらの堰堤がかなりの規模をもち，その建設に相当の組織力を必要としたと考えられるところからみると，これらの堰堤を，トゥグルカーバード城南の大水利計画の実施と関連して構築されたものと考えるのが妥当のように思われる。また，この水利計画の中で堰堤Iならびに堰堤IIに与えられた役割としては，谷間に流れ込む雨水をその場所に貯えることによって，雨期には，水が平坦地に一挙に流入することを防ぎ，雨期あけには，貯えられた水を農業用水として平坦地に供給することなどにあったと思われる。なお，これらの堰堤やアーディラーバードの堰堤城壁，さらには後者に設けられた水門などの建造目的ならびに機能についての詳細と，これらの建造物を利用する大水利計画の全体についての復原的考察とは，第二編第三章第一節においてとり扱いたいと考えている。

第二節　歴　史　的　背　景

トゥグルカーバードは，トゥグルク朝の初代スルターンであったギヤースッディーン＝トゥグルク＝シャー (Ghiyāth al-Dīn Tughluq Shāh) の治世に建設がはじめられ，その死後，725 A. H. (1325A. D.) 年にスルターン位を継承したその子ムハンマド＝シャー (Muḥammad Shāh) によって，デリーの新首都として利用されてきた大城市である。初代のスルターン＝ギヤースッディーンは，新都造営中にラクナワティー (Lakhnawatī)，すなわち今日のベンガル地方に遠征に出かけ，725A. H. (1325 A. D.) 年，デリーへの帰途，トゥグルカーバードに近いアフガーンプール (Afghānpūr) なる地で，仮行在所の天井の落下によって急死し，ついに，みずから造営を命じた新都城を見ることなしにこの世を去った。彼の死については，すでに同時代から，その子ムハンマド＝シャーによる謀殺説もとなえられてきた[1)]。

ムハンマド＝ビン＝トゥグルク (Muḥammad bin Tughluq) として知られている第二代のスルターンは，父帝が建造させた巨大な新城砦の完成後数年を経ずして，遠くデカン西部のデーオギリ (Deogiri) にダウラターバード (Daulatābād) と名づけた都市を造営した。しかも，このスルターンは，さらに宮廷をデリーに戻して都市と住民を再度移動させるという事業を実施させたのである。トゥグルカーバードについては詳述する余裕はないが，その建設工事はきわめて大規模なもので，それに投じられた大量の資材と莫大な労働力とは，トゥグルク朝初期の権力の大きさを伝えて余りある。もっとも，この新城市は，その規模の壮大さにもかかわらず，その工事の密度においては，それほど堅固なものであったとは思われない。高大な城壁も，城内の建造物も，その構造や技術の質はむしろ低く，この都市が放棄されたのちは，おそらくは，急速に荒廃していったものと想像されるのである。あるいは，その工事の杜撰さが，水源の問題などとあわせて，この大都城放棄の一つの原因となったのかもしれない。

トゥグルカーバードは，南城壁を底辺とするほぼ梯形の大城市で，その西南隅の宮廷区域とその他の部分を占める都市区域とから成っている。この都市区域には，のちにもふれるように，六つの井戸〔W. 2～W. 7〕の遺跡を見出すことができるが，宮廷区域には，われわれが「遺跡総目録」に収録した大貯水井戸〔W. 15〕をはじめ，より規模の大きな角型の貯水井戸や，城壁を利用した貯水池の遺構などが残っている。なお，この宮廷区域の部分の城外南方には，スルターン＝ギヤースッディーン＝トゥグルクの墓〔T. 6〕の立つ小城砦風

1)『デリー』，第二巻，第一編第一章「ギヤースッディーン＝トゥグルクの墓」，pp. 36-37を参照．

の建造物があるが，すでに第二巻第一編で詳述したので，ここではくり返さない。

さて，トゥグルカーバード大城市については，同時代の史書にその名がしばしばうかがえるのであるが，宮廷区域の東南方のアーディラーバード城砦〔O.3〕については，同時代の文献からは，その歴史についてなんらの手がかりもつかむことができない。ただ，一般には，スルターン＝ムハンマドがアーディル＝シャー（'Ādil Shāh）を称したところから，このアーディラーバードは，ムハンマド＝シャーによって造営されたものとされることが多い。しかし，彼が父帝の建てたトゥグルカーバードには長年月にわたって住んでいないところから考えると，この通説にもそのまま従えないところがある。

また，第一節で紹介したアーディラーバード南方の二つの堰堤に関しても，これまで，いかなる文献・史書にも言及されていない。さらに，アーディラーバード城砦の立つ小岩丘を利用して，それとトゥグルカーバードの東南部とを接続するところのアーディラーバード堰堤城壁〔W.38〕や，その北部に現存するトゥグルカーバードの水門〔W.47〕についても，従来の史書は，まったくふれてはいないのである。従って，トゥグルカーバード城南の水利計画のかなめともいうべきこれらの構築物については，文献上からの解明は，まったく不可能であるといわざるを得ない。

トゥグルカーバード大城砦やギヤースッディーン＝トゥグルクの墓に関しては相当の記述を残している19世紀以降の諸論著も，大城砦南方のこれらの水利建造物については，ほとんど言及していない。ただ，H.ワディントン（Hilary Waddington）によるアーディラーバードに関する発掘調査報告が，わずかにそれらにふれ，簡単な附図のなかにその所在を明らかにしているのみである。[1] ただし，インド考古調査局に所蔵されていた古い写真資料のなかに，この水門に関する簡単な平面図を複写したものが見出されたが，[2] それは，「デリーのトゥグルカーバード市のハンマームと水門」（Hammām and Sluice of Tughlaqābād City, Delhi）と説明されているにすぎない。ハンマームというのは，水門〔W.47〕の北方の部分を指すものらしいが，なぜ，この部分を蒸気風呂と考えたのか，その理由もよくわからない。

これを要するに，トゥグルク朝初期の大城市として著名なトゥグルカーバードの存在に重要な役割を演じた水利施設であるにもかかわらず，城南の堰堤や水門に関しては，同時代の史書をはじめ，後代の諸文献からは，ほとんどなにものをも期待することはできないのである。なお，次節で詳細に報告する水門を含めて，トゥグルカーバード城南の水利施設とそれを利用する水利計画については，のちの第二編の第三章第一節において考察するので，水門の建設年代や他の建造物との関係などについては，改めて述べることとする。

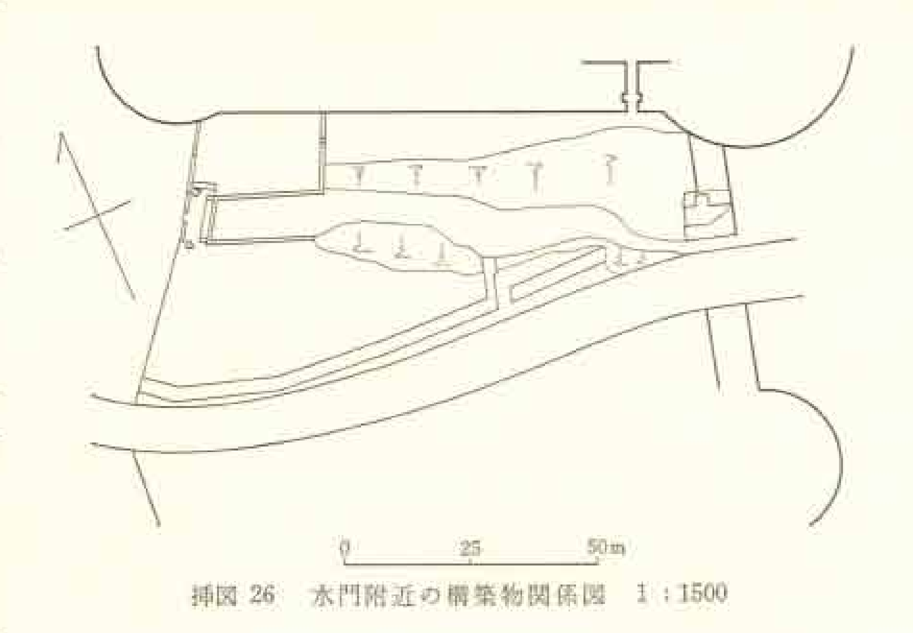
第三節　水門の構造と機能

トゥグルカーバードの南城壁と，アーディラーバードの城砦とを南北に結ぶ堰堤城壁〔W.38〕によって，その西側にひろがる平坦地に貯えられた雨水は，この堰堤城壁の北の部分に設けられた水門の操作によってその水量を調節され，あるいは，適時，東の方へ放出されたのである。本節においては，この水門の構造ならびに排水のメカニズムについて，詳細に叙述することとしたい。われわれが「トゥグルカーバードの水門」と名付けるこの施設〔W.47〕は，東西が6.3メートル，南北の長さは，流水トンネル部分のみで6.8メートル，東面立面の中位のレヴェルで測定して8メートルの大きさで（図版49c），屋上の胸壁とアーチの周囲とが漆喰

1) Hilary Waddington, 'Ādilābād : A part of the 'fourth' Delhi, *Ancient India*, No. 1, 1946, pp. 60-76.
2) Archaeological Survey of India, Photography Section, Photograph No. 5100.

仕上げを施されているほかは，硅岩の切石積みによって主要部分の壁面が構成されている。

西に面する上流側も東面する下流側も，ともに三つのアーチをもっており，このアーチは，下流側では，奥行きの深いトンネルとなっている。アーチの内側には，幅30センチメートル，高さ45センチメートルの，長方形の流水孔が多数穿たれており，調査時においては，水門の下の部分が土砂に埋もれてしまっていたために，中央アーチのなかに3列3段の，南北両側のアーチには3列2段の，流水孔が認められたにすぎなかった。しかし，1920年代に行なわれたと思われる発掘調査にあたって撮影された，インド政府考古調査局保管の二葉の写真によれば，中央アーチの内側には，流水孔は3列4段に並んでいることがわかる。[1)]この同じ写真からは，左右のアーチの流水孔の状況については何もわからないが，しかし，ここでも，3列4段に配列されている可能性は大きいと考えられる。



挿図 26　水門附近の構築物関係図　1：1500

さて，これらの流水孔は，上流側においては一つの垂直面に入口を開いているが（図版21b），下流側のトンネル内部においては，下のレヴェルの流水孔ほど長くなっているために，階段状に出口を開いている（図版22b, 49d）。これらの流水孔は，出口に近いところに，上方から遮断板を差し込むための穴をもっていて，板の差し込み作業によって閉鎖されるしくみになっている。遮断板の差し込み口は，長さ40センチメートル，幅12センチメートルのもので（図版49c），ここから差し込まれた板は，流水孔の両側壁と床面とに切り込まれた，深さ約5センチメートルの溝のなかにおさまるようになっている。このような遮断板の上げ下げの操作によって，流水孔を通過する水の流れは自由にコントロールされるのであり，さまざまな水位に応じて，異なったレヴェルの流水孔を操作することによって，この水門が，どのような水位においても，常に機能し得るようにつくられているのである。

上のような操作のためにトンネル内部に接近する必要から，この水門には，南と北とに階段が設けられている（図版49c）。これら二つの階段は，屋上から入って南あるいは北のトンネルに降りるものであるが，階段とこれらのトンネルとを結んで，レヴェルの異なる三つの通路がある（図版49c）。南北トンネルと中央トンネルとのあいだにも，同じような3本の通路が通じており，どの高さの流水孔の操作を目的とするかによって，それらのうちのいずれかの通路を利用することとなるのである。

この水門の屋上は，その東部分に，南北の長さ9.3メートル，幅1.3メートル，深さ0.7メートルの凹部分があるほかは，大部分が石敷きの平坦面をなしており，堰堤上面と同じレヴェルになっている。屋上の東西には，それぞれ胸壁があって，東胸壁は，水門の東側につづく地溝の側壁を構成する石積みの上を，さらに東へ延びている（図版22b）。

なお，水門の上流側には，中央アーチの両側の狭い壁の部分に接続して，二つの低い壁が構築されている（図版21b, 49c）。これらの壁は，今日では，ほとんど崩壊した状態となっており，中央アーチの幅とほぼ同じ間隔を保ちながら，互いに平行して西の方に延びている。しかし，これらの壁は，その石積みの状況からみ

1)　D. G. Archaeology in India, Neg. No. 4201, 4202: Delhi, Tughluqabad fort.

ても，あるいは，水門との接続のかたちからみても，後代に追加構築されたものであることは明らかである。おそらくは，この水門が本来の機能を停止した後に，中央アーチのなかに穿たれた流水孔のみを用いて，西側の平坦地に溜った水を東に排水する計画が立てられ，この計画の実施に際して，流水経路を中央アーチに集中させる目的から，上のような2本の壁が構築されたものと思われる。

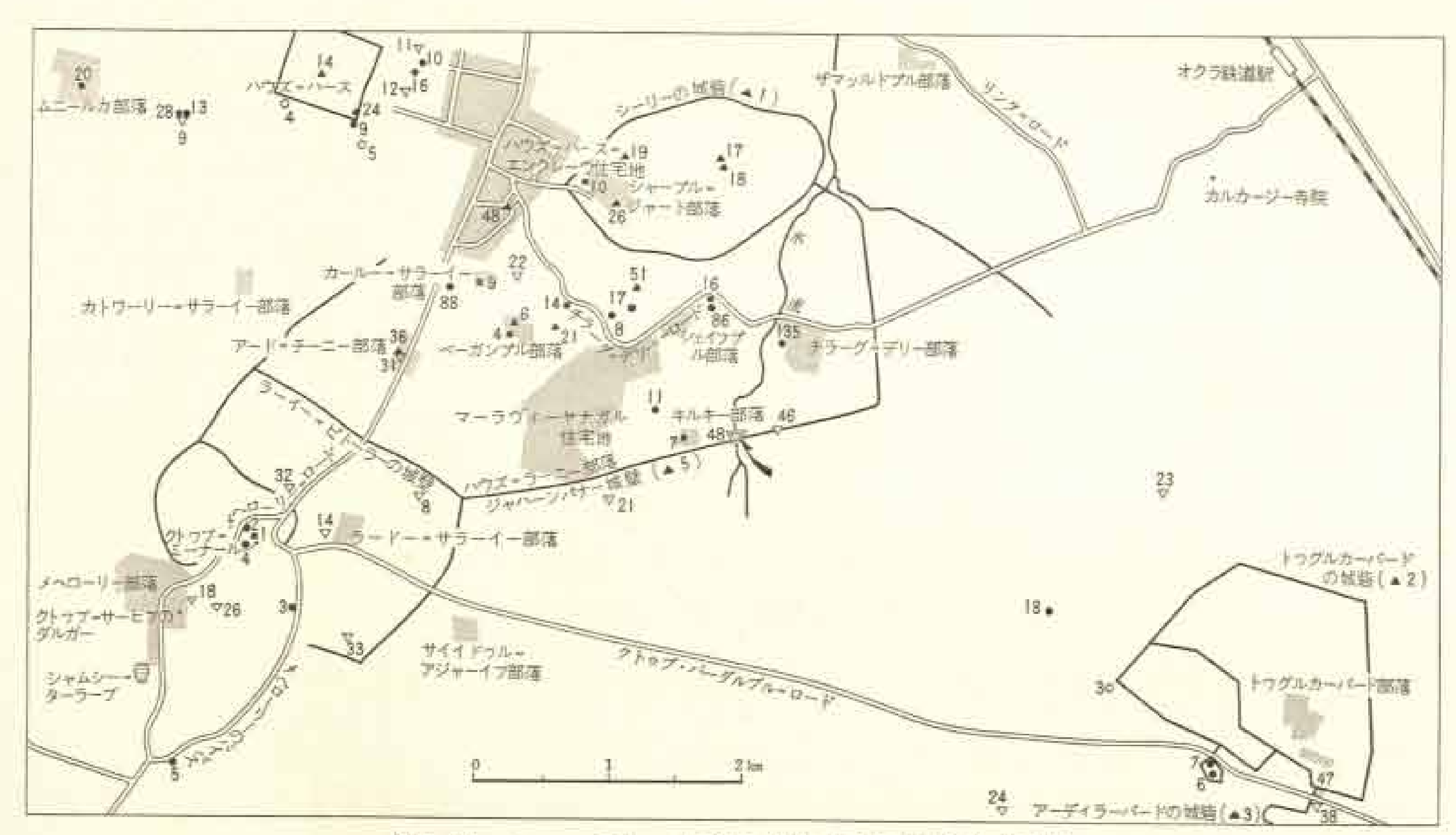
さて，トゥグルカーバードの水門の南方約30メートルのところには，堰堤城壁を横切って東西に走る放水路が設けられている（図版22a，挿図26）。この放水路は，幅約3メートル，深さ約1メートルのもので，両側壁は，かなり大型の切石を用いて丹念につくられ，床面は，一面の石敷きによっておおわれている。現在では，堰堤城壁の西側面から始まって，長さ約100メートルの部分が残っており，そこから東側は崩壊してしまっている。また，この放水路を途中で切断して，その地点から，水門の東側につづく深い地溝に水を落すために，別の短かい放水路がつくられているが，このような水路の変更は，後代の手になるもののように思われる。この放水路は，全体として，西から東に向って下がる傾斜をもっており，堰堤城壁の西側の平坦地に貯えられた水のレヴェルが放水路入口の底面の高さを越える場合，水門の操作とは無関係に，自動的に，東の方へ放水するためのものであることは明らかである。因みに，放水路入口の底面のレヴェルと，上に述べた水門の流水孔のレヴェルとを比較してみると，前者は，水門の最上段の流水孔の底面よりも3.04メートル高くなっており，また，水門の屋上よりも1.11メートル低くなっているので，この放水路と水門とは，両者のレヴェル関係からみる限りでは，同じ時期に併存し，同時に機能することができたものと考えられる。なお，この放水路入口の底面のレヴェルは，水門の流水孔を完全に閉鎖するかぎり，西側の平坦地に貯えられる水の最高水位を示すものであり，平坦地における貯水の問題を検討する際に，その基準となる高さであると考えられる。従って，挿図22として掲載された平坦地一帯の地形図においても，このレヴェルを0として等高線が描かれている。

なお，トゥグルカーバードの水門のすぐ北側，すなわち，この水門とトゥグルカーバードの南城壁とにはさまれた空間には，周囲を壁によってとり囲まれた，東西約25メートル，南北約16メートルの，長方形に近い平面をもつ広場がある（挿図26）。この広場は，上に述べた水門の屋上とは階段によって結ばれており，また，東壁と西壁とにそれぞれ一つずつ入口を開いているが，現在では，その内部に注目すべきものは何もなく，本来，どのような性格をもつ空間で，いかなる建造物がそのなかに構築されたかについては，まったくわからない。

第六章　サ　ー　ト＝プ　ラ

第一節　地理的環境と歴史的背景

ニューデリーの南郊，メヘローリー (Mehrauli) 部落の東北に，デリーにおける最古のイスラーム建造物であるクーワットゥル＝イスラーム＝マスジッド (Qūwat al-Islām Masjid) (いわゆるクトゥブ＝モスク) を中心に，サルタナット初期に属する若干の建造物が集合する著名な遺跡複合地区がある (挿図27)。このクトゥブ地区を中心とする，東西2.3キロメートル，南北2.1キロメートルにおよぶ広い地域は，ラーイー＝ピトーラーの城砦 (Qilā'-i Rāī Pithaurā) として知られる大城砦となっており，その城壁は，今日なお，かなりの部分において明確にその痕跡をたどることができる。このラーイー＝ピトーラーの城砦は，すでに，ムスリム侵入以前に建設されたものであるが，また，ムスリムによる支配以後においても，奴隷王朝の各スルターンの居城として，その政治権力の中心拠点となっていたところである。一方，このラーイー＝ピトーラーの城砦の東北方約3キロメートルのところには，シャープル＝ジャート (Shahpur Jat) 部落を西端として，東西約1.9キロメートル，南北約1.2キロメートルの楕円形を描く城壁の痕跡があって，この城砦は，今日では，ハルジー朝のスルターン＝アラーウッディーン (Sulṭān 'Alā' al-Dīn) (1296～1316 A. D. 在位) によって建設されたとされる，シーリー (Sīrī) の城砦に比定されている。



挿図 27　ニューデリー南郊における主要建造物分布図
(建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による)

このようなラーイー＝ピトーラーの城砦とシーリーの城砦とを結んで，現在，2本の城壁が走っているの

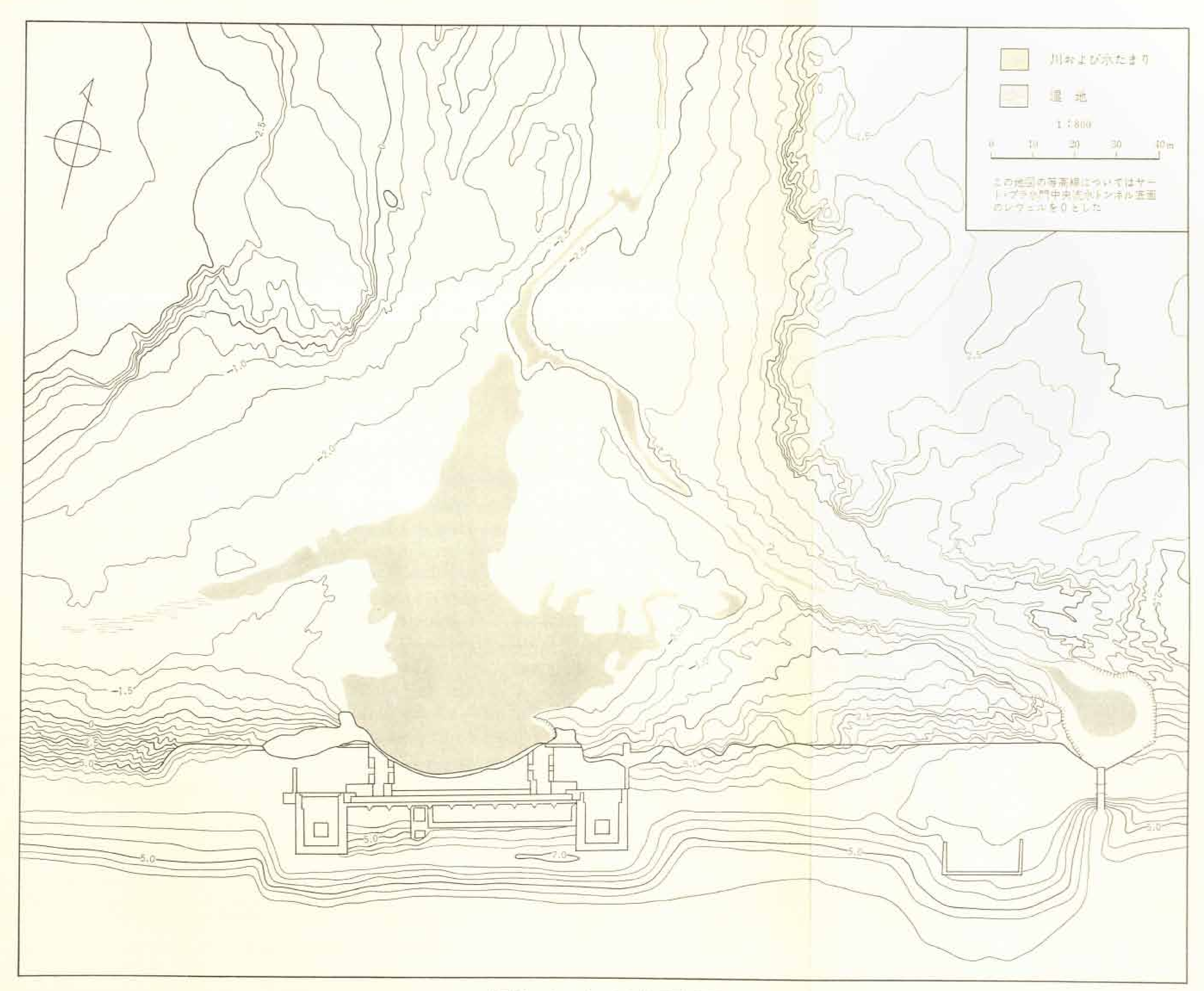
が認められる。このうちの1本は，ラーイー＝ピトーラーの城砦の東北の角から東北東に，一直線に約3.2キロメートル走り，そこで直角に折れて，さらに，北北西に1.8キロメートル延び，シーリー城砦の東端につらなるものである。他の1本は，ラーイー＝ピトーラーの西北の角から東北に，約1.2キロメートルのあいだその痕跡を認めることができるのであるが，この城壁は，おそらくは，さらに東北に延びて，シーリー城砦の西端に接続するように計画されていたものと思われる。さて，ここに述べた2本の城壁は，トゥグルク朝第二代のスルターン，ムハンマド＝ビン＝トゥグルク (Muḥammad bin Tughluq) (1325～51A. D. 在位) によって建設されたと伝えられる，ジャハーンパナー (Jahānpanāh) の城壁であったと考えられるのである。なお，この城壁の建設に関する歴史的問題については，後にふれることとしたい。

このジャハーンパナーの城壁は，結局，未完成に終わったもののように思われ，ラーイー＝ピトーラー城砦の東北の隅から東北東に延びる南城壁部分に，割石と漆喰とからなる石積みの残存が明確に認められるものの (挿図28)，この南城壁に直交して北北西に走る東城壁部分や，ラーイー＝ピトーラー城砦の西北の隅から東北に延びる西北城壁部分などは，むしろ，土塁に近いかたちのものである。さて，ジャハーンパナーの南城壁が，どの程度の規模をもつ城壁として完成が予定されていたかについては，この城壁の現状からはよくわからない。しかし，その南面には，ほぼ等しい間隔をおいて，半円形の突出部分が張り出しており，この城壁が，バスティオンを備えた堅固なものとして構築されていたことを示している。

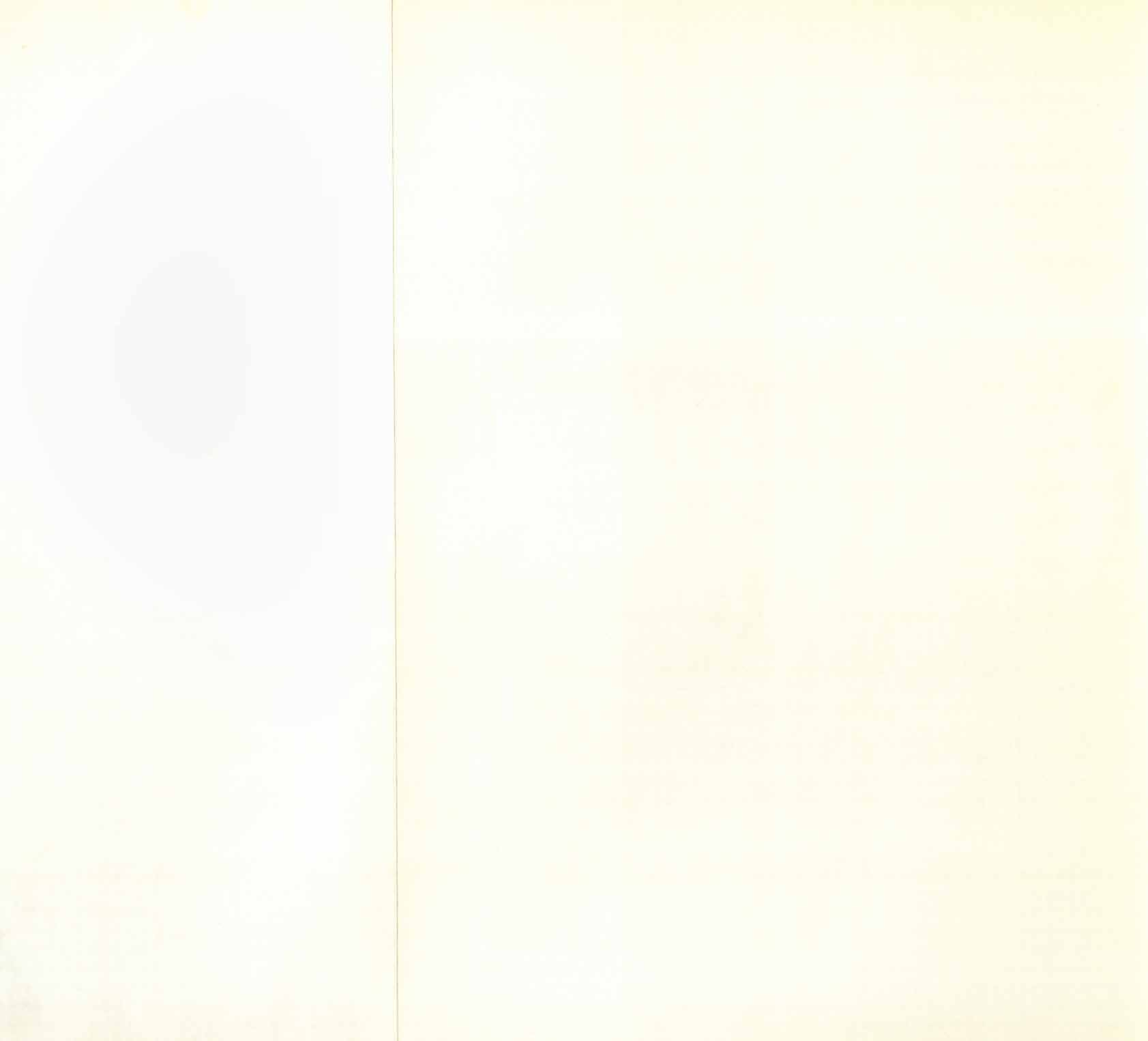

挿図 28　ジャハーンパナー南城壁石積みの残存状態

このようなジャハーンパナー南城壁の中間点，すなわち，ラーイー＝ピトーラー城砦の東北隅との接続点から東へ約2.1キロメートル，ジャハーンパナー南城壁と東城壁との交点から西へ約1.1キロメートルの地点に，サート＝プラ (Sāt Pulah) として知られる大水門の遺構〔W. 48〕が残っている。この水門は，ジャハーンパナー南城壁の一部を構成する構築物で，その全長は，この両端にある附属建物を含めて，79.5メートルにおよぶ巨大なものである。サート＝プラ大水門の形態と構造，ならびにその機能については，本章の第二節において詳細に述べる予定であるので，ここでは，これをとり囲む周囲の地形について，若干のことがらにふれておきたい。

サート＝プラ附近の地形は，ジャハーンパナー南城壁によって，その南側と北側とに二分されている (挿図29)。城壁の南側は，広い平坦地をなしており，この土地は，現在では，農耕地として利用されている。1960年2月の現地調査時においては，一面にさとうきびが栽培されていた。この城壁南側の平坦地は，メヘローリー部落附近を西北から東南に走る丘陵地帯，トゥグルカーバードの大城砦が立つ丘陵とその西北につづく丘陵地帯，さらには，トゥグルカーバードの南方から西南方にかけて広がる，より大きな丘陵地帯などによって，それぞれ，西・東ならびに南をとり囲まれた広大な平野の一部をなしており，これらの丘陵地帯に降った雨水は，この平野に流れ込んで，次第にジャハーンパナー南城壁の方向に向って，北上していったものと思われる。近年，インド政府によって刊行された，デリーとその周辺の地図によってみても，この平野を



挿図29　サート＝ブラ周辺地形図





挿図 30　サート=プラ南方平坦地における雨期の氾濫
(1963年8月山本撮影)

横切って北上する，数条の川筋が認められる[1]。しかし，サート＝プラ附近の平坦地についていえば，この水門に，直接接続するような川筋あるいは地溝は，現在ではまったく認められない。なお，サート＝プラ南方の平坦地は，現在なお，雨期には多量の雨水を集めており，これによってこの場所に大きな湖が出現するのである（挿図30）。

さて，つぎには，サート＝プラ水門の北側の地形について述べてみよう。まず，サート＝プラのすぐ北側につづく土地は，平らな低地をなしている。この低地は，その東北ならびに西北にひろがる，現在では耕地として使用されている土地よりも３～４メートル低くなっており，低地と耕作地との境には，小さな崖がつづいている。この低地は，ジャハーンパナー南城壁に沿ったところで，東西にもっとも広くなっており，北方にいくにしたがって次第にその幅もせばまり，やがては，東西にせまる小さな崖にはさまれた狭い谷間に続いているのである。1960年２月の現地調査時においては，サート＝プラ水門のすぐ北側に，小さな水溜りができていた。そして，この水溜りから始まる小さな川が，低地のほぼ中央を北に走り，やがて谷間の底を通って，ゆるやかに曲折しながら北上しているのである。この川は，その後，チラーグ＝デリー（Chiragh Delhi）部落の西側をかすめ（挿図27），シーリー（Sirī）城砦の東壁に沿ってその東側を北上し，ニザームッディーンのダルガー附近の部落に向って流れていく。しかし，現在では，この川の水源は，サート＝プラ北側の水溜りにあるのではなく，サート＝プラの東方110メートルの地点に，城壁を切断して近年新たに設けられた放水路から流れ落ちる水が，西北に走る地溝を通って，上に述べた小さな川に流れ込んでいるのである。

なお，ジャハーンパナー南城壁には，上に述べたサート＝プラの大水門のほかに，若干の水利関係施設が設けられているのが認められる。これらは，いずれも，近年の構築になるもののように思われるが，なお，その詳細については，次節においてふれることとしたい。

「サート＝プラ」（Sāt Pulah）という語は，ヒンディーの「七」（Sāt）と「橋」（Pulah）を意味する二つの語から成っており，これまでも，そのまま英訳されて，「七つの橋」（Seven Bridges）などと紹介されたこともある。デリーの遺跡のなかで，これに類するものとしては，たとえば「アート＝プラ」（Āṭh Pulah，八つの橋）というような呼称がムガル時代の橋に用いられてきた例が認められる[2]。この大水門の場合は橋そのものではないのであるが，建造物の外観の特徴を巧みにとらえていいあらわした名称といえよう[3]。また，アフマド＝ハーンのウルドゥー語の著書からも知られるように，この建造物は，「バンド」（Band）とも呼ばれてきた[4]。「バンド」とは，すでに本巻の序論でも記したように堰堤を意味する語であるが（14ページ参照），この場合には，サ

1)　"Delhi and Locality," published under the direction of Brigadier G. F. Heaney, Surveyor General of India, 1950, scale 1 inch to a mile.

2)　*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. II, No. 50, Athpula or Khaipur ka pul (bridge), pp. 38–39

3)　H. C. ファンショウは，「七つのアーチ」（Seven arches）といううがった訳をしている．H. C. Fanshawe, *Delhi, Past and Present*, London, 1902, p. 287.　また，J. D. ベグラーは，"Satpallalla band" と記しているが，彼自身の聞きとった音を，そのまま転写したものであろう．J. D. Beglar, Report on Delhi, for the half-year ending September 1871, *Archaeological Survey of India Reports*, Vol. IV, Calcutta, 1874, p. 64.

4)　Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Orig. ed., Pt. I, pp. 21–22;　Rev. ed., Pt. III, pp. 31–32.

ート＝プラそのものの両側につづくジャハーンパナー南城壁，すなわち堰堤の部分と切り離して，この水門施設だけを「バンド」という名で呼んでいたこともあったようである。

さて，このサート＝プラ大水門の建設年代に関しては，かつて，荒が，ジャハーンパナー南城壁の造営の年代についての考証とともに，詳細な考察を行なった。[1] それについては，本巻の第二編第三章においても言及するが，ここではその一端を述べるにとどめたい。問題点の詳細については，同論考を参照されたい。

ジャハーンパナーの南城壁の一部に設けられたこの水門の建設の時期が，ジャハーンパナーの城壁の造営の時期と密接に関連していることはいうまでもないところである。ムハンマド＝シャー＝トゥグルクの宮廷に仕官したアラブ人イブン＝バットゥータ (Ibn Baṭṭūṭa) が残した著名な旅行記や，フィーローズ＝シャー自身の作ともいわれる『フィーローズ＝シャーの勝利』(*Futūḥāt-i Fīrūz Shāhī*) などには，城壁都市としてジャハーンパナーについての記述が見えており，[2] また，サルタナット時代の後代の史書にも，その名はあらわれている。これらの諸資料を照合すれば，ジャハーンパナーは，その造営の年次にはなお問題はあるにせよ，スルターン＝ムハンマド＝シャー＝トゥグルクの時代に建造されたものと考えるのが妥当であるといえよう。

ところで，サート＝プラそのものについては，サルタナット時代のいかなる文献にもそれに関する記述は見当らない。しかし，19世紀以降の諸著書の多くは，この大水門をトゥグルク朝のスルターン＝ムハンマド＝シャーの時代の建造とすることにおいて，ほぼ見解が一致している。ただ，サイイド＝アフマド＝ハーンの『アーサールッ＝サナーディード』の初稿本のみが，フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの建立説をとっていたが，そのサイイド＝アフマド自身，のちの改稿本においては，「727 A. H. すなわち1326 A. D. 年に」ムハンマド＝シャーが建立したと，その見解を改めている。この727 A. H.（1326－27 A. D.）年説については，カー＝スティーブン (Carr Stephen, 1876年刊) やファンショウ (H. C. Fanshawe, 1902年刊) を含む後代の諸著書も，そのまま踏襲しているものが多い。

しかしながら，この727 A. H. 年建立説については，さまざまの点からして，疑問をもたざるを得ない。この年は，ムハンマド＝シャーがスルターンに即位してからわずか2年前後のときに当っており，しかも，この年には，有名なデカンのデーオギリ (Deogiri) における新都造営が行なわれ，ムハンマド自身，新都ダウラターバード (Daulatābād) へ赴いたとされているのである。[3] この新都造営が，首都の移転あるいは首都デリーの完全放棄といったような性質のものではなく，むしろ「第二の首都」(Second capital) の造営というべきであるとするマフディー＝フサインの所論には傾聴すべきものがある。デリーが，はたしてイブン＝バットゥータの記しているように，無人荒廃の町と化したというのは，正しくはないであろう。しかし，それにしても，この同じ727 A. H. 年に，たとえマフディー＝フサインらのいうようにジャハーンパナーの造営がはじまったということがあったとしても，[4] サート＝プラまでが，この年に建設されたというのは，いささか不自然のように思われる。詳細は，さらにジャハーンパナー自体の建立年次の考証にかかわることなのでここでは省略せざるを得ないが，多くの著者がとってきたアフマド＝ハーンの改稿本以来の，サート＝プラ727 A. H. 年建設説は，あまり信頼のおけるものではないとみてよいのではあるまいか。

1) 荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第36冊，1965年， pp. 83–90, pp. 103–112.

2) *Futūḥāt-i Fīrūz Shahi*, Persian text ed. by Shaikh ʻAbd al-Rashid, Muslim University, Aligarh, 1954, p. 15; Futūḥāt-i Fīrūz Shāhi, Persian text ed. by N. B. Roy, *Journal of the Royal Asiatic Society*, Letters, Vol. VII, 1941, No. 1, p. 83.

3) Mahdi Husain, *Tughluq Dynasty*, Calcutta, 1963, pp. 144–163, p. 657. Wolseley Haig, Five Questions in the History of the Tughluq Dynasty of Delhi, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1922, Pt. IV, The Chronology of the Reign of Muḥammad Tughluq, p. 361.　なお，荒，上掲論文，p. 84.

4) Mahdi Husain, *Tughluq Dynasty*, pp. 166–167.

さて，サイイド＝アフマドの『アーサールッ＝サナーディード』の初稿本に紹介された説は，ここで，一応，簡単にふれておくに値する。それは，スルターン＝フィーローズ＝シャーが，その子ファトゥフ＝ハーン（Fath Khān）の死によっていたく悲しんでいるのを見て，彼の貴族たちが，スルターンの悲哀を忘れさせようと，「シカールガー」（Shikārgāh，日本流には「お狩り場」とでも訳そうか）として，この「バンド」をつくらせたというのである。[1] ただ，このことは，この水門の建設目的にまつわる伝承としてはきわめて興味深い話ではあっても，歴史的事実として，そのまま認めるわけにはいかない。もっとも，のちに第二編で記すように（123ページ参照），水を集めて鳥獣を水辺に誘い出し，もって狩猟の条件を整えるというやり方は，当時の支配層がよく行なったことである。しかし，サイイド＝アフマドが紹介しているような狩猟場づくりにしては，この堰堤と大水門の工事は，あまりにも，その規模が大きすぎるようにも思える。この大水門の完成後に，サート＝プラ周辺の地は，狩猟に好適な場所となったかもしれない。しかし，後述するように，建設目的としては，それは，あくまでも附随的なものであったにすぎないであろう。結局，サート＝プラの建設年代については，決定的な結論は出し難いというべきであろう。ただ，のちに述べるように，現存するサート＝プラ大水門とジャハーンパナー南城壁との石積みのつづき具合から推すと，この両者が同時に建設された可能性もあるように思えるが，これも，サート＝プラ大水門が，ジャハーンパナーの造営とまったく同時に建造されたことを必ずしも意味しない。しかし，この石積みの問題も含めて，さまざまな点で，ムハンマド＝シャーの治世に建設されたという推論がかなり有力であるということはいえそうである（本巻115～119ページ参照）。水門としてのあり方からいえば，実は，サート＝プラほどの大建造物の必要は必ずしも認められない。のちのフィーローズ時代の堰堤にみられる水門施設でも十分その機能を果たせたであろう。この点から考えると，巨大さと奇異とを好むムハンマドの治世の建物という感じも，たしかにしてくるのである。

最後に，このサート＝プラにまつわる伝承と，それに関連してかつて行なわれていた民間信仰の行事について，簡単に紹介しておきたい。サイイド＝アフマド＝ハーンは，この大水門の東北方にダルガーがあるシェイフ＝ナシールッディーン＝マフムード（Shaikh Naṣir al-Dīn Maḥmūd）すなわちローシャネ＝チラーゲ＝ディッリー（Rūshan-i Chirāgh-i Dihlī）の名で知られたスーフィー聖者にまつわる伝承を紹介している。すなわち，この聖者の徳によって，この水門の前面に掘られた小さな井戸の水が，ムスリム・ヒンドゥーの両教徒によって，ともに聖なる水と考えられ，病気の治癒にも卓効があるとされ，特定の日に多数の民衆がこの地に集まったと記しているのである。さきに紹介したガンダク＝キ＝バーオリーにまつわる民間信仰的慣行とともに，興味あることがらといえよう。[2] なお，インド考古調査局の報告書（1922年刊）によれば，この水門の東西両端に残る二つの小部屋は，一時，附近の村民たちの「マクタブ」（Maktab，すなわち学校）として用いられたこともあり，また，サート＝プラ自体，この地域では「マドラッサ」（Madrasah，学校の意）と呼ばれていたらしいこともわかる。さらに，ASIによる調査が行なわれた1910年代には，西側の小室は，デリーの District Board の倉庫（Godown）として用いられていたという。[3] しかし，現在では，サート＝プラは，完全な廃墟の遺跡にすぎず，どの部分も，実用には使われていないようである。

なお，フィーローズ時代の史書ズィヤーウッディーン＝バラニーの『フィーローズ＝シャーの歴史』に，「バーラーバンデ＝アーベ＝シーリー」（Bālāband-i Āb-i Sīrī），または「バーラーバンデ＝シーリー」（Bālāband-i

1) Saiyid Aḥmad Khān, *Āthar al-Ṣanādīd*, Orig. ed., 1895, Pt. I, p. 21.

2) Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Orig. ed., Pt. I, pp. 21-22; Rev. ed., Pt. III, pp. 31-32; Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, p. 102.　なお，荒，前掲論文，pp. 86-87, p. 201, notes 41, 42 参照.

3) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, No. 216, p. 127.

Sīrī) なる語句がみえる一節がある。[1] 荒は，かつて，この「バーラーバンド」および「アーベ＝シーリー」について考証して，それが水利施設ではないかとする推論を提起した。[2] その結論の一つとして，バラニーの記すこの「バーラーバンド」が，あるいはサート＝プラ水門に比定し得る可能性もまったくないとはいえないことを説いた。この点については，本巻でものちにも述べるが（115〜116ページ参照），ここで，一言ふれておきたい。

第二節　形態・構造および機能

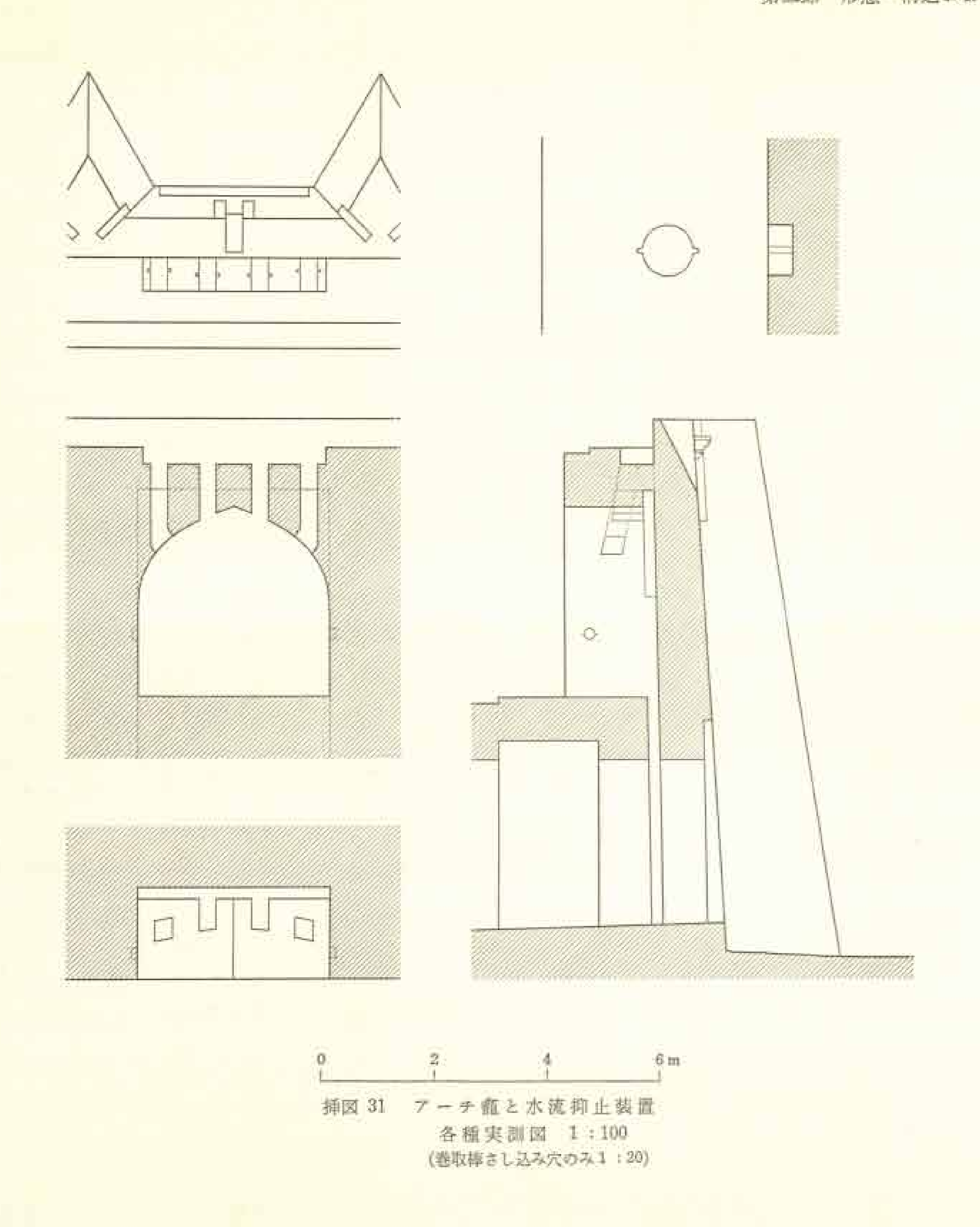
サート＝プラ（Sāt Pulah）の水門〔W. 48〕は，水門部分の長さが54.5メートル，東西両端にある附属建物を含む全長が79.5メートルあって（図版50a），その大部分は，割石と漆喰とによって構築されている。水門部分は，その北面，すなわち下流側においては二層形をなしており，その下層部分に合計11個の流水トンネルが設けられている（図版23a, 50b）。これらの流水トンネルは，レヴェルの異なる３段に配列されていて，中央附近の７個はもっとも低い位置にあり，それにつづく左右の２個は，それより1.4メートル高く，左右両端の２個は，後者よりもさらに1.4メートル高くなっている。これらの流水トンネルは，高さが3.2メートル，幅が2.2メートルないし2.9メートルあって，その長さは14.6メートルである。水門北面上層部分には，下層の流水トンネルに対応して11個のアーチ龕が設けられており，それぞれの龕は，個々の流水トンネルの真上の位置にある。これらの龕は，中央附近の７個においては，高さが3.3メートル，幅が2.7メートルないし3.4メートルあって，その深さは1.6メートルである。しかし，左右両端，ならびにその隣りにある合計４個のアーチ龕は，高さ・幅・深さとも，上述のものよりずっと小さい。中央部分の七つの龕には，その下の流水トンネルを通る水の流れをコントロールする装置が設けられており，龕の前方にある広いヴェランダの上で，この装置を操作できるようになっている（図版25b）。これに対して，他の四つの龕においては，そのような装置はみられない。

さて，トンネルを通る水流を抑止し，あるいは，その水量を調節する作業は，つぎのようなしくみと手順とによって行なわれる（挿図31）。すなわち，上層のアーチ龕の床面の，もっとも奥壁に近いところに，龕の幅に等しい長さをもち，幅が約20センチメートルの細長い穴があけられており（図版31b），この穴は下方に垂直にのびて，流水トンネルの南の端にある，二つのアーチのあいだの隙間につながっているのである（図版32c）。さて，水流のコントロールは，この細長い穴を通して，遮断板を上げ下げする作業によって行なわれる。すなわち，流水トンネルを開放して水を自由に放流する場合には，この遮断板をアーチ龕のなかに格納しておく。そして，流水トンネルを閉ざす場合に，この遮断板を，上のアーチ龕から下方の流水トンネルに向っておとすのである。落下する遮断板は，流水トンネルの南端にある２本のアーチのあいだの隙間のなかを滑り落ちる。

ところで，上述の遮断板は，幅が約３メートル，高さが3.2メートル以上，厚さが16〜17センチメートルのものと推定されるので，かりに，これが木の厚板を組み合わせてつくられたとしても，かなりの重量のものになるはずである。従って，この遮断板を上げ下げする装置も大がかりなものとならざるを得ない。まず，これらの遮断板は，太い綱によって上方からつり下げられ，また，この綱は，アーチ龕の上方に備え付けら

1) Ẓiyā' al-Dīn Baranī, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, Persian text ed. by Syed Aḥmad Khān, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1860-62, p. 565.

2) 荒，前掲論文，「Baranī にみえる Bālāband-i Sīrī について」，pp. 112-127.



挿図31　アーチ龕と水流抑止装置
各種実測図　1：100
(巻取棒さし込み穴のみ1：20)

れた固定式滑車に懸けられていたものと思われる。現在，この水門の屋上部分には，幅約0.3メートル，長さ約0.6メートルの長方形の穴が多数認められるが (図版29b)，これらの穴には，かつて，固定式滑車が設置されていたものと考えられる。また，この穴の両側には，滑車の心棒をはめ込んだと思われる，幅3.5センチメートル，長さ約7センチメートルの溝も認められる。ところで，このような滑車設置用の長方形の穴は，上のような装置をもつ中央附近の七つの龕のうち，左右両端の二つをのぞく五つの龕においては，それぞれ4個穿たれており，また，他の二つにおいては2個ずつ認められるので，もし，1個の穴に一つの滑車が設置され，一つの滑車は1本の綱を支えていたものとすれば，上の五つの龕においては，4本の綱が一つの遮断板をつり下げており，他の二つの龕においては，2本の綱が1個の遮断板をつり下げていたことになる。

さて，一方の端を遮断板に結びつけられた太い綱は，垂直に上に向って，アーチ龕上方の固定式滑車の周囲を半周し，やがて，斜め下に伸びて，アーチ龕の下の部分に水平にわたされた太い棒に，他方の端を巻きつけられるのである。この棒は，長さがアーチ龕の幅と同じく3メートル前後のもので，その両端を，アーチ龕の両側面に穿たれた円い穴の中に固定されていた (図版30a；挿図31)。この穴の形および大きさからみる

と，この棒は，断面が円形をなす棒で，その直径は約18センチメートルであったと思われる。このような丸棒は，各龕ごとに1本ずつわたされており，この1本の丸棒に，1個の遮断板に関係する4本もしくは2本の綱が，ともに巻きつけられるようになっている。遮断板を持ち上げようとする場合には，この水平の巻取棒の傍に立つ作業員が綱を十分に手前にたぐり寄せ，すばやく巻取棒に巻きつける。また，遮断板をトンネルにおとす場合には，この綱をほどきながら伸ばすようにすればよいのである。しかし，このような作業は，一つの遮断板に関係する4本もしくは2本の綱について，同時に，かつ同じ速度で行なわれる必要があろう。従って，綱が4本である場合には，一つの遮断板の上げ下げの操作は，4人の作業員によって，速度を合わせて行なわれたものと考えられる。なお，一つの可能性として，巻取棒そのものを回転させることによって，4本もしくは2本の綱を，同じ速度で巻き取ったりほどいたりしたかもしれないとも考えられるのであるが，この水門においては，巻取棒そのものを回転させることはなかったものと思われる。この棒の両端がはめ込まれている枘穴に，二つの爪がつけられているが，これは，おそらくは，巻取棒の回転を防ぐための何らかの工夫と関連するものと思われる（挿図31）。

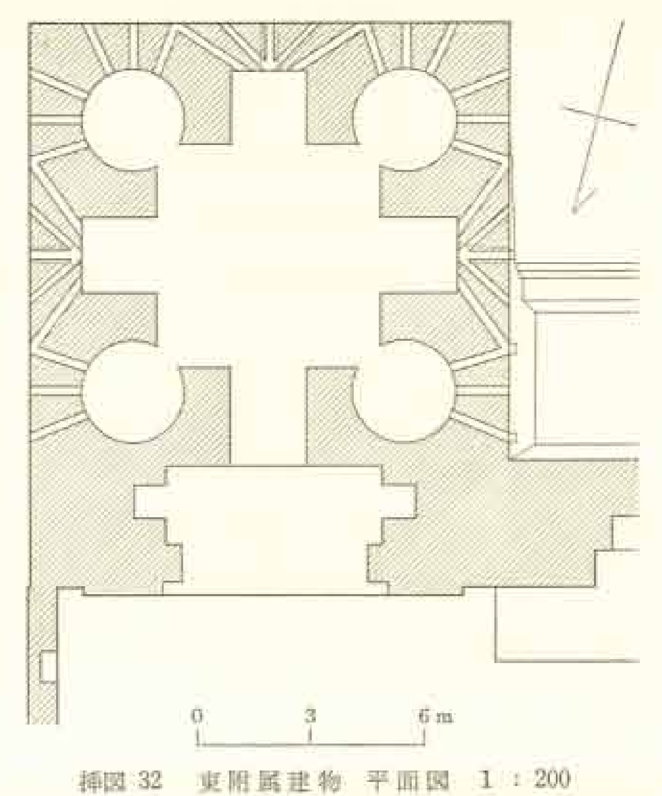
以上が，中央附近の七つの龕における流水コントロール装置の概要である。これに対して，水門の両端およびそのすぐ隣りにある，合計四つのアーチ龕においては，上のような装置は認められないのである。しかし，これらの龕の下方にある四つの流水トンネルにおいても，上述の七つの流水トンネルの場合と同様に，遮断板を上げ下げする溝が設けられている。従って，ここにおいても，遮断板によるトンネルの開閉が行なわれたとみなければならない。しかし，これが，どのような方法によってなされたかについては明らかではない。一つの推測としては，アーチ龕列北側の広いヴェランダから，これら四つのトンネル内部に降りる階段が設けられているので，この階段を利用して，トンネル内部で遮断板を操作した可能性も考えられる。

サート＝プラ水門の11個の流水トンネルには，それぞれ扉が備え付けられていた。すなわち，遮断板の移動する溝の北側にあるアーチの，そのすぐ北につづく一段高い天井の左右両側の隅に，直径約12センチメートルの円形の穴が穿たれているのが認められる（図版32d）。これらの穴は，その位置と形とからみて，扉の軸受けの穴であったと推定される。この扉は北側に向って開かれ，わずかに凹んだ壁の部分にしまいこまれるようになっていた。さて，流水トンネルに設けられたこのような扉は，雨期とそれにつづく一定期間，遮断板が流水コントロールの機能を果たしているあいだは，使用されることなく上述の凹んだ壁のなかにしまい込まれたままであったと思われる。そして，乾期に入って流水がまったく途絶えてしまって後，この扉が利用されたのであろう。すなわち，この扉は，乾期における防衛の役割をもっていたものと考えられる。そして，このことは，サート＝プラ水門そのものが，城壁の一部として建設されていたことと，当然関連しているのである。

サート＝プラ水門の東西両端には，東西約13メートル，南北約15メートルの附属建物が，南側に突出して設けられている（図版33a, b, 50a）。これらの建物は，北面をのぞく他の3面において，外観が二層形をなしており，その下層部分に，合計11個の狭間が3段に開かれているのが特徴的である。これらの狭間のうち，上段の2個は屋上から，中段の4個と下段の5個は建物内部の部屋から，それぞれ，通じている。なお，下段の左右から二つ目に位置する二つの狭間は，いずれも，別方向からくる2個のものがまじわって1個所に開口しているものである。以上のほか，上段の2個の狭間のあいだには，ブラケットを備えた太い溝状のものが，2個所に認められる。

さて，東西両端の附属建物は，その北側に広い前庭をもっており，この庭に面して，室内に通じるアーチ

形の入口を開いている（図版34a）。建物内部の部屋は，一辺5.9メートルの四角平面をなしており，北をのぞく3辺の中央にはほぼ方形の突出部分を，また，四隅には円形の突出部分をそれぞれもっている（図版34b）。また，方形の突出部分からは5個の狭間が外部に向ってのびており，東南と西南の円形の突出部分は6本の狭間を，東北と西北のそれは3本の狭間を，それぞれ備えているのである（挿図32）。このような狭間の存在は，これらの附属建物が水門の防衛を主要な任務とするものであることを明らかに示しているように思われる。なお，内部の部屋の円形天井には，交叉リブを表したと推定される漆喰の凸帯が認められ，また，天井の周囲には，植物文様が帯状に走っているのが注目される（図版34b）。



挿図 32　東附属建物　平面図　1：200

現在，サート＝プラの水門は，その本来の機能をまったく失ってしまっている。すなわち，11の流水トンネルのうち，東側の七つは，近年の切石積みの壁によって上流側（南側）をとり囲まれており，また，その上，この水門全体にわたって，その南側に新しい土手が築かれているので，もはや，今日では，流水トンネルに水が流れ込むことはなくなってしまっている（図版27）。ただし，西から4番目の流水トンネルには，その上流側に，導水のための側壁と，遮断板による流水抑制装置を備えたアーチ形のトンネルとが，近年新たに追加されているので，この1個所だけは，他の流水トンネルが機能しなくなったあとも，ごく最近まで利用されていたものと思われる。しかし，現在では，この流水トンネルもまた土砂に埋もれた状態となっていて，その機能を停止してしまっている。なお，アフマド＝ハーン（Aḥmad Khān）の著作によれば，英領インド時代に城壁の崩壊個所が修復され，サート＝プラ水門の流水トンネルが閉鎖されたことが知られるが，[1] 上に述べた切石積みの壁や水門南側の土手などは，この際に構築されたもののように思われる。

さて，ここで，サート＝プラ建立の年代について考察してみたい。この問題については，すでに前節において，サルタナット時代の文献に基づく考察と，19世紀以降の諸論考の見解とを紹介しておいたが，要するに，ジャハーンパナー南城壁については，同時代の文献によって，トゥグルク朝第二代のスルターン，ムハンマド＝ビン＝トゥグルク（Muḥammad bin Tughluq）の治世に建設されたことが明らかであるとしても，サート＝プラ水門建設に関しては，同時代の文献に何らの記載もなく，19世紀以降の諸論考においても，ムハンマド時代の建立とする多数意見と，次代のスルターン，フィーローズ＝シャー（Fīrūz Shāh）の時代の建立とする一見解とが対立していたのである。また，荒は，トゥグルク朝時代の歴史家Baranīの史書，*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī* のなかに記されたBālāband-i Āb-i Sīrīの記載に注目し，サート＝プラそのもの，あるいはその前身といえる水門施設の建設が，ムハンマドによって現在地点に着工され始めたことはあったにしても，それを今日みるようなかたちのサート＝プラに完成したのは，フィーローズ＝シヤーであったろうとの見解をすでに提出しておいた。[2]

1)　Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Original edition, Lakhnau (Lucknow), 1895, Pt. I, p. 21.
2)　荒 松雄,「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」, 東洋文化研究所紀要, 第36冊, 1965年, pp. 112-127.

さて，ここでは，サート＝プラ水門建立の年代について，水門そのものの構造・様式から，あるいは，水門と城壁との石積み相互の関係から，検討してみたいと考えている。まず，この水門の構造・様式についてみると，比較的小さな割石と漆喰とを用いて構築された石積みの状況，壁の外面にみられる強い傾斜，アーチのもつカーヴの性格，附属建物内部天井の周囲をめぐる帯状の植物文様，同じ建物のアーチのスパンドレルに残るディスク文様，そして，水門部分の屋上と附属建物の外面にみられるブラケットの様式などは，サート＝プラ水門が，サルタナット時代の中期，すなわちトゥグルク朝の時期に属するものであることを明らかに示している。しかし，上に紹介した従来の諸説と関連して，この建造物がムハンマド＝ビン＝トゥグルクの時代に属するものか，あるいはまた，フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの時代に属するかについて，上のようなさまざまの特徴から判断することは，はなはだ困難といわざるを得ない。なぜなら，デリーにおいては，歴史碑文の存在などによって，確実にフィーローズ＝シャー時代のものとされる建物は多数あって，このスルターンの時代の建造物の構造・様式上の特徴がかなり明確にとらえられるのに対し，ムハンマド＝シャー治世下の建造物については，それがどのような特徴をもっているのかを知ることが，かなり困難な情況にあるからである。サート＝プラ水門にみられる上のような構造・様式上の特徴は，確かに，フィーローズ＝シャーの時代にみとめられるものである。しかし，これらの特徴がムハンマド＝シャーの時代にまで溯るかもしれない可能性を否定することもまたできないのである。

そこで，同時代の文献の記載によって，ムハンマド＝シャーの時代に建設されたことが確かであるとされるジャハーンパナー南城壁と，このサート＝プラ水門との接続の状況について観察してみたい。まず，両者の接続部分を，北面の石積みについて検討してみると，両者を分ける縦の線は認められない。また，サート＝プラ水門の石積みは，幅55〜70センチメートルの，いくつかの層の重なり合いからできていて，層と層とのあいだには，水平に走る直線が明瞭に認められ，他方，ジャハーンパナー南城壁北面の石積みについても同様であるが，この場合，両者の石積みの層は互いに連続しており，層と層とのあいだを走る水平線も，両者を貫いて切れ目なくつづいているのである。これらの点からみると，サート＝プラの水門は，ムハンマド＝シャーによって建設されたとされるジャハーンパナー南城壁の石積みと，同一時期に，一連の工事として構築されたことになろう。

しかし，ここで，水門附近の南城壁の石積みについて，この部分の北面の石積みが，同じ城壁の他の部分に比較して，格段に良好な状態で残っており，また，これが，水門の西方約25メートルのところで切れているところから，この部分の石積みを，城壁の他の部分と区別して，一応，別個の工事によるものと推定することも可能なのである。もし，このように考えられるとすれば，上に述べた，水門附近の城壁石積みと水門そのものの石積みとの連続の事実は，サート＝プラ建設の時期が，ムハンマド＝ビン＝トゥグルクの治世における，ジャハーンパナー城壁建設の時期と同時であることを証明するものではなくて，むしろ，サート＝プラとそれに直接つづく城壁部分の石積みが，ともに，ジャハーンパナー城壁一般の建設とは別の時期，一つの可能性としては，フィーローズ＝シャーの時期に，建設されたことを示すことになるかもしれないのである。結局，サート＝プラの建設時期については，ジャハーンパナー南城壁とこの水門との石積みの接続状況から考察しても，決定的な結論を得ることは難しい。

さて，サート＝プラ水門の機能は，すでに述べた，その形態および構造からも明らかなように，ジャハーンパナー南城壁によって堰き止められて，その南にひろがる平坦地に貯えられた雨水を，流水トンネルの開閉の操作によって，適時，北方に放流することにある。しかし，南方の平坦地における貯水を中心とする水

利計画の概要，この計画の目的とその歴史的背景，水利計画における南城壁と水門との役割などについては，第二編第三章第二節において，改めてふれることとしたい。

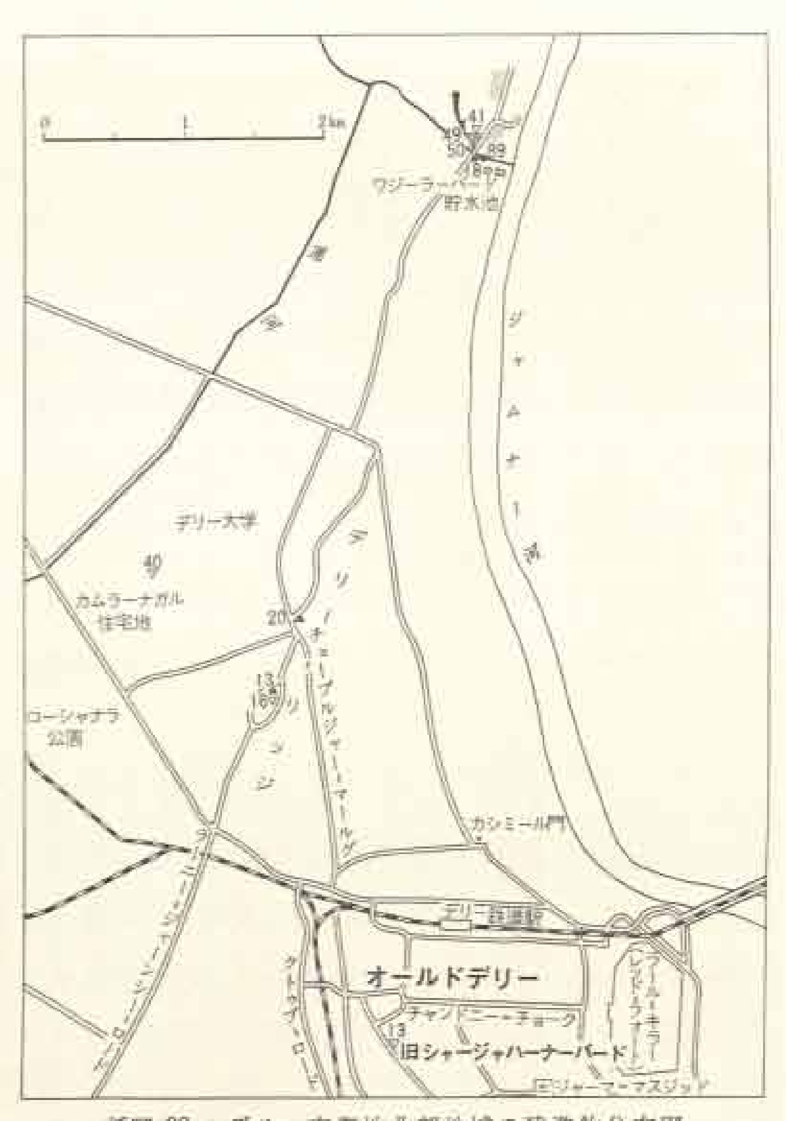
なお，ジャハーンパナーの南城壁には，上述のサート＝プラ大水門の他に，なお，五つの水利関係施設が認められる。これらを西のものから順次ふれることにしよう。まず，もっとも西の方にある第一の水利施設は，南から北に下る傾斜をもつ放水路で，これには，流水をコントロールする装置は設けられていない。第二のものは，サート＝プラの西方約670メートルのところにあり，トンネル式の小水門である。この水門は，水を南から北へ向けて放出するものであったと思われるが，水門南端の両側には溝があって，この溝のなかに板をおとすことによって，流水を止めることができるようになっていた。サート＝プラの西方約550メートルのところにある第三の水利施設は，南から北に下る傾斜をもつ放水路で，南北の長さ約17メートル，東西の幅約15メートルであり，これには流水をコントロールする装置はない。以上の三つの水利施設は，いずれも後代の構築になるものである。

一方，サート＝プラの東方110メートルの地点には，南北の長さ，現存部分で約11メートル，東西の幅約2メートルの流水路があって，その下部には円管が2本埋められており，上部には流水を制御する装置がつけられている。この流水路の建設については，サート＝プラ水門の南側に行なわれた防護措置と関連して，近年なされたもののように思われる。雨期になると，今日も，かなりの水がこの流水路を通って北に流れているらしく，その北側には，落下する水によって大きな窪地ができている。このような窪地から西北に向って，細い水溝が走っており（挿図29），この水溝を通った水は，サート＝プラ北側の低地から北方へ走る川のなかに流れ込むようになっている。最後に，サート＝プラの東方400メートルの地点にもう一つの放水路がある。これは，すでに述べた第三のものとほとんど同形同大で，同じように北に下る傾斜をもち，流水コントロール装置はない。これもまた，その構築は近代になって行なわれたものと思われる。

第七章　ワジーラーバードの水門

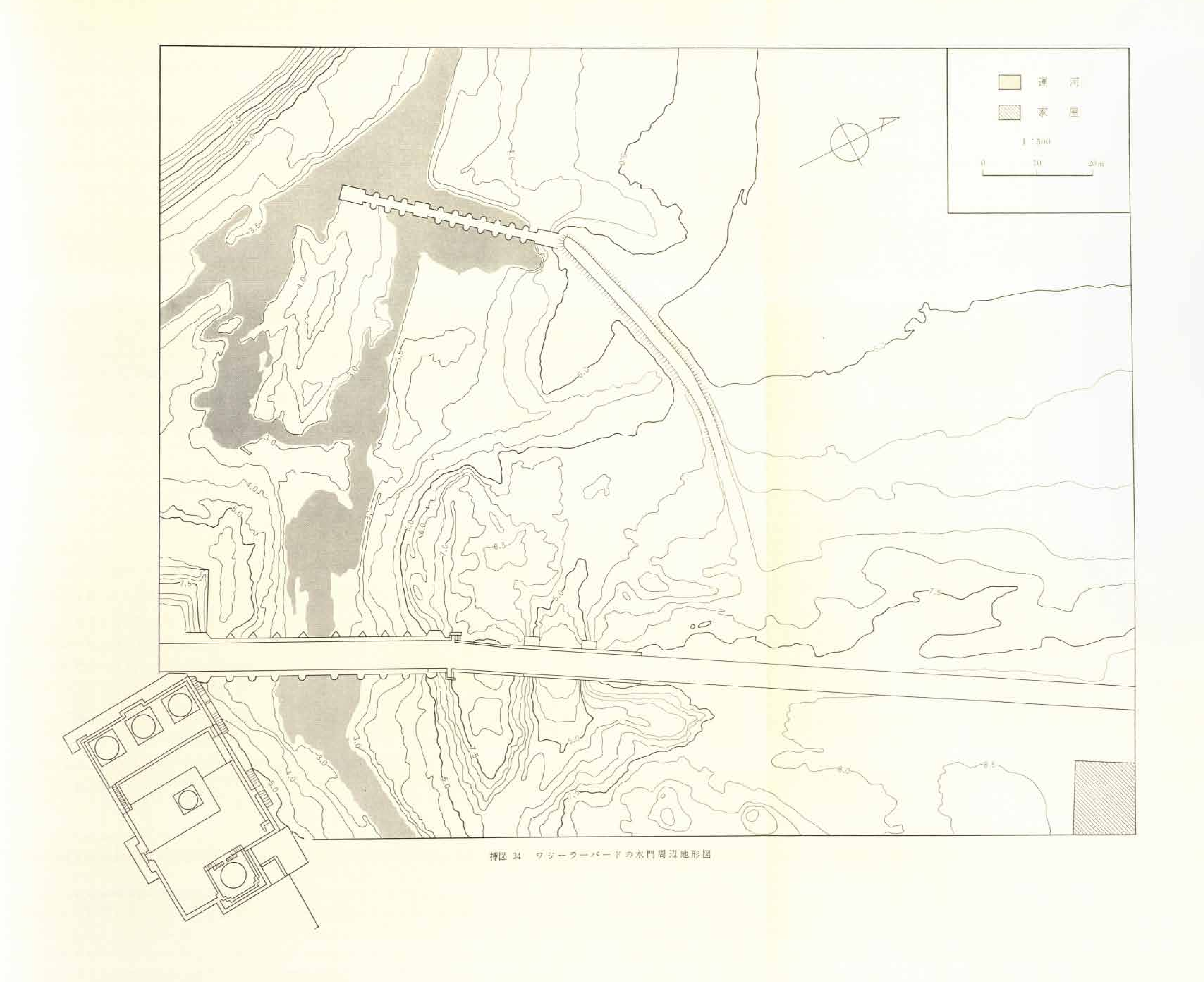
第一節　地理的環境と歴史的背景

ニューデリーの中心地，コンノート＝プレイス (Connaught Place) から北へ約9キロメートル，デリー市街地の最北端にあるティマルプル (Timarpur) の住宅地を通過してさらに北上すると，道路は，ほぼ東西に流れる，ナジャーフガル＝ドレイン (Najafgarh drain) と呼ばれる運河と交叉する (挿図33)。この運河には，デリー＝サルタナット時代中期に属すると推定される九つのスパンをもつ橋〔W. 50〕がかけられており，この橋の南たもとに，間口5間・奥行2間の礼拝堂をもつモスク〔M. 18〕が立っている (挿図34)。このモスクの前庭には，12本柱からなる列柱式墓建築〔T. 89〕が建てられており，シャーヘ＝アーラム (Shāh-i ʻĀlam) なる人物の墓と伝えられている。一方，この橋と並んで，そのすぐ北側には，多数の流水孔を備えた水門〔W. 49〕の遺跡が残っており，この水門とモスクおよび墓建築は，橋と同じくサルタナット時代中期に属するものと考えられる。これらの遺跡群を過ぎてさらに北方へ進むと，道路に沿って南北に走る自然の岩盤地帯が横たわっており，その一部に，この岩盤を利用して構築された，堰堤らしい構築物〔W. 41〕の痕跡が認められる。また，この附近には，最近，小さな住宅地が造成されており，またその近くには古い部落がある。

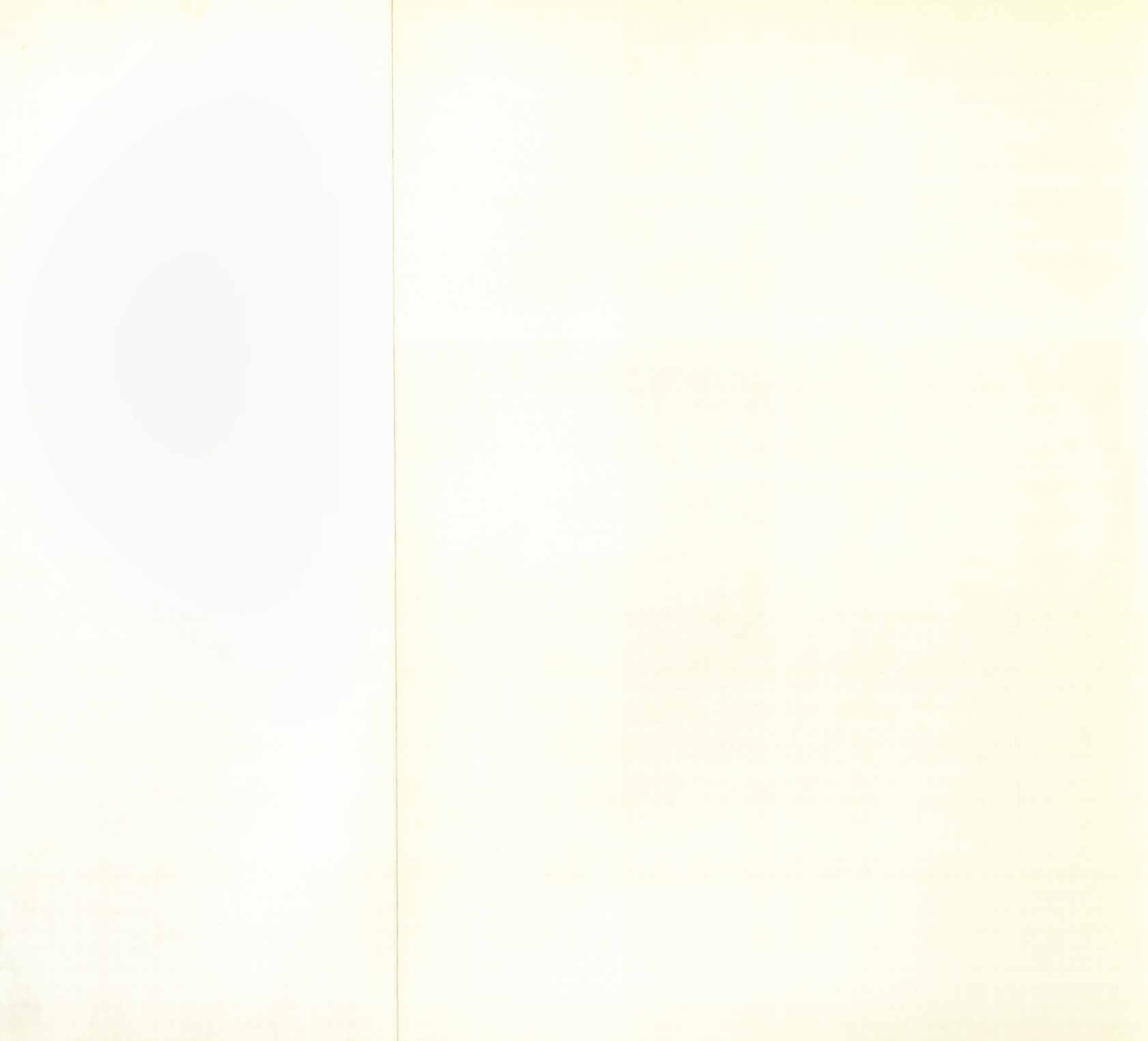


挿図 33　デリー市街地北部地域の建造物分布図
(建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による)

さて，上に述べた，橋とモスクと水門とが集合している問題の場所は，橋の下を流れる運河がジャムナー河に合する地点にほど近く，ジャムナー河の本流まで約300メートルの距離にある。この運河は，1960年2月の調査時においては，橋の附近で水流が乱れており，またその幅も広がってはいるが (挿図34)，その他の場所では幅約5メートルとなっており，とくに，西方の部分では，その両岸にきれいな護岸工事が施されていた (挿図35)。なお，調査時においては，運河の水は西から東に向って流れていた。運河にかかる橋の西方約80メートルのところには，この運河をさえぎるように，12のゲートをもち，長さ約40メートルの水門が，近年になって構築されており，現在では，運河の水は，この地点から，南の方へ分水されるようになっている。また，この新しい水門に連続して，東北の方向に低い堤防が走っているが，これもまた，近年



挿図 34　ワジーラーバードの水門周辺地形図



の構築になるもののように思われる。

さて，現在，橋の下には，上に述べたような運河がほぼ東西に流れているのであるが，もともと，この場所には，かなり古くから，すなわち，橋と同時代あるいはそれよりもっと以前から，何らかの水流が走っていたことは確かであろうと思われる。そして，それは，自然に生じた川そのままのものというよりは，むしろ，人工的に開掘された運河であったろうと推定されるのである。もし，そうとすれば，この水流は，デリー＝サルタナット時代の中期，スルターン＝フィーローズ＝シャー (Sulṭān Fīrūz Shāh) によって各地に開掘されたと伝えられる，多数の運河のなかの一つであった可能性は大きいと考えられる。


挿図 35　橋の西方地区の現状　東より


挿図 36　水門北西の平坦地　東南より

上に述べた運河を南の端とし，橋と水門ならびにその北につづく自然の岩盤地帯などを南北に結ぶ一線を東の端とする広い地域は，見渡すかぎりのひろびろとした平坦地をなしており，この場所は，農耕地としての好条件を備えているように見受けられた (挿図36)。従って，サルタナット時代中期に比定される水門の建設目的やその機能などを検討する場合，やはり，この平坦地との関連を無視することはできないように思われる。また，この水門の北につづく，自然の岩盤の上に建設された堰堤らしい構築物は，この平坦地を耕地として利用する水利計画の実施と，密接に関連して構築された水利施設と考えられるのである。

ワジーラーバードの水門については，トゥグルク朝のフィーローズ＝シャー時代の史書に，それに関連する記述がみられる。それについての詳細は，本巻第二編の第三章第三節において述べるが (120ページ参照)，ここでは，この水門にかかわる点についてだけふれておきたい。すなわち，シャムセ＝シラージュ＝アフィーフ (Shams-i Sirāj 'Afif) の『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*) の第IV部第11章の，「スルターン＝フィーローズ＝シャーが建てたさまざまの建造物について」(Dar 'Imārathāi-i Gūnāgūn kih Sulṭān Fīrūz Shāh kard) のなかの，堰堤の建設について列挙した個所に，「バンデ＝ワジーラーバード」(Band-i Wazīrābād) という名が認められるのである。[1] この「バンド」(Band) は，堰堤を意味するものと思われ，この史書にみえる「ワジーラーバードのバンド」とは，デリー地域の北端に近く，ジャムナー川を東に控えたワジーラーバード (Wazirabad) の部落の南方に，自然の地形を利用してつくられた岩盤と地溝からなる堰堤と，次節で述べるようなその延長部分とに比定し得るのではないかと思われる。もちろんワジーラーバードやワジールブ

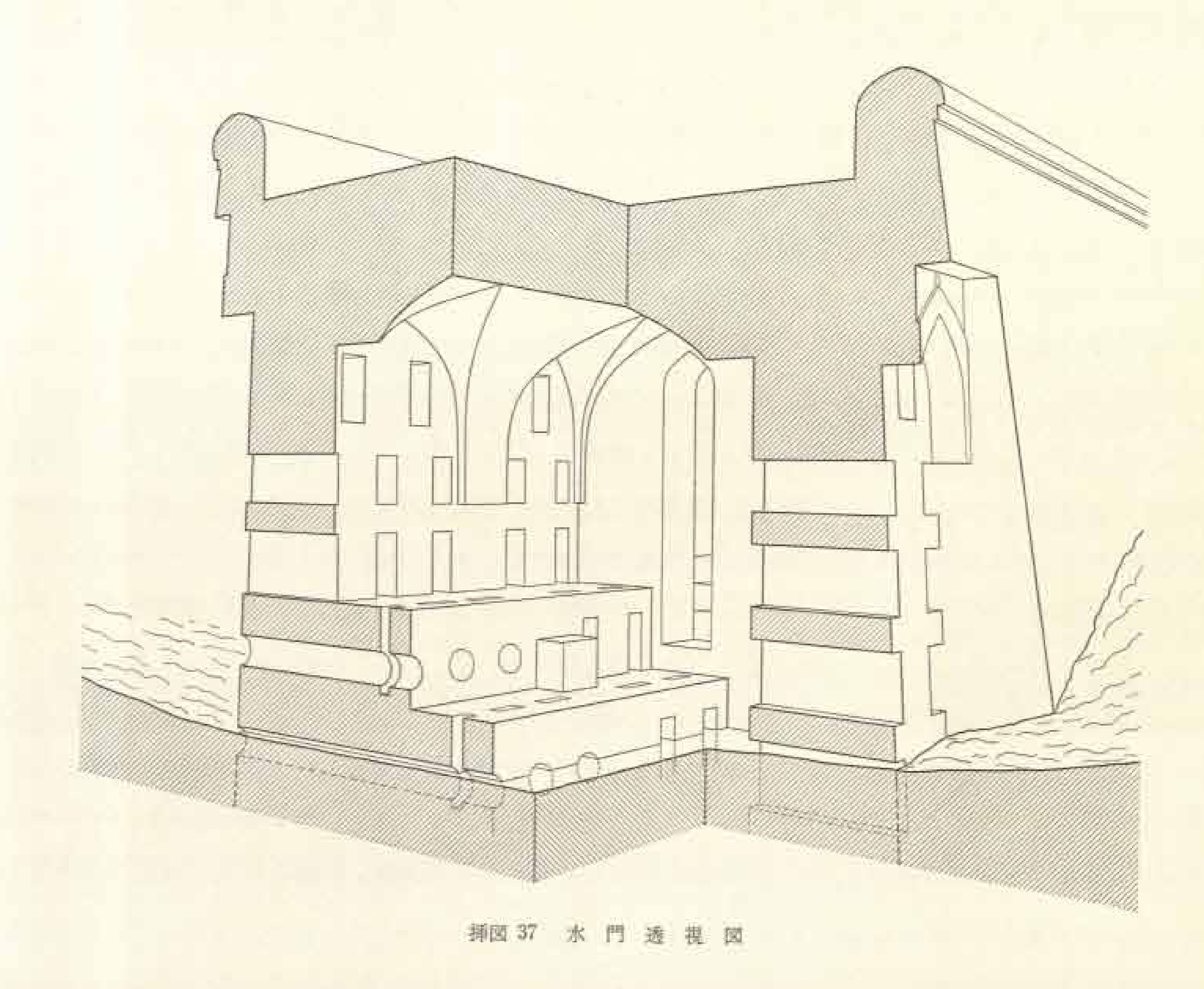
1) Shams-i Sirāj 'Afif, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, p. 330.　なお，この問題の個所のペルシア語原文は，本巻第二編の第三章第三節の叙述の際に引用している．p. 119，補注 2 を参照．

ル (Wazirpur) という地名は，北インドではそれほど珍しいものではないが，それらについての考察は，荒の論証を参照されたい[1]。もっとも，この堰堤は，全体としては，かつてどのような形態をとっていたものか明確ではないが，それについては，次節で考察されるであろう。

ところで，アフィーフをのぞけば，後代の他の文献には，問題の堰堤や水門にふれているものは，ほとんどないといってよい。サイイド＝アフマド＝ハーンすら，この興味ある水門の遺跡については，そのすぐ南方にあるフィーローズ＝シャー時代の特徴を示す橋〔W. 50〕とともに，まったく言及していないのである。近代になって，この水門にふれているのは，1910年代の遺跡調査の結果に基づいて刊行されたインド考古調査局の報告書であるが，そこでも，前記の橋の項の補註において言及されているにすぎない[2]。そこでは，この水門の効用について，水浴場 (a bathing place)，漁獲場 (a place for the catching of fish) という俗説が紹介されている。次節に述べるとおり，これらの俗説は，事実を伝えたものとはいえないであろう。

第二節　水門の構造と機能

ナジャーフガル＝ドレインと呼ばれる運河とジャムナー河との合流点の西方約300メートルの地点に，この運河に架け渡された長い橋が存在しており，その南側にはモスクと墓建築とが立ち，また，橋の北側には，その延長上に水門が構築されていることなどについては，すでに前節において述べたところである。そこで，本節においては，われわれが，「ワジーラーバード (Wazirabad) の水門」と名付けるこの水門の遺構について，



挿図 37　水門透視図

1)　荒　松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，pp. 52-57，pp. 132-134.
2)　*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. II, No. 409, p. 290.

まず，その形態と構造とを詳述し，ついで，この水門の周囲にみられる橋・運河・北方の堰堤様の構築物，さらにはその北西にひろがる平坦地，その東方を南北に流れるジャムナー河などの存在について考慮しつつ，問題の水門の機能，およびその建造目的について検討してみたい。

ワジーラーバードの水門〔W. 49〕は（挿図37），南南西から北北東に長い長方形の平面をもっており，その長さは13メートル，幅7メートルで，西面の両端に，内部への入口を含む二つの突出部分を備えている（図版51c）。東西両面の立面形は，西面に上述の突出部分がある他は，互いに同じ形式をもっており，ともに，三つのアーチからなりたっている（図版37a, b, 51a, b）。これらのアーチの内側には，5段の流水孔が穿たれており，そのうち，中央アーチの最下段と下から2段目とにある合計六つの流水孔が，直径30センチメートルの円形をなしている他は，すべて，縦長の長方形をなしている。この長方形の流水孔は，幅が30〜33センチメートル，高さは，上から2段目のものが45〜47センチメートル，その他のものが60〜63センチメートルである。西面両端の突出部分には，それぞれ，水門内部に通じる入口が設けられており，これを入って階段を降りると，室内に達することができる（図版51c）。

水門内部の部屋は，6.9メートル×2.6メートルの大きさで，この室内には，5段に配列された流水孔のうちの下の2段のものについて，水流を遮断する装置が部屋の西壁に接して設けられている（図版38, 51d）。この装置は，上から遮断板を差し込むことによって流水孔を塞ぐ形式のもので，遮断板の差し込み口は，長さ約40センチメートル，幅約10センチメートルの長方形をなしている（図版51c）。なお，その上方に位置する3段の流水孔については，水流を抑制するための装置は何もみとめられないので，上から3段目の流水孔の底面の高さを越える水については，この水門を通過して，自由に移動することができるようになっている。水門の屋上は，現在では，幅4.5メートルの舗装道路となっており，その両側に，厚さ0.6メートル，高さ0.9メートルの側壁が立っている。

この水門から南へ約15メートルのところには，幅約7メートル，長さ約44メートルの石積みの橋〔W. 50〕が，北北東から南南西の方向に走っており，この橋は，すでに述べたように，ほぼ東西に走る運河の上にまたがっている（図版36a, b；挿図34）。九つのスパンをもつこの橋は，橋脚の東西両側をバットレスによって補強されており，このバットレスは，西側においては三角形をなし，東側においてはほぼ半円形の平面をなしている。各スパンの東西両面には，それぞれ1個のアーチがあって，その下部に，ブラケットによって支えられた切石のリンテルが水平にわたされている。なお，この橋を構成する割石積みの表面は，本来，漆喰仕上げを施こされていたもので，アーチのスパンドレルは，漆喰の浮き彫りからなる大型のディスクによって装飾されていた。

このような橋と水門とのあいだの中間部分は，東西両面に割石積みをもっており，この石積みは，橋と水門とを連結している。この中間部分の東西両側には，小高い土地が土堤状に残っており，短かい階段を利用して，この場所に降りることができるようになっていた（挿図34）。なお，この中間部分と橋とは，わずかに方向がずれているように思われるが，中間部分と水門とはほぼ一直線をなしているように見受けられた。

さて，運河に沿ってその南側には，間口5間・奥行2間の礼拝堂と，ドームをいただく東門とをもつモスク〔M. 18〕があって，その前庭の中央には，十二本柱からなる四角平面の列柱式墓建築〔T. 89〕が立っている（挿図38）。この建造物は，一説によれば，シャーヘ＝アーラム（Shāh-i ʻĀlam）なる人物の墓とされているが，この人物の人となりについては何もわからない。なお，上述のモスクの礼拝堂北側の窓と，前庭北囲壁に開かれた出入り口とには，運河の河岸に降りる長い階段がとりつけられている（挿図34）。



挿図 38　ワジーラーバードのモスクと墓建築　東南より

ここで，以上述べてきた水門・橋・モスクならびに墓建築の年代について検討してみたい。まず，モスクについては，強い傾斜をもつ壁面，アーチやドームの形式，交叉ヴォールトの天井，ブラケット，柱，コーニスにみられるくり型などの形式，バトゥルメント風装飾，さらには壁面に施された漆喰文様などからみて，サルタナット時代中期の後半に属するものと考えてよいであろう。また，列柱式墓建築についても，ドームの内外に後代の補修がみられるが，モスクとほぼ同時期に比定して誤りないものと思われる。運河にかかる橋の年代については，割石積み・漆喰仕上げの状況と，リンテルを支えるブラケットの形式，ならびにアーチのスパンドレルを飾る漆喰浮き彫りのディスク文様などによって，これもまた，サルタナット中期の後半に属するものと考えたい。最後に，水門の年代については，水門それ自体に，年代を示す特徴的な部分はみられないが，橋との連続の状況からみて，これと同時期のものとするのがもっとも妥当のように思われる。

さて，このように考えてみると，ワジーラーバードの水門が構築されたサルタナット時代中期の後半には，橋・モスクおよび墓建築なども相前後して建設されたものと推定されよう。また，これらの建造物のほかにも，この地点に橋が建設された以上，この場所には，当時すでに，何らかの水流，おそらくは，人工的に開掘された運河が走っていたものと考えられる。一方，橋と水門とを北に延長する岩盤地帯の一角に構築された堰堤様の構築物〔W. 41〕も，水利計画の実施に伴う水門の建設とほぼ同時期に，その建設が企図されたものと思われる。



挿図 39　水門北方の堰堤様構築物　南より

以上のようなさまざまな事柄を考慮し，あわせて，この水門をとりまく自然的条件，すなわち，この水門の北西には広大な平坦地が広がっており（挿図36），また，水門の東方約 300 メートルのところにはジャムナー河が南北に流れている事実などをも考えあわせた場合，トゥグルカーバードの水門の機能，あるいはその役割をどのように考えたらよいであろうか。この問題について，まず，インド政府考古調査局の遺跡調査報告は，水浴場説あるいは漁獲場説などの俗説を紹介したあとで，この水門が，橋の上部構造と同じく，洪水時のジャムナー河からの過度の逆流を規制し，あるいは抑止する役割を与えられていたこと，減水した後に，その内部にたまった泥土などを除去するために，その室内に入れるような構造になっていること，などについて述べている[1]。また，荒は，1965年

1)　Archaeological Survey of India, *List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province*, Vol. II, Calcutta, 1919, p. 290.

の論文において，氾濫時のジャムナー河からの過度の逆流を抑制し，逆流による被害を防止することをこの水門の第一の目的としながらも，この他に，水門西側におこった氾濫をある期間持続させるために，水が東方ジャムナー河に向って急速に引くのを抑制すること，あるいは，ジャムナー河に流れ込む運河の水を抑止・調整することなどの機能をも併せもっていたであろうことを推定した。[1)]

さて，われわれは，ワジーラーバードの水門の機能およびその役割について検討する場合，まず，つぎの三つのことがらを明らかにしておかなければならない。その第一は，ワジーラーバードの水門は，低い水位における水のコントロールを，本来の使命としていたと考えられる事実である。すなわち，この水門では，5段に配列された流水孔のうち，下に位置する2段のもののみが水流を遮断する装置をもっていて，上から3段目の流水孔の底面のレヴェルを越える水については，この水門を自由に通過できるようになっているのである。つぎに，その第二は，水流を抑止し，あるいは水量を調整することを使命とする水門が，水の自由な移動を確保する橋と，同一水流において，左右併存のかたちで存在するのは奇妙なことである，という点である。なぜなら，このような場合，橋は，水門の存在をまったく無意味なものとしてしまうからである。そこで，われわれは，水門と橋とは，それぞれ別個の流れを引き受けるもの，あるいは，一つの流れであっても，第三の施設によって完全に分離された，別々の支流を分担するものと考えたいのである。そして第三のことがらとしては，水門と橋とにかかわる水流は，通常，西から東に向って流れていたろうということである。この問題について，水門ならびに橋の形態と構造とに推測の手掛りを求めてみると，まず，水門においては，下部の2段の流水孔にみられるコントロール装置は，室内の西壁に接して設けられており，このことは，デリーに現存するサルタナット時代の水門において，一般にコントロール装置が上流側に置かれている事実を考えあわせてみると，問題の水門においても，西側を上流側と推定させる一つの根拠となり得るもののように思われる。また，橋についてみると，橋脚に付されたバットレスは，西においては三角形をなし，東側では半円形となっていて，このことから，橋についてもまた，西側が上流側であったことが推定される。なお，1960年2月の調査においては，運河の水は，やはり，西から東に向って流れていたことをここに付け加えておきたい。しかし，ジャムナー河の氾濫時など，一時的には，上と反対に，水は東から西へ流れ込むこともあったかもしれない。

さて，上述のように，水門と橋とがそれぞれ別個の水流を受け持ち，その水流は，いずれも，通常，西から東へ流れていたと考えられるとすれば，われわれは，橋の西方にあたる運河の北岸に沿って，かつて，何らかの堤防様のものが構築されていて，この構築物は，水門と橋とをつなぐ中間石積み部分に達していたことを推定したいのである。現在，運河の北岸附近では土取り作業が行なわれているために，このような堤防の痕跡はみられないが，はるか西方の，まだ土取り作業が行なわれていないところには，大規模な堤防が現存しており，この堤防が今日みるようなかたちに仕上げられたのは近年のこととしても，その基となったものは古い時代に溯るのではないかと推定されるのである。また，水門と橋との中間部分の附近に，小高い丘が土堤状に残っているのも，上のような堤防の存在を推定する一つの根拠となっている。そこで，運河の北岸に沿って，かって，堤防が存在していたことを前提として考え得るとすれば，橋は，その南側を東西に走る運河の水流と関連しており，一方，水門は，堤防の北側にひろがる平坦地における水の動きと関連していたかもしれないと考えられるのである。もし，そうとすると，ここに，ワジーラーバードの水門と，その西

1) 荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第36冊，1965年，pp. 96–101.

北にひろがる平坦地との密接な関係が浮かび上ってくるのである。

ここで，さらに，ワジーラーバードの水門が，低い水位における流水の抑止あるいは水量の調節を使命としていることを考慮すれば，結局，この水門の第一の機能は，その西北にひろがる平坦地における貯水ということになろう。そして，運河の北岸に構築されたらしい堤防と，水門の北につづく自然の岩盤地帯，およびその一部に建設された堰堤らしい構築物とが，同じく，この平坦地における貯水と関連していたものと考えられる。そして，この水門の第二の機能は，貯えられた水を，一定期間の経過のあとで，適時，東に向って放流することにあったと思われる。このように考えられるとすれば，結局，ワジーラーバードの水門は，その西北にひろがる平坦地に，雨期のあいだ人工氾濫を起させ，これによってこの土地を肥沃な耕地とし，もって農業生産力をたかめようとする，農業目的の水門であったと結論することができよう。

しかし，この場合，問題となる一つの点は，この平坦地に人工氾濫を起させるために，いずれの場所から水を引き入れたかについてである。すでに第五章でとり扱ったトゥグルカーバード城南の堰堤城壁や，のちに第八章でとりあげられるマヒパールプルの堰堤などは，広い丘陵地帯にとり囲まれ，あるいはこの丘陵地帯に隣接する平坦地に構築されていて，明らかに，これらの丘陵地帯から平坦地に自然に流れ込む雨水を利用しているのである。これに対して，ワジーラーバードの水門西北の平坦地においては，このような，水を供給し得る大きな丘陵地帯はこの附近に存在しない。そこで，この平坦地においては，別の方法によって水を導入したと考えざるを得ないのである。この場合，一つの可能性としては，はるかデリー西方一帯に降った雨水を集めてこの平坦地の南側を東方に流れ，やがてジャムナー河に注ぐところの運河の水を，水門および橋の存在する場所よりもかなり上流の地点において，問題の平坦地に引き入れたのではないかと考えられるのである。もし，このような推測が正しいとすれば，この平坦地における人工氾濫を目的とする水利計画は，運河を利用し，これによって遠方の広い地域から運ばれてくる雨水をとり入れることを，その主要な内容としていたということができよう。

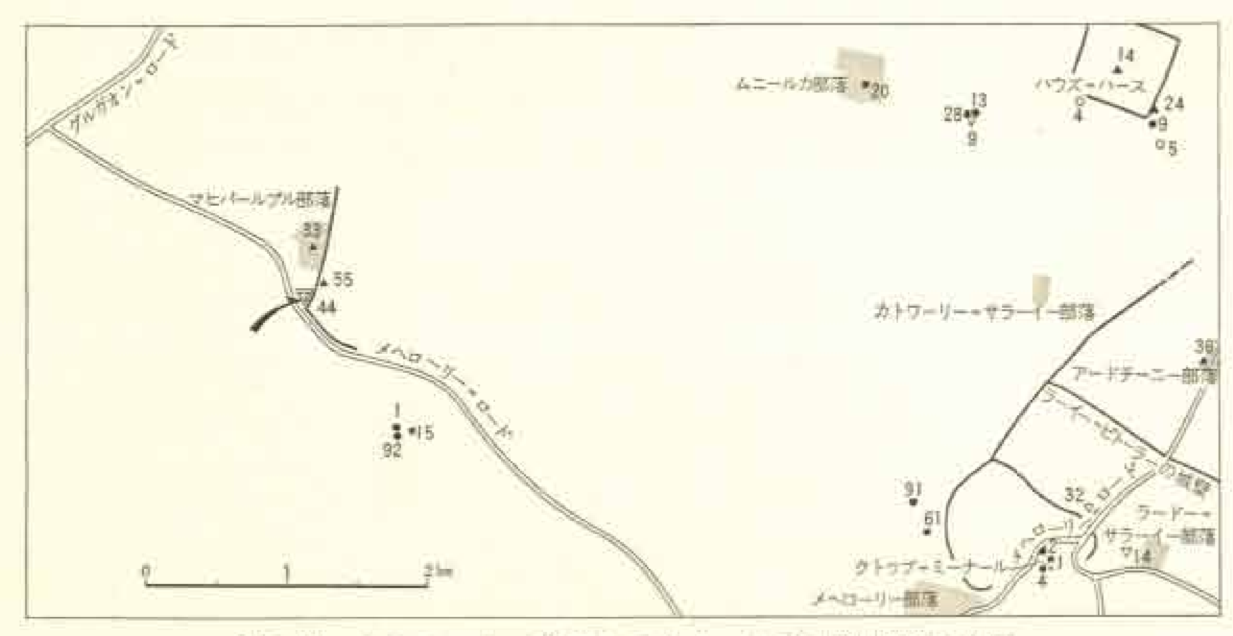
しかし，ワジーラーバードにおいては，この平坦地への取水について，次のような方法もまた可能であったかもしれないと考えられる。すなわち，この平坦地がジャムナー河にほど近いところにあることからみて，氾濫時に逆流してくるジャムナー河の水を，むしろ積極的にこの平坦地に導入したかもしれないというのである。この場合，一つには，ワジーラーバードの水門が，上部３段の流水孔について水流抑制装置をもたず，高い水位の水を自由に移動させる構造になっているので，この水門を通して，ジャムナー河の氾濫水がこの平坦地に侵入したかもしれないし，あるいは，問題の平坦地がさらに北方に延びて，ジャムナー河のもっと上流地点に接しているので，北方地点からこの平坦地に流入したかもしれないとも考えられるのである。

以上，われわれは，この平坦地への取水の問題について，運河の水を利用したろうとする説と，ジャムナー河の氾濫水を活用したかもしれないとする説の，二つの仮説を述べておいた。どちらの説がより有力であるかについて確かな答えを得るためには，さらに，雨期におけるジャムナー河の増水量や氾濫の状況，あるいは運河における流水量などについて，もっと詳細なデータを必要とするであろう。しかし，今日では，ジャムナー河の本流にはダムが建設されて水量のコントロールが行なわれており，また，運河についても，流水経路の整備・改変や，分水系の建設などが行なわれていて，サルタナット時代当時とはかなり条件が異なってしまっていると考えられる。従って，今日得られるデータをもって，ただちに，サルタナット時代のことがらについて断定を下すことは困難であろう。しかし，平坦地への取水の問題について，あえて一方の仮説をとるとすれば，運河利用説をより有力なものと考えたい。

第八章　マヒパールプルの堰堤

第一節　地理的環境と歴史的背景

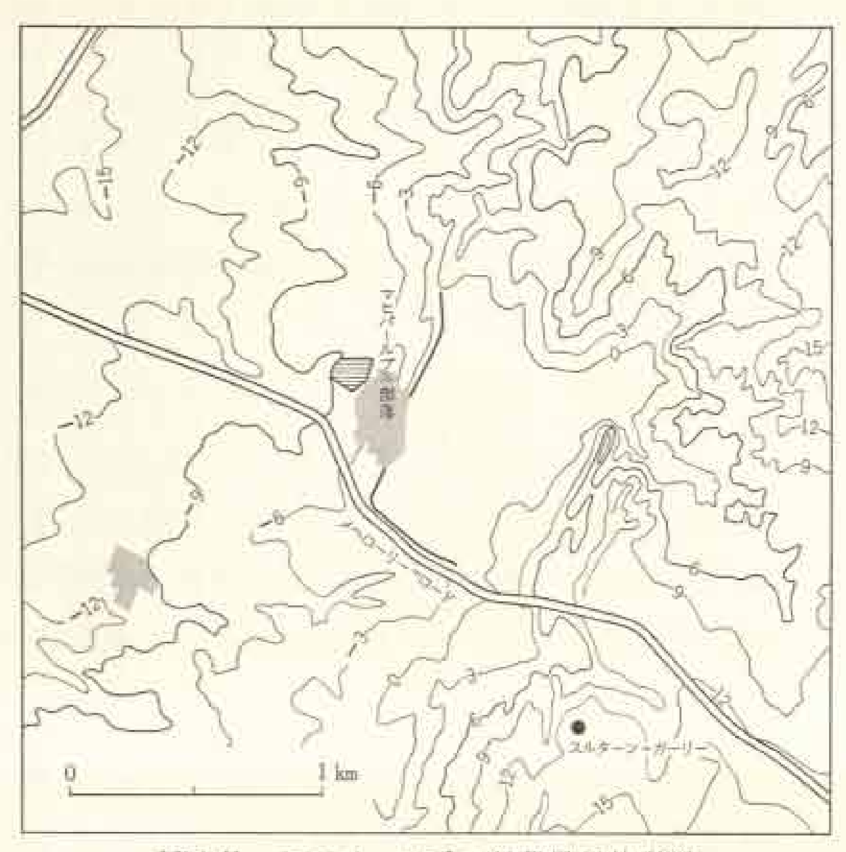
ニューデリーの市街地から，メヘローリー (Mehrauli) 部落に向って南下するメヘローリー＝ロード (Mehrauli Road) は，この部落を通り過ぎると間もなく，大きく右折してその向きを西北西に変える (挿図40)。この方向にしばらく進み，スルターン＝ガーリー (Sulṭān Ghārī) と呼ばれる著名な墓建築〔T. 1〕を含む遺跡群を左にみながら，右折点より約6キロメートル進むと，道路の北側に，マヒパールプル (Mahipalpur) の部落が展開しているのがみえる。本章で詳細にとり扱われるマヒパールプルの堰堤〔W. 44〕は，この部落の東側を



挿図 40　メヘローリー部落とマヒパールプル部落附近地図
(建造物の記号は第一巻「遺跡総目録」附図による)

ほぼ南北に走り，さらにその南端で曲折して，メヘローリー＝ロードの北側に沿って東南東にのびる，全長約1.4キロメートルにおよぶ大規模な堰堤である。

マヒパールプル部落周辺の地形についてふれると，まず，この部落の東方には，上述の堰堤によって西側と南側とをとり囲まれ，現在，農地として使用されている肥沃な平坦地が横たわっており，この平坦地の東方および北方には小高い丘陵地帯がつづいている (挿図41)。一方，マヒパールプル部落の西側は，はるか西方にひろがる広大な平地となっており，この平地は，西に向って下がる緩やかな傾斜をもっている。もともと，堰堤構築以前においては，部落東方の平坦地は，西方の広大な平地とひとつながりになっていて，後者の一部を構成していたものと考えられ，当時においては，上述の丘陵地帯に降った雨水は，まず，部落東方の平坦地に流れ込み，やがて，マヒパールプル部落を通り過ぎて，はるか西方に流れ去ったものと考えられる。しかし，部落東方の地点に堰堤が構築されるに至って，部落東方の平坦地は，その西側にひろがる平地から一応区別されるかたちとなり，また，丘陵地帯から流入する雨水は，この堰堤によって，平坦地に貯えられることとなったのである。



挿図 41　マヒパールプル部落周辺地形図
（等高線の0は海抜249メートルに当る）

この堰堤は，デリー地域に現存するサルタナット時代の堰堤の遺跡としては，建造当初の状態をもっともよく保っているものである。そのため，われわれの現地調査の詳細な研究の対象の一つとして選んだのであるが，さらに，フィーローズ＝シャー時代の史書に，この遺跡に比定し得ると推定される堰堤の名が記されているところからも，とくに注目すべき建造物と考えられるのである。マヒパールプル (Mahipalpur) という地名は，おそらくは，デリー南部に，一時，支配権力を打ち立てていたチャウハーナ＝ラージプート (Chauhāna Rājpūt) の王マヒー＝パール (Mahī Pāl) の名前からでたものと推測され，デリー地域においては，ムスリム支配の成立前にまでその歴史を溯り得る古い部落の一つであると推定される。この部落の附近には，いわゆるスルターン＝ガーリー (Sulṭān Ghārī) 〔T. 1〕，すなわち奴隷王朝初期のスルターン＝イレトゥミシュの時代に造営されたサルタナット最古の墓建築が残っている。

さて，この水利施設の建設年代の推定には，堰堤の遺跡そのものあるいは文献資料に基づく考察のほかに，マヒパールプル部落にのこる宗教施設（？）と推定される建造物〔O. 33〕が，その比定を補強する役割を果たしている（第一巻，図版159 c 参照)。この建造物が，はたして宗教施設であったかは断定することはできない。しかし，現在，部落の小学校として利用されているこの建物が，フィーローズ＝シャーの時代の建造物の諸特徴を備えていることは，この部落の近辺に残る堰堤の歴史的背景を探る一つの手がかりと考えることができよう。ちなみに，この建造物は，現在，部落民によって「マハル」(Maḥal，すなわち宮殿）と呼ばれている。

しかも，この堰堤の歴史的背景を考察するに重要な同時代の史料があるのである。すなわち，前章で紹介したシャムセ＝シラージュ＝アフィーフ (Shams-i Sirāj 'Afīf) の『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*) のなかに，このマヒパールプルの堰堤の遺跡に比定し得ると思われる「バンド」(Band) の名称が，列挙されている「バンド」のうちの三番目にあらわれているのである。すなわち，「バンデ＝マヒパールプール」(Band-i Mahipālpūr) とあるのがそれである。[1)]

すでに述べたように，現存する問題の堰堤の遺跡のおかれた環境と，現在のマヒパールプル部落の歴史的背景，さらに，同部落内に残る建造物などから推定すると，この『フィーローズ＝シャーの歴史』のなかにわずかに一個所だけ出てくる「バンデ＝マヒパールプール」，すなわち「マヒパールプールの堰堤」というのが，この現存する問題の遺跡にあたることは，ほぼまちがいないところとみてよいであろう。この比定は，さらに次節で述べるように，現存する堰堤の構築資材とその形態および構造からも確認され得るのである。ただ，マヒパールプール (Mahipālpūr) という地名は，インドでは，決して珍しい地名とはいえない。しかし，

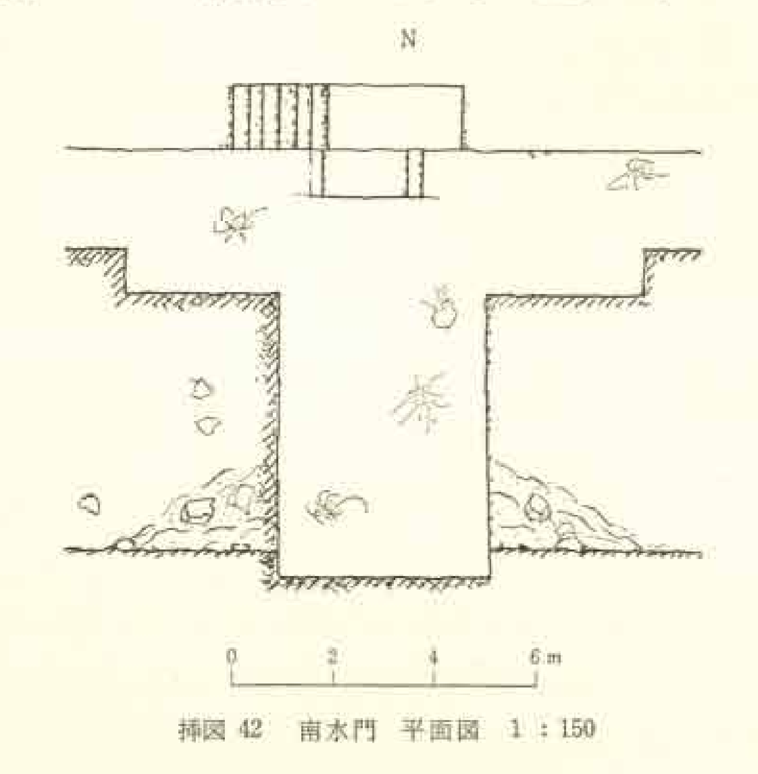
1)　Shams-i Sirāj 'Afīf, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, p. 330.　なお，そのペルシア語原文については，本巻119ページ，補注2に引用してある.

荒が考察したところによれば[1]，さまざまな条件は，この問題の堰堤を，トゥグルク朝後期のスルターン＝フィーローズ＝シャーが建設させた堰堤の一つと比定するのに，むしろ有利なのである。

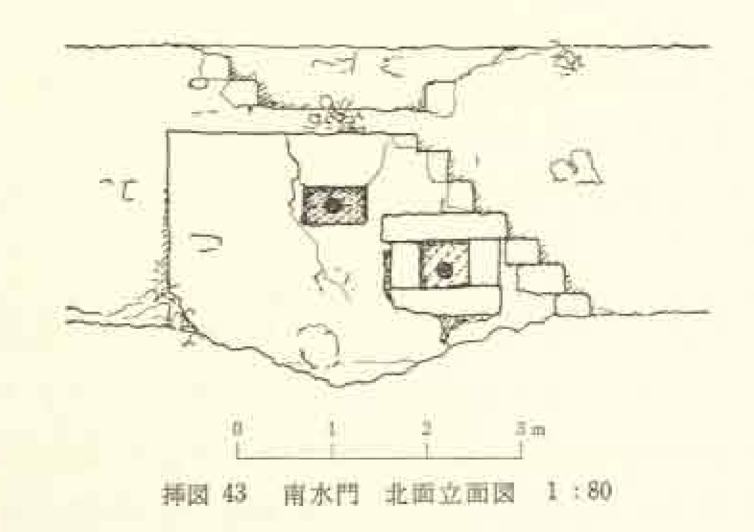
なお，このマヒパールプルの堰堤の遺跡については，近くはY.D. シャルマもそれに言及しているが，古くは，1860年代に，A.カニンガム（A.Cunningham）が，1850年のデリー考古学協会の機関紙（*Journal of Archaeological Society of Delhi*）を引用しつつ，簡単にその存在についてふれている[2]。しかし，この間，他に，この遺跡について紹介したものは少なく，まして，それについてやや詳しく紹介したものは，インド考古調査局の報告書[3]を別とすれば，他にまったくないのである。

第二節　形態・構造および機能

マヒパールプルの堰堤は，前節においてすでに述べたように，東側と北側とを丘陵地帯にとり囲まれた広い平坦地の，西側と南側とをつつむかたちに構築されたもので，全体はほぼL字型をなしており，その全長は，約1.4キロメートルにおよぶ。この堰堤は，割石と漆喰とによって構築されており，その石積みは，トゥグルク朝後半の特徴をよく示している（図版39a, b）。しかし，現在では，ところどころに崩壊個所が認められ，とくに，その中央部分は，マヒパールプル部落の住宅建設のために切断されてしまっている。また，この堰堤の北端と東端には，コンクリート製の近代の低い堤防がつづいている。



挿図 42　南水門　平面図　1：150

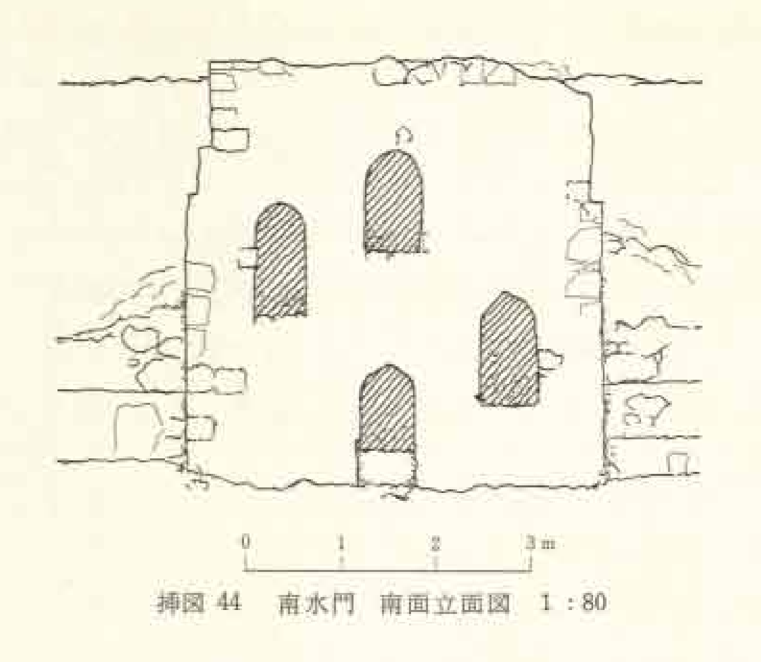


挿図 43　南水門　北面立面図　1：80

マヒパールプルの堰堤は，メヘローリー＝ロードに沿って西北西から東南東の方向に走る堰堤南部分についてみると，壁の厚さが7.7メートルあり，そのうち，平坦地に面する側（内側）の，幅1.3メートルの部分が一段高くなっており，道路に面する外側の，幅6.4メートルの部分はそれより低くつくられている（図版39a）。また，内側の一段高い部分の，平坦地の現地表面よりの高さは約3.5メートルである。なお，マヒパールプル部落の東側を南北に走る堰堤北部分は，上のような二段式の壁ではなくて，全体が同じ高さになっており，その幅は，南部分の場合よりもずっと狭い。

さて，この堰堤の北部分と南部分とにおいては，それぞれ1個所に，水門の施設が設けられている。南部分の水門は，全長が9.7メートルあり，堰堤の一段高い部分と同じレヴェルで南側に張り出す一方，北側，すなわち

1) 荒，前掲論文，pp. 131-132.
2) Y. D. Sharma, *Delhi and its Neighbourhood*, p. 23, pp. 60-61.　A. Cunningham, *Report of Operations of the Archaeological Surveyor to the Government of India during Season 1862—63*, (Vol. I), Simla, 1871, pp. 154-158
3) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. IV, No. 108, p. 58.



挿図 44　南水門　南面立面図　1：80

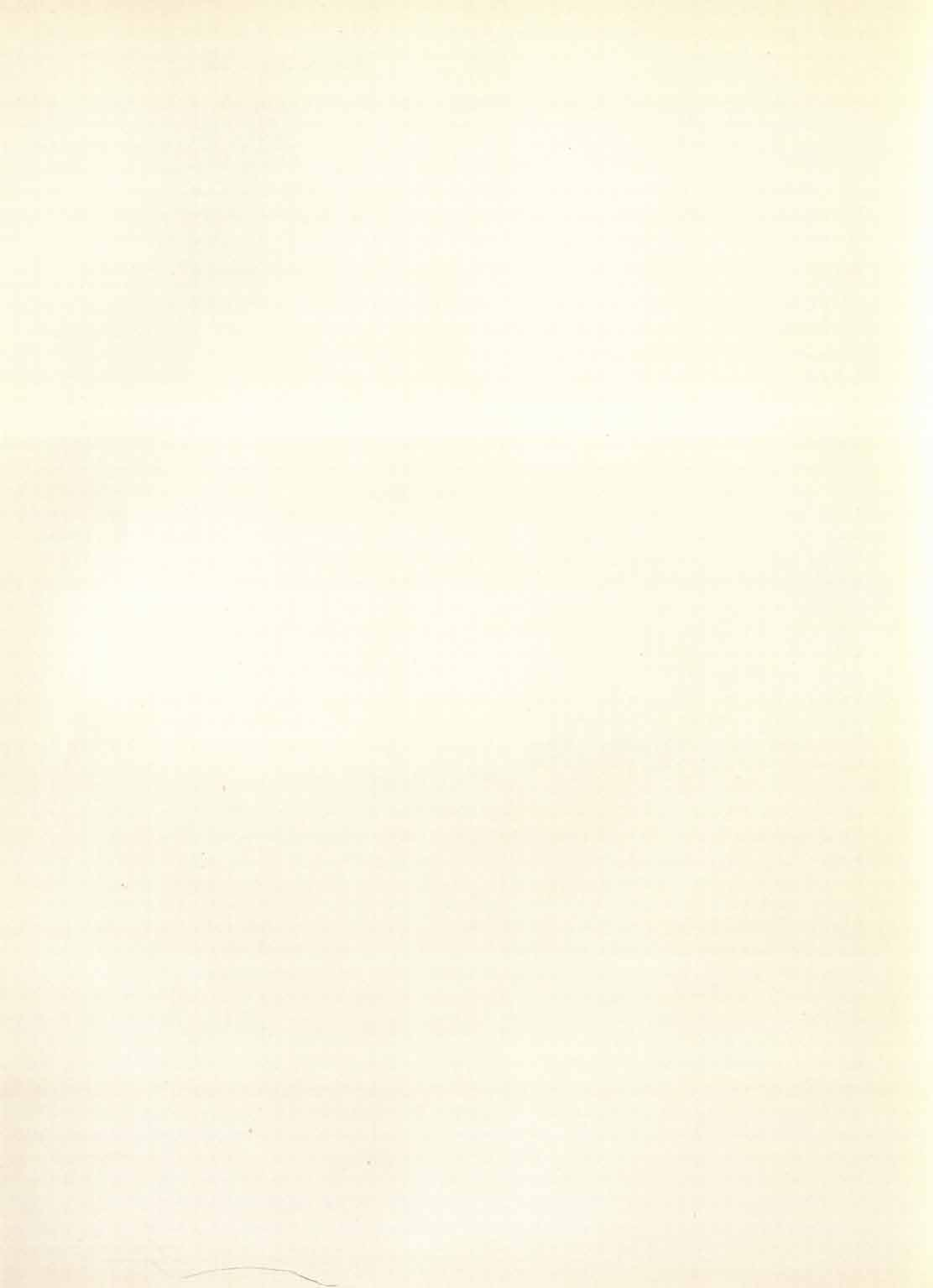
平坦地の側にも，わずかに突出したかたちのものである(挿図42)。この水門の南面は，幅が4.4メートル，高さは，現在地上に現われている部分で，4.5メートルあり，アーチ形をなすトンネル状の流水孔が，4個認められる(図版39b；挿図44)。これらの流水孔は，高さ約1.2メートル，幅約0.6メートルの大きさで，ひとつひとつが，互いに異なったレヴェルに位置している。そして，最上段と4段目の流水孔が，水門のほぼ中軸線上にあって，第2段目のものが向ってその左側に，第3段目の流水孔は向って右側に，それぞれ配列されているのは面白い。なお，これらの流水孔の，段と段とのあいだのレヴェル差は約0.8メートルである。一方，南部分の水門の北面においては，現在その下の部分が土中に埋もれてしまっているために，2個の流水孔が認められるにすぎない(挿図43)。これらの流水孔は，その位置関係からみて，南面における最上段と第2段目のものに相当すると考えられるが，その形は，南面の場合と異なって，直径約20センチメートルの円形をなしている。これら二つの円形流水孔は，いずれも，壁の表面に開口しておらず，壁面よりも深く凹んだところに口を開いているのである。すなわち，最上段の流水孔の場合には，縦42センチメートル，横62センチメートル，深さ56センチメートルの凹みがあって，その奥壁に口を開いており，第2段目のものにおいては，そのような凹みは，縦58センチメートル，横56センチメートル，深さは30センチメートルあって，その周囲を切石によって枠どりされている。このように，北面においては，いずれも，流水孔が凹みの奥に開口しているのであるが，このことは，この水門における流水のコントロールの仕方と関連しているものと考えられる。すなわち，ここにおいては，凹みの部分に板をはめ込むことによって流水孔を塞ぎ，これによって水の流れを遮断したものであろう。なお，この水門の北面には，平坦地から水門の屋上に昇るための階段が設けられている。


挿図 45　南水門北面

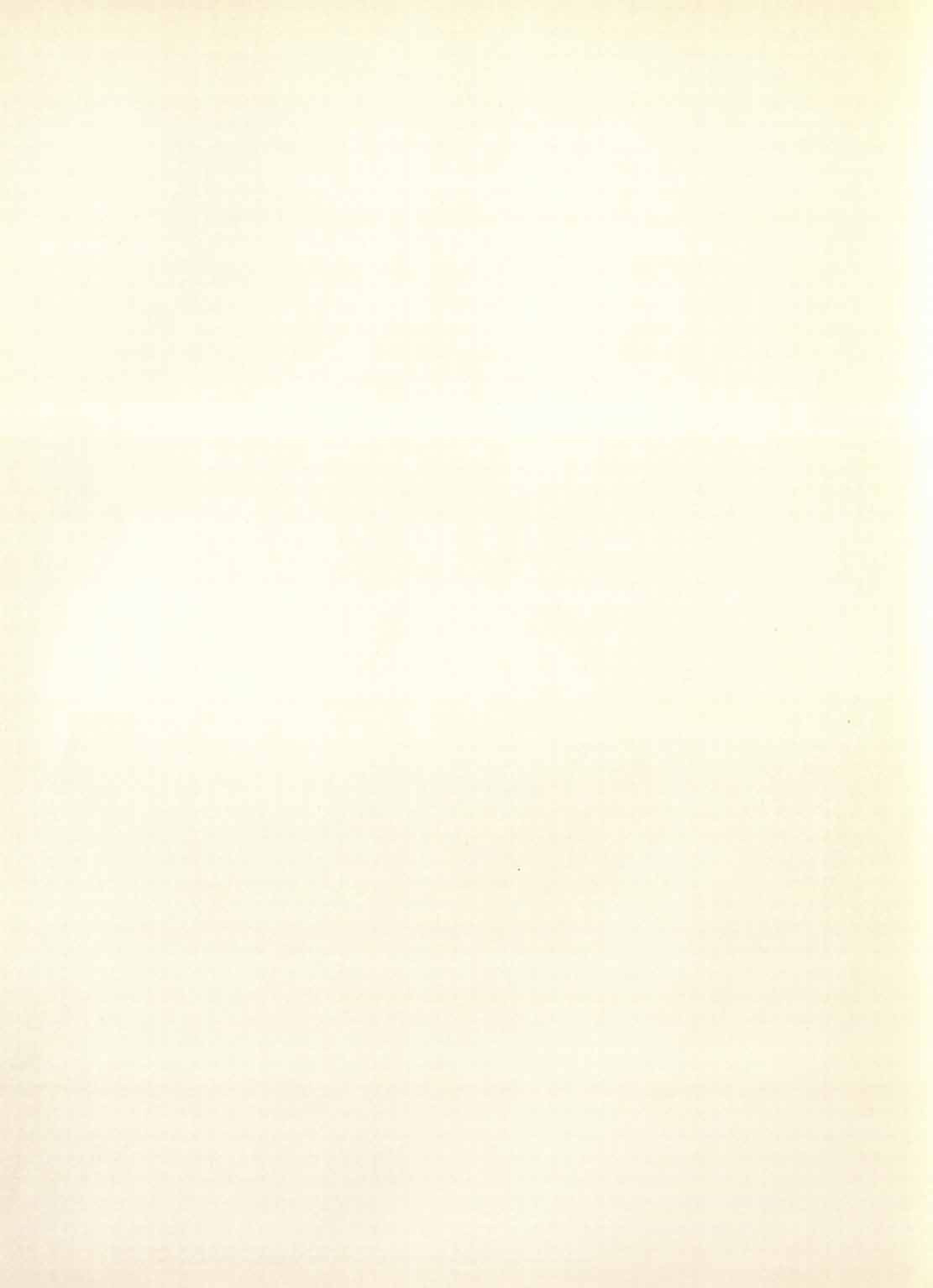
さて，堰堤の北の部分にみられるもう一つの水門は，堰堤の壁面から西へつよく張り出して設けられており，その西面には，現在，アーチ形をなすトンネル状の流水孔が2個認められる(図版39c)。しかし，これらの流水孔の下方に，さらに，別の流水孔が穿たれている可能性は十分考えられる。また，この水門の東面については，現在，深く土中に埋もれてしまっているために，その状況を知ることは難しい。おそらくは，南水門北面の場合と同様に，円形の流水孔と独特な流水コントロール装置とがあったのかもしれない。なお，マヒパールプルの堰堤には，以上の二つの水門の他に，平坦地から堰堤の頂部に昇る階段がところどころに設けられている。

以上，マヒパールプルの堰堤と，それに附設された二つの水門について，その形態と構造の概要を述べて

きた。そこで，つぎには，これらの建造物の機能あるいは役割について若干ふれることとしたい。まず，マヒパールプルの堰堤については，この建造物が，部落の東方にひろがる平坦地の西側および南側をとり囲むように構築されており，また，この平坦地は，その北方および東方に続く丘陵地帯に降った雨水が，自然に流れ込む位置にあることからみて，この堰堤の役割は，丘陵地帯に降った雨水をこの平坦地に貯え，これによってこの平坦地に人工氾濫を起させることにあったと思われる。また，この堰堤に附設された二つの水門は，雨期あけの，一定期間の貯水を経たのちに，平坦地に貯えられた水を外部に向って放出するために構築されたものである。このような平坦地における人工氾濫の目的については，これによって平坦地を肥沃な耕地につくりあげ，もって，農業生産の増大を計ることにあったと思われる。従って，マヒパールプルの堰堤は，農業振興を目的とする堰堤であったと結論づけることができよう。



第二編　総合的研究



はじめに

第一編においては，サルタナット時代の水利施設のなかから選ばれた八つの井戸・バーオリー，堰堤と水門について，形態と構造，およびその地理的位置と歴史的背景などを詳細に述べた。この第二編においては，サルタナット時代に属する水利施設の全般にわたって，その所在と現存状態，その建設目的と機能，および形態と構造について総括的な考察を試みた。また，水利施設建造の歴史のなかで特異なものとして注目される中期の堰堤と水門をめぐる水利計画をとくにとりあげ，その実態を明らかにしようと努力した。最後に，当時の政治・経済・社会・宗教と水利施設との関連を，さまざまな角度から解明することによって本編の結びとした。

第一章においては，サルタナット時代の初期・中期・末期に属するすべての水利施設を時代順に概観し，それぞれの時期における首都デリーの変遷の歴史とのかかわりについて論述した。これにつづく第二章においては，井戸とバーオリー，堰堤と水門のそれぞれについて，その形態・構造および機能にみられる差異と特徴とを比較検討した。

第三章では，サルタナット中期の水利計画の内容について，現地におけるわれわれの調査記録とサルタナット時代の文献資料とを利用して，その実態と歴史的意義とを，できる限り解明しようと努めた。すなわち，第一節および第二節においては，トゥグルク朝前期におけるトゥグルカーバード (Tughluqabad) 城南の水利計画と，ジャハーンパナー (Jahānpanāh) 南城壁を利用する水利計画とをとりあげ，現存する城壁や，堰堤・水門などの機能とメカニズムとを明らかにし，もって，それらの水利計画の目的と歴史的意義とを考究した。第三節においては，トゥグルク朝後期のフィーローズ＝シャーの水利政策を，当時の堰堤構築の実態を通じて考察し，とくに，ワジーラーバード (Wazirabad) とマヒパールプル (Mahipalpur) の堰堤をめぐる水利計画の問題点とその意義とを論じた。

最後に，第四章においては，まず，サルタナット全期を通じての水利施設の地域的分布と建設場所とについて検討し，ついで，それぞれの種類の水利建造物の時代に応じての消長をたどった。また，水利施設と政治権力との関係を，その建設者の性格を通じて論じ，さらに，宗教施設の内外に設けられた水利施設の社会的役割などを明らかにした。

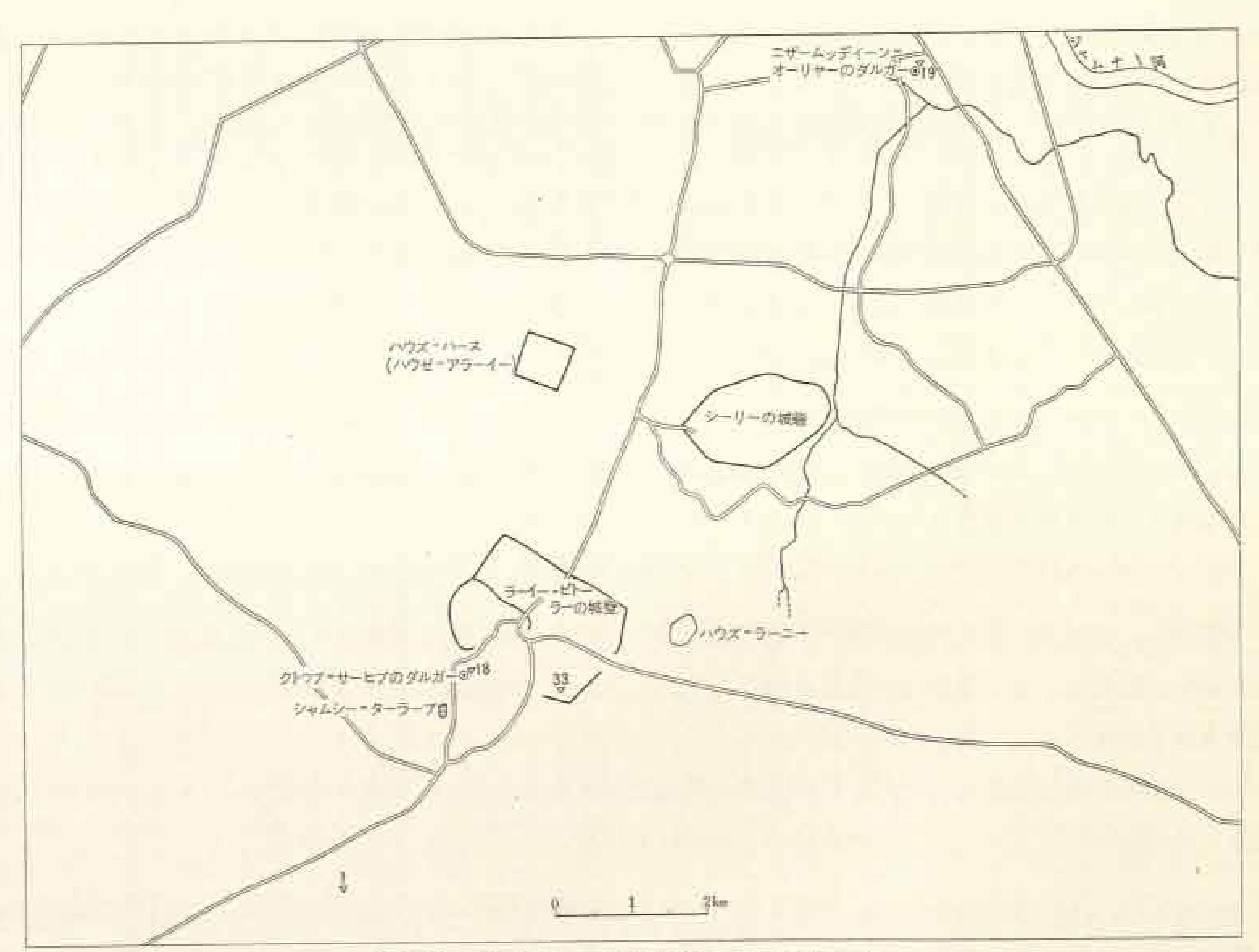
なお，本編の叙述にあたって，とくに王朝支配層による水利政策とその歴史的背景や，あるいは一部の建造物の建設年代などに関しては，同時代の文献資料の行間にみられるわずかな記述をもとにして，かなり大胆な推論を述べている場合がある。この点は，われわれの報告書が，単にせまい意味での考古学・建築史学の視点と方法によるものではなく，ひろく歴史学その他のより広い観点に立つために，あえて推論・仮説をも含めたのであって，試論として批判を請いたい。そうした意味からも，本編の叙述が，インド史のみならず，ひろく，歴史学その他の諸分野の研究者によって利用されることを望むものである。

第一章　現存するサルタナット時代の遺跡

第一節　初期の水利施設

1　初期のデリーと水利施設

デリー＝サルタナットの支配の変遷については，本報告書第一巻の総論第二章の冒頭[1]，および本巻の序論第一節において，簡単にふれておいた（4～6ページ）。このサルタナット最初の王朝たるいわゆる奴隷王朝（1206～1290A. D.）と，つぎのハルジー朝（1290～1320A. D.）とが支配権力を掌握していた時期を，われわれは，サルタナット時代の「初期」あるいは「第Ⅰ期」と呼んでいる。



挿図 46　サルタナット初期の水利施設分布図

サルタナット時代の初期に属する水利施設は，デリー地域に現存する遺跡のなかでは，その数がきわめて限られている。しかも，この時代に属すると推定される諸種の水利施設のなかで，堰堤および水門の遺跡は，われわれの現地調査に関する限りでは，まったく認められなかった。しかし，その反面，この時期の水利施設と推定される数少ない遺跡のなかには，これまでもほとんど紹介されていなかった建造物もあり，また，

1)　山本達郎・荒　松雄・月輪時房，『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』，第一巻，1967年，pp. 10–16.

われわれの研究にとってきわめて重要な遺跡も見出されたのである。

すでに本巻の序論において述べたように，トルコ系ムスリム勢力がデリーをその支配の拠点としたとき，彼らは，ヒンドゥー時代にすでに設けられていた既存の水利施設を，そのまま利用したものと思われる。遺跡として今日まで残っているスーラジュ＝クンデ（Sūraj Kuṇḍe）やアーナングプル（Anangpur）の堰堤などのように，彼らが占領したデリーの王城からかなり隔たる地点にあった水利施設はともかくとして，アーナング＝タール（Ānang Tāl）と呼ばれている貯水池や，サルタナット初期の文献『タバカーテ＝ナーシリー』（*Ṭabaqāt-i Nāṣirī*）にその名の見えるハウゼ＝ラーニー（Ḥauz-i Rānī）など，デリー城砦の内部やすぐ外側に構築されていた大貯水池は，そのまま利用したと思われる。ただ，サルタナット初期に属すると推定される水利施設の遺跡が少ないからといって，当時の支配層が，水の確保とその利用に関心を示さなかったとみるのは誤っている。のちに述べるように，この時代には，シャムシー＝ターラーブ（Shamsī Tālāb）やハウゼ＝アラーイー（Ḥauz-i ʻAlāʼī）のような大規模な貯水池の開掘をはじめ，井戸やバーオリーの建造も行なわれているのである。

2　現存する井戸とバーオリー

デリー＝サルタナット初期に属する水利施設のなかで，井戸とバーオリーは現存しているが，この時代に建造されたと推定される堰堤は，デリー地域には一つも見出されない。井戸およびバーオリーの遺跡のなかで，初期に属することが明らかなものには，つぎの三つの遺跡がある。

1）スルターンプル（Sultanpur）の円井戸〔W. 1〕

2）ガンダク＝キー＝バーオリー（Gandak kī Bāūlī）〔W. 18〕

3）ニザームッディーン（Nizamuddin）のバーオリー〔W. 19〕

このうち，スルターンプルの円井戸〔W. 1〕とガンダク＝キー＝バーオリー〔W. 18〕とは，本巻の第一編「個別的研究」のなかで，とくに詳細な研究の対象としてとりあげたので，これらの二つの遺跡に関しては，ここでその紹介をくり返すことは避けたい。ただ，スルターンプルの円井戸の場合，かつて，その内部西側に，661A. H.（1262–63A. D.）の年次をもつ歴史碑文がはめこまれていたこと（本巻23ページ挿図2, 3，および図版1bを参照），およびその碑文が，今日なお，デリーのレッド＝フォート内の博物館に保管されていることを記しておきたい。13世紀後半の建造が確認される井戸として，デリー地域に現存する水利施設のなかでもっとも重要な遺跡の一つといえるであろう。

すでに本巻の第一編第三章で紹介したように，ガンダク＝キー＝バーオリーの遺跡そのものに最近まで残存していた碑文が，歴史的内容を含んでいたものかどうかについては，今となってはわからない。しかし，いずれにせよ，すでに述べたように，このバーオリーの建造は，石積みあるいは形態・様式上の特徴などから，初期に属するものであることはまちがいない（本巻35ページ参照）。このバーオリーは，初期に属すると推定されるにもかかわらず，今日なお，その形態と構造とをよくうかがい得る点で，サルタナット時代の水利建造物として，きわめて重要な遺跡であるといえる。このバーオリーの当初の建設目的はよくわからないが，今日まで，近くのクトゥブ＝サーヒブ（Quṭb Ṣāḥib）のダルガーと関連して考えられ，利用されてきたことは興味あることである（本巻36ページ参照）。

ところで，第一巻の「遺跡総目録」においては，初期に属するバーオリーとして，ニザームッディーンのバーオリー〔W. 19〕をもあげておいた（第一巻，図版127参照）。この遺跡は，今日なお，水をたたえたまま，シ

ェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤー (Shaikh Nizām al-Dīn Auliyā) のダルガーの内部の，聖者の墓の北側に現存している。このバーオリーの水は，現在でも，このダルガーを訪れる大部分のムスリムにとって宗教的な意味をもつものと考えられており，その点で，サルタナット時代のバーオリーのなかで，今日なお実用に供されているきわめて少数の水利施設の一つということができよう。[1] サイイド＝アフマド＝ハーン (Saiyid Aḥmad Khān) は，このバーオリーの建設者をニザームッディーン＝オーリヤー自身とし，その建設の時を，聖者の生前の721A. H. 年すなわち1321A. D. 年ごろと記しているが，その建設年次は，そのまま信用できる性質のものではない。[2] このバーオリーの建設をめぐるスルターン＝ギヤースッディーン＝トゥグルク (Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Tughluq) とシェイフ＝ニザームッディーンとの争いにまつわる有名な話も，スーフィー関係の文献に伝えられてきたものであって，そのまま，歴史事実とみるわけにはいかない。[3] ここでは詳しいことは省略せざるを得ないが，バーオリー内側の壁面の石積みなどから推定すると，おそらくは，ハルジー朝時代の建造とみてよいのではなかろうか。もともと，シェイフ＝ニザームッディーンの宗教活動に関連して開掘されたものか，あるいはなんらかの世俗的な目的，すなわち日用の必要や農業用水の確保のために建設されたものが，のちに聖者の墓を中心とするダルガーの発展とともに，宗教施設の一部として包括されるようになったと推定することもできるが，決定的な結論はつけ難い。しかし，前者の可能性も多いと思う。

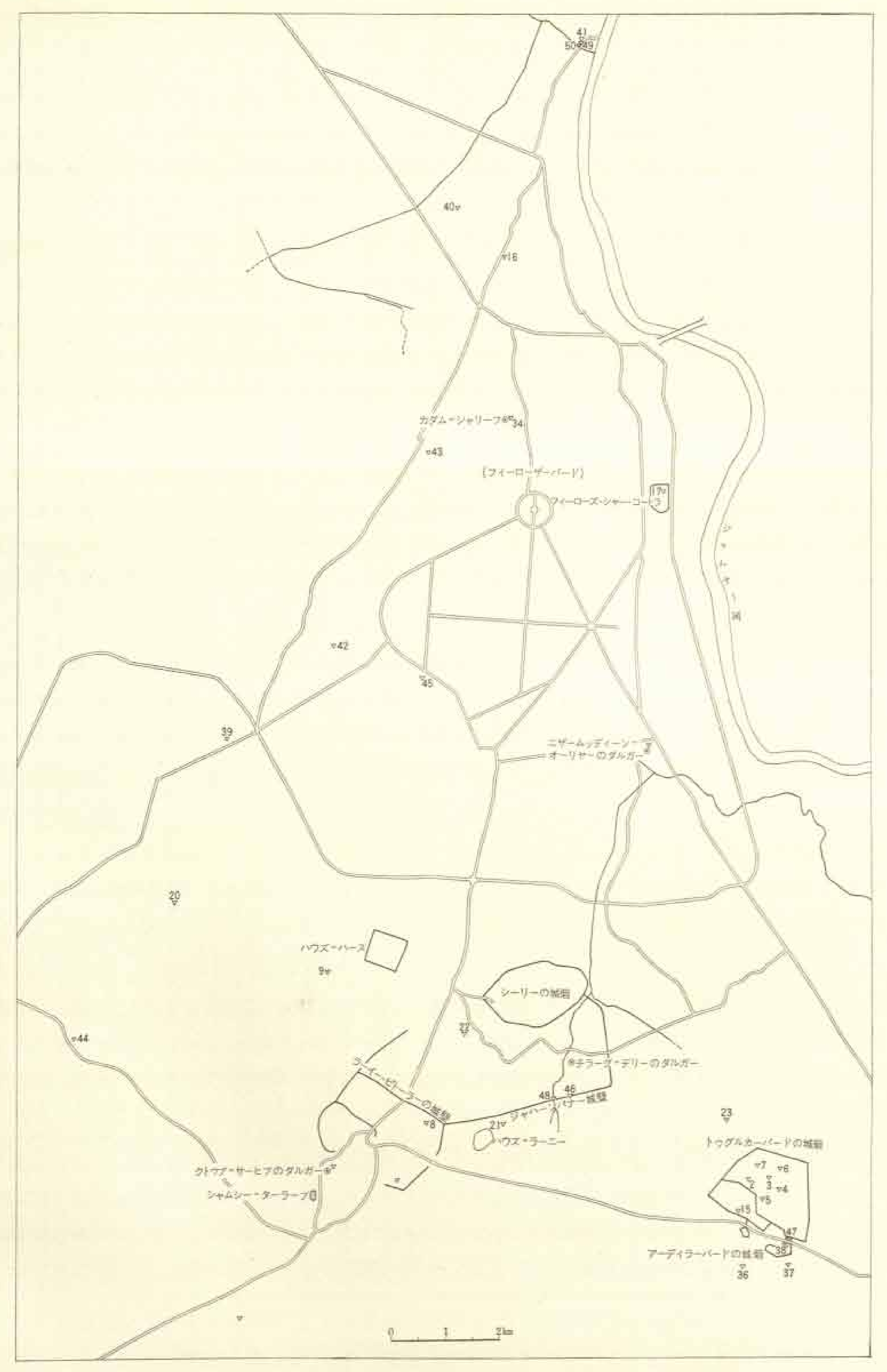
さて，デリー地域に現存するバーオリーの遺跡のなかで，その形態や資材から初期に属すると推定されるものが，上に述べたもののほかには見当らないところから考えると，初期に建造されたバーオリーは，たとえ他にあったにせよ，その数はきわめて少なかったのではないかと思われる。これに対して，井戸は，長年月のあいだには，バーオリーにくらべると消滅し易い。従って，初期に建造された井戸で，その後放棄されたまま荒廃し，結局そのあとをとどめていないものが，他にあったとみてもさしつかえあるまい。スルタールプルの円井戸は，形態と構造とからみて単純でその規模も小さいが，それが現存していることは，デリー＝サルタナット初期に，同じような井戸が，相当数，建造されたことを示す証拠であるとも考えられる。

第二節　中期の水利施設

1　中期のデリーと水利施設

われわれが本報告書のなかで用いているサルタナット「中期」あるいは「第II期」とは，ほぼトゥグルク朝 (1320～1413A. D.) の支配していた時期に当るものである。サルタナット中期の水利施設については，前節に記した初期や次節に述べる末期の場合とは異なるいくつかの問題点を指摘することができる。従って，本巻においては，サルタナット中期の水利計画とその実態について，とくに別章を設けて詳述することにした (本編第三章を参照)。サルタナット中期の水利施設に関する一つの問題は，この時期の支配層のなかに，大規模な水利計画を立案させ，デリー各地の諸種の水利建造物を建設させるために積極的な政策を採ったものがいたことにある。すなわち，トゥグルク朝の創始者たるギヤースッディーン (Sulṭān Ghiyāth al-Dīn)，彼を継いだムハンマド＝シャー (Sulṭān Muḥammad Shāh)，およびこの王朝の後期に属するフィーローズ＝シャー (Sulṭān Fīrūz Shāh) の3人のスルターンとその周辺の貴族とがそれである。これらのスルターンのうち，はじ

1)　荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第44冊，1967年，pp. 20-26.
2)　Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Lakhnau (Lucknow), Orig. ed. (1895), Pt. I, pp. 42-44 ;　Rev. ed. (1904), Pt. III, p. 28, p. 34.
3)　荒，上掲論文，pp. 23-24.



挿図 47　サルタナット中期の水利施設分布図

めの2人の人物，すなわちギヤースッディーン＝トゥグルクとムハンマド＝シャーとは，前者が創建させたトゥグルカーバード（Tughluqābād）大城市南方の地域を対象に大規模な水利計画を立案・実施させたスルターンであり，ムハンマド＝シャーは，その後，ジャハーンパナー（Jahānpanāh）と呼ばれた新城市の南城壁を巧みに利用して，ユニークな水利計画を実施させた人物と推測される。また，スルターン＝フィーローズ＝シャーは，デリーの各地に堰堤を構築させ，独特の水利政策を実施させたばかりでなく，ジャムナー川やその他の河川と関連して，西北インドの各地に運河を建設させたことでも知られている。こうして，サルタナット中期には，堰堤や運河といったような，井戸・バーオリー・貯水池などにくらべてより綿密な計画性と創意とを必要とする水利計画が立案・実施され，農業生産の振興，あるいはその結果としての民生の安定や治安の維持という支配政策の一環としての歴史的役割を果たしたのである。とくに，ムハンマド＝シャーとフィーローズ＝シャー治世の水利事業は，支配層としての奢侈生活上の諸目的もあったにせよ，度重なる遷都や農業事情の逼迫，さらに各地における反乱の続発や治安回復の必要という特殊な歴史的条件のもとで実施されたものであることを認識する必要があろう。この点に関しては，本編の第三・第四章において，その内容と歴史的意義とをさらに具体的に述べることにしている。

ところで，サルタナット中期における水利事業の内容については，わずかながらも，当時の文献の記述から，その一端を推察し得るのである。また，この時代の支配層によってつくられたさまざまな堰堤・水門の遺跡を，今日なお，デリー地域の各地に見出すことができる。しかも，この時代の堰堤のなかには，同時代の文献に記された建造物に比定することがほぼ可能と思われるものも含まれているのである。現存する遺跡をサルタナット時代の文献資料と照合し得る例は，墓建築やモスク，あるいはその他の建造物の場合でも，ほとんどなく，むしろ例外である。こうした点からみても，サルタナット中期の水利施設の遺跡は，われわれの研究にとって特異な資料的価値をもつものといえる。さらに，この時代に建設されたと推定される水利施設としては，堰堤ばかりでなく，井戸およびバーオリーについても，重要な遺跡がいくつか残っている。従って，サルタナット中期は，これらの中小規模の水利建造物の研究に関しても，きわめて重要な資料と研究対象とを提示してくれているといえるのである。

2　現存する井戸とバーオリー

サルタナット中期に属すると推定される井戸に関しては，われわれは，「遺跡総目録」において，八つの井戸と一つの特異な円井戸，および二つの大型の貯水井戸を載録しておいた。まず，それらを列挙してみよう。

1) トゥグルカーバード（Tughluqābād）城砦内の円井戸 I〔W. 2〕
2) トゥグルカーバード城砦内の円井戸 II〔W. 3〕
3) トゥグルカーバード城砦内の円井戸 III〔W. 4〕
4) トゥグルカーバード城砦内の円井戸 IV〔W. 5〕
5) トゥグルカーバード城砦内の円井戸 V〔W. 6〕
6) トゥグルカーバード城砦内の円井戸（?）VI〔W. 7〕
7) 円井戸〔W. 8〕（ラードー＝サラーイー（Lado Sarai）部落の東北方にある）
8) 円井戸〔W. 9〕（ムニールカ（Munirka）部落の東方にある）
9) フィーローズ＝シャー＝コートラ（Firoz Shah Kotla）の円井戸〔W. 17〕

10）　トゥグルカーバードの貯水井戸〔W. 15〕

11）　ピール＝ガーイブ（Pīr Ghāib）西南の井戸〔W. 16〕

このうち，W. 2からW. 7に至る六つの井戸は，いずれも，トゥグルカーバード大城市の都市区域内に荒廃した遺跡として残っているものである（第一巻，図版122b，122c；挿図47～51を参照）。八つの井戸のうちの残りの二つの円井戸〔W. 8，W. 9〕も，現在では崩壊著しい遺跡であって，いずれも，その附近に現存している墓地〔G. 8〕およびモスク〔M. 28〕との関連において，一応，中期に属すると推定したものである（第一巻，挿図52，53を参照）。

この時代のものと推定される円井戸には，他に，フィーローズ＝シャー＝コートラに残っている特異な円井戸がある。この井戸は，バーオリーと呼ばれたこともあり，中央に円型の井戸をもつ複雑な構造の建造物で，すでに，本巻の第一編第二章において，詳細に紹介・考察を行なってきた。その設けられた場所と建造物の構造・様式などからみて，明らかにトゥグルク朝後期のスルターン＝フィーローズ＝シャーの治世に，フィーローザーバード（Fīrūzābād）の宮廷区域内に建造されたものと推定される。また，「遺跡総目録」にW. 15およびW. 16として収録した二つの遺跡は，他の円井戸の場合とは異なるかなりの規模をもつ方形の井戸で，湧水に依存するとともに，雨水をも貯える目的をもって建造されたものと推定される。なお，前者が設けられたトゥグルカーバードの宮廷区域内には，その南方地区に，W. 15の貯水井戸よりもさらに格段に規模の大きい遺跡が廃墟として残っているが，貯水井戸と呼ぶにはその規模があまりにも大きすぎるので，第一巻の「遺跡総目録」には載せていない。

さて，一般に，規模の小さい井戸の遺跡には，それが建造された当初の時代を推定することが困難なものが多い。ここに，サルタナット中期に属する井戸として11にのぼる遺跡をあげることができたのは，W. 8，W. 9，およびW. 16，W. 17の場合を別にすれば，いずれも，トゥグルカーバードという，明らかにトゥグルク朝前期に造営された大城市の内部に残っているからである。トゥグルカーバード城砦内の円井戸 I〔W. 2〕，同円井戸 IV〔W. 5〕，および同円井戸 V〔W. 6〕は，いずれも，中小規模の通常の形をした円井戸であるが（第一巻，図版122b，挿図49，50参照），同じくトゥグルカーバード城砦内の都市区域に残る円井戸 II〔W. 3〕と同円井戸 III〔W. 4〕の場合には，ともにアーチ状の龕や小規模な階段を備えた，中規模の，いわば変型円井戸である（第一巻，図版122c，挿図47，48，本巻，挿図50を参照）。今日では廃墟となってしまっているためにその原型を明らかにし得ないトゥグルカーバード城砦内の円井戸 VI〔W. 7〕も，おそらくは，これらの二つの円井戸と似た形態をもつ中規模のものであったと思われる（第一巻，挿図51参照）。トゥグルカーバード大城市の内部に見出されたこれらの円井戸は，いずれも同城砦の都市区域内にあるので，その用途も，トゥグルカーバード城市に住む支配層や一般の民衆の生活に関連するものであったと思われる。これに対して，トゥグルカーバードの貯水井戸〔W. 15〕の方は，同城砦西南部の宮廷区域内の南城壁に近いところにあるもので（第一巻，図版124a参照），トゥグルク朝支配層の宮廷生活をまかなう主要な水源の一つであると同時に，宮廷区域の中央部に残る貯水池や南部地区の大貯水機構（？）などとともに，非常時における城砦・宮廷の防衛の場合の貯水施設の役割を果たすものとして構築されたものであろう。

ピール＝ガーイブ西南の井戸と呼ぶ建造物〔W. 16〕は，フィーローズ＝シャー時代の建造物と推定されるピール＝ガーイブ〔O. 13〕と関連して建設された貯水井戸と推定してよいであろう（第一巻，図版124b）。この一辺約13メートルに及ぶ，ほぼ正方形の井戸は，その形態と構造とにおいて，サルタナット時代の水利施設としては，フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸〔W. 17〕や第 III 期に属するラードー＝サラーイーの円

井戸〔W. 14〕などとともに，きわめて特異なものである。この貯水井戸も，バーオリーと呼ばれていたこともあったらしい。その設けられた場所の特殊性やその変った構造とから，さまざまな伝承も生み出された。詳細は省かざるを得ないが，地下に設けられた坑道の存在とそれにまつわる話は，すでに述べたフィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸の場合とともに，われわれの興味をそそる。[1)]

中期に属すると推定した他の二つの円井戸〔W. 8, W. 9〕については，形態や構造からではなく，すでに述べたように，いずれもその附近の環境から推測したものである。しかし，この二つの井戸に関する限りは，別の時代に，農業用水または他の用途のために開掘されたものであるかもしれない。

さて，バーオリーに関しては，第II期に属するものとして，「遺跡総目録」にはつぎの五つを収録しておいた。

1）　モラーダーバード＝パハーリー (Moradabad Pahari) のバーオリー〔W. 20〕

2）　ハウズ＝ラーニー (Hanz Rani) 東南のバーオリー〔W. 21〕

3）　チョール＝ミーナール (Chor Mīnār) 南方のバーオリー〔W. 22〕

4）　トゥグルカーバード西北のバーオリー〔W. 23〕

5）　カダム＝シャリーフ (Qadam Sharīf) のバーオリー〔W. 34〕

この五つのバーオリーのなかで，碑文があるものは皆無である。また，同時代の史書や後代の文献に言及されているものも一つとしてない。これらのバーオリーのうち，W. 20 と W. 34 の二つの遺跡は，インド考古調査局（ASI）の1910年代の調査に基づく報告書に，それぞれ，一項目として採録されており，W. 22 については，その存在の事実のみがわずかに言及されている[2)]（第一巻，図版128，挿図59，図版129bを参照）。しかしながら，ハウズ＝ラーニー東南のバーオリー〔W. 21〕とトゥグルカーバード西北のバーオリー〔W. 23〕の二つの遺跡については，ASI の報告書を含めて，それについて報告し，またはその存在の事実に言及した報告書や論考は，われわれの知る限りでは，これまで一つもない（第一巻，図版129a，129c 参照）。

サルタナット中期に属すると思われるこれらのバーオリーは，それぞれ，その存在する場所がデリーの各地に分散している（本巻89ページ，挿図47参照）。しかも，その大部分が，ほとんど埋没してしまっているか，あるいは崩壊が著しい。しかし，今日なお残存している部分の構造と様式，あるいは構築資材などの特徴からみて，これらのバーオリーが，サルタナット中期に属するものであることは，ほぼ疑いをいれない。ただ，カダム＝シャリーフのバーオリー〔W. 34〕のみは，ASI の報告書には比較的詳しく叙述されているにもかかわらず，現在では，井戸の部分の上部外縁を形づくっていたと思われる円弧の一部をなす数個の石が認められるにすぎない。

上に紹介した五つの遺跡のうち，モラーダーバード＝パハーリーのバーオリー〔W. 20〕のみは，南北に長い長方形の大型のバーオリーである。しかし，他は，それほど大規模なものとはいえない。現在，これらの遺跡が残っている附近の状況から，その建設目的や用途を推測することは難しいが，カダム＝シャリーフのバーオリー〔W. 34〕，モラーダーバード＝パハーリーのバーオリー〔W. 20〕が，ともに，その近傍の宗教施設あるいは聚落のために用いられたものであることが推定されるほかは，建設場所とその環境とから推して，おそらくは，近隣部落民の日用の必要を主とし，あわせて農業用水を得ることを主な目的としたものとみて

1）Archaeological Survey of India, *List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province*, 4 volumes, Calcutta, 1915–22, Vol. II, No. 402, p. 280.

2）*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. IV, No. 138, p. 70 ; Vol. II, No. 354, p. 246 ; cf. Vol. III, No. 289, p. 167.

よいのではあるまいか。[1)]

3　現存する堰堤と水門

サルタナット時代の水利施設のなかでもっとも重要な堰堤については，第一巻の「遺跡総目録」に収録したもののすべてが，サルタナット中期に構築されたものと推定される。この事実は，少なくともデリー地域に現存する遺跡からみる限りでは，サルタナット初期あるいは末期には，堰堤の建設はほとんど行なわれなかったのではないかということを推測させる。

サルタナット中期に属すると推定される堰堤は，トゥグルク朝前期に構築されたものと，トゥグルク朝後期に属するものとに分けることができる。つぎにこれらの堰堤を列挙してみよう。なお，水門は，多くの場合，堰堤の一ないしは数個所に附設されているのが通例であり，「遺跡総目録」のなかで独立した項目として載録したもののみをあげておく。

I　トゥグルク朝前期に属すると推定される堰堤と水門

1)　トゥグルカーバードの堰堤 I〔W. 36〕
2)　トゥグルカーバードの堰堤 II〔W. 37〕
3)　アーディラーバード（ʻĀdilābād）の堰堤城壁〔W. 38〕
4)　ジャハーンパナー（Jahānpanāh）南城壁の堰堤〔W. 46〕
5)　トゥグルカーバードの水門〔W. 47〕
6)　サート＝プラ（Sāt Pulah）〔W. 48〕

II　トゥグルク朝後期に属すると推定される堰堤と水門

1)　ステーション＝ロード（Station Road）の堰堤〔W. 39〕
2)　デリー大学構内の堰堤〔W. 40〕
3)　ワジーラーバード（Wazirabad）の堰堤〔W. 41〕
4)　マールチャ（Malcha）の堰堤〔W. 42〕
5)　ボーリー＝バティヤーリー＝カー＝マハル（Būlī Bhatiyārī kā Maḥal）の堰堤〔W. 43〕
6)　マヒパールプル（Mahipalpur）の堰堤〔W. 44〕
7)　ネルー＝ハウス（Nehru House）庭内の堰堤〔W. 45〕
8)　ワジーラーバード（Wazirabad）の水門〔W. 49〕

これらの堰堤および水門に関しては，かつて，荒が，それぞれの遺跡の現状の簡単な紹介・解説とともに，これらの堰堤および水門に関する文献上の諸問題，その他さまざまな歴史的問題点に関して長文の論考を公けにした。[2)] また，上記の堰堤および水門のうち，トゥグルカーバードの水門〔W. 47〕，サート＝プラ〔W. 48〕，およびワジーラーバードの水門〔W. 49〕の三つの遺跡と，マヒパールプルの堰堤〔W. 44〕については，本巻の第一編「個別的研究」において，すでに詳述したところである。トゥグルカーバードの堰堤 I〔W. 36〕，同堰堤 II〔W. 37〕，およびアーディラーバードの堰堤城壁〔W. 38〕，さらに，ジャハーンパナー南城壁の堰堤〔W. 46〕については，「サルタナット中期の水利計画の内容とその意義」と題する第三章において，その機能と建設目的あるいは堰堤構築の歴史的背景などについて考察を行なっている。また，マヒパールプルの堰堤ととも

1)　これらのバーオリーについては，荒，前掲論文，pp. 26-35, pp. 67-70 を参照.
2)　荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第36冊，1965年，pp. 1-220.

に，スルターン＝フィーローズ＝シャーの治世に建設されたと推定される堰堤と水門〔W. 39, W. 40, W. 41, W. 42, W. 43, W. 45, W49〕については，第三章第三節「トゥグルク朝後期における水利政策」のなかで言及しておいた。従って，個々の建造物についての紹介は，ここでは省略したい。

ところで，トゥグルク朝の前期に建造されたと推定される堰堤と水門とが，あるいはトゥグルカーバード大城市の南城壁の存在を前提として構築され，あるいはジャハーンパナーの南城壁を利用して建造されたものであることに，まず注目したい。一方，トゥグルク朝後期に建造された堰堤は，いわゆるデリー＝リッジとその周辺の地形を利用しつつ，南北の広大な地域にわたって散在して設けられているのである。同じトゥグルク朝の支配層によって構築されたとはいえ，その前期と後期とにおいては，堰堤それ自体の構造，その構築の直接の原因や目的，あるいはその水利政策のねらいなどの点において，かなりのちがいがあったことを認めざるを得ない。たとえば，トゥグルカーバード南方地域の堰堤が，支配権力そのものの存在に密着するものとして構築されたのに対し，後期の堰堤には，スルターンの権力の中央拠点とは直接関連のない場において，一般の被支配層の農業生産の振興を主要な目的の一つとして建設されたものと推定されるのである。さらに，ムハンマド＝シャー治世の後半に建設されたと推定されるジャハーンパナーの場合も，のちに述べるように，もし当時の農業危機を打開するという権力の要請に基づいて行なわれたものとすれば，その水利計画自体，特異な歴史的意味をもつものとして位置づけることができるのである。

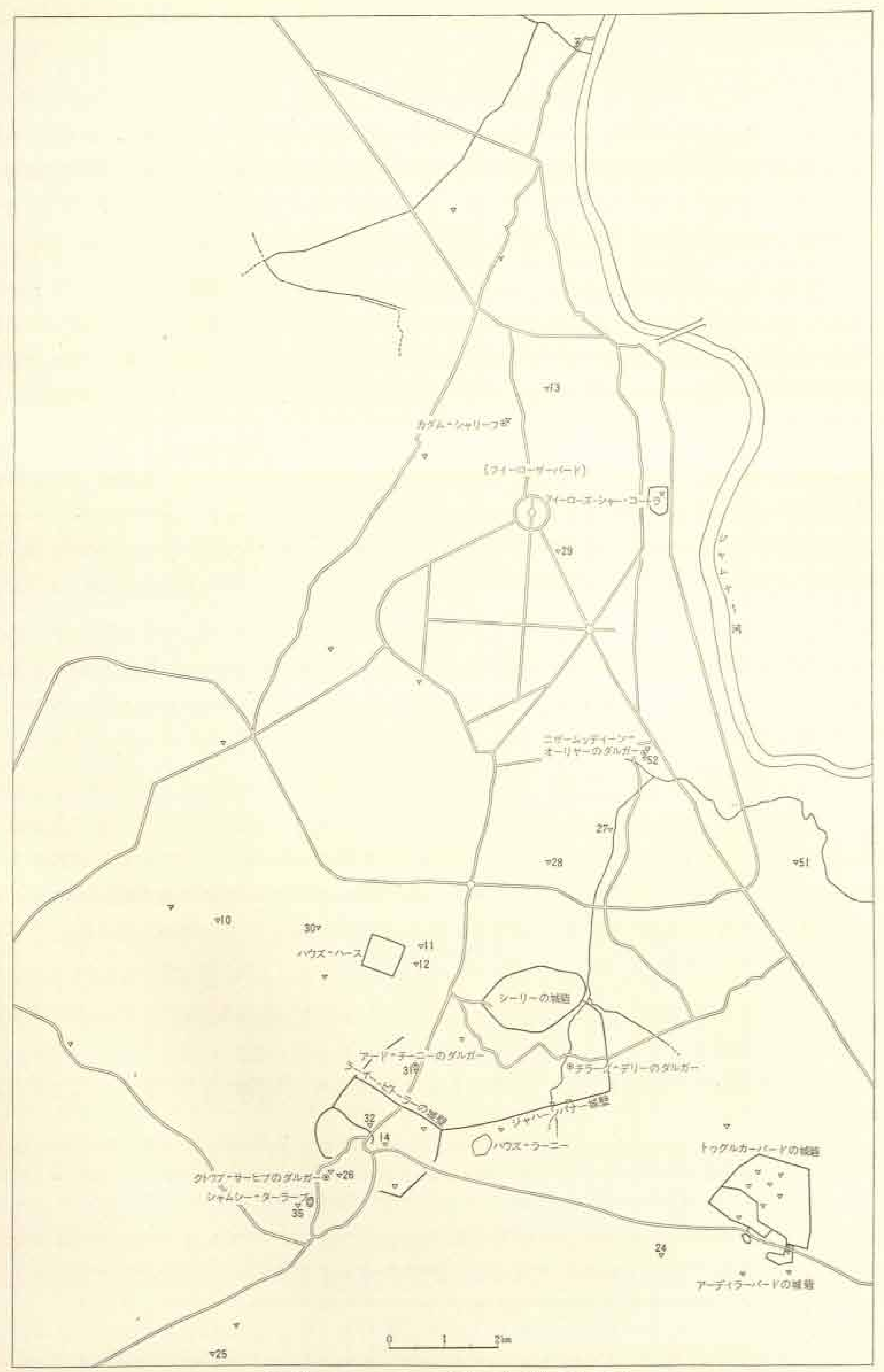
ところで，本巻ではほとんどふれられないいくつかの堰堤について，この際，若干のことがらを述べておきたい。トゥグルク朝後期に属する堰堤のうち，マールチャの堰堤〔W. 42〕は，第一編第七章で言及したワジーラーバードの堰堤の一部とともに，デリー＝リッジのなかの自然の岩盤地帯の特殊な地形を，堰堤そのものに直接利用した少数の例とみられることである[1]。一方，ステーション＝ロードの堰堤〔W. 39〕，デリー大学構内の堰堤〔W. 40〕，ボーリー＝バティヤーリー＝カ＝マハルの堰堤〔W. 43〕，およびネルー＝ハウス庭内の堰堤〔W. 45〕は，いずれも，砕石とモルタールとを用いて構築した堰堤で，高さや幅の点からみても，それほどの規模のものとはいい難いが，いずれも，文字通りの人工の築堤である。ただし，遺跡の現状からは，それらが，本来どれほどの長さや規模をもっていたものかを推定することは，ほとんど不可能である。このなかでは，ステーション＝ロードの堰堤が，全体としてはもっともよく残っているといえようが，それにしても，本巻第八章で詳細に紹介したマヒパールプルの堰堤〔W. 44〕の遺跡とくらべれば，現存状態は，けっしてよいとはいえない。これらの堰堤には，宮廷建造物あるいはそれに類した不明の建物が附設されているものがあるが，それらは，それぞれの堰堤の年代の推定に際しての重要な根拠となると同時に，堰堤構築の目的や用途を推定する場合にも役立つものである[2]。

第三節　末期の水利施設

1　末期のデリーと水利施設

サルタナット末期とは，サイイド朝（1414～1451A. D.）とそれにつづくローディー朝（1451～1526 A. D.）にかけての時期をいうものである。この時期に建設されたと思われるデリー地域現存の水利施設は，中期のそれにくらべると，遺跡の種類にも若干の差異が認められる。その主な点は，サルタナット中期につづいて建設

1）荒，前掲論文，pp. 57-59，pp. 132-134.
2）これらの堰堤については，荒，前掲論文，pp. 37-41（W. 39），pp. 47-49(W. 40)，pp. 41-47（W. 43），pp. 49-52(W. 45)，および荒論文に附せられた，山本達郎の「追記」，pp. 214-215（W. 45）などを参照.



挿図 48　サルタナット末期の水利施設分布図

された堰堤が，ほとんど見出されないということである。デリー地域には，中期よりあとに建造されたとみられる堰堤が，いくつか存在しているが，現地調査の結果では，そのいずれをもサルタナット末期に属するものと断定し得る根拠を見出すことはできなかった。[1)]いいかえれば，トゥグルク朝時代に盛行した堰堤は，サイイドおよびローディー両朝期には，その建造がほとんど行なわれなくなったものと推定されるのである。このことは，トゥグルク朝の支配層とサルタナット末期の支配層の経済・社会政策の差異に，その理由の一端を見出し得るかもしれない。サイイド朝はもちろん，ローディー朝も，必ずしも強力な王朝権力を実現したとはいえず，たとえ，シカンダル＝ローディー（Sikandar Lūdhī）のように，建造物の新築や補修に大きな関心を寄せたスルターンがいたとしても，モスクや墓建築と異なる堰堤の如き構築物には，スルターン＝フィーローズの場合ほどの関心は示し得なかったのではあるまいか。また，この時期には，デリーにおける新しい城市の建設も，ハルジー・トゥグルク両朝の場合のようには実現されず，支配層も，在来の王城や宮廷を利用していたものと思われる（5ページ参照）。このような情勢とも関連して，この時期には，中央権力が直接に関与することの多かった堰堤などの水利施設の建設はほとんど行なわれず，弱小な中央権力の間隙に割拠しはじめてきた地方権力者や地主層，あるいは宗教施設に関連する井戸やバーオリーの如き，いわば中小水利施設の建設が目立ったとみてよいであろう。

さて，サルタナット末期のものと推定される井戸やバーオリーについては，今日，なお相当数の遺跡が残っている。とくに井戸のなかには，歴史碑文をもっていたものがあり，それによって建造の年次を明らかにし得る遺跡もあるのである。しかし，この時期に属するものと推定されるバーオリーのなかには，歴史碑文をもつものは，他の時代と同じく皆無である。ただ，ラージョーン＝キ＝バーイーン〔W. 26〕のように，それに隣接するモスクの前庭に立つ墓建築に残る歴史碑文によって，バーオリー自体の建造の年次を間接的に推定し得る場合も認められる。

2　現存する井戸とバーオリー

第一巻の「遺跡総目録」のなかで，サルタナット末期のものと推定される井戸として，五つの遺跡をあげておいた。また，この時期に建設されたものと推定されるバーオリーについては九つの遺跡を収録し，さらに，やや明確さを欠く一つの遺跡をも加えておいた。これらの井戸とバーオリーの遺跡は，いずれも，われわれが現地でその存在を確認し得たもののみで，インド考古調査局による4巻の報告書に載録されているもので，諸般の事情から現地において確認し得なかったものは含まれていない。それについては，第一巻の附録2を参照されたい。[2)]

まず，井戸の遺跡について紹介しておこう。第一巻の「遺跡総目録」に収録した五つの井戸は，つぎの如くである。

1）円井戸〔W. 10〕

2）チャーヘ＝ハース（Chāh-i Khāṣ）と呼ばれていた円井戸〔W. 11〕

3）グリーン＝パーク（Green Park）の円井戸〔W. 12〕

4）ラール＝クワーン（Lāl Kuwān）として知られる井戸〔W. 13〕

5）ラードー＝サラーイー（Lado Sarai）の円井戸〔W. 14〕

1） 荒，前掲論文，pp. 60–65.
2） 『デリー』，第一巻，p. 117.

サルタナット末期に建設されたと推定されるこれらの五つの井戸には，その原形を完全に残しているものは一つもない。しかし，これらの井戸のうちの二つには，かつて歴史碑文が残っていたことが報告されており，また，他の一つの場合は，歴史碑文をもつ附近の建造物によって，ある程度，井戸の建設年代を想定することができるのである。

さて，歴史碑文をもっていた井戸は，チャーヘ＝ハースと呼ばれた円井戸〔W.11〕とラードー＝サラーイーの円井戸〔W.14〕との二つである。このうち，前者は，グリーン＝パーク住宅地の西方にあり（第一巻，図版123a参照），現在では，わずかに北側の石積みの一部を残しているにすぎない。円井戸の外側は，十二角形をなしていたらしく，残存部分から推定すると，その規模は，かなりのものであったと思われる。この井戸には，大理石の碑文が残っていて，ローディー朝のシカンダル＝シャー（Sikandar Shāh）の名と，915A.H.年のラジャブ（Rajab）月11日（すなわち1509年10月25日）の日付を記している[1]。この碑文の内容からみると，この井戸は，スルターン＝シカンダル＝シャーによって建造されたと思われるのであるが，碑文中に，アーミル＝ベーグ＝ハーニー＝ムナッワル（'Āmil Bīg Khānī Munawwar）という高官の名も記されているところからみると，実際には，この人物によって建てられたものと推定する方が自然であろう。この歴史碑文は，現在なお，レッド＝フォート内の同館内に保存されている[2]。

ラードー＝サラーイーの円井戸〔W.14〕の遺跡は，クトゥブ城域東方のラードー＝サラーイー部落の西方約100メートルの地点，クトゥブ・バーダルプル＝ロードのすぐ北側に残っている（第一巻，図版123c参照）。この井戸は，直径約15メートルに及ぶ円形の大規模なもので，直径約5メートルの八弁形の井戸の部分を中心として，その周辺に通路をめぐらすという特異な形態の建造物であり（本巻102ページ参照），ASIの報告書は，バーオリー（Baoli）と呼んでいる。この円井戸にも歴史碑文が残っていたが，磨滅著しく，読解し難い。しかし，前記のチャーヘ＝ハースと呼ばれた円井戸〔W.11〕よりは早い時代のものらしく，ASIの報告書では，804 A.H.年と読んでいるが[3]，これは，サイイド朝のムハンマド＝シャー（Muhammad Shāh）の治世に当る。この歴史碑文も，デリー考古博物館に移管され，現在なお，レッド＝フォート内の同博物館に保管されている[4]。ここに紹介してきた二つの円井戸は，歴史碑文の存在によってその建設年代をほぼ推定し得る点で，末期の水利施設としては重要な遺跡というべきであろう。

さて，すでにふれたムニールカ部落の西北西に現存する他の一つの円井戸〔W.10〕は，その南方約15メートルの地点にある不明の建造物〔O.47〕に残る歴史碑文の内容から推すと，それと関係のある遺跡と考えられるものである（第一巻，図版162cを参照）。この不明の建造物の外壁に残る漆喰の歴史碑文には，ローディー朝のシカンダル＝シャーの名と，906 A.H.（1500-01A.D.）の年次，および建設者と思われるムバーラク＝ハーン＝ヌーハーニー（Mubārak Khān Nūhānī）の名などが記されている。この碑文のなかに，「チャー」（Chāh），すな

1) Zafar Hasan, Inscriptions of Sikandar Shāh Lodi in Dehli, *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1919-20, Calcutta, 1924, pp. 8-9, Plate IV (b); *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, No. 332, p. 189.

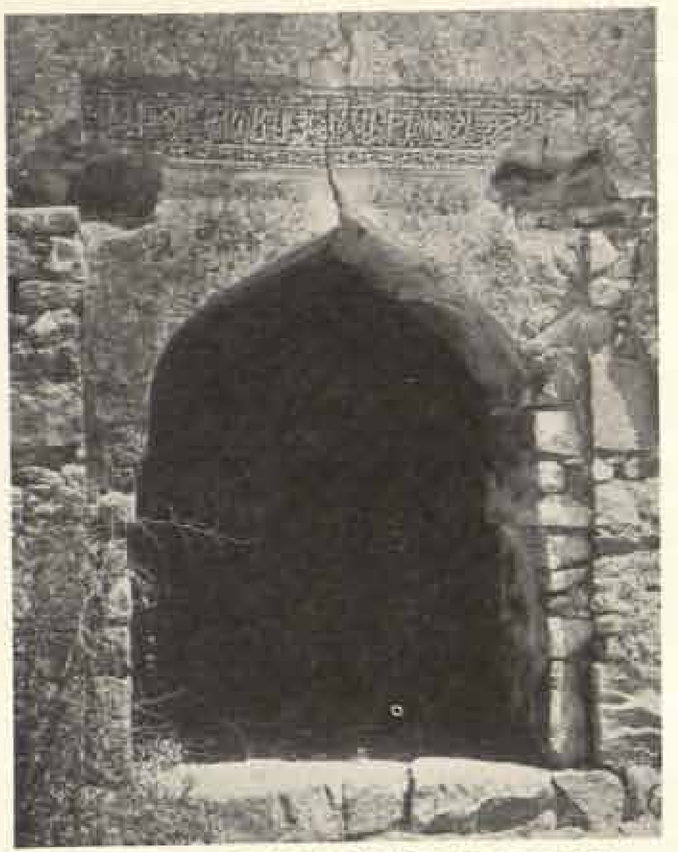
تاریخ چاه خاص
بنا فرمود چاهی همچو زمزم
خلیفه بن خلیفست شاه عادل
دهی اندر ده است کز گشت شیرین
در آن دم بود عامل بیگخانی
ز رجب یازده بودست ماهی

سکندر شاه لودی شاه عالم
ز عدلش بیخ اسلامیست محکم
بگردش از دحام اجناس مردم
منور بن خواصخان اعظم
سنه نهصد دگر بد پانزدهم

2) *Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology*, 2nd edition (Revised and enlarged), Calcutta, 1926, B. 13, p. 5.

3) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. III, No. 199, pp. 117-118.

4) *Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology*, 2nd edition, B. 7, p. 5.



挿図 49　不明の建造物〔O. 47〕南側入口と碑文

わち「井戸」という語が認められ，そこでは，「囲壁」(ḥaẓīrah)，「玄関」(Dahlīz)，および「バハーナーの泉水の井戸」(Chāh-i Chashmāt-i Bahānā) などの語句とともに，その井戸が「飲用水のために」(barāi-i āb-i khūr) 建てられたことを述べているのである[1](挿図49参照)。現在，この建物〔O. 47〕の附近には，他に井戸らしい遺跡はまったく見当らないので，この歴史碑文にみえる「チャー」(井戸) が，この建物の北方約15メートルの地点に残る大井戸である可能性はないとはいえない。ところで，われわれが「遺跡総目録」に収録しておいた，オールドデリーのラール＝クワーンと呼ばれる井戸〔W. 13〕は，改修された上，附近の住民にひろく利用されている。従って，今日では，その建設年代を推定する手がかりは，遺跡自体からはつかめない[2]。

つぎに，この時期に建造されたと思われるバーオリーの遺跡を列挙してみよう。ただし，このうち，最後にあげたもの〔W. 35〕のみは，あるいはより後代に属するものかもしれない (第一巻，挿図60参照)。

1)　トゥグルカーバード西南のバーオリー〔W. 24〕
2)　スルターンプル (Sultanpur) のバーオリー〔W. 25〕
3)　ラージョーン＝キー＝バーイーン (Rājūn kī Ba'aīn)〔W. 26〕
4)　バスティー＝バーオリー (Bastī Bāūli)〔W. 27〕
5)　ムバーラクプル＝コートラ (Mubarakpur Kotla) のバーオリー〔W. 28〕
6)　ウガル＝サイン (Ugar Sain) のバーオリー〔W. 29〕
7)　ワジールプル＝カ＝グンバッド南方のバーオリー〔W. 30〕
8)　アードチーニー (Adhchini) のバーオリー〔W. 31〕
9)　クトゥブ北方のL字型バーオリー〔W. 32〕
10)　メヘローリー (Mehrauli) 西南のバーオリー〔W. 35〕

これら10のバーオリーの遺跡のうち，ラージョーン＝キー＝バーイーン〔W. 26〕のみは，本巻の第一編「個別的研究」の第四章において詳細に紹介しておいたので，ここでは，それが，隣接するモスク〔M. 39〕の前庭にある16世紀初頭の歴史碑文をもつ十二本柱の墓建築〔T. 103〕とほぼ同時代に，そのモスクや墓建築となんらかの関連をもって建てられたものと推定し得ることを記すにとどめる。さて，建設年代がやや不明のメヘローリー西南のバーオリー〔W. 35〕を別とすれば，上に列挙した他の九つのバーオリーは，いずれも，その形態や構造などの点から，サルタナット末期に属することを推定し得る遺跡で，その残存状態あるいは現存する場所の歴史的環境などから，それぞれ，特徴ある遺跡ということができる。これらの遺跡の各々につ

1)　Zafar Hasan, Inscriptions of Sikandar Shāh Lodī in Dehlī, *E. I. M.*, 1919-20, pp. 3-4, Plate II(a); *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. IV, No. 127, p. 66.

…. ماه رجب رجب قدره حظیره و دهلیز و چاه چشماة بهانا مارکنان نوحانی بنا کناید برای ابخور را سنه ست و تسعمایة در عهد سکندر شاه

2)　*List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. I, No. 211, p. 97.

いて述べる余裕はないので，荒がさきに公けにした論考を参照されたい。[1] ここでは，若干の問題点についてのみ記すにとどめる。

残存状態からいえば，スルターンプルのバーオリー〔W. 25〕と，バスティー＝バーオリー〔W. 27〕の二つの遺跡は，大部分が地下に埋もれてしまっており，とくに後者の場合には，わずかに側室らしい部分の一部をうかがい得るにすぎない（第一巻，図版131，図版133a参照）。これに対して，トゥグルカーバード西南のバーオリー〔W. 24〕（第一巻，図版130参照），ラージョーン＝キ＝バーイーン〔W. 26〕，およびウガル＝サインのバーオリー〔W. 29〕（第一巻，図版133 c 参照）の三つの遺跡は，デリー地域に現存するバーオリーの遺跡のなかでも，もっともよくその原形をとどめているものといってよい。これらのうちでも，とくにトゥグルカーバード西南のバーオリー〔W. 24〕は，これまでいかなる文献にも紹介されたことのない遺跡で，1910年代のインド考古調査局の報告書にも載録されていない。他のバーオリー〔W. 28〕（第一巻，図版133 b），〔W. 30〕（同，図版134 a），〔W. 31〕（同，図版134b），〔W. 32〕（同，図版134c）については，その現存状況は，なかば崩壊しているという表現が適当であろうか。

ところで，これらのバーオリーのうち，バスティー＝バーオリー〔W. 27〕とアードチーニーのバーオリー〔W. 31〕の両者は，いずれも，宗教施設と関連をもつものと推定される。すなわち，前者に関しては，そのすぐ西側に一つのモスク〔M. 40〕，南側にローディー朝のシカンダル＝シャー治世の宦官であったと伝えられるバスティー＝ハーン（Bastī Khān）なる人物の墓といわれる建造物〔T. 110〕があり，このバーオリーも，おそらくは，これらの墓やモスクと関連して建造されたものと推定される。一方，アードチーニー部落に現存する後者の場合には，その西北方に，シェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤーの母ビービー＝ズライハー（Bībī Zulaikhā）とその一族を葬る墓や，聖者のチッラーガーとされる建造物（第一巻，挿図70）があるので，このバーオリーも，これらの宗教施設と関連して構築されたものとみてよいであろう。

この時代のバーオリーに関して興味ある一つの問題は，第一編で詳述したラージョーン＝キ＝バーイーンの場合のように，バーオリーに附設あるいは隣接して，別の建造物が残っているという事実である。これは，上記のバーオリーのうち，スルターンプルのバーオリー〔W. 25〕およびウガル＝サインのバーオリー〔W. 29〕の場合にもみられるもので，それぞれ，その階段の上のテラスに接して，礼拝壁あるいは小型のモスクが残っている。さらに，前者の場合には，階段の東の石敷きのテラスのほぼ中央に，ドームを頂く八角形のチャハトリ（第一巻，挿図57参照）が残存している点も興味あるところである。

一方，ムバーラクプル＝コートラのバーオリー〔W. 28〕と，ワジールプル＝カーグンバッド南方のバーオリー〔W. 30〕の場合は，その存在する場所がとくに問題となろう。すなわち，前者は，スルターン＝ムバーラク＝シャー＝サイイド（Sulṭān Mubārak Shāh Saiyid）の墓〔T. 77〕が現存する区域のすぐ北方にあり，もともと，この墓かあるいはその墓域を中心として成立した部落と，なんらかの関係をもって建設されたものと思われる。また，後者の場合には，その近辺に五つの墓建築〔T. 48, 57, 58, 65, 68〕が散在しており，このバーオリーも，それらの墓，あるいはそこに葬られた人物との関連において建設されたものと推定されるのである（第一巻，図版88a参照）。このように，この時代のバーオリーのなかには，墓やモスクあるいは他の宗教施設との関連において建造されたと思われるいくつかの遺跡を見出すことができるのである。

最後に，クトゥブ北方のL字型バーオリー〔W. 32〕にふれておきたい。この建造物は，L字型ともいうべき

1) 各々のバーオリーについては，荒，「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」，pp. 35-37 (W. 24)，pp. 37-39 (W. 25)，pp. 45-48 (W. 27)，pp. 48-51 (W. 28)，pp. 51-56 (W. 29)，pp. 56-59 (W. 30)，pp. 59-61 (W. 31)，pp. 61-64 (W. 32)，pp. 70-72 (W. 35) を，それぞれ参照されたい。

変った平面のために，サルタナット時代のバーオリーとしては，きわめて特異な遺跡として注目されるものである。それにもかかわらず，このバーオリーについては，ASIの報告書をも含めて，これまで，ほとんど紹介されていない。われわれは，この興味ある形態と構造とをもつバーオリーを，トゥグルカーバード西南のバーオリー〔W. 24〕とともに，この報告書のなかで紹介できたことをよろこんでいる。

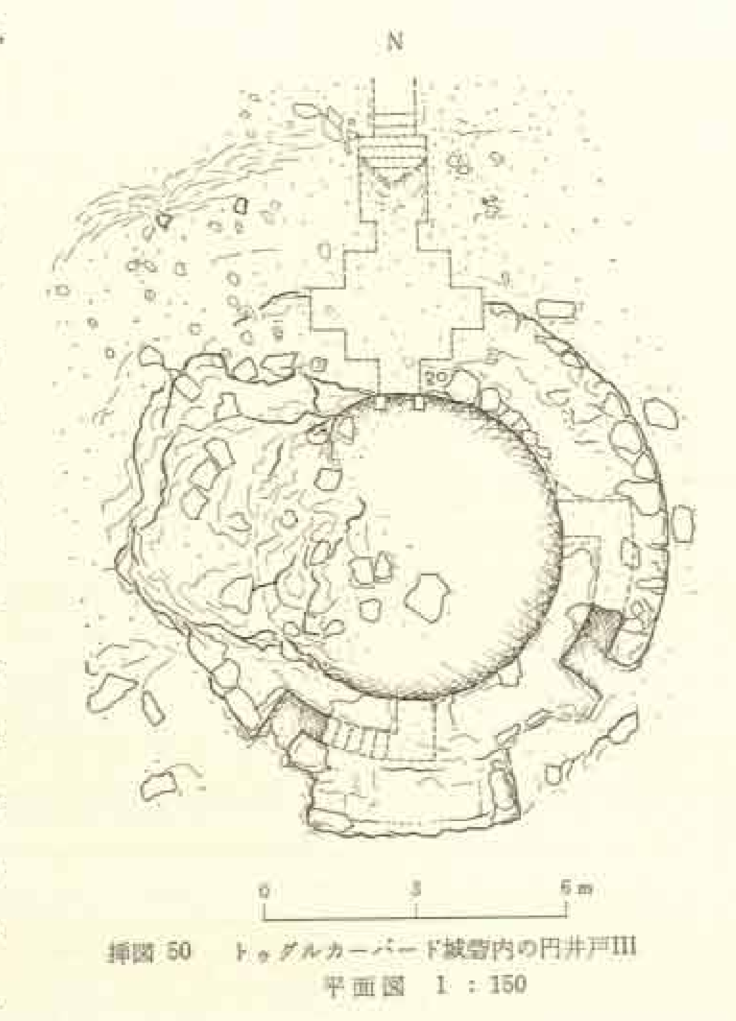
第二章　水利施設の構造と機能に関する諸問題

第一節　井戸とバーオリー

われわれが現地において調査し，サルタナット時代に属するものと考えて第一巻「遺跡総目録」に載録した井戸の遺跡は17個におよぶ。これらの遺跡を，歴史碑文の存在，あるいは年代の明確な他の遺跡との密接な関連，さらには，井戸そのものの石積みなどの構造によって時期別に分類してみると，初期に属するものが1個〔W.1〕，中期に比定されるものが11個〔W.2~9,15~17〕，末期に属するものが5個〔W.10~14〕となる。また，これらの井戸を形態の上から分類してみると，その大部分のものは，円形平面をなしており，他に，四角平面のものが2個〔W.15,16〕と，十二角平面と推定されるものが1個〔W.11〕ある。

サルタナット初期に属するものとして「遺跡総目録」に載録されたただ一つの井戸は，すでに，第一編第一章において詳細にとり扱ったところのスルターンプルの円井戸〔W.1〕（図版1）である。この井戸は，全体が円形平面をなしており，井戸の部分もまた，開口部をのぞけば円形となっていて，この部分の周囲には，傾斜をもった水汲み場が設けられている。そして，井戸の水は，つるべ式の方法によってこの水汲み場に汲み上げられたものと思われる。現在では，この井戸の外部に貯水槽が認められ，汲み上げられた水は，この貯水槽に導かれたものと思われるが，しかし，現在みられる貯水槽は明らかに後代のものである。

サルタナット中期についてみると，円形平面の井戸がもっとも一般的となっており，トゥグルカーバード城砦内の円井戸I〔W.2〕（第一巻，図版122b），同II〔W.3〕（第一巻，図版122c），同V〔W.6〕（第一巻，挿図50）およびW.9（第一巻，挿図53）などがもっとも単純なかたちの円井戸である。これらの井戸においても，水は開口部に汲み上げられたものと思われるが，W.2あるいはW.3において井戸の周囲に明瞭に認められる環状の石敷き部分が，スルターンプルの円井戸の場合のように，その表面に水を受けるような水汲み場であったかどうかはわからない。おそらくは，単なる水の汲み上げ作業のための足場にすぎなかったものかもしれない。中期に属する円井戸のなかには，特別な場所に水の汲み上げ場を設けている例もある。すなわち，トゥグルカーバード城砦内の円井戸IV〔W.5〕（第一巻，挿図49）は，井戸の部分の南側に四角の張り出しを設けて，ここを水汲み場として使用しており，また，同城砦内の円井戸III〔W.4〕（第一巻，挿図48）は，東・西・南・北の4個所に，地表面から井戸の内側に降りる地下の通路を設けていて，この通路の末端にあたるアーチ型の開口部分を水汲み場として利用し



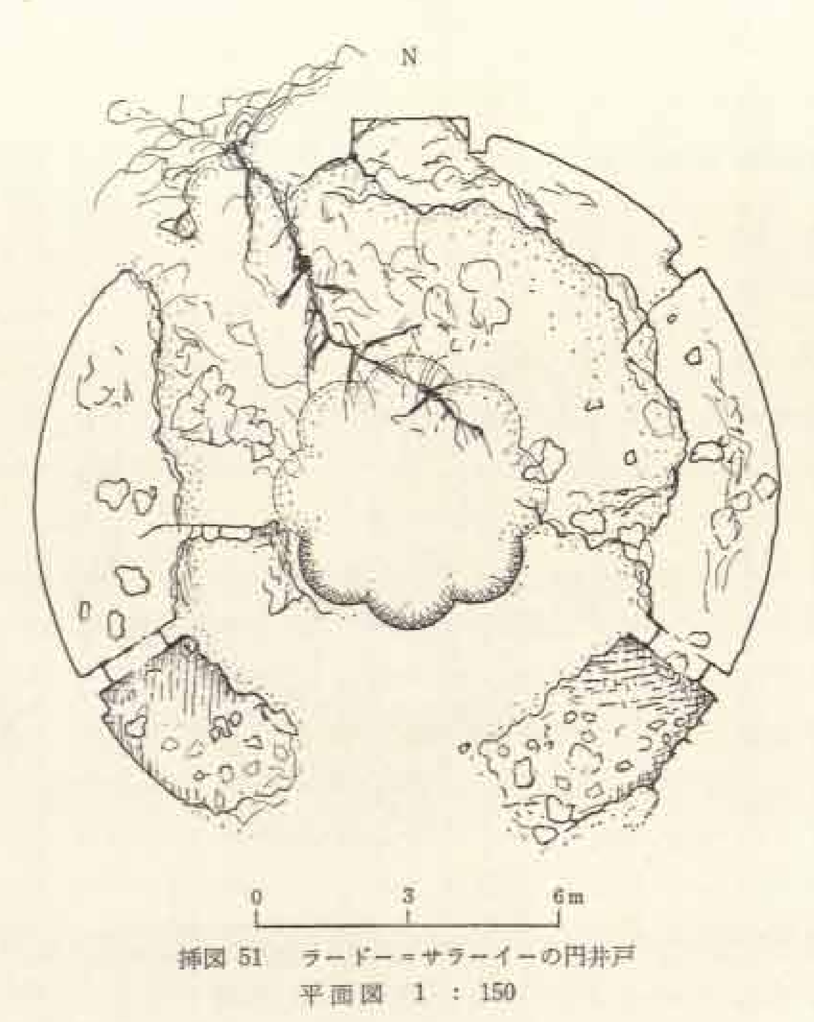
挿図 50　トゥグルカーバード城砦内の円井戸III
平面図　1：150

ているのである（挿図50）。

中期に属する円井戸のなかで，きわめて特異な性格をもち，また，その構成のもっとも複雑なものは，すでに第一編第二章において詳細にとり扱った，フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸〔W. 17〕(図版2～4）である。この建物は，井戸の周囲に，二層の部屋をめぐらしており，各層とも，南北二つの扇形平面の部屋の奥壁に，多数のアーチ龕を備えている。このアーチ龕は，底部に水受けをもっていて，ここに水が貯えられるようになっていた。さて，この円井戸の屋上に汲み上げられた水は，流水溝によって周縁部分に運ばれ，ここから，あるものは円井戸の外部に流れ，他のものは建物内部に送り込まれる。外部に向う水は，あるいは貯水槽に導かれ，あるいは何らかの容器によって受けとめられる。一方，内部の部屋に運ばれた水は，上に述べた，部屋の奥壁に設けられたアーチ龕につぎつぎと配分され，その底部の水受けに貯えられる。

サルタナット中期においては，以上のような円井戸の他に，四角平面の井戸も二つ認められる。トゥグルカーバードの貯水井戸〔W. 15〕（第一巻，図版124a）は，おそらくは，湧水のほかに天水をも貯えたものと思われるが，現在，壁面の一角に，ブラケット状に突き出た石からなる揚水施設が認められ，かつては，この装置によって，水が地表面に汲み上げられていたと考えられる。また，ピール＝ガーイブ西南の井戸〔W. 16〕（第一巻，図版124b）は，内部に幾層かの部屋をもっており，現在では三層が確認される。この井戸は，東隅附近の屋上に，水を汲み上げる施設をもっているが，一方，西北の側には，井戸の内部に降りる階段を備えており，これによって，井戸の底部に達することができるようになっていた。

最後に，サルタナット末期の井戸は，「遺跡総目録」においてつぎの五つが載録されている。まず，W. 10（第一巻，挿図54）およびグリーン＝パークの円井戸〔W. 12〕（第一巻，図版123 b）は，円形平面の井戸の周囲に水汲み場があり，井戸の内部の壁面には，水の汲み上げに使用した突き出し石がある。チャーヘ＝ハース（Chāh-i Khāṣ）〔W. 11〕（第一巻，図版123a）とラール＝クワーン（Lāl Kuwān）〔W. 13〕（第一巻，挿図55）とは，現在，著しい崩壊あるいは補修改変によって，その本来のかたちをうかがうことは難しいが，前者は，その全体の平面が十二角形をなしていたものと推定される。末期においてもっとも特色ある井戸は，ラードー＝サラーイーの円井戸〔W. 14〕（第一巻，図版123c）である。この井戸は，全体のかたちが円形平面であるが，井戸の部分は八弁形をなしており，その周囲に，ヴォールト天井をもつ通路がめぐっている（挿図51）。この通路は，南側に入口があって，この左右から緩い傾斜をもって北方につづいている。



挿図 51　ラードー＝サラーイーの円井戸
平面図　1 : 150

以上のようなサルタナット時代の井戸の遺跡につづいて，つぎには，同時代に属するバーオリーの遺跡について，その形態と構成とを概観してみたい。第一巻「遺跡総目録」においては，この時代に属するバーオリーとして，合計18個を載録しておいたが（W. 18～35），これを時期別に分類してみると，サル

タナット初期に属するものが2個〔W.18,19〕，中期に比定されるものが4個〔W.20～23〕，末期の建設になると思われるものが9個〔W.24～32〕となる。他の3個のバーオリー〔W.33～35〕については，年代推定の手掛りとなるものがほとんどないために，その年代比定は困難であるが，一応，初期・中期・末期に，それぞれ一つずつを分類しておいた。

一般的にいえば，バーオリーと呼ばれる水利施設は，湧水に依存する井戸と，貯水を目的とするタンク，および水面に達する広い階段とを結合したかたちのもので，長方形部分の一方にタンクがあり，他方にはそれに降りる階段があって，井戸はタンク側の外側にあるのがもっとも普通にみられる形式である。このような構成をもつバーオリーにおいては，水の汲み上げは，井戸の部分において，屋上の水汲み場に水を汲み上げる方法とともに，階段を降りて水面に近づくことによって，直接水を汲み取る方法が採用されている。さて，デリーに現存する18個のバーオリーについて，その形態ならびに構成を詳細に比較検討してみると，そこには，さまざまな相違点，あるいは変化があることに気付かれるのである。たとえば，井戸とタンクと階段とが一直線に並ぶ一般形の他に，L字型の平面をもつもの〔W.32〕，あるいはその年代については不明確であるが，十字型のプランをもつバーオリー〔W.33〕などがある。また，井戸がタンクの外側にはなくて，内側にあるバーオリーも，一・二例認められる。さらには，タンクの左右に部屋を備えていて複雑な構成をとるもの，あるいはその壁面に多数の龕をもつもの，それらをまったくもたないものなど，さまざまな相違が認められる。

サルタナット初期に属するものは，ガンダク＝キ＝バーオリー〔W.18〕とニザームッディーンのバーオリー〔W.19〕とである。前者は，井戸とタンクと階段とが南から北へ一直線に並んでおり，井戸とタンクとのあいだの壁面は四層形になっていて，各層には，列柱からなるヴェランダあるいは窓風の小さな空間がある(図版5～10, 43)。これらの各層と階段の途中とを結んで，左右両壁に通路が走っており，これによって，上に述べたヴェランダあるいは小空間に達することができる。これらのさまざまな特徴は，その後のバーオリーにも一般的にみられるものである。しかし，他方，ガンダク＝キ＝バーオリーにおいては，その両側壁に，のちの時期にみられるようなアーチ龕も部屋列も認められない。ニザームッディーンのバーオリーは，井戸の所在についていささか問題のある遺跡である（第一巻，図版127)。すなわち，このバーオリーにおいては，タンクの外側に井戸がみられないので，もともと井戸はつくられなかったか，あるいはタンクの底に設けられたかのいずれかであろうと思われる。しかし，1919年のバシールッディーン＝アフマド（Bashīr al-Dīn Aḥmad）の報告と[1]，アードチーニーのバーオリー〔W.31〕にみられる実際例とによって（第一巻，図版134 b），問題のバーオリーは，タンクの底部に井戸を備えた特異な形式のものであったと推定される。また，このバーオリーにおいては，三方の壁面に深いアーチ龕が設けられている。なお，ラーイー＝ピトーラー南城壁北方のバーオリー〔W.33〕は，サルタナット時代に属するかどうかについて問題はあるが，全体が十字型平面をもつ特種な形式のもので，四方に階段を，中央にタンクを備えていたと推定される，デリーにおいては他に例をみない水利施設である。

さて，サルタナット中期に属するバーオリーは，著しい崩壊によって井戸の所在を確認することのできなかったハウズ＝ラーニー東南のバーオリー〔W.21〕（第一巻，図版129a）をのぞくと，いずれも，円形の井戸とタンクと階段とが一直線に並ぶ一般形のものである。また，モラーダーバード＝パハーリーのバーオリー〔W.20〕（第一巻，図版128）は，タンクと井戸とのあいだの最上層と第二層とに，それぞれ三つの部屋をもっており，

1) Bashir al-Din Aḥmad Dihlawi, *Wāqi'āt-i Dār al-Ḥukūmat-i Dihlī*, Dihli, 1919, Vol. II, p. 804.

チョール＝ミーナール南方のバーオリー〔W. 22〕（第一巻，図版129b）もまた，最上層部分に，五つの柱間からなる部屋をもっているのであるが，これに対し，トゥグルカーバード西北のバーオリー〔W. 23〕（第一巻，図版129c）においては，このような部屋はみられない。つぎに，サルタナット中期に属するバーオリーの左右の側壁の状態についてみると，現在ではその状況を確めることができなくなったW. 22の場合を別とすれば，いずれも，多数のアーチ龕によっておおわれている。

最後に，サルタナット時代末期に属するバーオリーのなかで，クトゥブ北方のL字型のバーオリー〔W. 32〕（第一巻，図版134c）は，西から東に降りる階段部分が，南北に長いタンクの部分に直角にとりついた奇妙なかたちのもので，井戸も，タンクの外側には認められず，その有無も，あるいはその位置についても，現在ではまったくわからない。アードチーニーのバーオリー〔W. 31〕（第一巻，図版134b）も，井戸の位置に関して一般形とは異なるものであり，長方形のタンクの底部に円形の井戸を備えている。

以上の二つをのぞく末期のバーオリーは，いずれも，井戸とタンクと階段とが一直線に並ぶ通常の形式のもので，井戸とタンクとのあいだの部分に，ウガル＝サインのバーオリー〔W. 29〕（第一巻，図版133c）の場合をのぞけば，一層，もしくは二層の部屋を備えている。しかし，タンクと階段とをふくむ長方形部分の両側壁の状況について比較してみると，つぎのような三つの場合に分類されるのである。その一つは，左右の側壁にアーチ龕も部屋もみられないもので，トゥグルカーバード西南のバーオリー〔W. 24〕（第一巻，図版130）とスルターンプルのバーオリー〔W. 25〕（第一巻，図版131）とがその例である。その第二は，両側の壁面に多数のアーチ龕を備えたグループで，ウガル＝サインのバーオリー〔W. 29〕とワジールプル＝カ＝グンバッド南方のバーオリー〔W. 30〕（第一巻，図版134a）とがそれに属しており，また，第三の種類のものは，両側部分に多数の部屋を備えたバーオリーである。この種類に分類されるものとしては，ラージョーン＝キ＝バーイーン〔W. 26〕（図版11～18, 44～48），バスティー＝バーオリー〔W. 27〕（第一巻，図版133a），およびムバーラクプル＝コートラのバーオリー〔W. 28〕（第一巻，図版133b）などをあげることができるのであるが，これらのなかでも，最初のものが，もっとも大規模かつ複雑な構成をもつバーオリーである。

以上，サルタナット時代に属するバーオリーについて，その形態と構成とを概観してきたのであるが，要するに，全体が十字型あるいはL字型プランをなすもの，井戸をタンクの内側に備えているものなど，少数の例をのぞけば，他はほとんど大きな違いをもっていないといえよう。また，これらを時期別に考察しても，顕著な時期的変化あるいは時代的特徴はほとんど認められないように思われる。ただし，末期において，タンクの周囲に部屋をもつ，複雑な構成のバーオリーがみられるようになることが，わずかに注目される程度である。また，バーオリーにおける取水と給水のメカニズムについても，何らかの相違あるいは時期的変化を明らかにしようと努めたのであるが，現存する遺跡の状況からは，これについて明確な成果を得ることはできなかった。ただ，一・二のバーオリーにおいて，側壁の頂上に水溝が認められ，また，あるバーオリーの水汲み場の周縁には，外部に向って水を放出するための流水口が残されていて，当時の水の動きの一端を示していたことを指摘するにとどめておきたい。

第二節　堰 堤 と 水 門

われわれが本節において考察の対象とする堰堤の数は，合計11個〔W. 36～46〕に達する。これらの堰堤の多くのものは，流水をコントロールできる水門を備えていたと考えられるのであるが，「遺跡総目録」におい

ては，これらの水門のうちで規模も大きく，また，注目すべきメカニズムをもっている三つの水門について，とくに，別項目を設けて詳細にとり扱っておいた〔W. 47～49〕。これらの堰堤ならびに水門は，その石積みなどの構造，それに附設された建造物の構造と様式，あるいは同時代の文献資料の記載などによって，いずれもデリー＝サルタナット時代中期，すなわち，トゥグルク朝支配の時代に属するものと考えられるのであり，この中期における，水利施設としての堰堤の重要性をつよく感じさせるのである。

これらの堰堤を，形態の上から比較してみると，おおよそ，つぎの三つの種類に分類することができよう。その一つは，本来防衛的機能をもつ城壁そのものが，堰堤としての役割をも併せもっている場合であり，その二つは，自然の地形を利用し，あるいは運河や川を用いて雨水を集め，もって一定地域に貯水を行なうために人工的に構築された堰堤であり，第三のものは，自然に存在する帯状の岩盤を，それほど人工の手を加えることなく貯水のための堰堤として用いる場合の例である。まず，その第一の種類に属するものとしては，ジャハーンパナー南城壁の堰堤〔W. 46〕(図版24) とアーディラーバードの堰堤城壁〔W. 38〕(図版20b) とをあげることができよう。これら二つのものは，もともと防衛を目的とする城壁であるために，その規模も，一般の堰堤よりも格段に大きく，外側の壁面にはバスティオンを張り出しており，また，アーディラーバードの堰堤城壁においては，今日なお，バトゥルメントと狭間とが認められる。しかし，このような城壁を堰堤として利用する場合には，いくつかの技術的問題が生じたであろうと思われる。その一つは，城門の存在が，貯水にとってさまたげとならなかったかどうかの問題であり，サルタナット時代の文献の記載によって，当時，城門を備えていたことが確実と思われるジャハーンパナー南城壁について，荒は，すでにこの問題を詳細に論じておいた。[1] また，技術的問題として予想される第二の点は，城壁の一角に設けられた水門の存在が，その地点における城壁の防衛力を弱めることにならないかどうかについてである。ジャハーンパナー南城壁の一角に設けられたサート＝プラ水門においては，その両側に，多数の狭間を備えた附属建物を設けていて，水門とその附近を防衛するかたわら (65ページ参照)，水門の流水トンネルには，水流を抑止する遮断板のほかに，城門と同じく扉を備え付けているのである (64ページ参照)。また，アーディラーバードの堰堤城壁に附設されたトゥグルカーバードの水門においては，この水門の存在によって，城壁の外面にあたる東面の石積みが，いささかも損われることのないように配慮されている。

形態上の分類による第二の種類のものは，自然条件を利用し，あるいは運河を用いて貯水を行なうために，とくに人工的に構築された堰堤である。これらの堰堤は，多くの場合，谷間の出口，傾斜地の中間地点またはその裾地，丘陵地帯に隣接する平坦地，あるいは運河や川に沿った平坦地などに，割石と漆喰とを用いて構築されている。このような堰堤は，トゥグルカーバードの堰堤 II〔W. 37〕のように，長さが100メートル程度のものもあれば (50ページ参照)，マヒパールプルの堰堤〔W. 44〕のように約1.4キロメートルに及ぶ長大なものもある (79ページ参照)。また，後者は，厚さが7.7メートル，現存部分の高さは3.5メートルあり，また，現在では補修・改築の著しいボーリー＝バティヤーリー＝カ＝マハルの堰堤〔W. 43〕(第一巻，図版135g, h) は，インド考古調査局の報告によれば，厚さがもっとも広いところで5.1メートル，その高さは7.2メートルあったという。[2]

最後に，堰堤の第三の種類のものは，自然の小丘あるいは岩盤地帯を，それほど人工の手を加えることなく堰堤として利用する場合の例であって，ワジーラーバードの堰堤〔W. 41〕(挿図39) やマールチャの堰堤〔W.

1) 荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，東洋文化研究所紀要，第36冊，1965年，pp. 162-163.
2) Archaeological Survey of India, *List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province*, Vol. II, Calcutta, 1919, p. 233.

42〕(第一巻，図版135 f) などをその例としてあげることができる。ワジーラーバードにおいては，トゥグルク朝後期に属すると思われる水門と橋とがあって，この水門は，その西北にひろがる平坦地に貯水することを目的としたものと考えられる。問題の堰堤は，水門の北側につづく，南北に長い自然の岩盤地帯を利用したもので，この岩盤地帯は，その西にあたる上述の平坦地に貯水する場合の，恰好な自然の堤防をかたちづくっているのである。つぎに，マールチャの堰堤についてふれると，インド政府考古調査局の遺跡リストは，1910年代の現地調査に基づいて，マールチャ地区にある，マハルと呼ばれる建造物の南方約50ヤードのところに，大きなタンクの堤防が存在していたことを報告しており[1]，この堤防は，サルタナット時代の史書に記された "Band-i Māljah" にあたるものかもしれないと考えられるのである[2]。ところで，われわれが，現地調査において，デリー＝リッジの斜面のジャングルのなかに現存するマールチャ＝マハル (O.12〕(第一巻，図版151a) の南方一帯を調査したところ，堤防状に走る自然の岩盤を見出すことができたのである。この附近には，他に，堰堤を思わせるような構築物は認められないので，この堤防状の岩盤が，考古調査局の報告するタンクの堤防であったろうと推定したのである。

以上，デリー＝サルタナット時代に属する堰堤を，形態の上から三つの種類に分類したのであるが，つぎに，この時代の水門の遺跡について，その形態と構造とを概観してみたい。すでに述べたように，サルタナット時代の堰堤は，普通，水門の施設を備えていたと思われるのであるが，しかし，現在では，堰堤の一部分とともに崩壊・消滅して，その形態もメカニズムもわからなくなってしまったものが多い。今日なお良好な状態で残っていて，その流水抑制装置の構造とその操作法とを明確に知り得る水門は，トゥグルカーバードの水門〔W.47〕(図版21～22,49) (52～54ページ参照)，サート＝プラ〔W.48〕(図版23～34,50) (62～67ページ参照)，ワジーラーバードの水門〔W.49〕(図版35～38,51) (72～76ページ参照) およびマヒパールプルの堰堤〔W.44〕に附設された南水門 (図版39b,挿図42～45) (79～81ページ参照) などである。

これらの水門について，まず，その全体の規模を比較してみると，サート＝プラは，その水門部分の長さが約55メートル，幅17メートルととびぬけて大きく，その他の水門は，トゥグルカーバードの水門が約8メートル×6メートル，ワジーラーバードの水門が13メートル×7メートル，マヒパールプル堰堤南水門が約10メートル×4メートルとなっていて，全体の大きさについてはそれほどの相違はない。つぎに，各水門の流水孔の形態および大きさについて比較してみると，サート＝プラにおいては，高さが3.2メートル，幅が2.2メートルないし2.9メートルの，大きなヴォールト型のトンネルとなっている。トゥグルカーバードの水門の流水孔は，30センチメートル×45センチメートルの縦長の長方形をなしており，また，ワジーラーバードの水門においては，直径30センチメートルの円形の流水孔と，30センチメートル×60センチメートルの長方形のものとがある。最後に，マヒパールプル堰堤南水門の流水孔は，上流側においては，直径約20センチメートルの円形をなしており，下流側では，高さ1.2メートル，幅60センチメートルのアーチ型をなしているのは面白い。

これらの流水孔は，いずれの水門においても，レヴェルを異にするいくつかの段をなして配列されている。すなわち，トゥグルカーバードの水門とマヒパールプルの堰堤南水門とにおいては4段に配列されており，サート＝プラにおいては3段に，ワジーラーバードの水門においては，流水抑止装置をもつ流水孔の場合は2段に，それぞれ配置されているのである。なお，各水門における流水孔間のレヴェル差は，サート＝プラ

1) Archaeological Survey of India, *List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province*, Vol. II, Calcutta, 1919, p. 227.
2) Shams-i Sirāj 'Afīf, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, Persian text ed. by M. Vilayat Husain, Bibliotheca Indica Series, Calcutta, 1891, p. 330.

においては1.4メートル，トゥグルカーバードの水門とワジーラーバードの水門とにおいては，それぞれ1.1メートルと0.9メートル，マヒパールプル堰堤南水門においては0.8メートルである。さて，これらの流水孔を通過する水流を抑止する方法としては，つぎの二つの方法が採用されている。その一つは，サート＝プラ，トゥグルカーバードの水門およびワジーラーバードの水門において採用されている方法で，遮断板を上から流水孔におとすことによって水流を抑止し，これをぬきとることによって放出するという方法である。この場合，サート＝プラにおいては，流水トンネルが大きく，従って，遮断板も大型で重量のあるものとなったので，その上げ下げのための装置も，また大規模なものとなったのである。すなわち，この操作には滑車と綱とを利用し，1個の遮断板について，4人もしくは2人の協力によって作業が行なわれた。これに対して，トゥグルカーバードならびにワジーラーバードの二つの水門においては，1人の人間によって容易に遮断板の操作が行なわれたものと思われる。水流を抑止する第二の方法は，マヒパールプル堰堤南水門において採用されている方法で，上流側において，流水口入口は凹みの奥に開口しており，この凹みのなかに板をはめ込むことによって水流を止める方法であった。

第三章　サルタナット中期の水利計画の内容とその意義

第一節　トゥグルカーバード城南の水利計画

1　城南の水利計画のメカニズム

トゥグルカーバード大城砦の南にひろがる平坦地を中心として，14世紀の前半に大水利事業が計画され，また，その実施と関連して，いくつかの建造物がこの平坦地の周辺に構築されたことについては，すでに，第一編第五章において詳細に述べたところである。すなわち，トゥグルカーバードの南城壁とアーディラーバードの城砦とを結んで，南北の長さ約300メートル，幅約120メートルにおよぶ大堰堤城壁〔W. 38〕(アーディラーバードの堰堤城壁）が構築され（挿図22），また，この堰堤城壁の北の部分には，レヴェルの異なる多数の流水孔を備え，さまざまな水位において水をコントロールすることのできる水門〔W. 47〕(トゥグルカーバードの水門）（挿図22におけるA）と，そのすぐ南を東西に走る放水路（挿図22におけるB）とが設けられたのであった。一方，平坦地の南に緩やかに起伏する丘陵地帯の，ふところ深く入りこんだ二つの谷間の出口には，その出口をふさぐかたちに，二本の石積みの堰堤〔W. 36, 37〕(トゥグルカーバードの堰堤Iならびに堰堤II)（挿図22におけるCならびにD）が構築されたのである。これらの建造物の形態と構造とについては，すでに，第一編第五章においてふれたところであるので（46～54ページ参照），本節においては，これらの建造物を利用する大水利計画の全貌について，現地調査で得られた若干の測定データを用いて復原的考察をこころみ，あわせて，このような大水利計画のなかで，上に述べた諸建造物が，それぞれ，どのような機能をもち，また，いかなる役割を演じていたかについて，検討してみることにしたい。

トゥグルカーバード城南の水利計画においてその根幹をなすものは，城南の平坦地における貯水と，そのためのアーディラーバード堰堤城壁の建設であったと思われる。元来，この堰堤城壁の建設された地点は，トゥグルカーバードの城砦が立つ小丘陵と，アーディラーバードの丘をその一角として，その南側に広く展開する丘陵地帯とが，もっとも接近した個所であり，トゥグルカーバードの西南方面から城南へとつづく平地が，突然狭ばまるくびれの部分にあたるのである。従って，この広い平地やその南の丘陵地帯に降った雨水は，もともとこの平地にみられる，西から東に下る傾斜にしたがってこの地点に集中し，やがて，東方ジャムナー河の方向へ流れ去ったものと推定される。すなわち，この堰堤城壁の建設されたこの地点は，城南の平坦地に貯水するための堰堤構築の場所としては，まさに恰好なところであったといえよう。

さて，水利計画の実施に伴ってこの地点に堰堤が建設され，貯水が開始されると，城南の平坦地のほとんど大部分は水面下に没するところとなり，ここに，広い人工湖が出現することとなったのである。そして，ギヤースッディーン＝トゥグルクの墓をおさめる小城砦や，これとトゥグルカーバードの南城壁とを結ぶ石積みの通路などは，周囲を水にとり囲まれて，あたかも，湖中に浮かぶ小城砦と，それに架け渡された橋のような趣きを呈したものと思われる。

この場合，堰堤城壁には，これを横切って東西に走る放水路（挿図22におけるB）が設けられ，この放水路入口底面のレヴェルを越える水については，自動的に放出されるようになっていたために，平坦地における最

高水位はこのレヴェルに抑えられていた。そこで，この平坦地に，最高水位まで水が貯えられたとした場合，どれだけの範囲の土地が水面下に没し，また，各地点における水深がどれほどに達したかを示すために，挿図22においては，最高水位を0として等高線を描いてみた。この場合，0の等高線は，人工湖の外廓線を示すものであり，この線は，挿図に示した範囲を越えて，さらに西方へ延びているのである。結局，平坦地に現在みられる傾斜を基に推定してみると，この等高線は，堰堤城壁の西方約1.5キロメートルのところまで達していたものと思われる。また，挿図22において，等高線に附されたマイナス記号は，それが水面下にあることを示し，その数字は水深を表わす。

しかし，挿図22において，平坦地に描かれたマイナスの等高線は，平坦地の現状についての測定の結果によったものであり，ここから推定される貯水の状況は，平坦地における現在の地形に基づいているのである。従って，もし，水利事業実施当時の平坦地の地形が，現状と少なからず相違していたとすれば，当時における貯水の状況，たとえば，人工湖の大きさや各地点における水深などは，挿図に示したものとは異ったものであったに違いない。われわれは，この平坦地に水利事業が実施された当時においては，平坦地は一般的にもっとレヴェルが低く，現在地点に堰堤城壁が建設されて，ここに貯水が行なわれるようになってから今日に至る長期間に，かなりの土砂がこの平坦地に運び込まれて地面のレヴェルが全体的に上昇し，とくに，堰堤に近い地点ほど，土砂の堆積は著しかったであろうことを推測するものである。もし，このような推測が正しいものとすれば，水利計画実施当時の，最高水位における各地点の水深は，場所によって相違はあるにせよ，挿図に示した数字を上回ったはずであり，また，人工湖の面積も，上に述べた現状からの推定よりも，広かった可能性が考えられるのである。

このような土砂の堆積と関連して注目されるのは，堰堤城壁の北の部分に設けられた水門の埋没の状況である。すでに述べたように，この水門は4段の流水孔を備えており，さまざまな水位において常に機能し得るようにつくられているのであるが（52〜53ページ参照），現在では，上流側において，上の2段がかろうじて確認されるにすぎない。そして，上流側の，水門にもっとも近い部分の地面のレヴェルは，現在では，最高水位を0とした場合，−3.0メートルないしは−3.2メートルである。しかし，水利計画が実施され，ここに水門が構築された当時は，4段の流水孔のすべてが実際に利用されていたと考えられるので，当時におけるこの附近一帯の地面のレヴェルは，最下段の流水孔の底面のレヴェルと，それほどの相違はなかったものと考えられる。いま，確認できる流水孔の個々の大きさや相互の間隔などを基にして，最下段の流水孔の底面のレヴェルを推定すると，約−6.3メートルになる。当時の水門附近の地面のレヴェルがこれに近いものとすると，この附近では，それ以後，現在に至るまでの長いあいだに，約3メートルにおよぶ土砂の堆積があったことになる。もっとも，これほど多量の土砂の堆積が，平坦地のどの場所においても一様に行なわれたとはいえないであろう。おそらくは，堰堤城壁ならびに水門に近いところで土砂の堆積は最大であり，西にいくにしたがって，それは次第に減少していったものと思われる。しかしながら，小城砦とトゥグルカーバードの南城壁とを結ぶ石積みの通路に穿たれたアーチの，現在みられる埋没の状況から判断すると，堰堤城壁の西方約800メートルのところにあるこの地点においても，なお，かなりの土砂の堆積があったらしいことがわかる。おそらくは，その量は，少なくとも1メートルを越えていたろう。

さて，平坦地に貯えられた水は，水門（挿図22におけるA）の操作によって計画的に堰堤城壁の東側に放出される。まず，水門の最上段の流水孔を開くと，この流水孔の底面のレヴェルは，−3.04メートルであるので，平坦地における水面の高さはこのレヴェルまで引き下げられる。これに応じて，人工湖の面積も一挙に小さ

くなり，おそらくは，人工湖の西端は小城砦附近まで移動することとなったろう。つづいて，水門の上から2段目の流水孔が開かれると，水面の高さは－4.1メートルまで下がり，3段目の流水孔によって，－5.2メートルまで引き下げられる。最後に，最下段の流水孔を開くことによって水は完全に放出され，ここに，平坦地の地面の全部が姿を現わすこととなるのである。

以上のような平坦地における貯水が，どのような目的のためになされたかについては，次項において詳細に述べることとするが，そのような目的のなかの一つとして，この平坦地に人工氾濫を起こさせ，これによってこの地に豊かな農地を造成し，もって農業生産の上昇を計るという目的があったであろうことは十分推測されるところである。すなわち，トゥグルカーバード大城砦の都市地域の内部は，岩がちの不毛な土地が多く，当時においても，ここに適当な耕地を得ることは難しかったであろう。従って，都市住民の食糧生産の場を城南の平坦地に求めることは，十分あり得ることのように思われる。このように考えた場合，平坦地の南につづく丘陵地帯の二つの谷間に構築された二つの堰堤，すなわち，トゥグルカーバードの堰堤Ｉならびに堰堤IIの役割は，雨期のあいだにこの谷間に水を貯え，雨期あけの季節には，耕地として利用されている平坦地に，灌漑用水を供給することにあったと思われる。まず，トゥグルカーバードの堰堤Ｉ（挿図22におけるC）についてみてみよう。この堰堤の石積みの高さは，平坦地における最高水位を0とした場合，ほぼ＋7.5メートルであったと推定される。そこで，上部1メートルほどを残して，＋6.5メートルの高さにまで，この谷間に水を貯えたとすれば，この谷間には，長さが約500メートル，幅80メートルないし140メートル，最高水深3.0～3.5メートル程度の人工池が出現することになる。この池の水を灌漑用水として利用し，これを計画的に平坦地に放出するためには，おそらくは，水門の施設を必要としたであろう。現在では崩壊してしまった堰堤石積み部分に，かつては，何らかのかたちの水門があったものと思われるが，それを裏付ける証拠は何も残っておらず，この水門が，どのような形式のものであったかを推定することは，今日ではまったくできない。しかし，この池の最高水深が3.5メートル程度であったとすれば，その水門には，レヴェルを異にする2段ないし3段の流水孔を設けて，段階的に放水することを必要としたであろうし，また，この放水を計画的に行なうためには，この流水孔に開閉装置がなければならなかったであろうと考えられるのである。なお，この堰堤Ｉの水門から放出された水は，小城砦附近より東側にあたる耕地を潤すとともに，附近一帯のレヴェル関係からみると，小城砦附近の西側の，かなり広い範囲にわたって供給されていたように思われるのである。

つぎに，トゥグルカーバードの堰堤II（挿図22におけるD）について検討してみよう。現在，この堰堤においては，石積みの崩壊が著しいために，かつての堰堤上面のレヴェルを推定することは難しい。しかし，平坦地の最高水位を0とした場合，＋9.0メートルに達したかもしれないと推定され，かりに，＋8.0メートルのレヴェルまでこの谷間に貯水したとすれば，奥行き130～140メートルの池が出現したものと推測される。この池の水を灌漑用水として計画的に放出するためには，やはり，水門の施設を必要としたと考えられるが，ここにおいても，すでに，そのような水門の存在を証拠立てるものは何もない。しかし，トゥグルカーバードの堰堤Ｉに関連して推定されたような形式の水門は，堰堤IIにおいても必要であったと考えられる。なお，堰堤IIの水門から放出された水は，必ずしも広い範囲に供給されることなく，アーディラーバードの小丘の西の突端を迂回して，その地点より東側にあたる狭い土地を潤したにすぎなかったろうと推測されるのである。

2　水利計画の目的とその歴史的背景

トゥグルカーバード大城市南方地域の水利計画は，デリー＝サルタナット時代のみならず，ひろくインドにおける都市造営あるいは水利事業の歴史のなかでも特異なものである。トゥグルカーバード大城砦の造営計画のなかで，水の確保ということは，計画立案の当初から切実な問題であったと思われる。城内にみられる大小の井戸や大貯水池の遺構はそのことをよく物語っている。トゥグルカーバード城南の平坦地と南方の岩丘地帯の地勢とを巧みに利用する水利計画の基本的な構想も，城砦建設の計画立案の当初から考えられていたとみてよいのではなかろうか。もっとも，こうした推定が正しいのか，または城砦建設作業の進行する過程ないしはその完工後に計画・実施されたのかという点については，文献上でも決め手となる史料はまったくなく，それを明らかにすることは不可能かもしれない。もし，この水利計画の構想が，城砦構築計画のなかに当初から含まれていたものとすれば，それは，トゥグルク朝の創始者たるスルターン＝ギヤースッディーン (Sulṭān Ghiyāth al-Dīn) の治世のこととなるわけである。

さて，トゥグルカーバードに残っている三つの堰堤のなかで，本巻の第一編第五章で詳述したトゥグルカーバードの水門〔W. 47〕と，それに連なるアーディラーバード堰堤城壁〔W. 38〕とは，この水利計画実施の上での，いわば，かなめともいうべき部分である。この堰堤城壁の南部延長線が，同時に，アーディラーバード城砦の外壁の南部分を形成している事実をみると，この堰堤城壁の完成の時期には，おそらくは，アーディラーバード城砦の建造がすでに完成していたか，あるいは少なくとも，計画・実施されていたものとみてよいのではなかろうか。

ところで，アーディラーバード城砦については，同時代の文献資料の面から，その建設前後の事情を明らかにすることはできない。また，いつからこの名がつけられたかもわからない。一般には，アーディル (ʿĀdil) という名が用いられてきたことから，この名を称号の一部にもつスルターン＝ムハンマド＝シャーが建設したものと解されている。しかし，この建設者がムハンマド＝シャーであるか，または前代のスルターン＝ギヤースッディーンであるかについては，なお論議の余地があると思う。詳しいことはここでは述べる余裕はないが，アーディラーバード城砦は，トゥグルカーバード主城砦に対する，いわば離宮的な意味をもって建造されたものとも考えられるが，同時に，防衛上の見地からすると，大城砦の前哨的な存在たる意味をももっていたと思われる。とくに，城南の大規模な水利計画の重要性を考えれば，この計画のかなめともいうべき堰堤〔W. 38〕と水門〔W. 47〕，さらに城南平坦地と南部岩丘地帯の防衛のための有効な拠点としてのアーディラーバードの役割をとくに重視する必要があろう。問題の堰堤の南側の部分が，相当の規模をもつバスティヨンを備えた堂々たる城壁として構築されており，また，堰堤城壁それ自体も，相当数の兵員を配置するに足る余裕をもってひろくつくられているのも，アーディラーバード城砦南側の二重城壁の建設とともに，防衛という点に大きな注意が払われた証拠と考えてよいのではあるまいか。さらに，この堰堤城壁は，アーディラーバードとトゥグルカーバード大城砦とを連結することによって，前者の孤立化を防ぐ役割をも担っていたと思われる。このように，トゥグルカーバード大城砦とアーディラーバード城砦，およびこの堰堤城壁〔W. 38〕のあいだにみられる相互防衛の機能は，周到に計画・考慮されたものとして，注目すべきものがある。

ところで，トゥグルカーバード城南の水利計画は，いかなる目的をもって立案され，実施されたのであろうか。その主要な目的の一つは，後述するように，農業生産増大の条件を整えることにあったと思われる。しかし，この計画は，同時にさまざまな目的をもあわせねらっていたと考えられるので，まず，それらの点

を述べてみよう。第一に，トゥグルカーバード大城砦の防衛ということが考えられていたと思われる。すなわち，雨期の水を集めて城南の平坦地に貯え，時期的に限度はあっても，外敵が城壁に接近するのを一時的に困難ならしめることをねらったものである。トゥグルク朝初期の支配層の置かれた政治的立場，とくにインド内外の当時の情勢を考えれば，彼らがその新首都の防衛に意を用いたのも当然のことといえよう。

つぎに，大城砦のすぐ外辺に水を確保しておくという目的も考えられよう。日常生活に必要な水の確保は，およそ都市造営とその存続のための必要条件の最たるものの一つである。平時はもちろん，とくに外敵の攻撃が予想される城砦内での非常時における水源の確保は，籠城の場合も考慮に入れるとき，きわめて切実な問題となってくる。城南の平坦地を，いわば貯水池として利用することは，平時と非常時とを問わず，水の確保のためにきわめて有用であることは，容易に想像し得るところである。

第三に考えられることは，主城砦および城南一帯の地域の風光の観賞と，それに関連する新首都の権威の増大ということがらである。トゥグルカーバード大城砦の城壁が，常時，水濠によって囲まれ，あるいは城南一帯の地が水で蔽われることは，大城砦そのものの外観を威厳あるものとし，観るものをして新しい王朝の力と権威とをつよく印象づけるに役立つことは，想像するに難くないところである。のちにギヤースッディーンの墓所となった城南の小城砦風の建造物〔T.6〕の存在は，それが水中に浮かぶとき，大城砦南面の風色を一層ひき立たせるものとなったにちがいない。また，城砦内の宮廷区域の高楼からみるときの水のある南面の風色は，まことに一見に値するものがあったであろう。逆に，アーディラーバード城砦から，北方ないしは西北方をながめたときの景観も，それに劣らぬものがあったと想像されるのである。アーディラーバード城砦の離宮的な意味は，城南の平坦地に水がたたえられたときを想うと，とくに鮮明なものとして浮かび上ってくるのである。水をたたえて自然と人工の景観を賞するのは，インドの支配層にとって奢侈生活上の最高の興趣であったし，また，そのことは，みずからの権力を誇示することをも意味したのである。また，貯水池の存在は，その周辺に，常時，緑樹を繁らせることを助けたし，さらに，鳥獣を水辺に誘引することによって，狩猟にも役立ったであろう。トゥグルカーバード城南の水利計画が，こうした支配層の奢侈生活上の欲望充足をも計算に入れていた点も，十分，考慮する必要があると思う。

しかしながら，すでに述べたように，トゥグルカーバード城南の水利計画が，新城市に関連して農業生産の条件を整える目的のために用意されたと思われる点は，とくに強調される必要があろう。すなわち，城南の平坦地を，雨期および雨期の明けたあとの一定の期間，人為的な氾濫の状態のもとにおき，排水後の土地の生産力の改善に役立てるという構想である。さらに，城南のトゥグルカーバード堰堤Ⅰおよび堰堤Ⅱを利用することによって，これらの堰堤の東側の岩丘地帯に貯水池をつくり，乾期の必要に応じて，適時，放水し，城南の平坦地における農業の灌漑用水として用いることも，実際に行なわれたかもしれない。もちろん，新城市の支配層や民衆の生存のための食料は，デリーの他の地域やさらには外部からの農産物に依存せざるを得なかったであろう。しかし，トゥグルカーバードの立地条件，とくに城南の平坦地の存在を考えると，この地域が，ともかく，新首都の住民のための食料生産にとって，至近で，しかももっとも好適な場であったことは指摘し得るであろう。ちなみに，現在，この地域一帯は，かなり良好な農地として利用されている。雨期明けまで水に蔽われ，水のひいたあとを農地として利用するというやり方は，モンスーンに依存する北インドにおいては，決して珍しいことではない。のちに述べるように，フィーローズ＝シャーは，人工氾濫を奨励する政策さえ採っているのである（本章第三節参照）。

このようにトゥグルカーバード城南の水利計画の目的は，農業生産上の問題が主目的であったと思われる。

しかし，それは，決して単一のものではなく，さまざまな目的と効果とを考慮にいれていたものと考えるべきであろう。もちろん，それらの諸目的には，当時の政治的，経済的な状況に即して，おのずから緩急の差が考慮されていたにちがいない。それにしても，城南の水利計画が，このような種々の目的をもって立案され，実施されたものとすれば，それは，インドにおける水利事業および都市建設の歴史のなかで，もっとも注目されるべきものといえるのではあるまいか。

第二節　ジャハーンパナー南城壁を利用する水利計画

1　水利施設としての南城壁の役割

ラーイー＝ピトーラー城砦の東北隅から東北東へ，3.2キロメートルのあいだ一直線に走り，その一角にサート＝プラと呼ばれる水門を附設しているところの城壁は，すでに述べたように，イブン＝バットゥータ(Ibn Baṭṭūṭa)の記載によれば，トゥグルク朝第二代のスルターン，ムハンマド＝ビン＝トゥグルク(Muḥammad bin Tughluq)(1325～51A. D. 統治)によって，当時のデリーにおける四つの都市を一つの城壁によって結びつけることを目的として建設された，ジャハーンパナー(Jahānpanāh)の一部を構成するものであった(55～56ページ参照)。また，サルタナット時代の他の文献によれば，この南城壁は，当時，いくつかの城門を備えたものであったことが知られる。一方，現地調査における観察によれば，この南城壁は，南面のところどころに円形の張り出し部分をもっていて，もともと，巨大なバスティオンを備えた城壁として建設されていたことがわかる。以上のような事実からみて，ジャハーンパナー南城壁は，まず，都市の防衛をその第一の任務とするところのものであったことは明らかである。

しかし，他方，この南城壁は，サート＝プラ水門の存在によっても知られるように，堰堤としての機能をも兼ね備えるものであったのである。この場合，南城壁が，建設当初から堰堤としての機能をも併せもっていたものか，あるいは，もともと防衛のみを任務とする城壁が，後になって，堰堤としての役割をも担わされることになったかについては，どちらとも容易には決められない。この場合，サート＝プラ水門もしくはその先駆となる水利施設の建設が，ジャハーンパナー南城壁の建設と同時に行なわれたのか，あるいは後になって実施されたものかについて事実を明らかにすることが問題解決のキーポイントである。しかし，すでに第一編第六章第二節において述べたように(65～66ページ参照)，これについては，断定的な結論は下し難いのである。しかしながら，ここで，もし，建設後のある時期にこの城壁に堰堤としての役割が与えられ，サート＝プラ水門が追加建設されたと仮定しても，それは，おそらくは，ジャハーンパナーを建設したムハンマド＝ビン＝トゥグルクにつづく次代のスルターン，フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの時代のことであったと推定されるのである。

さて，ジャハーンパナー南城壁が，本来，どのような規模のものとして完成が予定されていたかについては，今日ではよくわからない。まず，城壁の厚さについては，城壁の両側面の表面石積みをともに残している部分が，現在では存在しないので，正確に測定することはできないが，おそらくは，15～18メートルであったろう。また，城壁の高さについては，その現存部分をサート＝プラ附近において測定してみると，城壁南側の平坦地よりも2.5メートルないし3メートル高く，サート＝プラ水門最下段の流水トンネルの底面よりも，6.5メートルないし7メートル高くなっている。

ジャハーンパナー南城壁は，附近一帯の地形からみて，堰堤としても恰好な場所に建設されていたといえ

よう。すなわち，この南城壁の南方には広い平坦地が横たわっており，この平坦地は，メヘローリー部落附近を西北から東南に走る丘陵地帯，トゥグルカーバードの城砦が位置する小丘陵とその西北につづく丘陵地帯，そして，クトゥブ・バーダルプル＝ロード (Qutb-Badarpur Road) のはるか南に横たわる丘陵地帯などによって，その西・東あるいは南をとり囲まれた広大な平野の一部をなしているのである。従って，これらの丘陵地帯に降った雨水はこの平野に流れ込み，やがて，北上してジャハーンパナー南城壁の方向に向って流れていく。1871年刊行のA.カニンガム (A. Cunningham) による報告書に掲載されたデリー地域の地図には，丘陵地帯の各所から水を集めてこの平野を北上する川筋が記載されており[1]，また，インド政府発行のデリーとその近傍の地図においても，同じような水系が記されているのである[2]。従って，ジャハーンパナー南城壁の建設地点は，このような構築物の建設によって，その南方一帯に，かなりの量の水を容易に貯えることができる場所にあたっていたのである。

さて，すでに述べたように，南城壁南方の平坦地，とくに，その南城壁に近い部分は，この城壁の現存部分の頂上よりも，2.5メートルないし3メートル低くなっている (挿図29)。しかし，平坦地のこの部分は，長期間にわたる土砂の堆積によって，今日みるようなレヴェルにまで高まったものと考えられ，かつては，もっと低かったと推定されるのである。ちなみに，サート＝プラ水門のすぐ南方の地面のレヴェルを，水門最下段の流水トンネルの床面と比較してみると，前者がほぼ4メートルも高くなっている。もともと，南城壁や水門が構築された当時においては，水門に近接する地面は，水門最下段の流水トンネル床面に直接つづいていたと考えられるので，この地点における地面の高さは，流水トンネル床面のレヴェルとそれほどの相違はなかったはずである。とすれば，少なくともこの地点においては，4メートルに近い土砂の堆積があったことになる。そして，南方平坦地のその他の部分においても，やはり，現在では，相当程度，地面のレヴェルが上昇したと推定して誤りないものと思われる。

このように考えれば，城壁構築当時においては，現在よりもはるかに多量の水が，南方平坦地に貯えられたものと思われる。そして，この水は，サート＝プラ水門の操作によって，適時，北方に放流されたのである。まず，この水門の11個の流水トンネルのうち，もっとも高いレヴェルにある左右両端の二つのトンネルの開放によって，平坦地における水位は，最下段の流水トンネル床面のレヴェルを0とすれば，＋2.8メートルのレヴェルまで引き下げられたのである。ついで，中段に位置する二つのトンネルによって放水すれば，水位はさらに＋1.4メートルのところまで低下する。そして，最下段の流水トンネルを開くことによって，平坦地の水は完全に放出される。このような，ジャハーンパナー南城壁による南方一帯の貯水と，サート＝プラ水門による計画的な放水とが，どのような目的のためになされたかについては，次項において詳細に述べることとしたい。

2　水利計画の目的

ジャハーンパナーの南城壁については，建設の時期をも含めて，歴史的な観点からは，なお多くの疑問が残されている。本巻第一編のサート＝プラについて述べた章において，ジャハーンパナーの建設が，トゥグルク朝のスルターン＝ムハンマド＝シャー (Sulṭān Muḥammad Shāh) の治世に行なわれたものと推定し得る点を

1) Alexander Cunningham, Report of Operations of the Archaeological Surveyor to the Government of India during Season 1862-63, *Archaeological Survey of India Reports*, Vol. I, Simla, 1871, Plate XXXV.

2) "Delhi and Locality", published under the direction of Brigadier G. F. Heaney, Surveyor General of India, 1950, scale 1 inch to a mile.

指摘しておいた(60ページ参照)。荒は，かつて，サルタナット時代のさまざまな文献の記述内容を利用して，ジャハーンパナー建設の時期やその城門（ダルワーザ，Darwāzah）の存在に関する諸問題，サート＝プラとの関係などについての考証を発表している[1]。本巻で述べる推論は，同論考を利用し，そのなかの若干の謬見を訂正しつつ記すものである。

さて，ジャハーンパナー南城壁を利用する水利計画について考察する場合，サート＝プラ水門を含めての城壁・堰堤としての機能については，つぎの二つの場合が想定できるように思う。

1)　ジャハーンパナー南城壁は，当初は，城壁としてのみ構築されたものであるが，のちに，堰堤としての機能をもつように改築され，サート＝プラを含む水門などの水利諸施設が設けられた。

2)　建設当初から，城壁としての本来の役割のほかに，同時に，水利施設としての機能をも果たすものとして構築された。

この二つの推論の差は，サート＝プラあるいはそれに代わる水門施設が，ジャハーンパナー南城壁の建設と同時につくられていたか否かという問題に関連してくる。ところで，現存するサート＝プラについても，確実なことはいえないにしても，トゥグルク朝のムハンマド＝シャーの治世に建設されている可能性がつよいことに関しては，第一編第六章でもふれたところであり(60ページ参照)，また，当時の農業事情を背景として，ムハンマド治世の建立とする推論も考えられることは，のちに述べるとおりである(117〜119ページ)。ジャハーンパナーの建設年代については，すでにふれたように，マフディー＝フサインの如く，バドゥル＝チャーチュ（Badr Chāch）その他の記録をもとに，727 A.H.（1326-27 A.D.）年ごろに着手されたとするものもある[2]。しかし，同じ年に，スルターン＝ムハンマドによるデカンのダウラターバードへの建設が行なわれている点から，この 727 A.H. 年建設説には若干の疑問を抱かざるを得ない。しかも，1334 年にデリーに来て，みずからジャハーンパナーを見てその名を記しているイブン＝バットゥータ（Ibn Baṭṭūṭa）は，ジャハーンパナーについては，未完成のまま残されていると明らかに述べているのである[3]。それに，ジャハーンパナー造営とその南城壁の建造とは，必ずしも同時に行なわれたものとは考えられない。従って，かりに，ジャハーンパナーの造営が 727 A.H. 年に着手されたとしても，それを，南城壁の建設の年代とみなすことはできない。南城壁は，未完成の部分に入っていたかもしれないからである。とすれば，ジャハーンパナー南城壁について，ほぼ，確実にいい得ることは，それが，おそらくは，スルターン＝ムハンマドの治世に建設されたのではないかということであり，ましてや，第一編第六章でふれたように，サート＝プラの 727 年建設説は，まったくの臆測にすぎないというべきである。

ところで，ジャハーンパナーおよびサート＝プラに関連する疑問の一つとして，バラニーの『フィーローズ＝シャーの歴史』（*Tārīkh-i Fīrūz Shahī*）のなかに，フィーローズ＝シャーがつくった大規模な建造物として，「シーリーのバーラーバンド」「Bālāband-i Sīrī)，あるいは「シーリー水のバーラーバンド」（Bālāband-i Āb-i Sīrī）という建造物に関する問題がある。荒は，かつて，一つの推論として，このなかの「シーリー水」（Āb-i Sīrī）を，サート＝プラ北側から現在のチラーグ＝デリー部落の西側を通り，シーリー城砦東側にかけて北上する水流（現在なお水流ないしは地溝として残っている――挿図27参照）と考え，問題の「シーリーの（あるいはシーリー水

1)　荒，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」所収，第IV章，「Jahānpanāh，とくにその南城壁について」(pp. 103-112) 参照．なお，その所論には，若干の謬見があったことを記しておきたい。

2)　Mahdi Husain, *Tughluq Dynasty*, Calcutta, 1963, pp. 166-168.

3)　*Voyage d'Ibn Batoutah*, Texte arabe, accompagné d'une traduction par C. Defrémery et B.R. Sanguinetti, Société asiatique, Paris, 5me tirage, 1949, tome 3, p. 147.　*The Rehla af Ibn Baṭṭūṭa (India, Maldive Islands and Ceylon)*, Translation and Commentary by Mahdi Husain, pp. 25-26.

の）バーラーバンド」とは，サート＝プラそのものをいったものかもしれないと述べた。[1] もし，このバラニー文中の「バーラーバンド」を，このような推論に従って解釈するならば，それは，フィーローズ＝シャーの建設とする点に疑問は残るにせよ，堰堤としてのジャハーンパナーまたはサート＝プラ，あるいはそれと関連したトゥグルク朝時代の水利施設に言及したものとして，きわめて珍しい史料といえるであろう。

さて，ジャハーンパナー堰堤城壁の機能については，前項で考察したように，緩やかな土地の傾斜と地溝とを利用して，雨期の降水をサート＝プラ水門の南側一帯の地域に貯水し，あわせて，その貯水を，水門機構を利用して，必要に応じて，北方の平坦地に導入することにあった。しかし，ジャハーンパナー南城壁とサート＝プラの建設にかかわる複雑な問題が，その城壁に設けられた城門の存在をめぐってなお残っているのである。この点については，ほぼ，つぎの点が指摘されよう。[2] すなわち，問題の一つは，ジャハーンパナー南城壁が，もし，当初から堰堤として建造されたものであるならば，なぜ，そこに城門が設けられたかという疑問である。現在残っている南城壁の遺構にはいくつかのモーリーやジャルナーなどの水門施設が設けられているが，それらの場所に，もと，城門があったかどうかは，ほとんどわからない。しかし，現存する南城壁の一部には，断定はできないにしても，かつての城門ではなかったかと思わせる個所も存在している。この点に関連して，1871年にＡＳＩの調査報告書を書いたJ.D. ベグラー (J.D. Beglar) は，水門は南城壁建設ののちになってつくられたものと考えていたようである。[3] しかし，同じトゥグルク朝時代の建造物たるサート＝プラの存在によって，堰堤としてのジャハーンパナー南城壁の存在理由は確認されているのである。しかし，その一方，サルタナット時代の文献の記すところによれば，トゥグルク末期，すなわちサート＝プラがすでに設けられ，ジャハーンパナー南城壁が堰堤としての機能を果たしていたと思われる時期においても，これらの城門は使用されていたらしいのである。このような矛盾と疑問とに対しては，いくつかの推論が可能である。それについてここで詳述する余裕はないが，城南の地域の貯水は，常時行なわれたわけではなく，また，城門の存在も，堰堤としての城壁の機能と役割とを必ずしも損わなかったとみることもできるのである。

堰堤としてのジャハーンパナー南城壁とサート＝プラ建造の目的については，ほぼ，つぎのように要約することができるであろう。まず，防衛という点が問題となるであろう。問題の南城壁は，ジャハーンパナー城市を囲む城壁の一部として建設されたものであり，在来の城砦の場合と同じように，新しい都市区域の防衛手段として城壁の建設が計画されたことは言を俟たないところであろう。貯水計画が実施された場合には，城壁への外敵の接近は困難なものとなるため，城市防衛の機能は，かえって強化されるわけである。

堰堤としてジャハーンパナーの南城壁を利用する主要な目的は，城壁南方一帯の地域に水を貯え，いわゆる人為的氾濫を起こさせることにあったと推定される。この方式は，すでに本章の前節で述べたトゥグルカーバード城南の平坦地を対象とした水利計画の場合と同様に，排水後の土地の農業生産力を高める意図をもって計画されたものである。一方，サート＝プラの北側，すなわち城壁内部の平坦地に対しては，城南に貯えられた水を水門装置の開閉操作によって，適時導入し，灌漑用水として用いた可能性も十分考えられるのである。なお，この水利政策の実施については，当時における農業事情の逼迫と社会情勢の深刻化という歴史的背景をみる必要があると思うが，それについては，次項で説明したい。この水利計画の他の目的としては，城内住民のための水の確保ということも考えられよう。城壁南方地域に貯えられた水は，北方の城内の

1) 荒，前掲論文，第IV章所収，「Baranī にみえる Bālāband-i Sirī について」(pp. 112-127) を参照．なお，この論考では，ここに述べたのとは別の推論についても記している．
2) 荒，前掲論文，pp. 106-111.
3) J. D. Beglar, Report on Delhi, for the half-year ending September 1871, *Archaeological Survey of India Reports*, Vol. IV, Calcutta, 1874, p. 65.

区域への放水によって，ジャハーンパナー城内の住民への給水が，ある程度確保されたことはたしかである。

ところで，上にあげた諸目的のほかにも，たとえば，風光の観賞や，狩猟その他当時の支配層の奢侈生活上の興趣のためにも，この水利計画は，その効果を期待されていたものと思われる。すでにサート＝プラの項でふれたように，この建造物がシカールガー（Shikārgāh），すなわち狩猟場として造営されたとする伝承さえ行なわれていたらしい。狩猟という行事が，このような大規模な堰堤・水門の建設の主要な目的であったとは考えられないにしても，水利計画の実施後，この南城壁のサート＝プラ周辺の地域が，とくに，水を求める鳥獣の集まる恰好の場所となり，支配層が，この附近の地を狩猟場として用いるようになったことは，想像し得るところである。

3　水利計画実施の歴史的背景

前項において，堰堤としてのジャハーンパナー南城壁の利用目的の一つである，農業生産の振興という問題にふれておいた。この推論をさらに説得的なものとするために，トゥグルク朝の支配下のデリー地域における農業情勢，とくに食糧事情の逼迫という当時の歴史的背景について，同時代の文献の記述をもとにして考察した推論の一端を簡単に述べておきたい。[1]

ムハンマド＝シャー＝トゥグルクは，727 A.H.（1326-27A.D.）年に，デカン西部の地に新都を造営し，それをダウラターバード（Daulatābād）と名づけた。翌728 A.H.（1327-28A.D.）年には，デリーの後背地として重要であったドーアーブ（Dūāb）の地方に動乱が続発したらしく，スルターンは，デカンのダウラターバードからデリーに帰っている。ところで，735 A.H. 年の末ごろ（1335年）から，デリー地方は，深刻な飢饉におそわれ，民衆は悲惨な状況下におかれたらしい。ところで，ムハンマド＝シャーによるデカンの新都造営後に，デリーが無人の地として荒廃してしまったように説かれることがあるが，ダウラターバードの経営後，トゥグルカーバードはともかくとして，デリー地域の全般が荒廃に帰したとするのは当っていない。すでにマフディー＝フサインも，この問題にふれて，いわゆるデカン遷都は「第二の首都」の建設にすぎず，デリーは，依然として首都であったといっている。[2] 飢饉の続発という事実も，デリー地域になお多くの人口が残っていたことを物語っているし，この間，スルターンがしばしばデリーとダウラターバードのあいだを往復している事実からも，そのことは推測されるであろう。

ところで，デリー地域に起こった飢饉は，単なる自然的要因のみによるものではなかった。すなわち，デカンへのかなりの人口の移動の結果として経済・社会の面においてみられた変動の影響によって，従来トゥグルク政権が採ってきた農業政策が根底から混乱してしまったこともその一因と考えられる。たとえば首都の消費人口の多くがデリーを離れたことにより，近隣の農村は，その直接の影響を蒙り，結果において農村の疲弊を招いたものと思われる。それらの経済的・社会的変動が，自然の悪条件と相俟って，飢饉の被害を増大させたと推定すべきではなかろうか。自然の悪条件のなかでもっとも大きな問題となったのは，のちにふれる同時代の文献の記すところからもわかるように，雨期の間のデリー地域における寡雨によって生じた旱魃であった。中央政府の移動によって，そうした災害に対する政策がほとんど採られなかったという事情が，飢饉がもたらした被害を，さらに甚だしいものにしたことも想像されるところである。

このように，デリー地域の経済・社会状況が逼迫しはじめていた1337年の７月にも，ムハンマドは，デリ

1）荒，前掲論文，第Ⅴ章所収，「Muḥammad Shāh Tughluq 治世下の農業情勢と Jahānpanāh の南壁について」（pp. 167-175）参照.

2）Mahdi Husain, *Tughluq Dynasty*, pp. 144-163.

ーに帰っている。この年 (737 A. H. 年) にも，デリー諸地域は，大規模な飢饉におそわれている。デリーの惨状を見たスルターンは，その対策に苦慮したらしい。われわれは，その当時の情勢について，同時代のズィヤーウッディーン＝バラニーの記すところによって，その一端を知ることができる。すなわち，彼の史書『フィーローズ＝シャーの歴史』をみると，ほぼ，つぎのようなことを知ることができるのである[1]。すなわち，

1) 穀物と馬糧 (ghallah wa 'alaf) の入手が，デリー地域においては著しく困難となり，飢饉が起こったこと。

2) その主な原因は，雨 (bārān) が少なかったことで，雨が降らない限り，耕作 (zirā'at) は不可能となり，デリーの都市の住民 (khalq-i shahr) の救済も難しかったこと。

3) スルターンの命令によって，デリーの住民は，食糧事情の逼迫を理由として，妻子・家族とともに，城外に疎開することを許され，そのため，城内や城壁 (darwāzahā wa alanghā) も開放されたこと。

4) そのため，多くの住民がヒンドゥースターン (Hindūstān) へ疎開したこと(なお，ここで，「ヒンドゥースターン」というのは，ガンジス川中流域の地帯を指すものとみてさしつかえないであろう)。

飢饉による食糧危機を契機として，社会情勢は，スルターン＝ムハンマドを含むトゥグルク支配層をもデリーの外へ疎開させるまでに緊迫の度を加えたのである。ムハンマドは，軍隊とともに，一時，ガンジス河畔のサルガ＝ドゥワーリー (Sarga Dwārī) と呼ばれた村に滞在することを余儀なくさせられた。バラニーは，ガンジス中流域の穀倉地帯からサルガ＝ドゥワーリーに向けて穀物が送られるようになった状況についても記述を残している[2]。

さて，スルターン＝ムハンマドのサルガ＝ドゥワーリー滞在は，738 A.H. 年，すなわち 1337–38 年のころのことであったといわれる。このデリーの人口の移動と食糧危機による疎開の結果，情勢はやや緩和されたらしく，ムハンマド＝シャーも，742 A.H. 年すなわち 1341 A.D. 年には，デリーに帰還したとされている[3]。この前後のインドの情勢をみると，ラクナワティー (Lakhnawatī) すなわちベンガル地方の一部，およびグルバルガー (Gulbargā)・ビーダル (Bīdar) などのデカンの地や，ガンジス中流域の要衝カナウジ (Kanauj)，さらにインダス中流域のムルターン (Multān) に，そしてついには穀倉ドーアーブの地に，反乱が起こり，いよいよ，デリーに近い要衝までが動揺しはじめてきた。こうした情勢のなかで，スルターンは，各地の反乱に対処するのに忙しく，みずから軍を率いて出向いている。やがて，746 A.H. 年には，デカンの都ダウラターバードにも，ついに反乱の火の手があがったのである。

ところで，サルガ＝ドゥワーリーからデリーへ帰還したスルターン＝ムハンマドは，各地の反乱鎮圧の指揮に忙殺される一方，決して好転したとはいい難い食糧危機という深刻な問題に苦慮していたらしい。たとえば前記バラニーの文章の行間から，われわれは，つぎのようなことがらを読みとることができるのである[4]。

1) Ẓiyā' al-Dīn Barani, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, Persian text ed. by Saiyid Aḥmad Khān, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1860-62, p. 485.　つぎにペルシア語原文を引用しておく，なお，これについては，荒，前掲論文，pp. 168-170 を参照.

چون سلطان محمد دید که هیچ نوعی تنگچهٔ غله و علف در شهر خلاص نمیشود و بهیچ طریقی بی نزول باران زراعت کردن ممکن نمیگردد
و روز بروز خلق شهر در مانده تر می شوند فرمان داد تا دروازها و النگهای خلق شهر را در رفتن جانب هندوستان و بردن زن و
بچه این طرف مانع نشوند و بگذارند تا خلق جانب هندوستان برود و چند گهی از قحط خلاص بیابند و در ان دیار خود را و فرزندان
خودرا بگذارند و بیشتری خلق از واسطهٔ تنگی غله جانب هندوستان رخ اورده بودند و زن و بچه را دران دیار ربوده و . . . . .

2) Ẓiyā' al-Dīn Barani, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, p. 485.　これについては，荒，前掲論文，pp. 170-172 を参照.

3) Mahdi Husain, *Tughluq Dynasty*, p. 254.

4) Ẓiyā' al-Dīn Barani, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, pp. 497–498.　なお，これについては，荒，前掲論文，pp. 172-174 を参照.

و در جملهٔ بعد از امدن سرگردانی که سلطان محمد سه چهار سال در شهر ماند و اشتغال و استغراق او بوده است مگر در چند
چیزها و از جملهٔ امور جهانداری و جهانگیری باستغراق چند مصلحت خود را مشغول گردانید اول اشتغال سلطان محمد در چند سال
که از دهلی طرفی نهضت نفرموده در ازدیاد زراعت و افزونی عمارت بوده است و سلطان در ازدیاد زراعت اسلوبها اختراع میکرد هرچه
در ازدیاد زراعت در تصور سلطان میگذشته و در قلم می امد انرا اسلوب نام میشد . . . .
و در معاملهٔ ازدیاد زراعت دیوانی وضع شد و ان دیوان را دیوان امیر کوهی نام کردند و عهده داران نصب شدند و سی کروه در
سی کروه دایرهٔ گرد از قیاس گرفتند بشرط انکه یک بلشت زمین در مسافت چندین کروه بی زراعت نماند . . . . .

すなわち，

1)　スルターン＝ムハンマドは，逼迫した事態を考慮して，みずから，デリーにとどまり，耕作の振興 (izdiyāt-i zirā'at) と建設事業の進展 (afzūni-i 'imārat) とに没頭したこと。

2)　農業事情の改善と生産振興のために，新しい方法 (uslūb) を考案させ，そのうち，スルターンがよしとして採用したことについては，ただちに実行に移させたらしいこと。

3)　農業振興のために，「ディーワーネ＝アミーレ＝コーヒー」(Dīwān-i Amīr-i kūhī) と呼ばれる部局を設け，官吏 ('ahd-i dārān) が任命され，耕地を拡張するための施策がとられたこと。

さらに，バラニーは，スルターン＝ムハンマドが，農地拡張，品種改良その他の農業振興策を推進するため，官を任じて，耕作者に対する貸金制度などを実施させたことをも記している[1]。ジャハーンパナー南城壁を利用した水利計画は，深刻な農業危機の解決に忙殺されたスルターン＝ムハンマドによって採用された一つの方法 (uslūb) であったとは考えられないであろうか。ジャハーンパナー南壁の両側，とくに南側の区域は，デリー地域における主要な農耕地帯の一部であったと思われる。農業生産の増強を計るための方策を実施するのには適切な場所であり，しかも城壁を堰堤として利用することは，まさにバラニーの記す新しき方法 (uslūb) にふさわしいものではなかったろうか。

ところで，ジャハーンパナーの城壁の造営の年代や現存のサート＝プラの建設年代については，すでに記したように，明確なことはわからない。しかし，さきにふれたように，サート＝プラそのものも，堰堤としてのジャハーンパナー南城壁の造営と同じくムハンマド＝シャーの治世に建設された可能性もある。そして，もし，その建設時期を，上に述べてきたように，スルターン＝ムハンマドがデリーの農業危機克服に努力した時期と推測する場合には，サート＝プラの建設の時期は，742 A.H. 年ごろからそれほど隔たらない時期と推測することもできるかもしれない。しかし，これは，あくまで一つの推論にしかすぎない。この推論がまったく当っていないとしても，すでに述べたことがらに示されているトゥグルク朝時代のデリー地域の農業事情の難しさがこのような水利計画の創出の背後にあったことだけはたしかであるといえよう。

第三節　トゥグルク朝後期における水利政策

1　フィーローズ＝シャー治世の堰堤構築

シャムセ＝シラージュ＝アフィーフ (Shams-i Sirāj 'Afīf) の著『フィーローズ＝シャーの歴史』(*Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*) には，スルターン＝フィーローズの治世における北インド各地の諸都市の建設をはじめ，運河の開さくその他の建設事業や補修作業についての記述がみられる。しかも，「スルターン＝フィーローズ＝シャーが建てたさまざまの建造物について」(Dar 'imārathāī-i gūnāgūn kih Sulṭān Fīrūz Shāh kard) と題する第IV部第11章では，他の史書からはうかがい得ないような堰堤に関する記述が，わずかながらもみられるのである。

このアフィーフの記述については，そのペルシア語原文を脚註に引用しておくが[2]，その前半は，フィーロ

1)　Ẓiyā' al-Dīn Baranī, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, p. 498;　Shams-i Sirāj 'Afīf, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, Persian text ed. by M. Vilayat Husain, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1891, p. 92;　W. H. Moreland, *The Agrarian System of Moslem India*, London, 1936, p. 50.

2)　Shams-i Sirāj 'Afīf, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, p. 330.　なお，荒　松雄，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」，pp. 128–129 を参照.

و از قسم کوشکهای با تکلف چنانچه کوشک فیروزاباد و کوشک نزول و کوشک مهندواری و کوشک شهر حصار فیروزه و کوشک فتح اباد
و کوشک جونپور و کوشک شکار و کوشک بند فتح خان و کوشک سالوره و مقامات دیگر و از قسم بندها چنانچه بند فتح خان و بند
مالجه (که دران مقام پادشاه نیک نام اب زمزم انداخته بود) و بند مهپالپور و بند شکرخان و بند سالوره و بند سهپته و
بند وزیراباد و مانند ان اینچنین بندهای محکم در هر محلی مستحکم کنانیده . . . . .

ーズ＝シャーが北インドの各地に建てさせた「クーシャク」(Kūshak，すなわち宮廷建造物）の名称を列挙したものであり，後半は，「バンド」(Band)，すなわち堰堤と思われる構築物について記したものである。そこに記されている七つの「バンド」の名を列挙すると，つぎのとおりである。

1）　バンデ＝ファトゥフ＝ハーン (Band-i Fatḥ Khān)

2）　バンデ＝マールジャ (Band-i Māljah)

3）　バンデ＝マヒパールプール (Band-i Mahipālpūr)

4）　バンデ＝シュクル＝ハーン (Band-i Shukr Khān)

5）　バンデ＝サールーラ (Band-i Sālūrah)

6）　バンデ＝スィヒパナー (Band-i Sihpanāh)

7）　バンデ＝ワジーラーバード (Band-i Wazīrābād)

ところで，このアフィーフの史書にみえるこれらの「バンド」が，はたして，本報告書で紹介してきたような堰堤を意味するかどうかが，まず問題となるであろう。しかし，この点については，肯定的な結論を出してさしつかえないであろう[1]。また，これらの七つの「バンド」のなかで，デリー地域に現存する堰堤の遺跡に比定し得るものがあることも，荒の考察によって明らかとされている。すなわち，上に紹介した七つの「バンド」のうちの三つは，すでに本編第一章第二節（93ページ参照）で紹介した，トゥグルク朝後期に属すると推定される七つの堰堤のうちの三つに比定し得ると思われるのである。それらの三つの堰堤は，つぎのとおりである。

マールチャ (Malcha) の堰堤〔W. 42〕 → 2）バンデ＝マールジャ (Band-i Māljah)

マヒパールプル (Mahipalpur) の堰堤〔W. 44〕 → 3）バンデ＝マヒパールプール (Band-i Mahipālpūr)

ワジーラーバード (Wazirabad) の堰堤〔W. 41〕 → 7）バンデ＝ワジーラーバード (Band-i Wazīrābād)

これらの三つの堰堤のうち，最初のものを除く二つの堰堤の場合には，それぞれ，まったく同一の名称をもっているが，第一の場合も，マールチャ (Mālcha) は，マールジャ (Māljah) と同じ地名とみてよいであろう。

さて，アフィーフの問題の文中にみえる他の四つの「バンド」，すなわち，1）バンデ＝ファトゥフ＝ハーン (Band-i Fatḥ Khān)，4）バンデ＝シュクル＝ハーン (Band-i Shukr Khān)，5）バンデ＝サールーラ (Band-i Sālūrah)，および 6）バンデ＝スィヒパナー (Band-i Sihpanāh) については，本編第一章で紹介したデリー地域の堰堤の遺跡のいずれかに比定することは難しい。ただ，前記の荒の論考によれば，これらのなかには，なお考察の余地が残っているものもあるのである。まず，5）バンデ＝サールーラ (Band-i Sālūrah) は，アフィーフの史書の他の個所（第II部第5章）に記されているシック (Shiqq) すなわち徴税区の名称から推すと，デリーの西方あるいは西南，西北方のいずれかの地方にあったのではないかと推定される。また，1）バンデ＝ファトゥフ＝ハーン (Band-i Fatḥ Khān) と，4）バンデ＝シュクル＝ハーン (Band-i Shukr Khān)，それに，のこりの 6）バンデ＝スィヒパナー (Band-i Sihpanāh) の三つは，文献を用いる考証や現存遺跡との比較・照合からは，その所在を推察し難い。ただ，一つの推理としては，このうちのバンデ＝ファトゥフ＝ハーンは，問題のアフィーフの文章（前ページ脚註2参照）の前段に列挙された「クーシャク」(Kūshak) すなわち宮廷建造物の名称中に同名のものが記されているところから，現存の遺跡のうちで，クーシャクと呼ばれるにふさわしい建造物が附設されているステーション＝ロードの堰堤〔W. 39〕，ポーリー＝バティヤーリー＝カーマハルの堰堤〔W. 43〕，あるいは故ネルー＝ハウス庭内の堰堤のいずれかに当る可能性がないとはいえない。

1）荒，前掲論文，第IV章所収，「Shams-i Sirāj 'Afīf の記述にみえる堰堤について」(pp. 128-142) を参照.

しかし，これは，この堰堤がデリー地域内にあるものと想定した場合の一つの推論にすぎない。

ところで，アフィーフと並んでフィーローズ＝シャー治世に重要な史書を著したズィヤーウッディーン＝バラニーは，アフィーフが紹介している「バンド」(Band) については，まったく記録を残していない。また，スルターン＝フィーローズ自身の著作といわれている『フィーローズ＝シャーの勝利』(*Futūḥāt-i Fīrūz Shāhī*) も，このスルターンのデリー内外における諸種の建設事業や建造物の再建・補修などについては具体的な名称まであげて言及しているにもかかわらず，堰堤については，まったくふれていない。

ただ，ムガル朝のアクバルの時代に書かれた三大史書の一つとされているカーシム＝ヒンドゥー＝シャー＝フィリシタ (Qāsim Hindū Shāh Firishtah) の『グルシャネ＝イブラーヒーミー』(*Gulshan-i Ibrāhīmī*)，一般には『フィリシタの歴史』(*Tārīkh-i Firishtah*) として知られてきた史書は，スルターン＝フィーローズ＝シャーが50にのぼる「バンデ＝ジューイー」(Band-i jūī) をつくらせたと記しているのである。[1] この語は，「川のほとりの堰堤」，「川に沿う堰堤」と訳し得るであろうか。もっとも，この著者は，それについて，具体的なことや出典については，なにも記してはいないし，この "Band" が堰堤を意味するものかも明らかではない。さらに，彼の記す「50」(Panjah 'abd) という数字が，はたして事実を示しているものかどうかも疑わしい。ただ，さきに紹介したアフィーフの文章には，問題の七つの「バンド」の具体的な名称を並べたあとで，「さらに，その他の類似した堅固なバンド (wa mānand-i ān inchnīn bandhāī-i maḥukm) と記されており (119ページ脚註2参照)，また，われわれが紹介したスルターン＝フィーローズの時代の堰堤は，デリー地域に現存する遺跡のみを対象としてみても，少なくとも八つは数え得るのである。従って，フィリシタの記す「50」という数は，そのまま信用することはできないにしても，当時，デリー以外の北インド各地で行なわれた運河やその他の水利施設，あるいは地方諸都市の建設などの諸事業とあわせ考えてみると，スルターン＝フィーローズ＝シャーの治世に建造された堰堤の数が数十の多きに及んだことも，十分，あり得たというべきであろう。

2　堰堤構築の目的と歴史的背景

フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの水利政策，とくに北インド各地における運河の開さくについては，インド史のなかでも著名なことがらとされている。このスルターンの運河建設については，彼の建設事業に対する個人的な熱意と愛好心とがしばしば強調されるが，前代のスルターン＝ムハンマド＝シャー以来のトゥグルク支配層が採ってきた農業政策の一環として計画・実施された点に注意する必要がある。ただ，運河建設の事業ほどには目立たない堰堤の建設については，これまで，あまり紹介されなかった。

さて，シャムセ＝シラージュ＝アフィーフの史書『フィーローズ＝シャーの歴史』の第II部第17章は，「スルターン＝フィーローズ＝シャー治世の人民の幸わせと楽しさ」(Khūshī wa khurramī-i khalā'iq-i 'ahd-i Sulṭān Fīrūz Shāh) という題で，著者のパトロンであったフィーローズ＝シャーの治績を讃えているが，運河の開さくや水利事業についてもふれている。実際，フィーローズ時代に建設されたと推定される運河の一部は，近代的施設に改変されたものも多いが，今日，なお北インド各地に，そのあとをたどることができるのである。

ところで，スルターン＝フィーローズ治世における運河の開さくについては，ムスリム支配下のインドの農政史の研究に多大の貢献をしてきた W.H. モアーランド (W.H. Moreland) が，耕地の拡張と品種改良を主

1) Muḥammad Qāsim Hindū Shāh Firishtah, *Tārīkh-i Firishtah*, Persian text published by Nawal Kishūr, Lucknow, p. 151.
. . . بنای عمارات و بنای خیر او یافته شد بریں موجب بند جوی پنجاه عدد مسجد چهل عدد . . .

とする農業振興を目的とするものとして，簡単ながら適切に概観している[1]。運河の構築は，いうまでもなく，自然の河川のみにたよっていた水系の拡散を意図したものである。スルターン＝フィーローズの治世の運河構築の一つの目的も，それによって，新しく建設された北インドの諸都市への水の供給を確保することにあった。しかし，運河の開さくによる水利事業が，同時に，農村地域をも対象としていたことは，とくに注目しておく必要がある。この点に関して，W.H. モアーランドが，近代に建設された運河と異なるトゥグルク朝時代の運河の比較的幼稚な点を指摘した上で，それは，現在のパンジャーブ地方にみられるもののように農耕地域に対する精緻な灌漑水系をつくりあげようとしたものではなく，むしろ，雨期の水を利用して農耕地域に人為的氾濫を起こさせる手段とみるべきであると説いているのは，傾聴するに値するものといえよう[2]。また，アリーガル大学のイルファン＝ハビーブ (Irfan Habib) も，ムガル時代における同様な問題にふれた際に，地形の特徴が，人工氾濫によって，雨期の水を耕地へ導入する一種の水脈の如きものを自然につくりあげていたと述べているのは[3]，これまた説得的である。

ところで，フィーローズ＝シャーの時代に農耕地における雨期の人工氾濫が，当時の支配層によっていかにつよく望まれていたかということは，たとえば，アフィーフの『フィーローズ＝シャーの歴史』のなかの一節がよく示していると思う[4]。脚註に引用した文章には，若干の疑問点もないではないが，要するに，雨期 (aiyām-i bar<u>sh</u>akar) には，農村地域において人工氾濫 (sailāb) が望まれたこと，スルターン＝フィーローズ＝シャーの政府が，耕作地における水の氾濫の拡散の程度に大きな関心を寄せ，特別の官を任命して現地を視察させていたこと，さらに，スルターン＝フィーローズが，氾濫の事実を知るとたいへんよろこんだことなどが記されているのである。この著者の父や伯父もそうした役に任じられたことが記されているが，それだけに，当時の支配層の関心のほどがよくうかがえる文章である。おそらく，当時の支配層は，運河の開さくによって一層の効果を期待し得た農耕地における氾濫が，農業生産の増大にいかに有効であったかを十分に知っており，それを，食糧確保と地税徴収という，治安の維持と体制の存続のためのもっとも重要な問題の基盤として，農業政策のなかに巧みに活用していたものと考えられるのである。本巻でしばしばふれてきた堰堤の建設による人工氾濫の企図も，このようなトゥグルク権力の採った農業政策を背景として，理解すべきであろう。

シャムセ＝シラージュ＝アフィーフは，デリーのいかなるバードシャー (Bād<u>sh</u>āh) や他の国の王にくらべても，フィーローズ＝シャーほど建築に熱意を示した支配者は見当らないと述べている[5]。デリー地域のみならず，北インド各地に残る彼の時代の建造物をみると，このことは，パトロンたるスルターンに向けての宮廷文人の追従の言葉として片づけてしまうことはできない。スルターン＝フィーローズの治世における支配層の建設事業に対するつよい関心が，堰堤・水門などの建設事業にも反映したであろうことは，たしかに見過ごすわけにはいかないであろう。

1) W. H. Moreland, *The Agrarian System of Moslem India*, London, 1936, p. 89.
2) W. H. Moreland, *The Agrarian System of Moslem India*, pp. 59-60.
3) Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India (1556-1707)*, Asia Publishing House, 1963, pp. 31-33.
4) <u>Sh</u>ams-i Sirāj 'Afīf, *Tārī<u>kh</u>-i Fīrūz <u>Sh</u>āhī*, p. 130. なお，これについては，荒，前掲論文，pp. 177-179を参照.

چون ایام برشکال درآمدی و بارانها بکمال باریدی از پیش تخت فیروزشاهی بعضی ملوک مخصوص تعین میشدند تا ایشان در کرانهای
هریک جو بگردند و اخبار بیارند که اب سیلاب از کجا تا کجا رسیده بارها درین کردارها پدر و اودر این مورخ از پیش سلطان
فیروزشاه برای این اخبار تعین میشدند تا ایشان در کرانهای هریک جو بگردند القصه چون حضرت فیروزشاه شنیدی که اب سیلاب
جویها جهان تا جهان گرفت و از مغرب تا مشرق رفت بغایت خوش گشتی و در جامه نگنجیدی و اگر مادا دیهی از قریات املاک
خراب گشتی حضرت فیروزشاه چون خسروان صاحب کلاه بااوج جاه برای عهده‌داران تغیر بخشش کردی ・・・・・

5) <u>Sh</u>ams-i Sirāj 'Afīf, *Tārī<u>kh</u>-i Fīrūz <u>Sh</u>āhī*, p. 329.

ところで，この時代につくられた水利施設といっても，井戸やバーオリーの場合には，一部の宮廷区域の内部に建てられたものを除くと，デリー地域において見出し得る遺跡の数は，それほど多くはない。このことは，墓やモスクその他諸種の建造物の数が明らかに増大しはじめるこの時代としては，いささか問題となる点である。思うに，トゥグルク支配層の農業政策の一環として実施された水利建設事業は，具体的には，権力が主体となって行なう運河や堰堤などの大規模な建設事業に集中され，さらに，ムハンマド治世におけるデリー地域の農村の疲弊や住民の疎開やその他の社会的・経済的変動などの影響もあって，中小規模の水利施設の建設が，かえって等閑に附されたとみることもできるかもしれない。また，運河の開さくや水路の開発が進むと，その建設工事の影響によって，一部の地域では，井戸が涸れたりまたは地下水位が低下するという現象が，ずっと後代ではあるが，北インドでみられたという。[1] トゥグルク朝後期における井戸などの中小規模の水利施設の相対的な減少のうらには，あるいは，そうした事情もあったかもしれない。

つぎに，フィーローズ＝シャー時代における堰堤・水門の建設の目的について，建造物の機能と関連しつつ，要約してみたい。しかし，そのまえに，これらの水利施設建設の目的の一つと考えられる狩猟について若干の説明をしておく必要があると思う。インドでは，狩猟は，ヒンドゥー・ムスリムを問わず，古くから支配層が好んで行なってきた主要な競技であり，リクリエーションの一つであった。サルタナット時代のデリーの支配者たちが，好んで狩猟に出かけたことは，同時代の文献が物語っている。ところで，狩猟のための好適な場所の一つは，水辺に近い地域であり，支配層が，人為的に貯水池をつくり，狩猟のための好条件をつくり出すことに努めたのも，十分考えられることである。

スルターン＝フィーローズが狩猟を愛好したことは，アフィーフが，その著『フィーローズ＝シャーの歴史』のなかで，「フィーローズ＝シャーの狩猟について」(Dar bayān-i shikārhāī'-i Fīrūz Shāhī) という一章を設けていることからもうかがわれるところである。[2] ズィヤーウッディーン＝バラニーも，このスルターンの狩猟については，興味ある記述を残している。[3] このような事実に照してみても，この時代における堰堤の建設の目的の一つが，サルタナット支配層による狩猟にあったと推定せざるを得ない。われわれが紹介した堰堤のなかでも，ステーション＝ロードの堰堤〔W. 39〕，ボーリー＝バティヤーリー＝カ＝マハルの堰堤〔W. 43〕，ネルー＝ハウス庭内の堰堤〔W. 45〕，およびマールチャの堰堤〔W. 42〕などは，附近の一帯が，灌木の繁茂している荒れた岩盤地帯で，いわゆるジャンガル (Jangal, すなわちジャングル) と呼ばれるにふさわしい環境で，耕作には概して不適当な土地柄である。しかも，これらの堰堤の場合には，その一部あるいは附近に立派な建物が残っており，いずれも，「マハル」(Mahal, すなわち宮殿) あるいは「シカールガー」(Shikārgāh, すなわちお狩り場) などと呼ばれてきているのである。これらの建造物は，狩猟を楽しむ支配層とその側近のものが休憩や宿泊のため，あるいは小規模の軍兵の駐屯のための役割を果たす建造物であったと考えてよいであろう。なかでも，ステーション＝ロードの堰堤の設けられた地域は，ASIの報告書によれば，かつては，「バンデ＝シカール」(Band-i Shikār) なる地名で呼ばれていたらしい。[4] また，サート＝プラ建設の目的が「シカールガー」をつくることにあったという伝承についてもすでに述べた (本巻61ページ参照)。これらのことがらの真偽はともかく，堰堤の起源が，しばしば狩猟と関連して伝えられてきている点は，やはり注意すべきであろう。

しかし，狩猟の条件の整備は，堰堤構築の一つの目的にしかすぎない。歴史学的見地からすれば，より重

1) Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India*, p. 28 & Note 23.
2) Shams-i Sirāj 'Afīf, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, p. 315.
3) Ziyā'-i Baranī, *Tārīkh-i Fīrūz Shāhī*, pp. 599–600.　なお，これについては，荒，「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤と水門の遺跡について」, pp. 181–182 を参照.
4) *List of Muhammadan and Hindu Monuments*, Vol. IV, No. 139, pp. 70–71.　なお，荒，上掲論文，pp. 39–40 を参照.

要で興味をひかれるのは，これまでもしばしば説いてきた，支配権力による農業政策の一環としての堰堤・水門の建設ということがらであろう。トゥグルカーバードあるいはジャハーンパナーをめぐる諸問題に関しては，上の観点から，本巻でもすでに多くの問題点を記してきた。フィーローズ＝シャー時代の場合には，こうした農業政策のための堰堤建設事業のもっとも典型的な例としては，すでに第一編第八章で詳細に紹介したマヒパールプルの堰堤〔W. 44〕をあげ得るであろう。すでに述べたように，トゥグルク朝前期の堰堤水利計画が，城砦の建造と密接に関連していたと思われるのに対して，トゥグルク朝後期のそれは，規模はずっと小さいが，それぞれ，その目的によって巧みに地形を選定したうえで構築されている点が，とくに注目されるのである。このことは，堰堤が，農業生産に直接にかかわりをもつ水利建造物として農村地域にも定着し，その存在理由を明確にしはじめたことを示しているものともいえる。さらに，建設場所の選定の面でもその範囲が拡大され，また，その機能や建設目的にも，新しい要素がみられるようになった。たとえば，ワジーラーバード南方の堰堤〔W. 41〕および水門〔W. 49〕は，たんに雨水を貯えることに依存したばかりでなく，明らかに，東方のジャムナー川からの引水をも考えたうえで構築されたものであろう。

これを要するに，トゥグルク朝後期における堰堤および水門の建設は，ほぼ，つぎのような目的をもって建設されたものと考えられる。すなわち，

1）集水・貯水によって人工氾濫を結果させ，その効果によって一定地域の農業生産力の増大を計る。
2）貯えた水を，適時，反対側の地域に導入し，灌漑用水として用いる。
3）日常生活の必要のための水の確保。
4）狩猟のための条件と環境の整備。
5）避暑，あるいは風光の観賞。

最後に，これらの堰堤・水門の建設者の問題に，一言だけふれておきたい。これについては，つぎの第四章で考察するが，トゥグルク朝後期に建設されたと思われるデリー地域現存の堰堤施設の全部あるいはその大部分が，スルターンを頂点とするサルタナット中央権力によって建造されたものと考えられる点をここに述べておきたい。このことは，次章で述べるように，地方権力者や共同体によって建造されたものもあると思われる井戸やバーオリーその他の中小規模の水利建造物の場合と対比される点である。堰堤の建造は，明らかに支配の貫徹と体制の存続のための基盤としての農業生産の増大を計るために，権力者によって計画・実施された支配政策の具体的な方策である。同時に，防衛や水の確保という現実の要請，さらに，風光の観賞や狩猟のための環境作りというような奢侈的な目的が認められる点に，われわれは，中世インドの支配層の性格の一端をかいま見る思いがする。

3　ワジーラーバード・マヒパールプルの堰堤水利計画

前項においてすでに述べたように，スルターン＝フィーローズ＝シャーの治世を中心とするトゥグルク朝後期においては，雨期における降雨によって平坦地にひき起こされる氾濫がその土地を肥沃なものとし，農業生産力の増大をもたらすものと考えられていた。従って，このような氾濫を人工的にひき起こすために，附近一帯の自然地形を利用して堰堤・水門を構築し，あるいは運河を開掘することが当時の農業振興のための水利計画の中心的テーマをなしていたのである。われわれは，すでに第一編第七章および第八章において詳細にとり扱ったワジーラーバードの水門・堰堤ならびにマヒパールプルの堰堤が，このような人工氾濫をひき起こすことを目的として構築された，もっとも代表的な水利施設であったと考えるものである。そこで，

本項においては，これらの堰堤ならびに水門について，これと関連する水利計画の実態を復原的に考察してみよう。

まず，ワジーラーバードにおいては，2段の流水コントロール装置をもつ水門と，九つのスパンをもつ長い橋とが南北に並んで存在しており，この橋の下には，古い時代に溯るものと思われる運河がほぼ東西に走っている（挿図34）。また，橋と水門とを結ぶ線を北に延長したところには，自然の低い岩盤地帯があって，その一角に，堰堤らしい構築物が認められた。水門の北西には，この岩盤地帯を東の端とし，上述の運河を南の端とする広大な平坦地が広がっていて，この平坦地は，現在でも，農地として利用するのに恰好な土地であるように見受けられた。一方，橋と水門とが構築された地点の東方には，ジャムナー河が北から南に向って流れており，上述の運河は，橋の東方約300メートルの地点でこのジャムナー河に合流する（68～71ページ参照）。

さて，われわれは，ワジーラーバードの水門をとりまく以上のような環境を考慮しつつ，この水門の機能およびその役割を明らかにするために，まず，橋の西方にあたる運河部分の北岸に沿って，かつて，堤防様のものが構築されていたことを推測し，橋は，堤防の南側を走る運河の水流に関連し，水門は，堤防の北方にひろがる平坦地における水の動きと関連するものと考えたのである。結局，ワジーラーバードの水門は，その北西にひろがる平坦地に貯水し，そこに人工氾濫をひき起こすことによって，この平坦地を肥沃な耕地とし，もって農業生産力の上昇をめざすものであったと推論されたのである。

ところで，ワジーラーバードにおいては，この平坦地に人工氾濫をひき起こすために，デリー西方一帯の地域に降った多量の雨水を集めてこの平坦地の南側を東流し，やがてジャムナー河にそそぐ運河の水を，橋の地点からかなり上流側においてこの平坦地に積極的に取り入れていたものとわれわれは推定したのである。すなわち，この平坦地における人工氾濫を目的とする水利計画は，遠方の広い地域から運河によって運ばれてくる雨水を利用するところにその中心的テーマがあったのである。従って，この場合，運河の役割は，一般に考えられているように，灌漑用の水を農耕地に系統的に配分することにあったのではなくて，むしろ，雨期に降った雨水を集めて農耕地域に人工氾濫を起こさせることにあったと考えられるのであり，この点についてはすでにW.H. Morelandも指摘しているところである[1)]。なお，われわれは，第一編第七章第二節において，平坦地への取水の問題と関連して，他に，氾濫時におけるジャムナー河からの逆流水の取り入れという仮説についても述べたのであるが，このような仮説は，より現実性にとぼしいものと考えている。

一方，マヒパールプルの堰堤は，ワジーラーバードの水門の場合と比較して，かなり異なった自然条件のもとにあったのである。すなわち，この堰堤は，マヒパールプル部落の東にひろがる平坦地の，西と南とをとり囲むように構築されているが，この平坦地は，その北側と東側とにおいて，広い丘陵地帯に直接つづいており，丘陵地帯に降った雨水は，自然の傾斜に従って，ただちに，この平坦地に流れ込むようになっていた（挿図41）。すなわち，この平坦地は，ワジーラーバードの平坦地と比較して，もっと直接的に水を得易い位置にあったのであり，また，この隣接する丘陵地帯から直接流入する雨水によって，容易に，かつ十分に人工氾濫を起こすことができたと考えられるのである。従って，ここでは，運河のような水利施設を必要としなかったであろう。この結果，マヒパールプルにおいて実施された水利計画は，より単純な内容をもつものとなったのである。

以上，われわれは，サルタナット時代中期の後半に建設された二つの堰堤・水門について，その水利計画

1)　W.H. Moreland, *The Agrarian System of Moslem India*, London, 1936, pp. 59–60.

の概要を述べてきた。この二つの堰堤・水門は，同じく，平坦地における人工氾濫を目的として構築され，農業振興をめざす水利施設であったのではあるが，それらがおかれた自然条件の相違によって，その水利計画の内容は，かなり相違したものとなったのである。すなわち，マヒパールプルにおいては，隣接した丘陵地帯から直接流れ込む雨水を利用した計画であったのに対し，ワジーラーバードにおいては，遠方の広い地域から運河によって運ばれてくる雨水を利用するところに水利計画の核心があったのである。すなわち，前者は，より単純な内容をもっており，後者はより複雑な構成のものである。また，前者の計画においては，それが自然的条件に，より多く依存する性質のものであるために，限られた場所に，狭い範囲で実施されるにすぎないのに対し，後者の計画によれば，広大な平坦地において，しかも大規模に水利事業を行なうことができたと考えられるのである。

第四章　サルタナット時代の水利施設に関する歴史的諸問題

第一節　地域的分布と建設場所

1　地域的分布と時代的消長

サルタナット初期に建設されたと思われる水利施設の遺跡は，挿図46（本巻86ページ）にうかがえるように，サルタナット最初の奴隷王朝の支配の拠点となった旧ラーイー＝ピトーラー城砦の周辺とその南方の区域に見出すことができる。ただ，そのはるか東北方，現在のニューデリーのニザームッディーン＝ウェスト地区に一つのバーオリー〔W. 19〕が建設されているのは，奴隷王朝の末期に，この地区の東方のキーロークッリー（Kilūkhrī）という地に支配層の居住地が発展し，この地域が王朝支配のなかに包摂されつつあった事実と関連するものかもしれない。また，このバーオリーの建設を，サルタナット初期から中期にかけて活躍したシェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤーの宗教活動に関連するものとみることもできる（88ページ参照）。いずれにせよ，この飛びはなれたバーオリーの存在は，それだけの歴史的背景をもつものといえるのである。

デリーにおけるムスリム支配成立前に建設されたと推定される貯水池や堰堤が，この旧ヒンドゥー城砦の内外の地，あるいはそのはるか東南方の岩丘地帯内に残っているのは（本巻18ページ参照），ムスリムのデリー征服前におけるラージプート王権の拠点の位置から考えると当然のことである。また，奴隷王朝およびハルジー朝時代につくられた二つの大貯水池，シャムシー＝ターラーブ（Shamsī Tālāb）と，ハウゼ＝アラーイー（Ḥauẓ-i 'Alā'ī）すなわち今日のハウズ＝ハース（Hauz Khas）も，それぞれ，これらの王朝の都城であった旧ラーイー＝ピトーラー城砦とシーリー城砦の城外近傍の地に建設されたもので，とくに後者の位置は，ハルジー朝に入ってからの首都デリーの北方への発展を示すものといえよう。

サルタナット中期に建設された井戸やバーオリー，あるいは堰堤・水門も，その建設された場所の地域的分布をたどってみると，この時期の王朝権力の動向，とくに度重なる城市の造営・移動という歴史的背景をよく反映している（本巻89ページ，挿図47参照）。すなわち，トゥグルク朝初期におけるトゥグルカーバード大城市の建設は，すでに本巻の随所でふれたように，ニューデリー東南方に残るこの巨大な城砦の内外の地に，さまざまの水利建造物を残すことになった。トゥグルク朝時代には，ムハンマド治世の後半にジャハーンパナー城市の建設が行なわれ，さらにスルターン＝フィーローズの治世に入ると，フィーローザーバードの造営がはじまった。デリー地域における新都の造営や都市区域の拡大によって，デリーの支配層や一般住民，あるいは近隣の農村地域に住む地方的権力者や地主層，さらに農民たちの生活と行動の範囲にも，著しい変動がみられた。とくに，トゥグルク朝後期のフィーローズ＝シャーの治世には，前期には城砦・城壁と関連してしか建設されなかった堰堤が，独立して設けられるようになったのである。これらの堰堤は，中央政府の農業政策とも関連しつつ，そのイニシアティヴのもとに建設されたもので，ときに離宮あるいは屯営と思われる建造物をともないながら，主としてデリー＝リッジに沿いつつ，デリー地域の南北に及ぶ各地に散在して建設されたのである。こうして，トゥグルク朝時代には，南はトゥグルカーバード大城砦の南方地域か

ら北は遠くワジーラーバード南方の堰堤の遺跡にまで及ぶデリーの広範な地域にわたって，さまざまな水利施設が建設されるようになっていったのである。サルタナット中期にみられるこのような水利施設の建設地域の著しい拡大という事実は，サルタナット時代につくられた他の建造物，すなわち墓建築や墓地またはモスクをはじめとする諸種の宗教施設の場合にもあてはまることである。ただ，サルタナット中期に，中規模の堰堤が，デリー＝リッジに沿う区域とその近傍の南北にわたる諸地域につぎつぎに構築されたという事実は，水利建造物の種類の消長と地域的分布のいずれの面からみても，サルタナット時代の水利施設建造の歴史的変遷のなかで，もっとも特徴的なことであったということができよう。

すでに述べたように，明らかにサルタナット末期に属すると思われる堰堤は，われわれの調査した限りにおいては認められなかった。しかしながら，井戸およびバーオリーに関しては，この時代に属するものと推定される中小規模の遺跡が，デリーの諸地域にわたって見出されるのである（本巻95ページ，挿図48参照）。このことは，トゥグルク朝時代のデリー諸城市の拡大と変遷のあとにあらわれたサルタナット末期の二つの王朝権力のおかれた歴史的状況を，そのまま反映しているものということができよう。

2　水利施設の建設場所

サルタナット時代に属する諸種の水利施設のなかで，堰堤の場合には，その特殊な機能と建設目的からして，その建設の場所にも，当然，一定の限界が認められる。それに関連して，とくに注目されるのは，城砦あるいは城壁の造営に際して，その附近の自然条件とくに地勢に応じて，その城壁の一部を直接あるいは間接に利用しながら，堰堤・水門を構築した場合である。そのもっとも適切な例は，トゥグルカーバード城砦南方地域に建設された堰堤および水門と，城壁を堰堤として用い，その一部に大水門（サート＝プラ）をもつジャハーンパナー南城壁の場合とである。もっとも，これらの場合には，堰堤・水門の構築は，城市の造営と関連して計画されているので，水利施設としての独自な場所の選定にも限界があったと思われる。

これに対して，同じデリー地域に設けられた堰堤でも，トゥグルク朝後期に建設されたものは，その構築場所をかなり自由に選定しているようである。もちろん，これらの堰堤は，いずれもデリー＝リッジに沿って設けられたものが多く，このリッジとその近辺の地形の特殊性を，巧みに，また有効に利用している。すなわち，ワジーラーバードの堰堤〔W. 41〕，デリー大学構内の堰堤〔W. 40〕，ボーリー＝バティヤーリー＝カーマハルの堰堤〔W. 43〕，マールチャの堰堤〔W. 42〕，ネルー＝ハウス庭内の堰堤〔W. 45〕，ステーション＝ロードの堰堤〔W. 39〕，およびマヒパールプルの堰堤〔W. 44〕は，挿図47（本巻89ページ参照）によって明らかであるように，オールドデリーからニューデリー中心地域の西側を北北東から南南西に走っているデリー＝リッジに沿って，その丘陵上またはその外縁部，あるいはリッジからほど遠からぬ地点に建設されているのである。堰堤構築の諸目的の実現のために，デリー＝リッジあるいはその近辺の地域は，もっとも好適な条件を備えており，この地を選んで利用したトゥグルク朝後期の計画立案者の着眼は，すぐれたものといわざるを得ない。

堰堤の建設が，一定の地理的条件や自然的環境の制約を受けるのに対して，井戸およびバーオリーの場合には，その建設場所の選定において堰堤ほどの難しさはない。もちろん，本巻の序論で述べたように（10～11ページ），近代においては，デリー地域における井戸の建設に関する限り，ジャムナー川の河岸に近い，いわゆるクハーディル（Khādir）の地域では容易であるが，台地すなわちバーンガル（Bāngar）の地域ではより困難であるといわれている。これは，くり返すまでもなく，地質および地下水系とその水位などの諸条件の差に

よるもので，サルタナット時代にもあてはまることである。従って，デリー地域においては，井戸あるいは井戸をもつバーオリーが，リッジや南方の台地の地域に少なく，一般に，それらに囲まれた平坦地の方に多く見られるのも，こうした諸条件を考えてみれば，当然のことがらといえよう。

ところで，デリー地域に現存する井戸とバーオリーの場合，遺跡が存在している場所の現在の環境から，その水利施設が建設された当初の環境を推定するのは，遺跡によってはきわめて難しい場合がある。われわれが「遺跡総目録」のなかに収録した井戸のうち，その現存場所から，直接，当時の支配層との関連を明らかにし得るものは，トゥグルカーバードの貯水井戸〔W.15〕，ピール＝ガーイブ西南の井戸〔W.16〕，およびフィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸〔W.17〕の三つであり，そのいずれも，トゥグルカーバードあるいはフィーローザーバードの宮廷内，あるいはそれとの関連において建造されたものである。また，トゥグルカーバード城砦内の円井戸Iから同円井戸VIに至る六つの井戸は，いずれも，トゥグルカーバード城砦内の都市区域内に分散して建設されたもので，明らかに，トゥグルカーバード大城市の住民の飲料その他日用のためのものであったことが，その建設場所からも推定されるのである。

上にあげたような特殊な場合を除くと，農村地帯に建設された可能性が考えられる井戸とバーオリーには，つぎの諸遺跡があげられよう。

スルターンプルの円井戸〔W.1〕；　ラール＝クワーンとして知られた井戸〔W.13〕；
ハウズ＝ラーニー東南のバーオリー〔W.21〕；　トゥグルカーバード西北のバーオリー〔W.23〕；
トゥグルカーバード西南のバーオリー〔W.24〕；　スルターンプル南方のバーオリー〔W.25〕

もっとも，このうちで最初にあげたスルターンプルの円井戸は，歴史碑文をもっており，それによると，この井戸と関連してモスクが建てられたようである。また，すでに述べたように，別の推察も可能である(23～24ページ)。従って，この井戸は，つぎの分類に入れた方がよいかも知れない。

都市の居住区域内またはその近傍，あるいは，墓やモスクその他の宗教施設などとの関連において建設された可能性の多い井戸とバーオリーとしては，つぎのものがあげられよう。

円井戸〔W.8〕；　円井戸〔W.9〕；　円井戸〔W.10〕；　チャーヘ＝ハースとよばれた円井戸〔W.11〕；　グリーン＝パークの円井戸〔W.12〕；　ラードー＝サラーイーの円井戸〔W.14〕；　ガンダク＝キ＝バーオリー〔W.18〕；　ニザームッディーンのバーオリー〔W.19〕；　モラーダーバード北方のバーオリー〔W.20〕；　チョール＝ミーナール南方のバーオリー〔W.22〕；　ラージョーン＝キ＝バーイーン〔W.26〕；　バスティー＝バーオリー〔W.27〕；　ムバーラクプル＝コートラのバーオリー〔W.28〕；　ワジールプル＝カ＝グンバッド南方のバーオリー〔W.30〕；　アードチーニーのバーオリー〔W.31〕；　ラーイー＝ピトーラー南城壁北方のバーオリー〔W.33〕；　カダム＝シャリーフのバーオリー〔W.34〕

もちろん，ここで試みたような分類は推測にしかすぎない。もっとも，このうち，チャーヘ＝ハースと呼ばれた円井戸〔W.11〕は歴史碑文をもっており，その内容から，この井戸の水が飲用に用いられたことがわかるのである。しかし，多くの場合には，正確なことはほとんど断じ得ないというべきであろう。ただ，井戸やバーオリーの建設場所は，いうまでもなく，その建設目的や用途に応じて，選ばれるものである。従って，場合によっては，今日残存している遺跡から，逆に，その水利施設の建造された時代におけるその場所や地域の歴史的環境を推測することも，ある程度は可能なのである。そうした点を考えてみると，現存する水利施設の遺跡が，デリーの歴史地理に関する諸問題を明らかにするための重要な資料たり得ることを，改めて認識させられるのである。

第二節　水利施設と政治・社会

1　建設者としての政治権力

すでに本巻でもしばしばふれたように，デリー地域に現存するサルタナット時代の堰堤・水門の遺跡に関する限り，碑文の残存していた例はまったくなかった。従って，歴史碑文を手がかりとしてその建設者を明確にすることは，不可能である。しかしながら，前章で述べたように，一部の堰堤については，同時代の文献史料の記述内容によって，その建設者を知ることができるのである。また，これらの堰堤・水門のなかには，支配層が構築した城砦や城壁を，直接あるいは間接に利用しているものがあり，その場合には，その水利施設が，それらの城砦あるいは城壁を建造，もしくは後代に利用ないしは補修した権力者によってつくられたことが，容易に推定し得るのである。一方，中小規模の井戸やバーオリーに関しても，その遺跡の現存する環境や建設場所についての歴史的背景を考察することによって，それらが，ときの中央権力によって建造されたことが推定される場合もあり得る。フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸〔W. 17〕や他の少数の大型貯水井戸の場合〔W. 15, W. 16〕などは，その適例といえよう。もっとも，井戸のなかには，歴史碑文が残存していて，建設者に関するある程度の推測が可能な場合がある。たとえば，チャーヘ＝ハースと呼ばれた末期の井戸〔W. 11〕の例などは，碑文の内容から，当時の支配層によって建てられたことが，ほぼ明らかにし得るのである（97ページ参照)。

さて，貯水池あるいは運河などの水利施設がときの権力者の手によって建造されたことは，同時代の文献あるいは後代の伝承がしばしば伝えているところである。奴隷王朝時代のシャムシー＝ターラーブ（<u>Sh</u>amsī Tālāb)，あるいはハルジー朝時代のハウゼ＝アラーイー（Ḥauẓ-i ʻAlā'ī）すなわち現在のハウズ＝ハースの如きはその一例であり，また，トゥグルク朝のスルターン＝フィーローズが運河の構築に熱意を示したことは，本巻の随所で，しばしば言及したところである。このように，一部の中小規模の井戸やバーオリーなどの水利施設を除くと，デリー地域に現存する水利施設のうち，堰堤・大貯水池など大規模な建造物には，ときの中央権力によって建設されたものが多かったといえるのである。

ところで，中央権力によって建設された水利施設のなかで，現実の政策と関連するところがもっとも大きかったのは，堰堤である。とくに，トゥグルク朝時代におけるトゥグルカーバード城南の堰堤や水門，あるいはジャハーンパナー南城壁の堰堤化は，すでに詳述したように，当時の支配層がおかれていた特異な政治・経済の状況のなかで計画・実施されたものであり，同時に，支配層自体のさまざまな必要をも満たすために建造されたものであった。もし，ジャハーンパナー南城壁を利用した水利計画が，ムハンマド＝トゥグルク治世の後半における農業危機克服の方途の一環として実施されたものとすれば，ときの中央権力が，政策上の意図から水利計画を重視したことを示す具体的な例として，とくに注目に値するものといえよう。

トゥグルク朝前期における堰堤の構築のさまざまな効用をみずからの目で確認したと思われる次代のスルターン＝フィーローズ＝シャーの時代に，デリーの各地に堰堤が建造されたことは，当時の支配層が，水利施設の建設を一層重視していったことを示すものである。一面において，狩猟や観光など支配層自体の奢侈生活の充実を目的としていたとはいえ，この時代の堰堤建設が，農業生産の上昇を主要な目的とし，それによって，前代以来の経済危機と社会不安の原因をとり除くことを計って，支配の存続に資することをねらいとしたことは，すでに説明したところである。もちろん，水利施設の建設も，他の建造物の場合と同じよう

に，スルターンや支配層に属する個人の，建築への愛好の度や建設事業に対する意欲や関心にかかわるところも多かった。しかし，同時に，それが，社会秩序の安定を求める権力の側の支配政策の一環として実施された点に，われわれは，とくに注目しておきたいのである。

2　中小水利施設と建設者の問題

支配権力のイニシアティヴのもとに建設された堰堤や貯水池などと異なって，中小規模の井戸やバーオリーの建設には，スルターンや支配層が，直接に関与していない場合も多かったと思われる。すでに紹介したトゥグルカーバード城砦内のいくつかの井戸の場合は別として，デリー地域に散在するサルタナット時代の井戸のなかには，おそらくは，地方的な権力者ないしは地主によって建設されたものも多かったのではないかと思われる。

ところで，バーオリーの遺跡の場合には，歴史碑文を備えている例は皆無であったが，井戸の場合には，三つの歴史碑文が見出されている。その一つに，スルターンプルの円井戸〔W. 1〕がある。この場合には，その碑文の一部に，サーリフ＝ムゥタマド (Sālih M'utamad) なる名が読みとられるのであるが，これが，ASIの報告書もいうように，あるいは，この井戸の建設者の名かも知れない (本巻23ページ参照)。もしそうとすれば，この建設者は，多分，地方的権力者か，または地主だったのではあるまいか。

さて，こうしたことは，井戸の場合よりははるかに多くの資材や労働力を必要とした中小規模のバーオリーの場合にもあてはまるであろう。バーオリーの場合には，歴史碑文を備えている遺跡はないのであるが，たとえば，推定し得る一つの例として，モラーダーバードのバーオリー〔W. 20〕をあげてみたい。現在，このバーオリーの附近には，明らかに防衛的な手段を施した囲壁の遺構とともに，モスクその他の建造物が残っており，この囲壁内の区域は，おそらくは，地方的権力者ないしは大地主の拠点だったのではないかと推定されるのである (第一巻，図版31，挿図7を参照)。このバーオリーは，すでにふれたように，デリー地域現存のバーオリーの遺跡のなかでは最大の規模をもつものであるが，その形態や構造上の特徴からみても，小城砦風の囲壁内のトゥグルク朝時代のものと思われる建造物と関連して，ほぼ同時代につくられたものと推定されるのである。おそらくは，この小城砦の居住者によって，その日用の必要を充たすべく，また，同時に農業用水にも利用するために建造されたものとみてよいであろう。デリーの中央権力によって直接建てられたものではなく，地方的権力者によって建造された水利施設の一つの例と推定したい。

さて，地方権力者ないしは地主層による水利施設の建設は，その勢力範囲内での彼らの支配の貫徹と権威の存続の手段として有効なものであったろう。水は，およそ人間の日常生活に必要不可欠のものであり，水利施設は，飲用をはじめとする日用の需要から，宗教あるいは農業にもかかわりをもつ公共建造物たる性格をもっている。これらの水利施設の建設は，直接，宗教施設に関連をもたない場合でも，ムスリムとヒンドゥーたるとを問わず，彼らの宗教的義務や民衆への奉仕の顕現たる善行として，建設者自身を満足させ，同時に，民衆に対する彼らの権威や社会的評価を高める手段ともなったのである。

ところで，中小の水利施設，とくに井戸やバーオリーが，部落や村落の成員による共同的な事業として建設されたこともあったであろう。飲料や日用の水の供給源，あるいはその手段としての水利施設は，さまざまな社会集団によって共同に利用されることが多く，また，一部のヒンドゥー＝カースト集団では，他の集団による使用を認めない場合もあった。従って，一定の集団が，共同に建設したことも，当然，推測し得るところである。首都デリーとその周辺の農村地帯は，多くの消費人口をかかえていたから，他のインドの農

村諸地域にくらべて，農業生産力においても，また農民の生活水準においても，決して低くはなかったとみてよい。これらの農村地域の水利施設が，村民の集団的意志に基づき，資金と労働力とを共同に運用することによって建設された場合も，なかったとはいえまい。こうした場合，その集団がヒンドゥーであったときは，村落パンチャーヤットやカースト＝パンチャーヤットなどの指導と主体性とにおいてイニシアティヴがとられ，建設作業が実行に移されたこともあったにちがいない。ただ，デリー周辺地域の村落は，弱小政権の時期を除くと，サルタナット中央権力のもとに，それに従属する地方権力者や地主層によって掌握されていた場合が多かったと思われるので，直接，村民の手による集団的な事業としてよりは，これらの中小実力者個人のイニシアティヴによる建設の方が，一般的であったとみる方が当っているかもしれない。

第三節　水利施設と宗教

1　宗教施設と水利建造物

本巻で研究の対象とした水利施設のなかで，堰堤・水門は，直接，宗教と関連をもつ性格のものではないが，井戸およびバーオリーは，ときに宗教施設と密接な関係をもつ場合がある。

ヒンドゥーの場合と同じように，ムスリムの宗教的儀礼や慣習においても，水は，重要な役割を果たすものであり，とくに，モスクにおける礼拝のまえに行なわれる浄法では，通常，水が用いられてきたことが多い。また，ムスリムの墓や聖者のダルガーあるいは公共のモスクをはじめとするさまざまな宗教施設，とくにスーフィーのハーンカー (Khānqāh) への信徒の出入がさかんになると，そこに集まるムスリムにとっての，飲用・調理その他日常の世俗的な用途のため，それらの施設に専用の水源をもつ必要が生じる場合もあった。このように，スーフィーズムの盛行，宗教施設の拡大・発展とともに，井戸やバーオリーなどの中小水利建造物が，ダルガーや宗教施設に附設されるようになったことは，デリー地域においても想像するに難くない。

こうした場合にも，その井戸やバーオリーが，だれによって建設されたかということが問題となろう。それには，ムスリム宗教者自身，あるいは彼らを中心とする宗派や教団に属するものによって，またはスーフィー聖者の弟子ないしは崇拝者たちによって建てられるなど，さまざまな場合があったであろう。しかし，ここでも，ときの支配層に属するものが，みずからの信仰から著名な宗教者に傾倒した結果，あるいはその宗教権威と社会的影響力とを利用しようとして，その宗教者のダルガーや他の宗教施設に，モスクや他の建造物と同じように，水利施設をも寄進するといったことが行なわれていたのではあるまいか。デリー地域の著名なダルガーの周辺の建造物群を調べてみると，そうしたことがしばしば行なわれていたらしいことが推察できるのである。

宗教施設に関連ある井戸やバーオリーなどの場合，その建設が，宗教者自身の手によって行なわれたように伝えられてきた場合も，ときには認められる。しかし，ダルガーや聖地に残っている建造物については，その建設当時の歴史的事実にかわって，さまざまな逸話が後代になってつくり出される場合が多いことを考慮する必要があろう。宗教的権威の存続のために，その権威の根源たる人物，あるいはそれにまつわる事物や現象が，伝承や説話として次第に拡大・誇張されてゆき，やがて信徒間においてはそのまま事実として信じられてゆくという傾向は，多くの宗教組織や教団の活動の場合にみられることである。デリーの水利施設の場合にも，たとえばニザームッディーンのバーオリー〔W. 19〕を例にあげれば，後代のさまざまな文献が，その建造に関するできごととして，スルターン＝ギヤースッディーン＝トゥグルクとシェイフ＝ニザームッ

ディーン＝オーリヤーとのあいだの対立関係や，それにまつわるさまざまの超自然的な事象について記していることが指摘されよう。[1] たしかに，ハルジーおよびトゥグルク朝の支配者たちと，この高名なスーフィーの指導者とのあいだには，この聖者の思想的立場あるいは世俗的権力と宗教権威の関係をめぐって，なんらかの対立関係があったことは，歴史的にも認め得るところである。従って，この聖者のゆかりの地に建設されたバーオリーに，それにまつわるさまざまな説話が生み出されたのも理由のあることである。ただ，それらを歴史的事実としてそのまま受け入れることは誤りである。[2]

ところで，宗教施設に附設された水利建造物の例としては，井戸の場合，たとえば，二つの円井戸〔W.8およびW.9〕をあげ得るであろう。一方，バーオリーの場合には，初期のガンダク＝キ＝バーオリー〔W.18〕，ニザームッディーンのバーオリー〔W.19〕の場合にはやや問題はあるにしても，末期に属するラージョーン＝キ＝バーイーン〔W.26〕をはじめとして，バスティー＝バーオリー〔W.27〕，ワジールプル＝カ＝グンバッド南方のバーオリー〔W.30〕，あるいはアードチーニーのバーオリー〔W.31〕，さらに，現在では，円井戸の部分の石片の一部しか認められないカダム＝シャリーフのバーオリー〔W.34〕などの場合は，そのもっともよい例として指摘できよう。

2　水利施設の建設者と宗教

さて，地方権力者ないしは地主層によって建造された水利施設の場合，その建設者がムスリムであったかあるいはヒンドゥー教やジャイナ教その他の信徒であったかという問題が，なお，残されている。すでにあげたいくつかの井戸の例のように，碑文の存在によって，その建設者が明らかにムスリムであることがわかったり，あるいはその水利施設がイスラームの宗教施設と関連して建造されているような場合は別として，水利施設が，世俗的な目的と効用のために建てられている場合には，建設者は，必ずしもムスリムとは限らなかったであろう。実際，この問題については，デリー地域とその周辺において，ヒンドゥー教徒によって建設されたと推定されるいくつかの井戸の例を指摘することができるのである。

現在，レッド＝フォート内のデリー考古博物館に，いずれもデリー地域あるいはその周辺の井戸に備えられていたという，４枚のサンスクリット語の碑文が保管されている。[3] これらの碑文の内容を一々ここに紹介する余裕はないが，それらは，奴隷王朝のスルターン＝ギヤースッディーン＝バルバン（Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban），ハルジー朝のスルターン＝ジャラールッディーン＝フィーローズ＝シャー（Sulṭān Jalāl al-Dīn Fīrūz Shāh）の名とそれぞれの治世の年月日を記すもの各１枚，およびトゥグルク朝のムハンマド＝シャーの名とその治世の年月日を記すもの２枚で，日付は，いずれも，ヴィクラマ（Vikrama）暦で記されている。井戸の建設を伝えるこれらの４枚の歴史碑文の存在は，サルタナット時代のデリー地域とその周辺地区の井戸のなかに，ヒンドゥー教徒の手によって建設されたものがあることをはっきりと証拠立てるものとして，重要な意味をもつものといえよう。それぞれの井戸の建設者がいかなる人物であったかは，碑文の内容からは必ず

1)　荒 松雄，「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」，pp. 23-24.

2)　荒 松雄，「ムスリム支配成立期における政治権力と宗教」，松井透・山崎利男編，『インド史における土地制度と権力構造』，1969年，pp. 138-139.

3)　*Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology* (*Founded in January*, 1909), compiled by J. Ph. Vogel, Calcutta, 1908, B. 3～B. 6, pp. 2-3.　その解説，サンスクリット原文および英訳については，同書，III (Cat. No. B, 3), Sanskrit Inscription of the reign of Ghiyāṣu-d-Dīn Balban and of the Vikrama year 1337 (A. D. 1280 or 1281), pp. 18-28 ;　IV (Cat. No. B, 4), Sanskrit Inscription of the reign of Jalālu-d-Dīn Khiljī and the Vikrama year 1347 (A. D. 1291), pp. 28-29 ;　V (Cat. No. B, 5), Sanskrit Inscription of the reign of Muḥammad Tughlaq and of the Vikrama year 1384 (A. D. 1327), pp. 29-33 ;　VI (Cat. No. B, 6), Sanskrit Inscription of the reign of Muḥammad Tughlaq and of the Vikrama year 1384 (A. D. 1328), pp. 33-37.

しも明らかではないが，彼らが，あるいは富裕な人物であったり，あるいは商人をその祖先にもつものがあったり，あるいはバラモン階層に属することがはっきりと記されていることなどから，彼らは，いずれも，地方権力者ないしは地主ではなかったかと思われるのである。なお，これらの井戸の建設が，碑文の示す限りでは，建設者やその祖先の至福のためであり，その効用は，旅行者によい飲料水を与えることにあるとしていることにふれておきたい。

さて，バーオリーの場合には，デリー地域においては，上に紹介した井戸のような例は一つも見出すことができない。しかし，すでに本巻でもふれたウガル＝サインのバーオリー〔W. 29〕(第一巻，図版133c参照) については，かつて，バシールッディーン＝アフマド (Bas͟hīr al-Dīn Aḥmad) が，ヒンドゥーによる建設説を主張したことがあり[1]，「ヒンドゥー教徒のなかには，自己の幸福を願って」このような建造物を建てるものもあり，「慈善行為においては，彼らは宗派的な区別も意に介さない」と述べている。また，1910年代のインド考古調査局の報告書においても，事実上の執筆者と思われるザファル＝ハサン (Zafar Hasan) が，積極的とはいえないにしても，ヒンドゥーによる建設を示唆しているように思われる。しかし，このバーオリーに関する限り，その建設者の宗教の区別は，結局は，明確にはし難いであろう[2]。しかし，さきの井戸の場合と同じように，ヒンドゥー教徒や，イスラーム以外の他の宗教の信徒によって建設されたものがあったとしても，決して不思議ではない。墓建築やモスクなどにみられるような，ムスリムの場合にしかみられない文字碑文や文様が残っていればともかく，デリー地域の水利施設の場合には，そうした例は，ガンダク＝キー＝バーオリー〔W. 18〕やラージョーン＝キー＝バーイーン〔W. 26〕などの一部の場合を除くと，ほとんど，見当らないのである。また，このような場合に，アーチ型の様式やドーム天井を，すべてムスリムによる建造を裏付けるものと考えてしまうのも，サルタナット時代の建造物の総体的な様式の変化と発展とを考えると，必ずしも正当とはいえないであろう。

しかも，井戸はもちろん，とかくムスリムによる建造物と考えられ易いバーオリーの場合にも，デリー以外の地方には，明らかにヒンドゥーあるいはジャイナ教徒によって建設された遺跡が残っているのである。ここでは詳しいことを述べる余裕はないが，さしあたり，グジャラート地方の歴史的都市アフマダーバード (Ahmadabad) に残る二つの大規模なバーオリーが，ヒンドゥー教徒によって建造されたものであることにだけふれておきたい[3]。この二つの遺跡の存在によって，バーオリーが，ムスリムの影響のものではじめて建造された水利施設であるのか，またはムスリムの影響にはかかわりのない建造物であるのか，必ずしも明瞭にし難いことが指摘されるのである。本巻では，バーオリーの建造に関するヒンドゥーあるいはムスリム起源説については結論をさしひかえたいが，バーオリーも含めてデリー地域における中小水利施設のなかには，イスラーム以外の宗教の信徒によって建設されたものもある可能性が認められる点を，とくに強調しておきたい。

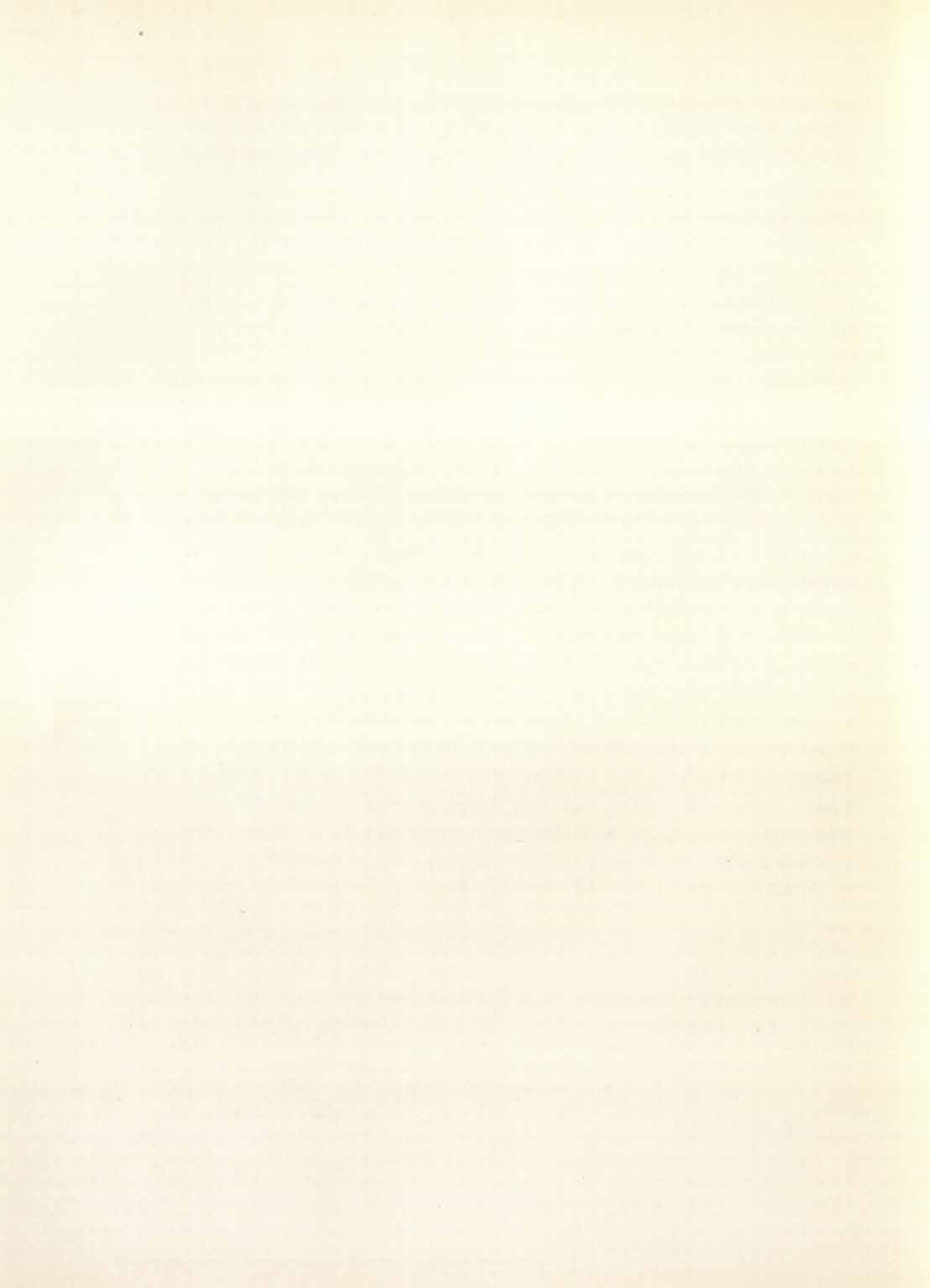
それにもかかわらず，デリー地域とくにその中心部における井戸やバーオリーの大部分は，おそらくは，ムスリムによって建造されたものと考えるのが妥当ではあるまいか。その個々の場合についてふれる余裕はないが，それぞれの井戸やバーオリーの建設の時期や年代，それが建設されている地域の性格や環境，さらにその機能や効用などをあわせ考えてみると，デリー＝サルタナット時代の水利建造物の大部分は，おそら

1) Bas͟hīr al-Dīn Ahmad, *Wāqi'āt-i Dār al-Ḥukūmat-i Dihli*, 3 volumes in Urdu, Vol. III, p. 27.
2) 荒，「デリーに現存するサルタナット時代のバーオリーの遺跡について」，pp. 54-55.
3) Jas. Burgess, *The Muhammadan Architecture of Ahmadabad*. Part II. with Muslim and Hindu Remains in the Vicinity, London, 1905, pp. 1-3, Plates II & XIII.

くは，首都デリーとその周辺地域において権力を掌握していたムスリムから成る支配層，あるいはムスリム地方権力者や地主層によって建造されたものと考えられるのである。たとえば，前節でふれたモラーダーバード＝パハーリーに残る小城砦が，その地方の権力者ないしは地主層の拠点の一つの例であると考えられるならば，その囲壁内に同時代のものと思われるモスクが存在することによって，彼がムスリムであったことは明らかである。従って，それに近接して同時代に建てられたことが明らかな，モラーダーバード＝パハーリーのバーオリー〔W. 20〕が，ムスリムによる建造であることは，ほとんど疑いをいれない。また，バシールッディーンその他によって，ヒンドゥー建設説が主張されたウガル＝サインのバーオリー〔W. 29〕にしても，ムスリム建立説が否定されているわけではない。このバーオリーの石敷きのテラスの一端に，やや後代の建造にせよ，小型のモスクが建てられたという事実は，ムスリム建立説にとっては有利な材料といえるであろう。[1)]

最後に一言ふれておきたいのは，水利施設のなかでも，井戸やバーオリーの場合には，その水の使用に当って，権力支配の諸関係のほかに，カースト制度や宗教のちがいに基づく差別が，社会関係の面で，切実な問題として行なわれていたのではないかということである。ヒンドゥー・ムスリム両教徒ともに，水は，浄式のために必要なものであり，とくにヒンドゥーの保守的なバラモン階層に属するものは，他の下級カーストないしはいわゆる不可触民と同じ井戸の水を使用するのを拒む場合が，現在ですら，なお，相当の範囲に認められるのである。サルタナット時代においては，これらのヒンドゥー上層カーストの大部分は，異民族たるムスリムを「ムレッチャ」(Mlecca) と呼んで，社会的には差別の意識をもって臨んだ。中小水利施設の建設と実際の利用に当って，これらのカースト的差別の意識が，微妙に作用したことは十分に想像されるところである。この点を考慮に入れれば，デリー地域においても，ヒンドゥー人口の集中していた区域では，中小水利施設，とくに日用の水を供給する井戸が，ヒンドゥーによって建設されたであろうことは，十分推察し得るところである。さきに例示したサンスクリット語碑文をもつヒンドゥー建設の井戸が，デリー地域とはいっても，いずれも，中心部からやや隔たる区域に見出されている事実は，当時のデリーのムスリム・ヒンドゥー人口の居住状態を推察するとき，あるいは理由のあることといえるかもしれない。逆に，このような井戸の存在の事実とその建設者の性格などから，当時のムスリム・ヒンドゥー人口の居住区域，さらには当時のムスリム権力のヒンドゥー住民への対応やヒンドゥー教徒の反応などについて種々のことを推測し得る場合もあり得るであろう。しかし，これらの問題については，個々の遺跡にかかわる問題が多いので，本巻では省略せざるを得ない。ただ，建造物の歴史的資料としての意義に関連して，以上のことにふれておきたかった次第である。

1) 荒，前掲論文，pp. 54-55.



附　　録

図面作製の経過

東京大学インド史跡調査団は，1959〜60年，1961〜62年の現地調査において，若干の建造物を主要な調査対象として選び，これについて詳細な測定作業を行なった。その後，われわれは，測定資料の整理とそれに基づく図面作製作業を実施してきたが，本巻においては，こうして作製された図面のうち，水利関係建造物に関する図面ならびにそれと関連する若干の地図類など，合わせて53枚（図版24枚と挿図29枚）を掲載している。

調査団が現地において実施した測定作業の方法とその内容，資料整理ならびに図面作製の過程において当面したさまざまの問題点，とくに，写真測量の方法による測定資料と，他の一般的測定法によって得られた図面資料とを調整する作業において生じた問題などについては，すでに，報告書第二巻「墓建築」附録において，三つの墓建築に関する図面の場合を例として，具体的に述べておいた（第二巻169〜173ページ参照）。本巻に掲載した図面においても，作図作業の経過ならびにその過程でさまざまな問題点が生じたが，これについては，上記の附録に述べた内容と共通するところが多いので，ここではくり返し述べることを避け，もっぱら，図面作製作業の担当者，個々の段階の作業実施者，およびその作業の概略を記すにとどめておきたい。

まず，巻末に図版として掲載した24枚の図面は，本巻の主要な研究対象となった六つの水利関係建造物の平面図，外面立面図，断面・内部立面図などを含むものであるが，現地において，図面計画を立案しその実施を総括したのは山本であり，測定作業にたずさわったのはインド史跡調査団の大島太市団員と月輪とである。平面図に関しては主として平板測量の方法を用い，立面図については写真測量を採用し，断面図には直接実測の方法をとることが多かったが，これらの測定作業は，水利建造物の性格，その残存状況，その他さまざまの理由から，墓建築に関する図版図面の場合と比較して，より精度の低いものとなったのである。今次の調査に写真測量を採用したのは山本の構想であり，東京大学生産技術研究所丸安隆和教授の協力を得て実現した。なお，山本と大島氏とは，現地調査終了後も，海外旅行の途路しばしばデリーに立寄り，建造物の測定・地形の測量を含む若干の補足作業を行なった。大島氏が補足作業を行なったのは1966年６月と1968年９月末である。

さて，測定資料の整理は，山本の計画に基づき，大島氏がこれを担当し，写真測量関係資料の整理と技術的処理とは，生産技術研究所丸安研究室において行なわれていたが，まとめの段階に入って，月輪が主として整理・処理を担当することとなり，東京大学東洋文化研究所技官木村源蔵氏が，各種資料の調整その他の具体的作業を実施することとなった。このような資料に基づいて，24枚の図版図面の鉛筆による原図仕上げを行なったのも，この木村氏である。なお，資料整理の過程で，生産技術研究所村松貞次郎助教授ならびに同研究室の関建世氏の協力があったことをここに附記しておきたい。

以上の図面の墨入れについては，これを迅速に進める必要から作業を幾人かの手にわかつこととし，図版40，41，42a, b, 47, 48, 49a, b, c, d の10枚を木村氏が担当したほかは，図版43a, b, c, 50a, b, c, 51a, b, c, dの10枚をハイ・ブラナー社に，図版44, 45, 46a, b の４枚を和良品長門氏に，それぞれ依頼することとした。

つぎに，本巻の本文中に挿図として掲載した29枚の図面ならびに地図について，その基となった現地資料に一言ふれておきたい。挿図４, 10, 16, 42, 43, 44, 50, 51は，山本の実測図ならびにスケッチ図に基づいて描かれており，挿図1, 5, 14, 21, 27, 33, 40, 46, 47, 48の各地図のための資料は，荒と月輪とによって蒐集・整理されたものである。挿図13, 26, 32は，大島氏と月輪の共同測定作業の結果に基づいており，挿図18, 22, 29, 34は写真測量の成果を基礎とするものである。挿図31には山本と月輪の実測資料が採用されており，最後に，挿図６の作製にあたっては，インド考古調査局が作製した図面の写真プリント（D. G. Archaeology in India, Neg. No. 4588）を，また，挿図41についてはインド政府発行の地図（Delhi guide map, 1959）を，それぞれ参照したことを附記しておきたい。

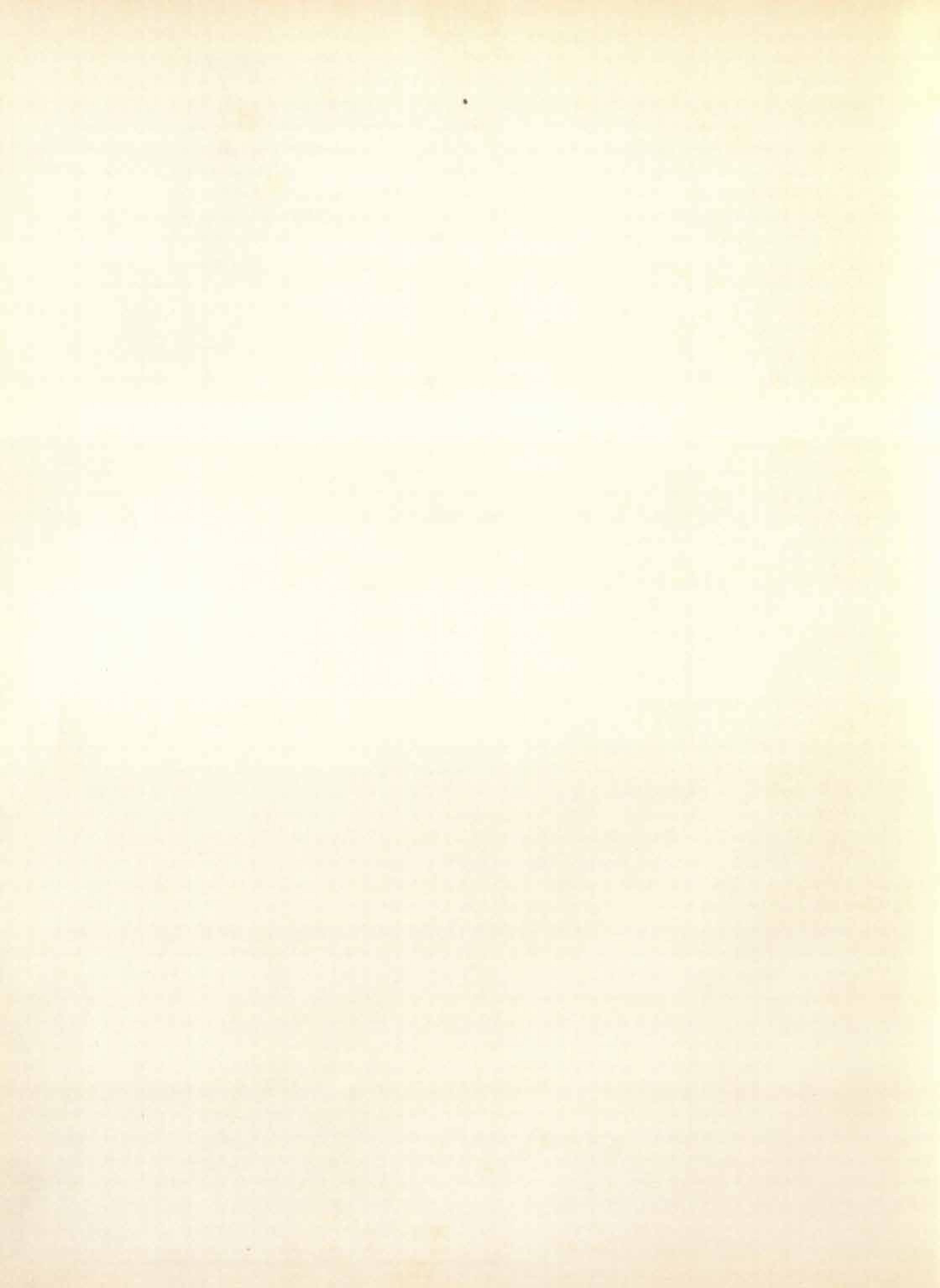
上の資料に基づく原図作製と墨入れ作業の担当者は次のとおりである。挿図4, 10, 42, 43, 44, 51の各図面については山本がこれを担当し，挿図6, 13, 16, 18, 31, 32, 37, 50は，木村源蔵氏の手になるものである。また，挿図1, 5, 14, 21, 26, 27, 33, 40, 41, 46, 47, 48についてはハイ・ブラナー社に，挿図22, 29, 34については和良品長門氏に，それぞれ作業を依頼した。

建造物索引

*　*　*

〔水利施設〕

図　版



遺跡写真

a 全景 西より

b 開口部分 東より

スルターンプルの円井戸

a 全景 東南より

b 同上 東北より

フィーローズ=シャー=コートラの円井戸

a　内部北側

b　内部南側

フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸

a 内部東側

b 内部西側

フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸

a 全景 西北より

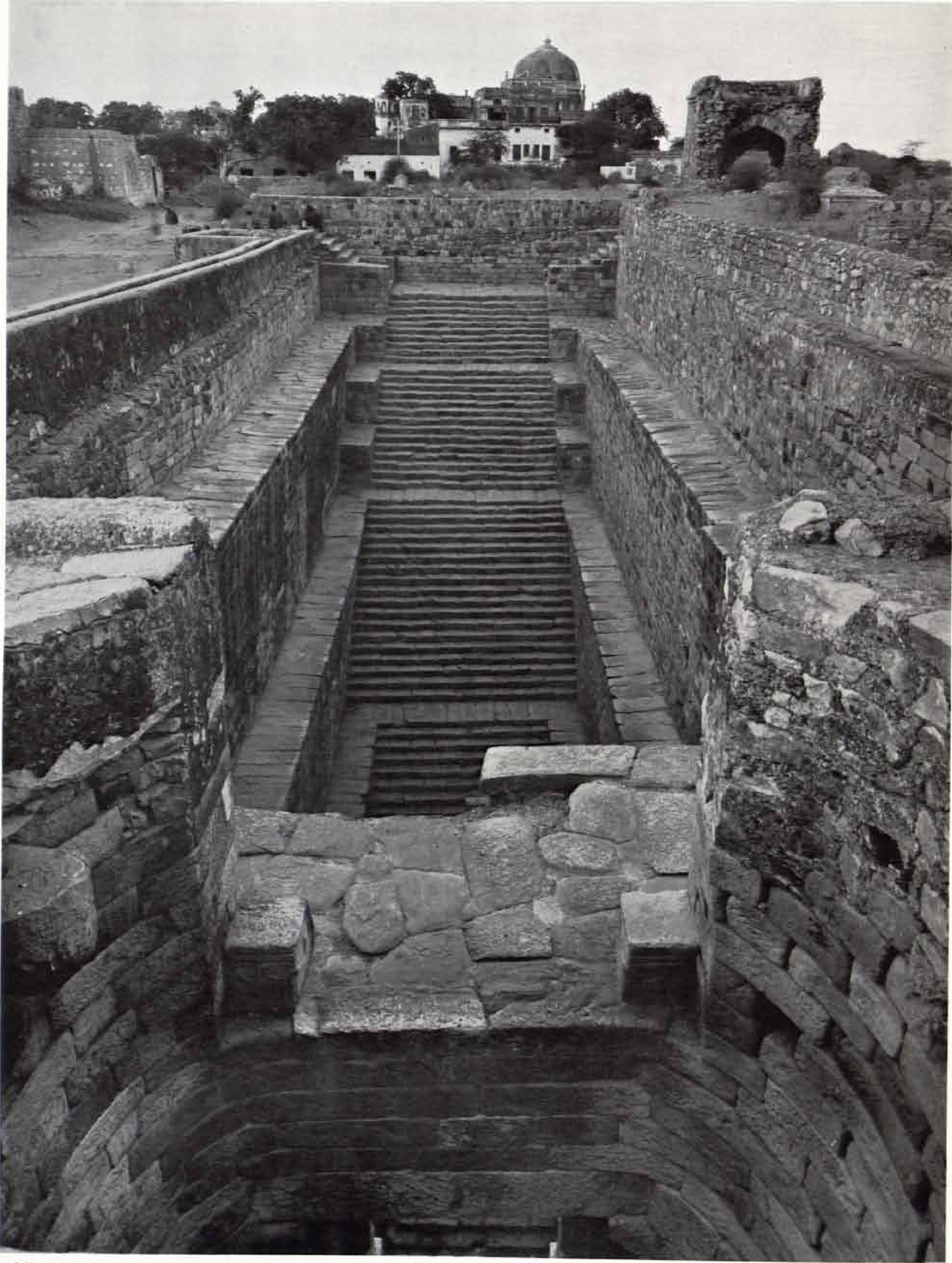
b 北部分 西より

ガンダク=キ=バーオリー

a 全景 東南より

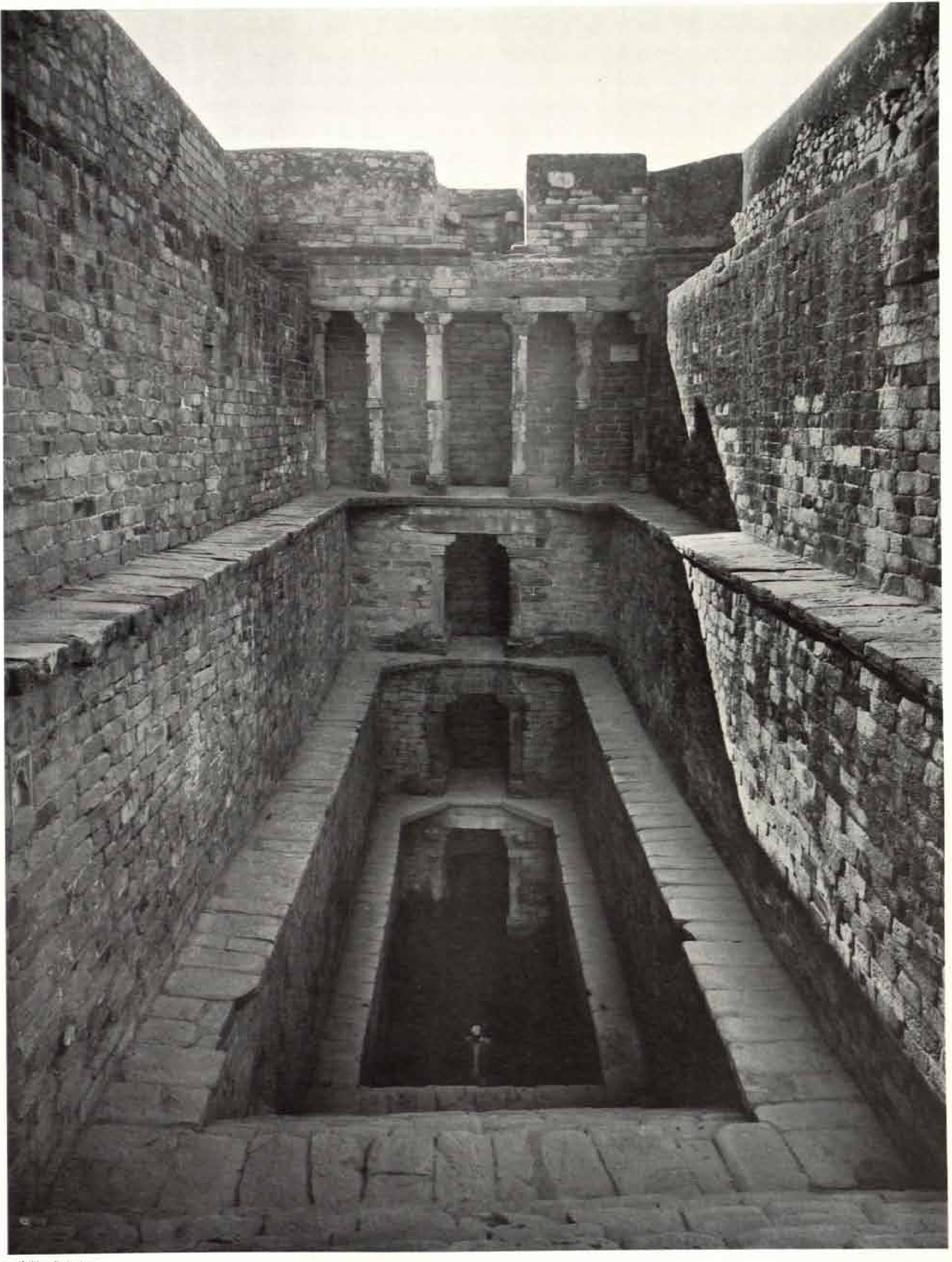
b 南部分 西北より

ガンダク=キ=バーオリー



内部　南より

ガンダク＝キ＝バーオリー



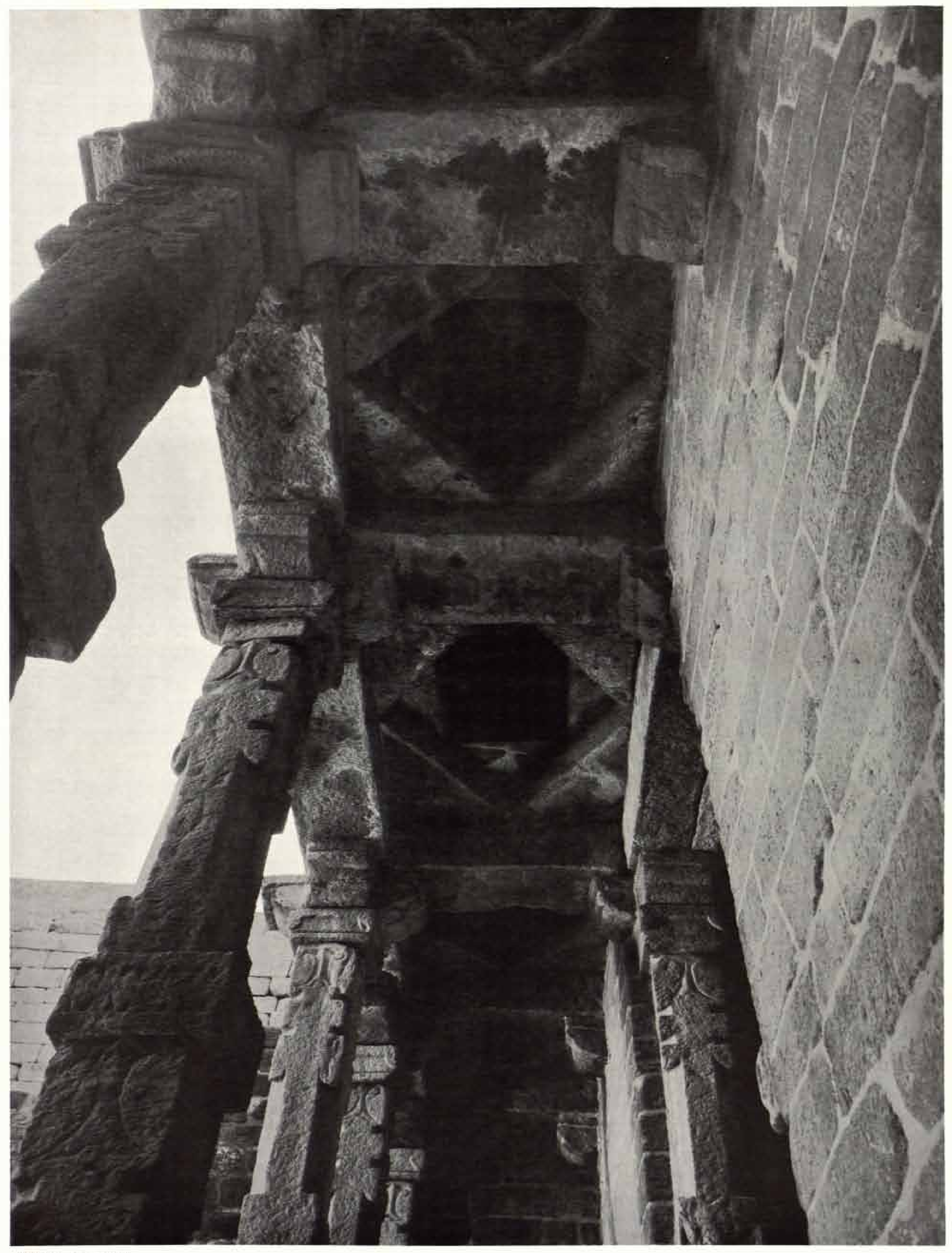
内部　北より

ガンダク=キ=バーオリー



内部南側

ガンダク＝キ＝バーオリー



最上層ヴェランダ天井

ガンダク=キ=バーオリー

a メヘローリー部落東方地域における遺跡の残存状況

b バーオリーとモスクおよび墓建築 南より

ラージョーン=キ=バーイーン

a メヘローリー部落東方地域における遺跡の残存状況

b バーオリーとモスクおよび墓建築 北より

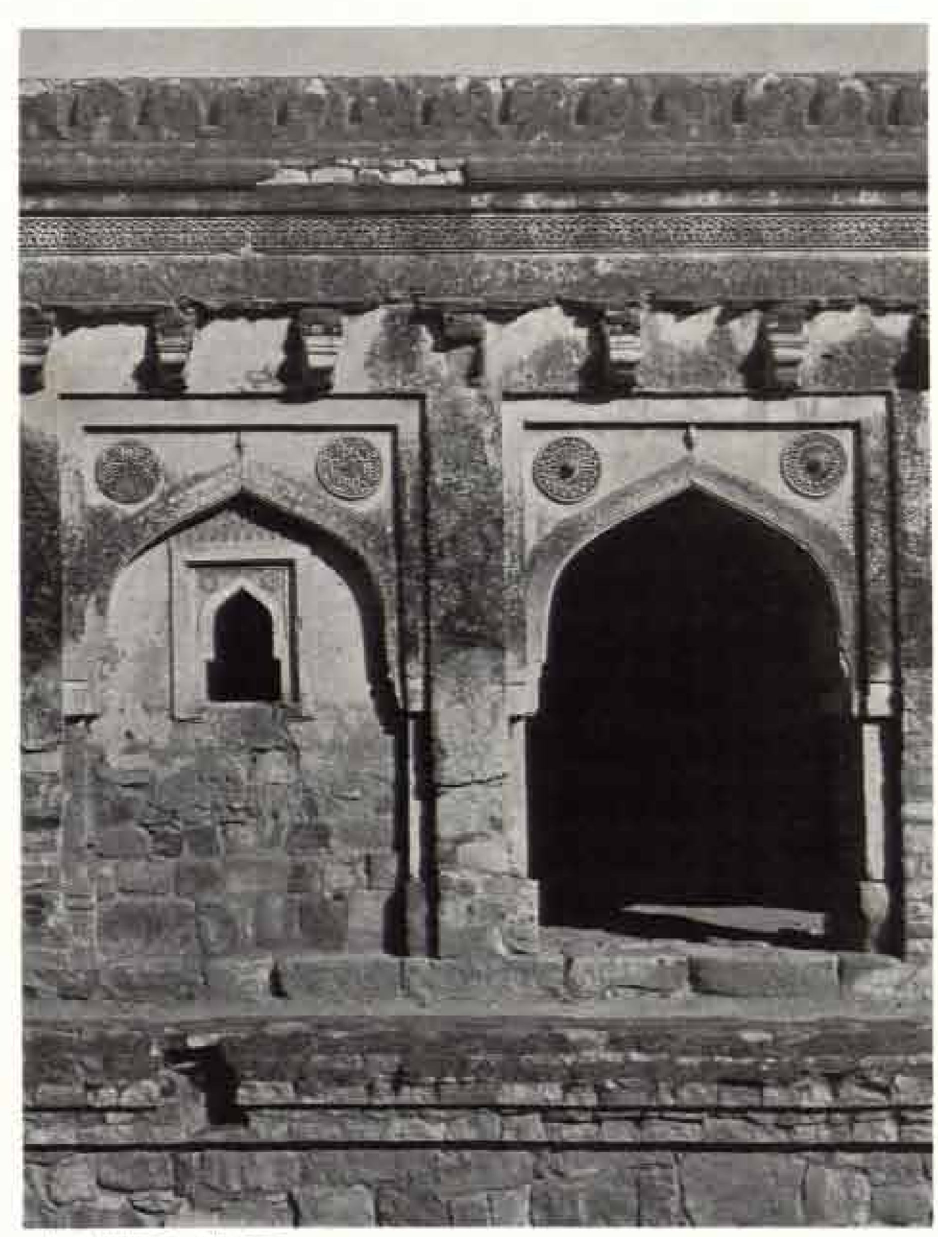
ラージョーン＝キ＝バーイーン

a 内部 北より

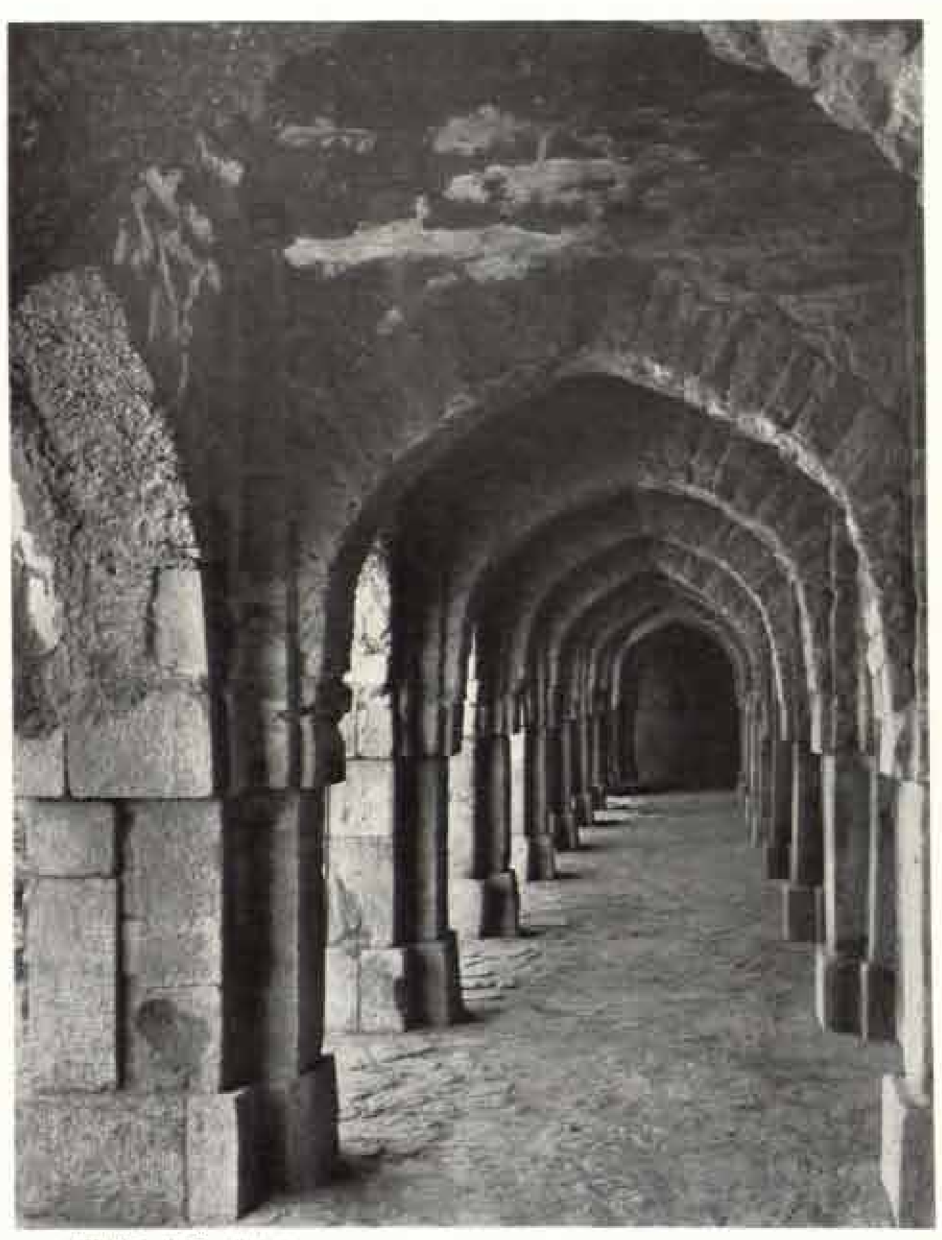
b 内部 南より

ラージョーン=キ=バーイーン

a 内部西側



b 東廻廊の一部 西面



c 西廻廊 内部 北より

ラージョーン=キ=バーイーン

a 西廻廊とモスクおよび墓建築 東より

b 同上 東南より

ラージョーン＝キ＝バーイーン

a バーオリー屋上とモスク前庭 西より

b 屋上南部分とモスクの南門 西北より

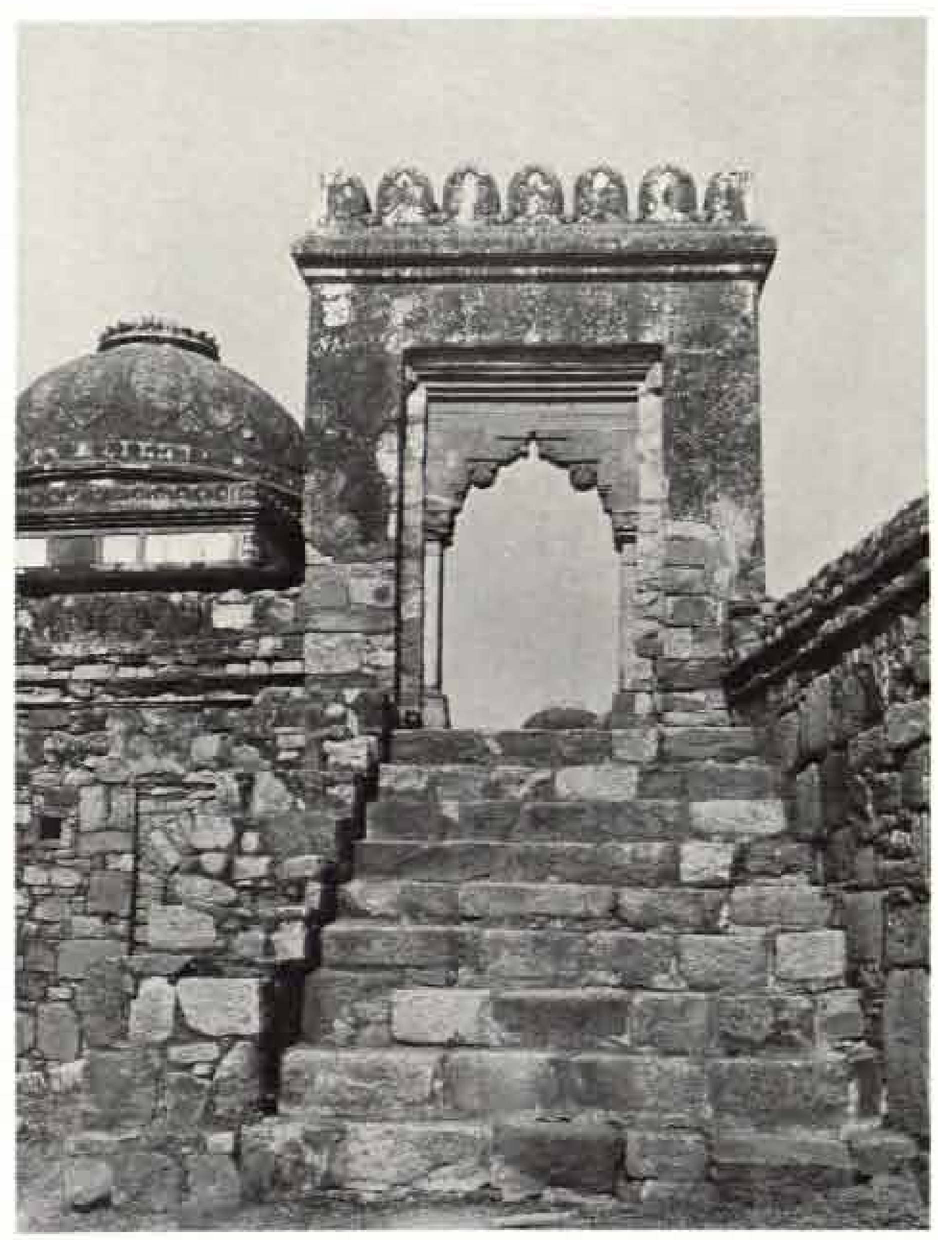
ラージョーン＝キ＝バーイーン

a 南面

b 井戸と廻廊部分 南より

ラージョーン＝キ＝バーイーン

a モスク 南面と西面



b モスクの南門 南面



c 墓建築 南面

ラージョーン＝キ＝バーイーン

a トゥグルカーバードの城砦と南方の平坦地 西より

b 同上 南より

トゥグルカーバードの水門

a トゥグルカーバードの城砦内部とアーディラーバードの城砦遠景

b アーディラーバードの城砦（後方）と堰堤城壁（前方） 北より

トゥグルカーバードの水門

a 水門遠景 西より

b 西面

トゥグルカーバードの水門

a 水門遠景 東より

b 東面

トゥグルカーバードの水門

a 北面

b 水門北方の地形 南より

サ ー ト＝プ ラ

a 水門とジャハーンパナー南城壁 西より

b 同上 東より

a 東部分 北面

b 同上 西北より

サートニプラ

a 中央部分 北面

b 西部分 北面 東北より

サ ー ト = プ ラ



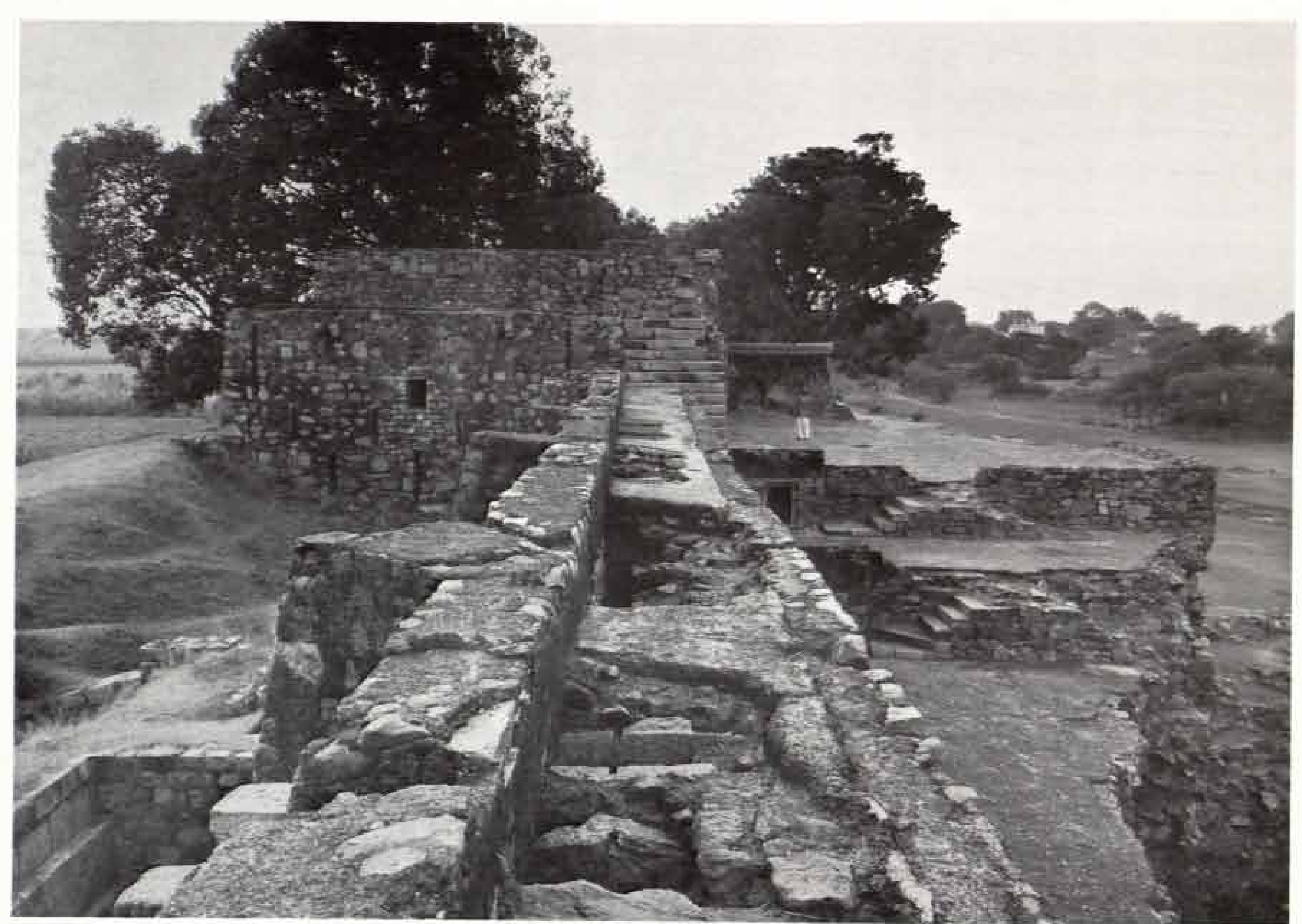
居上 西より

サートニプラ

a 南面 西南より

b 同上 東南より

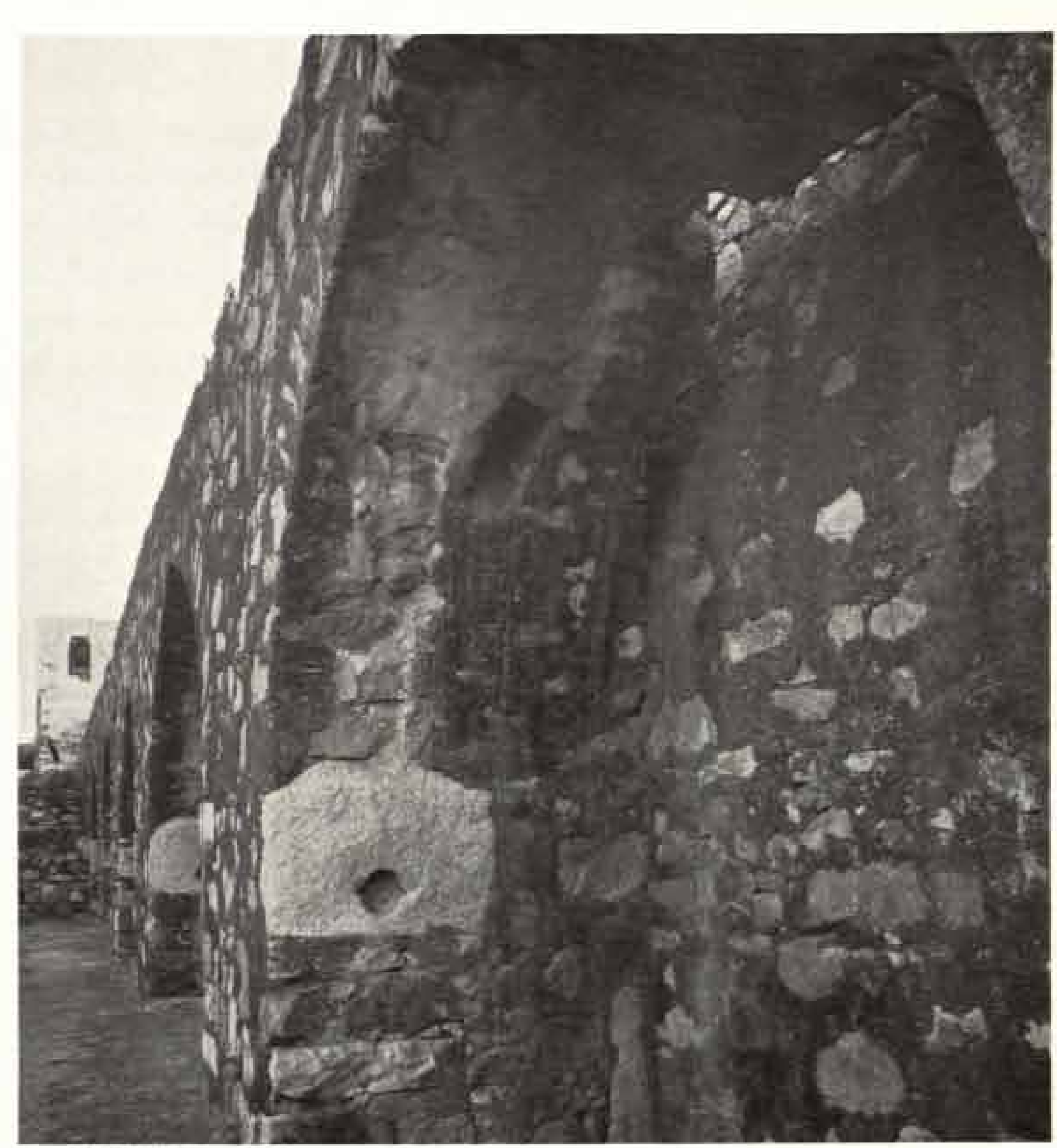
サ ー ト ＝ プ ラ



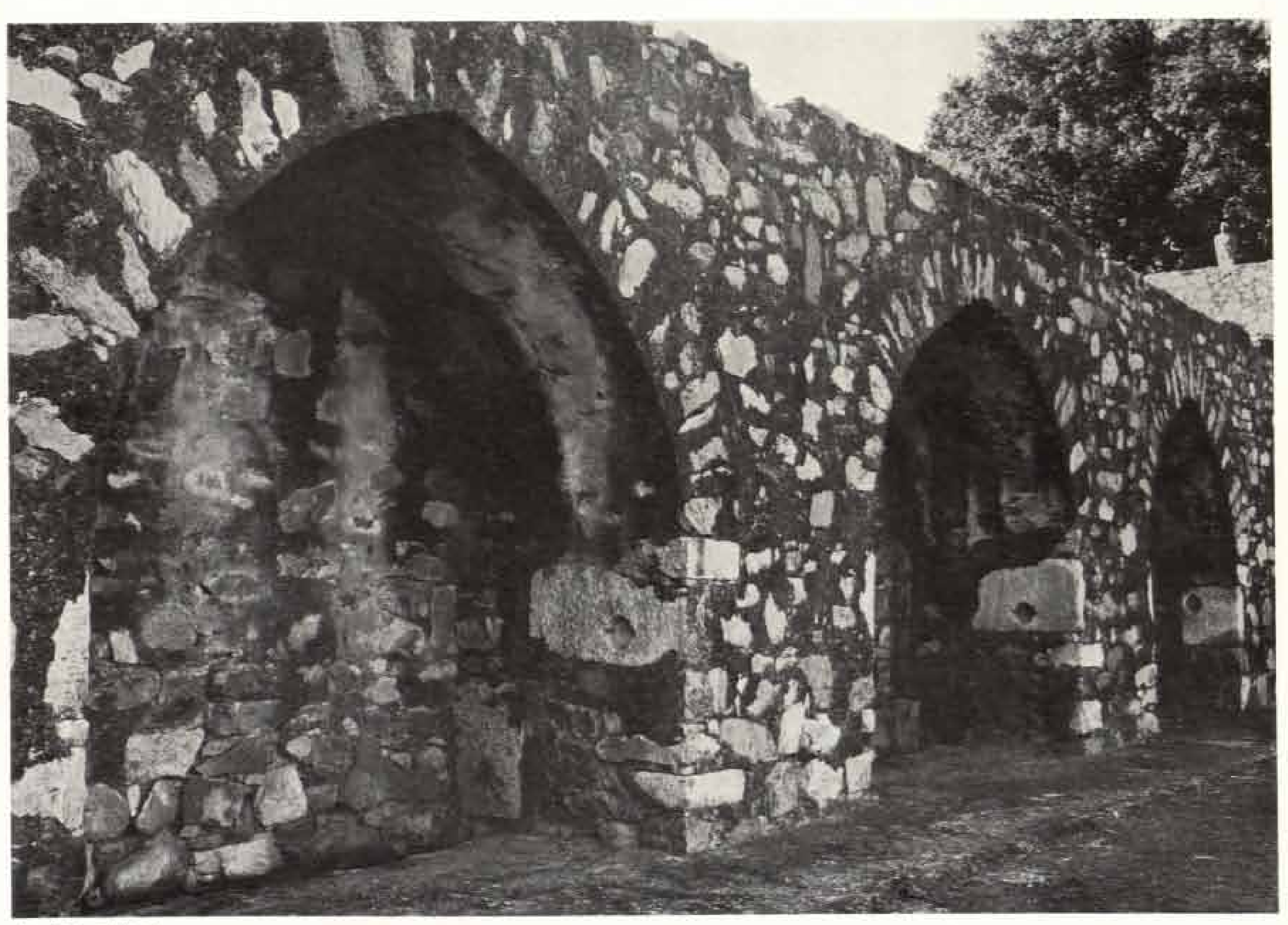
a 屋上 東より



b 同上 部分 東より



a 上層部分北面のアーチ龕 西より



b 同上 東北より

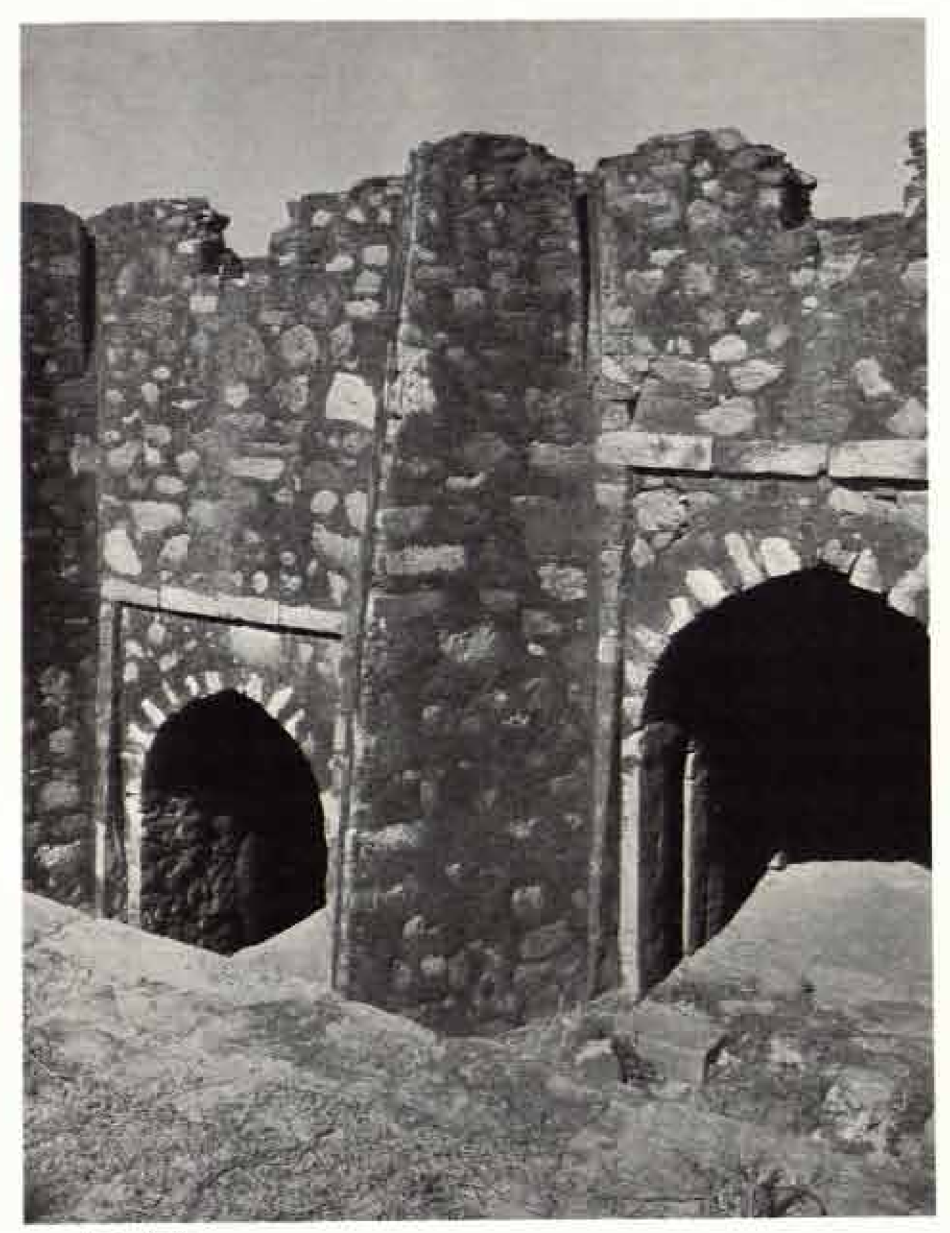
サ ー ト = プ ラ



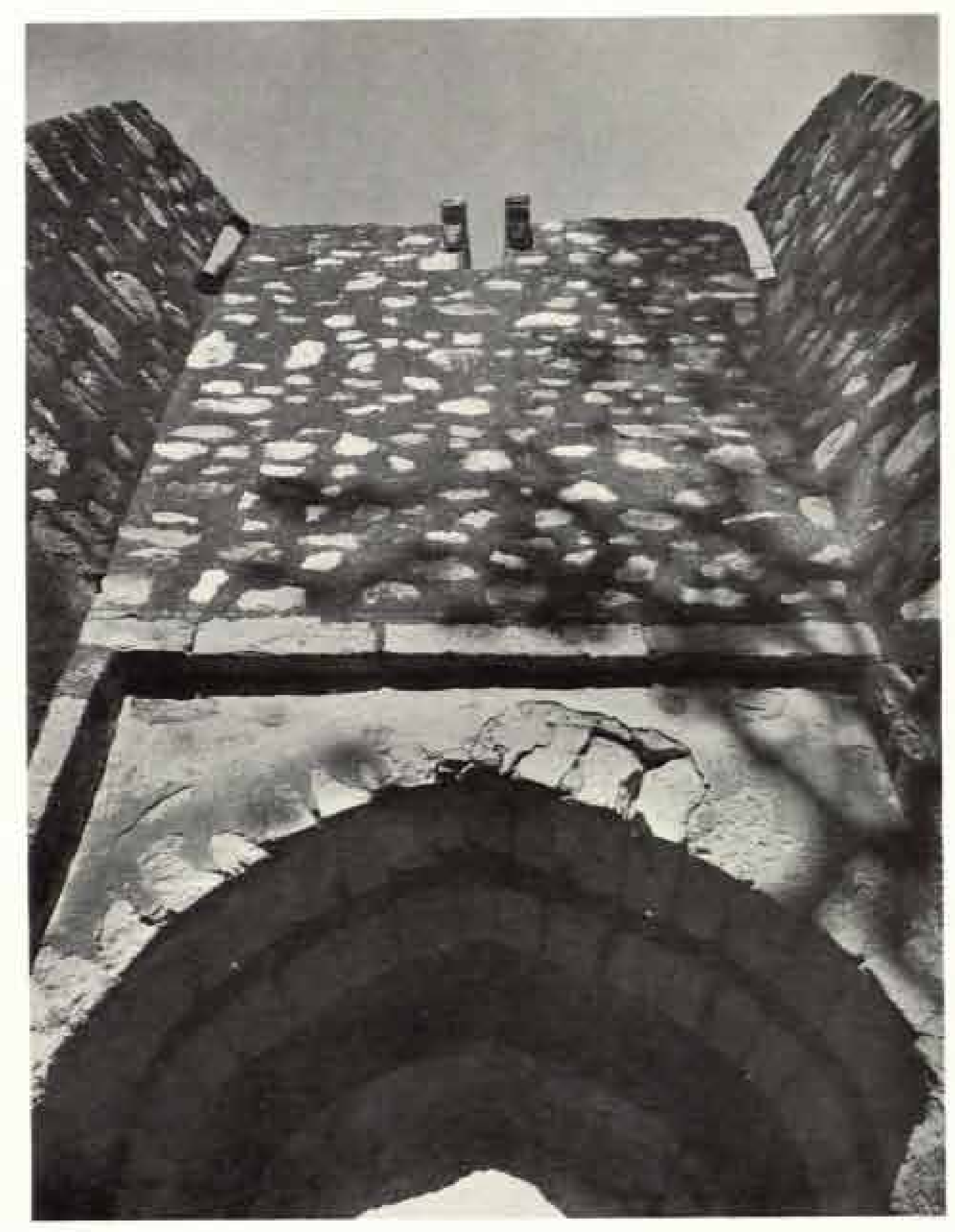
a アーチ龕 見上げ

b 同上 北より

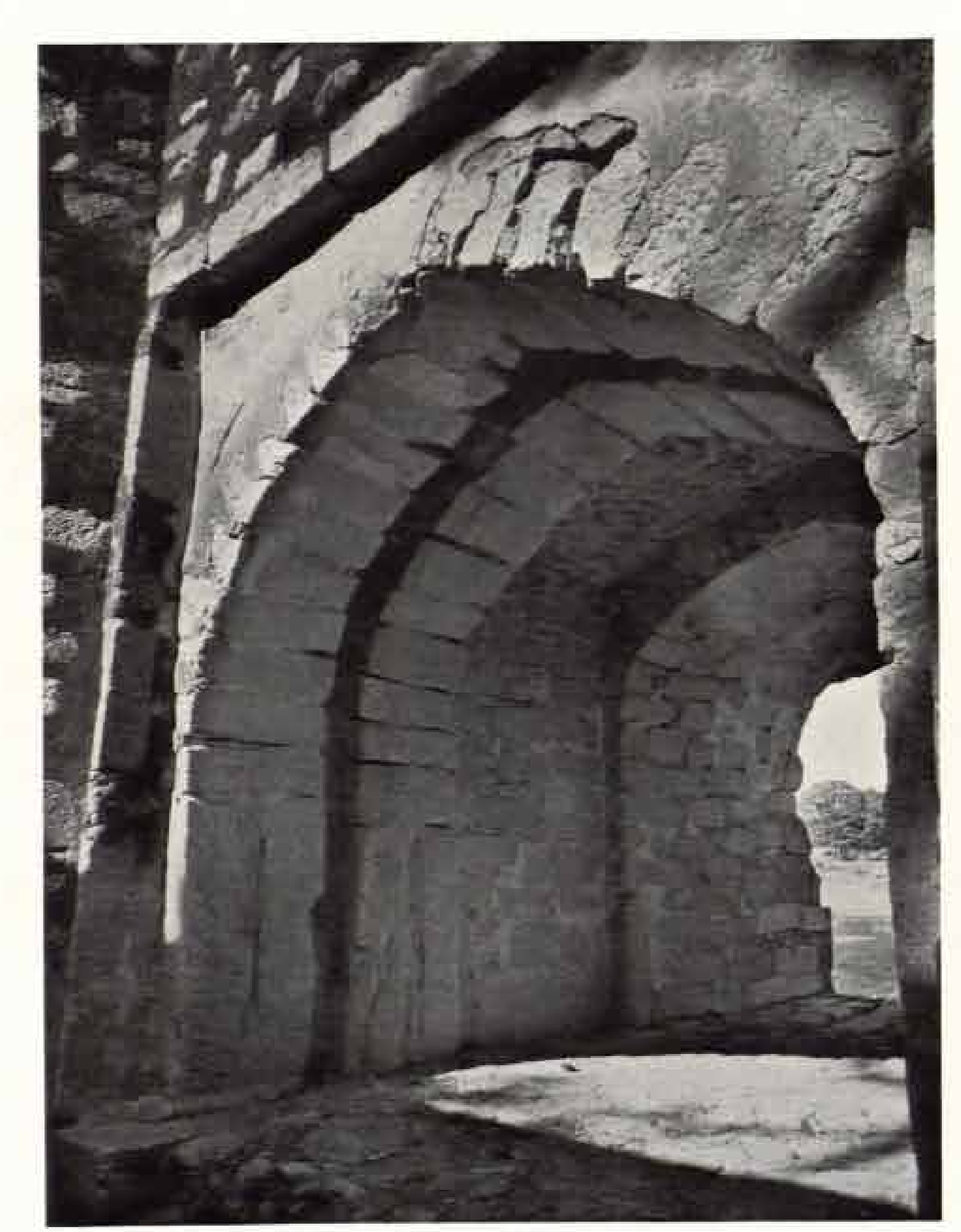
サート＝プラ



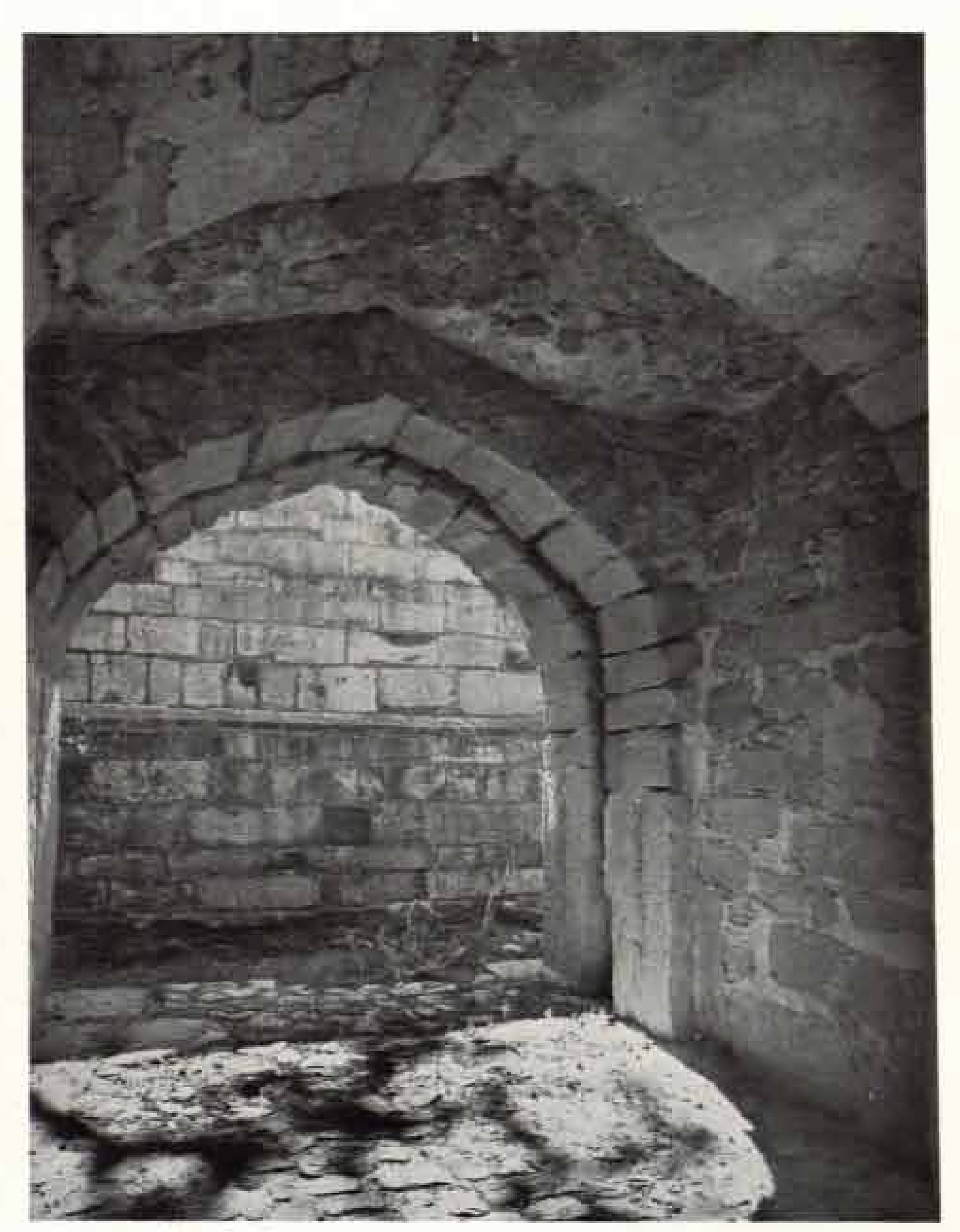
a 南面 部分



b 同左 上の部分

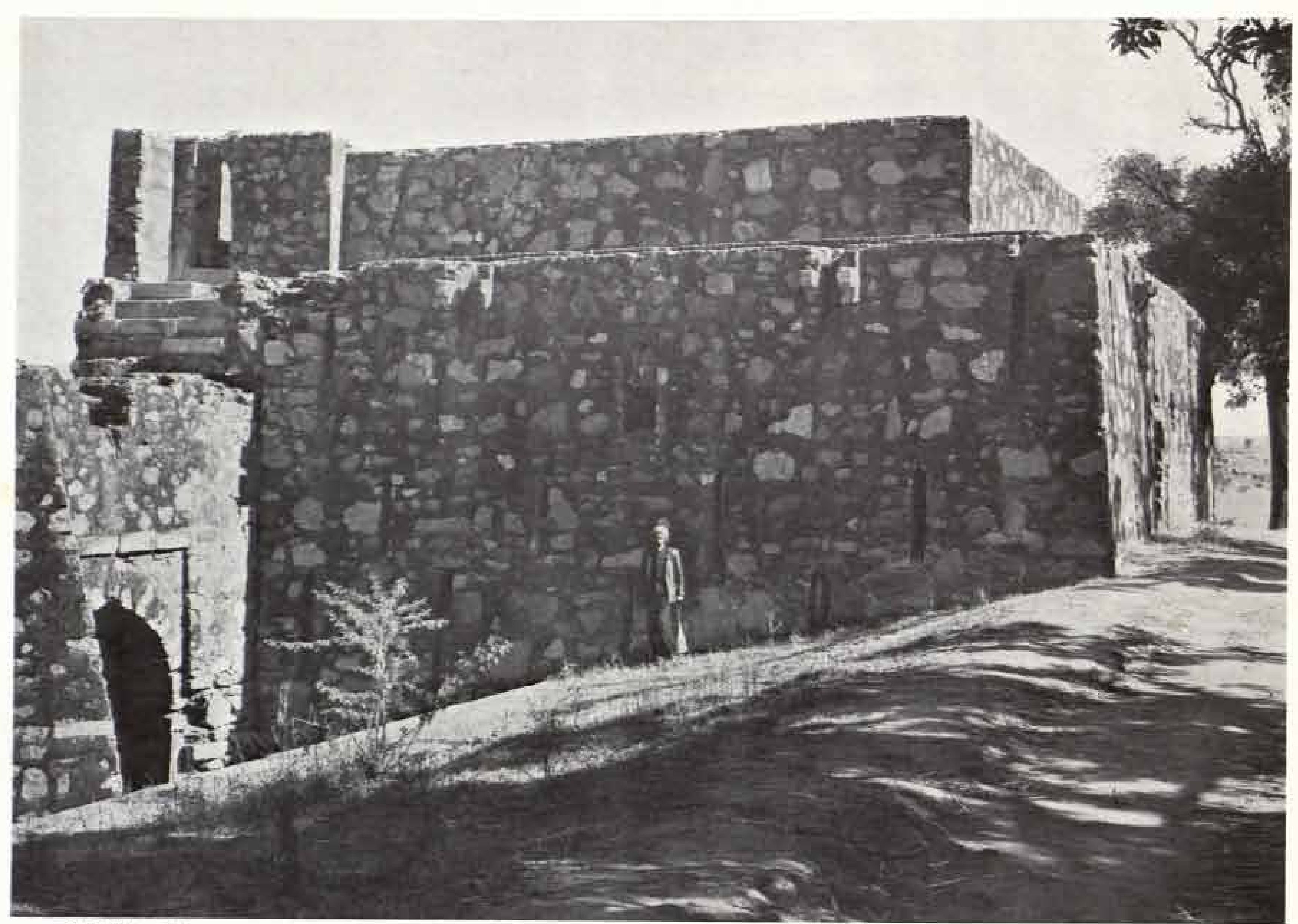


c 流水トンネル 東南より



d 同左 内部 北より

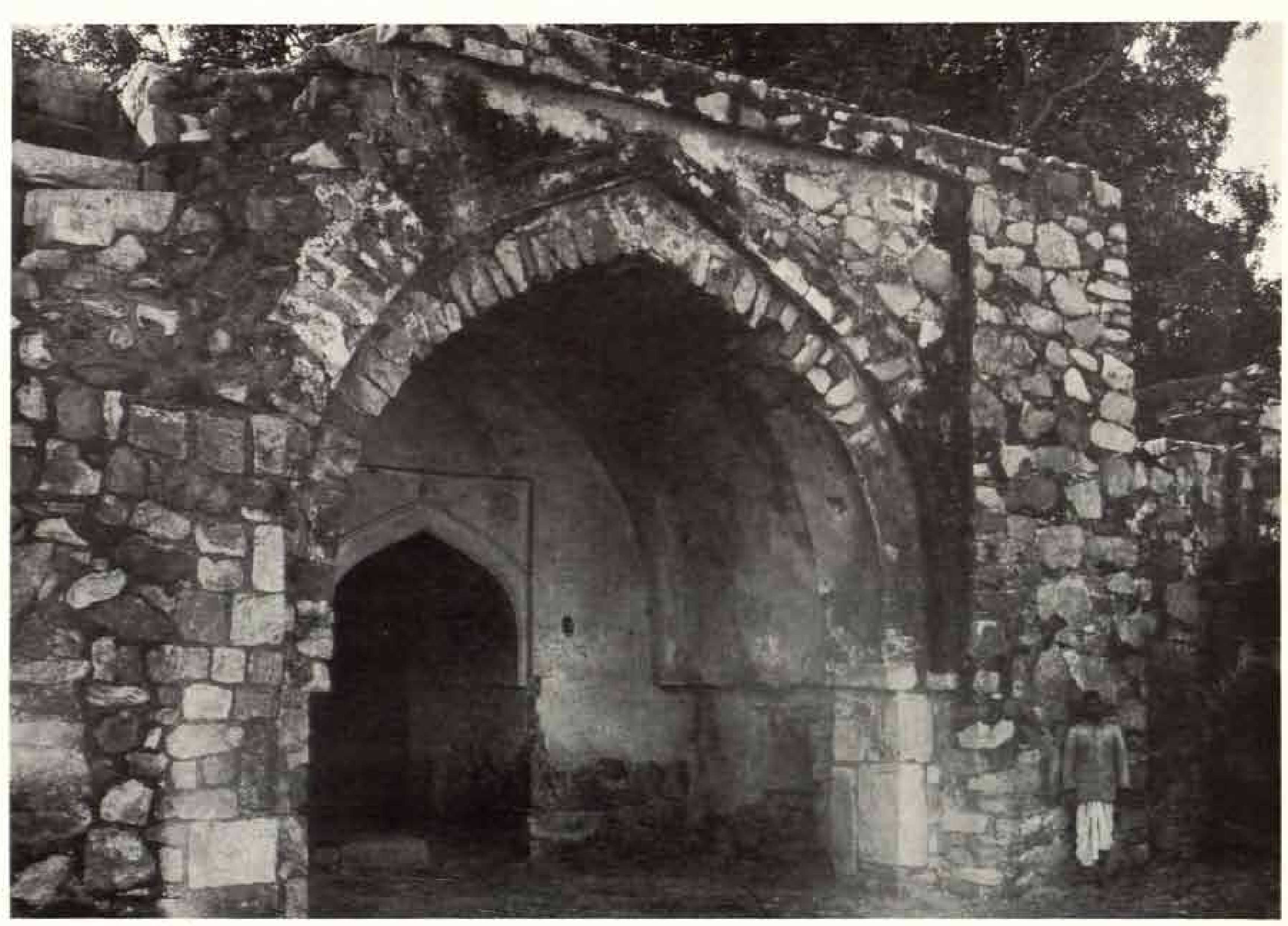
サ ー ト = プ ラ



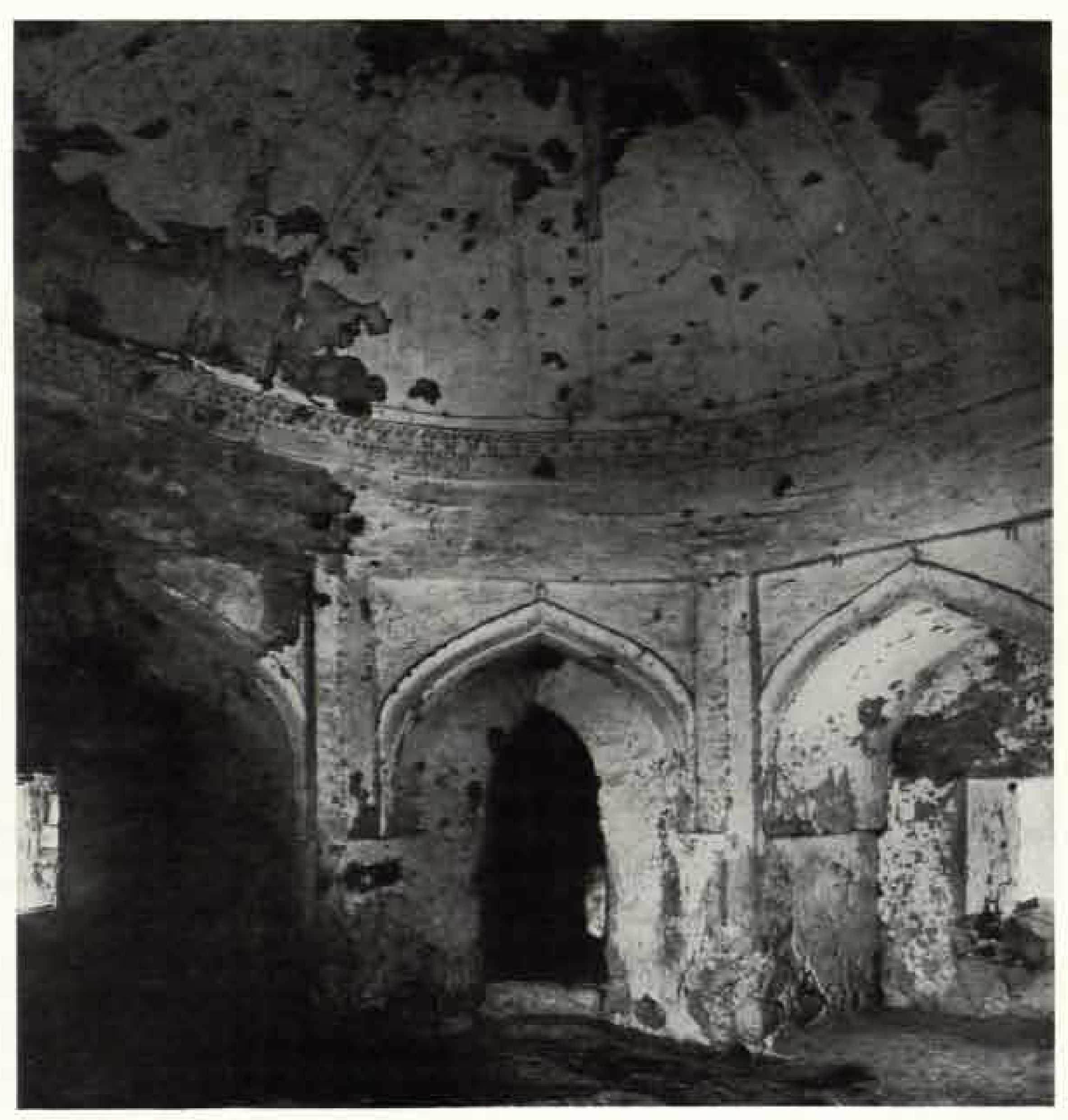
a 東附属建物 西面



b 西附属建物 東面



a 西附属建物 北面



b 同上 内部 東南隅

サ ー ト = プ ラ

a 水門と橋およびモスク 西より

b 同上 東より

ワジーラーバードの水門

a 橋 西面

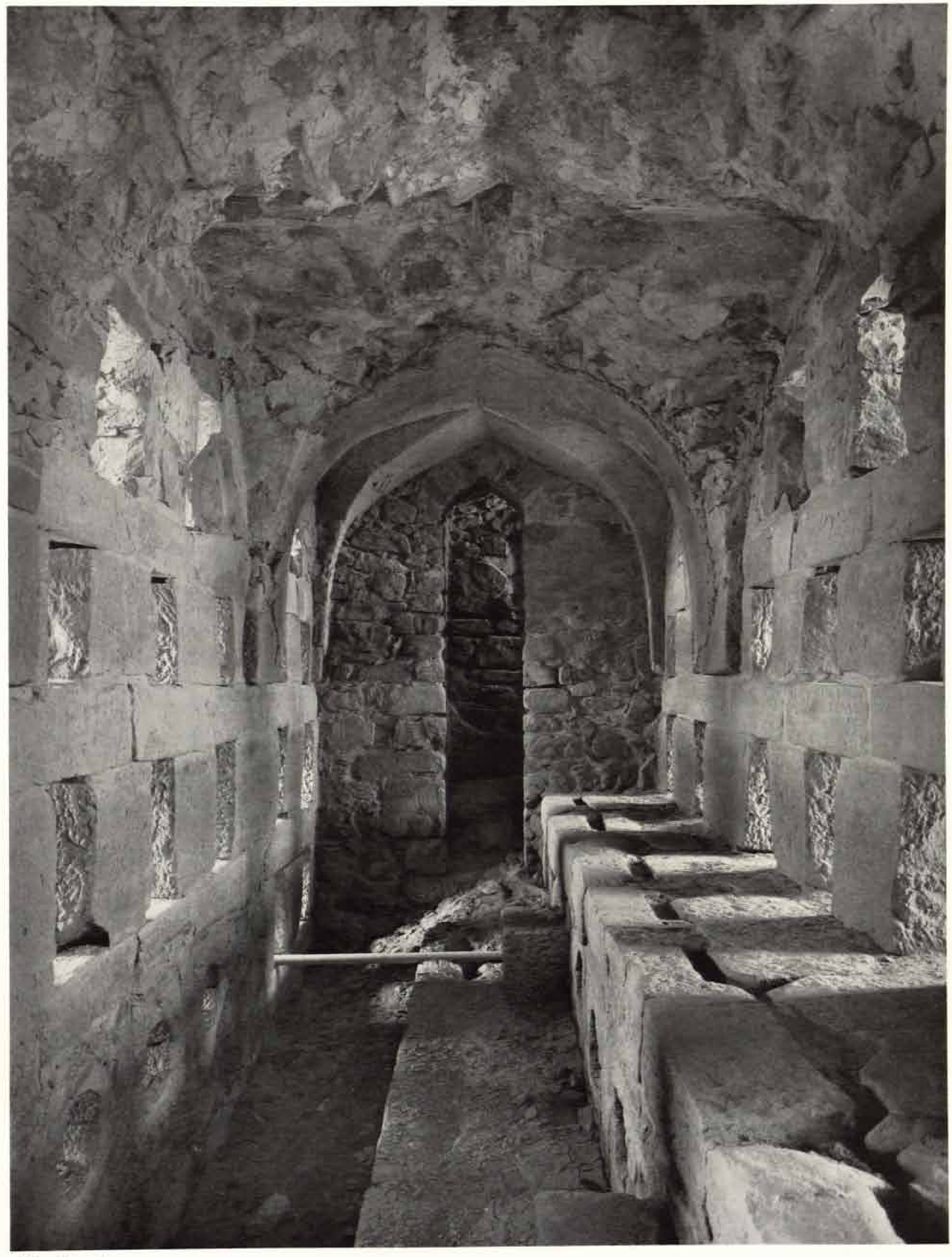
b 同上 東面

ワジーラーバードの水門

a 水門 西面

b 同上 東面

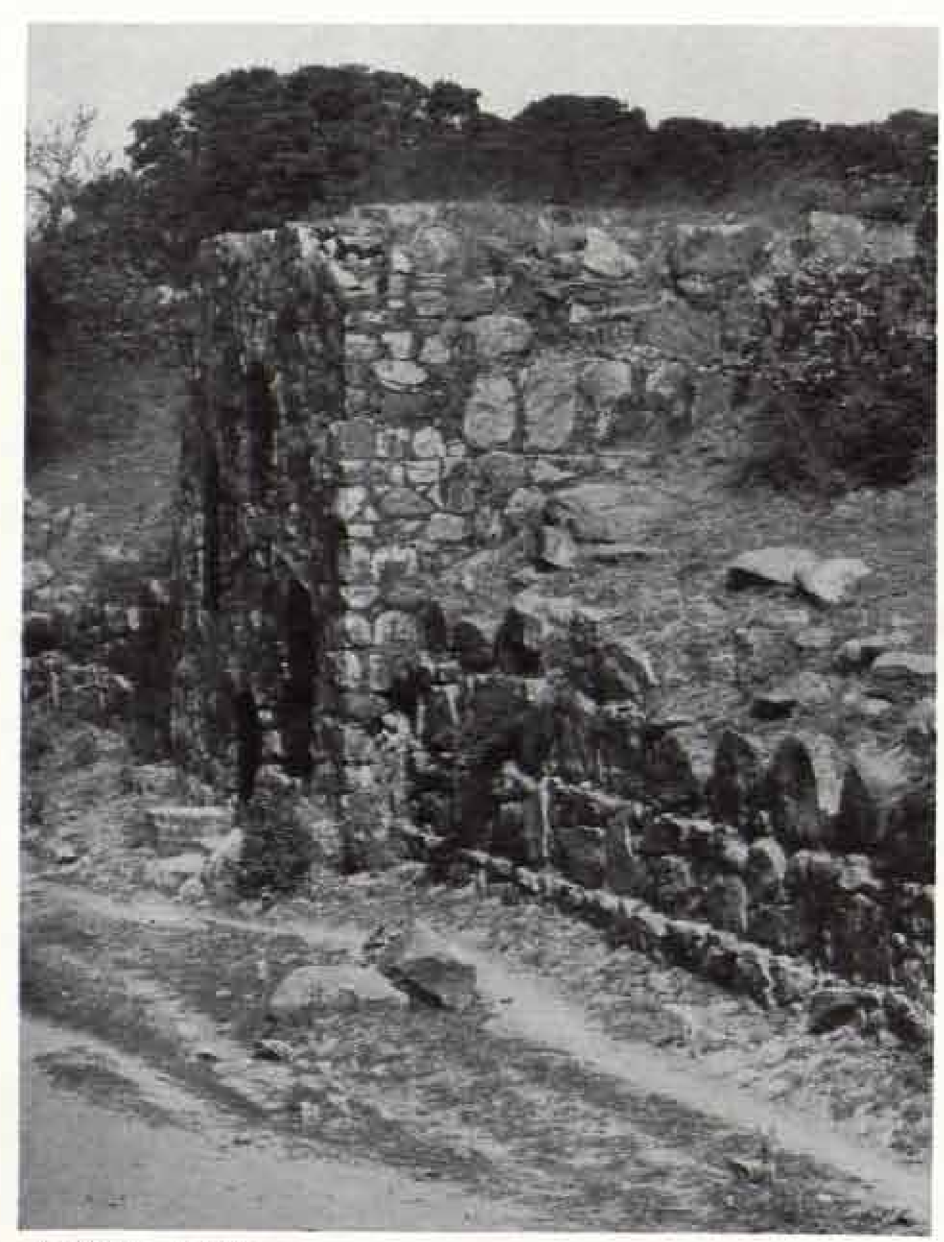
ワジーラーバードの水門



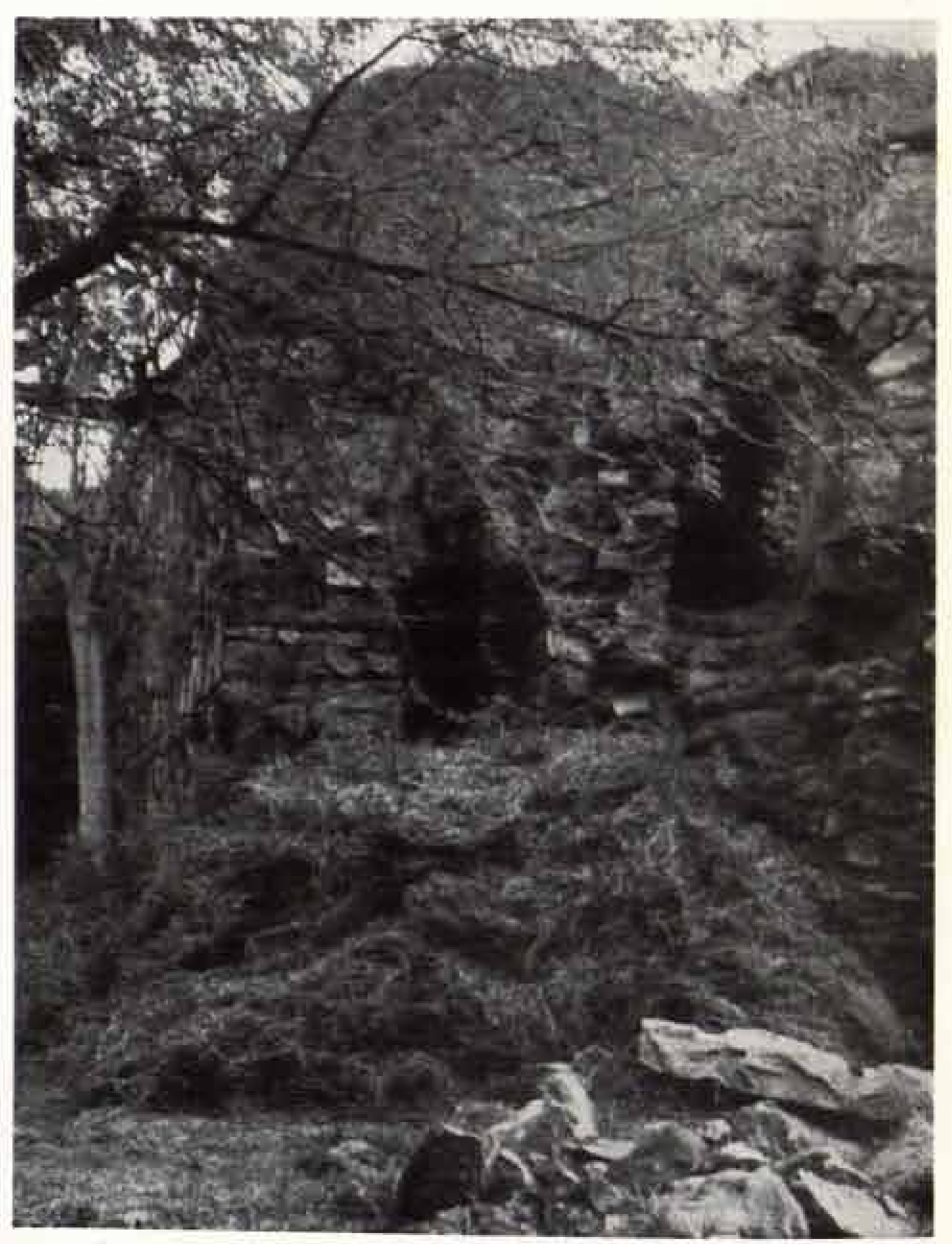
水門　内部　北より

ワジーラーバードの水門

a 中央部分 東南より



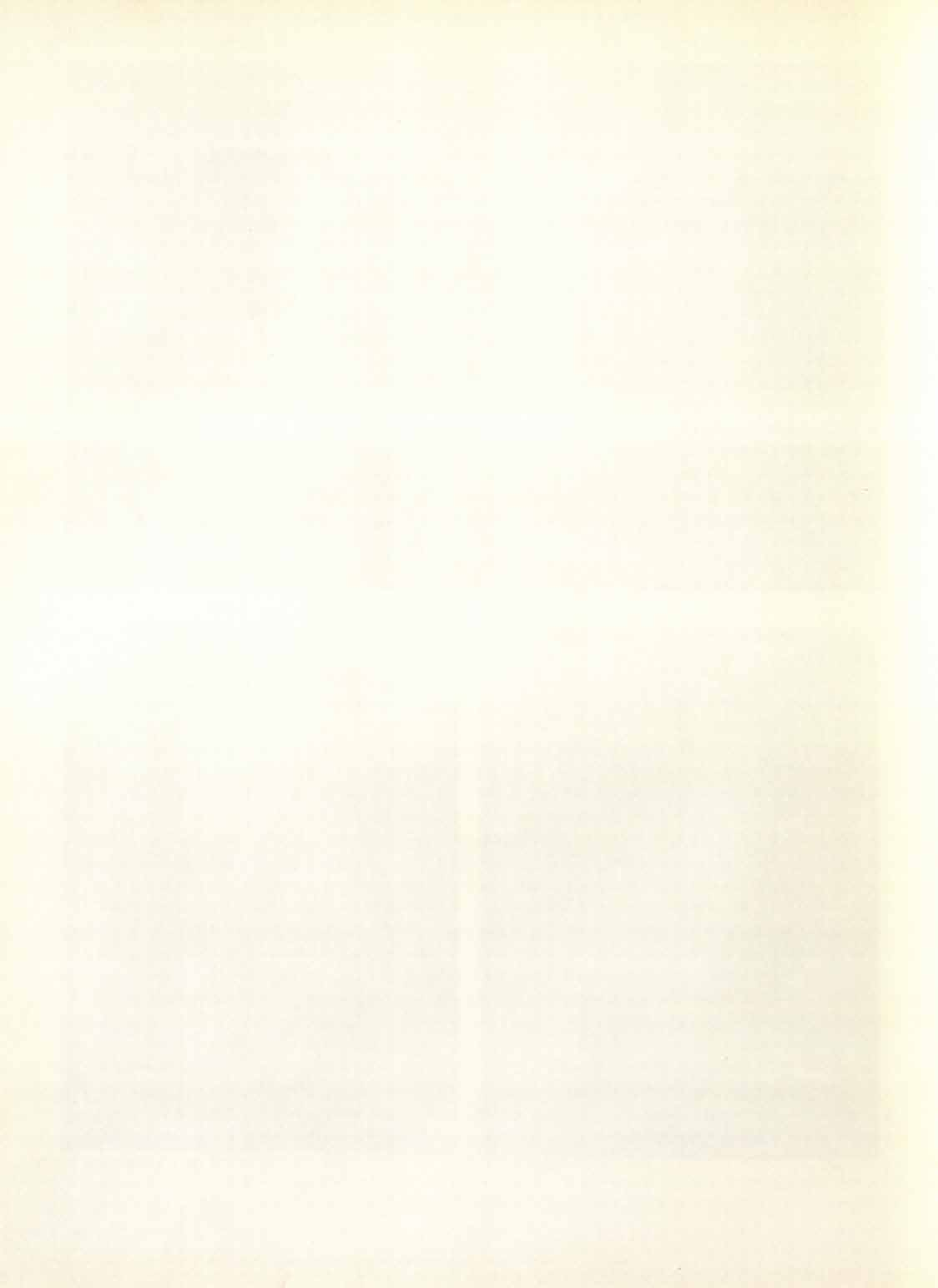
b 南水門 東南より

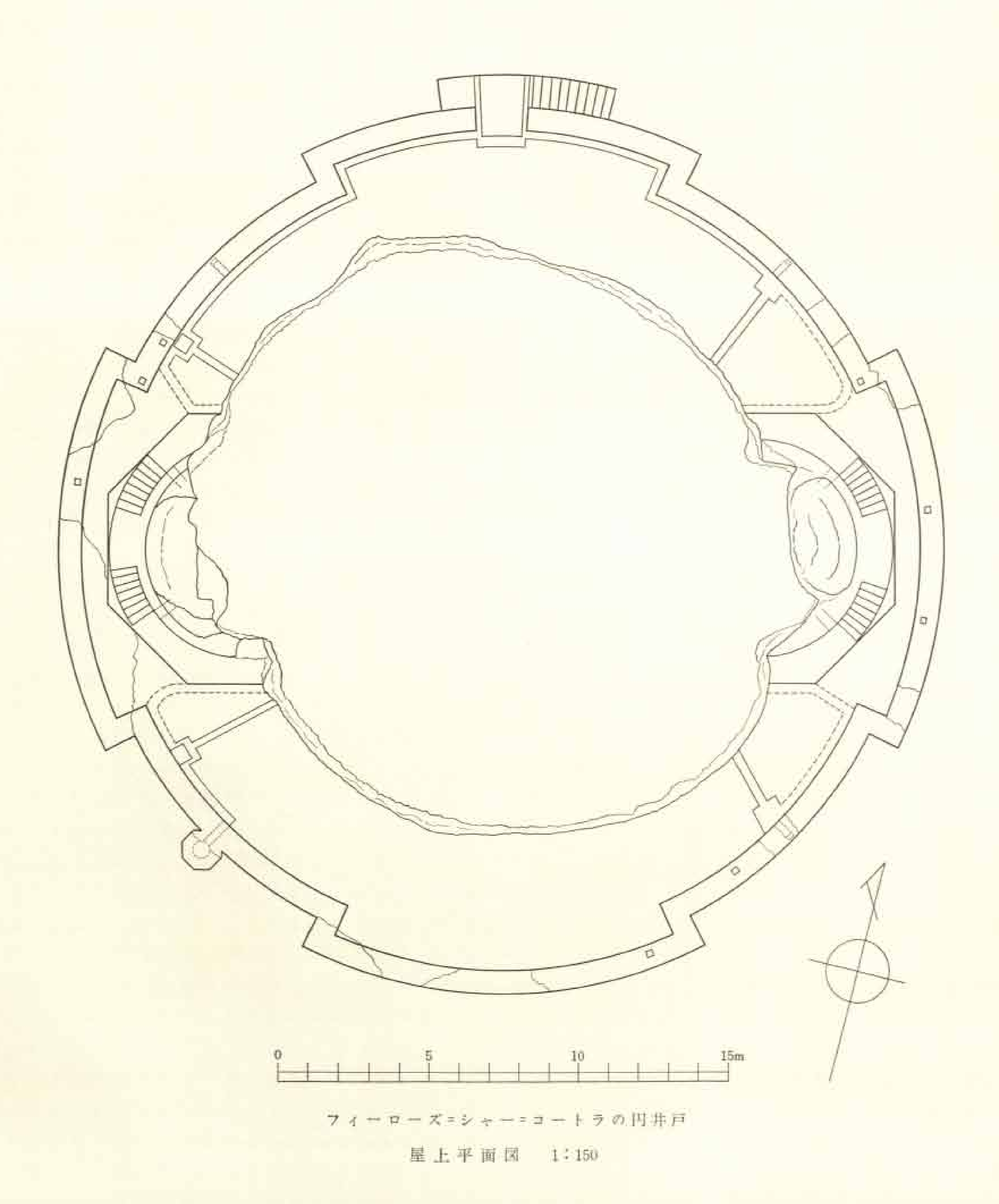


c 西水門 西面

マヒパールプルの堰堤

実　測　図

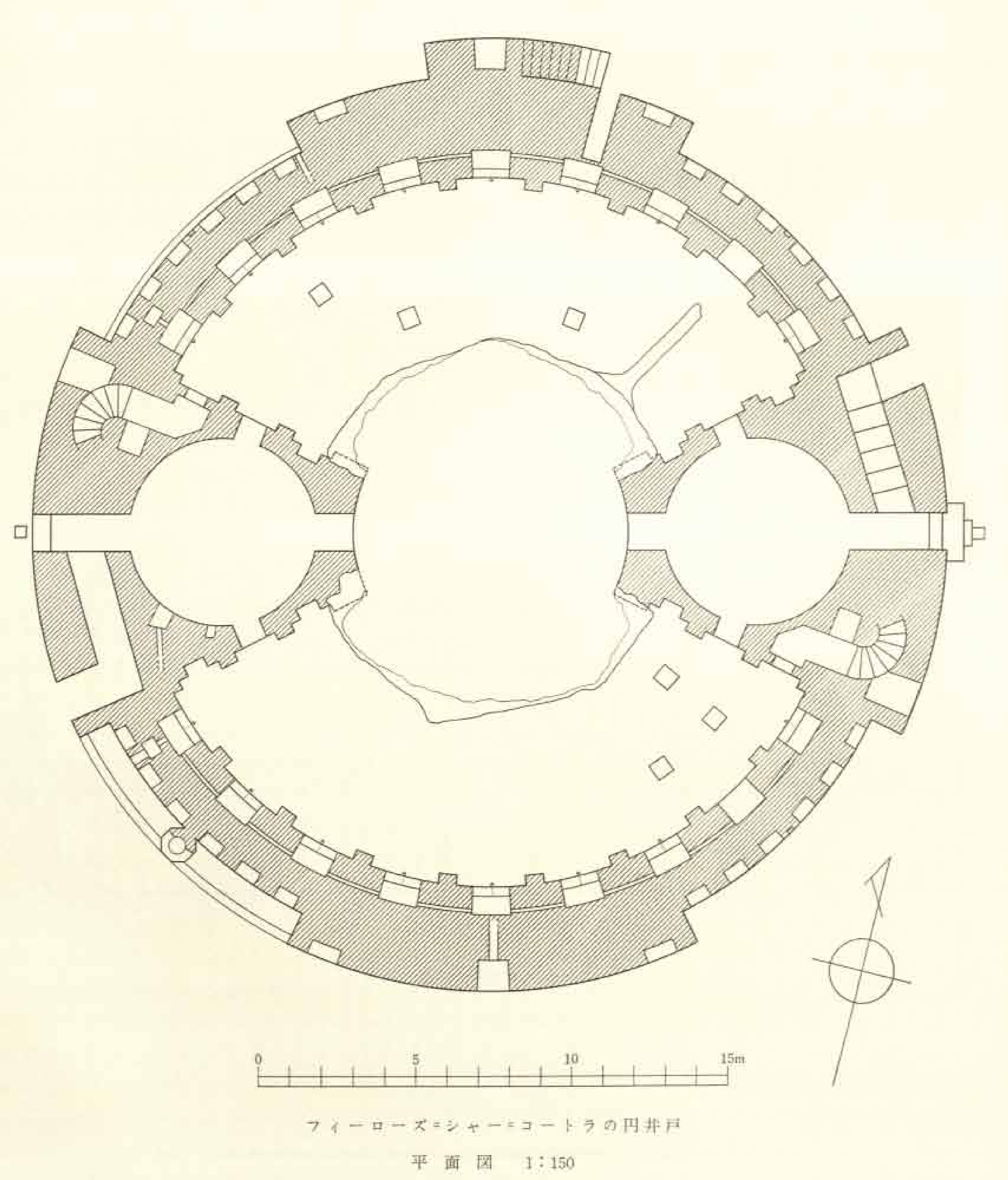




フィーローズ=シャー=コートラの円井戸

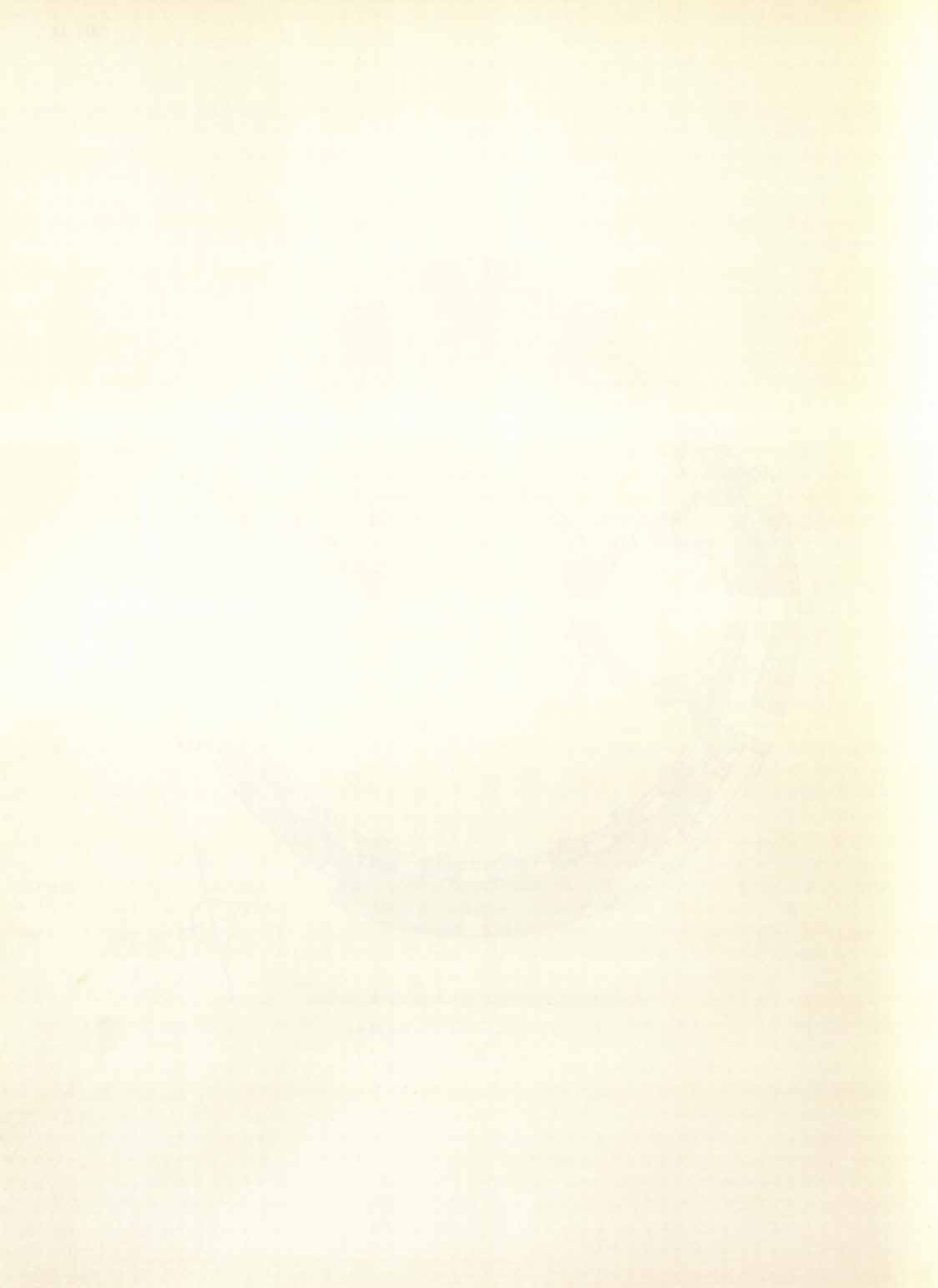
屋上平面図　1：150

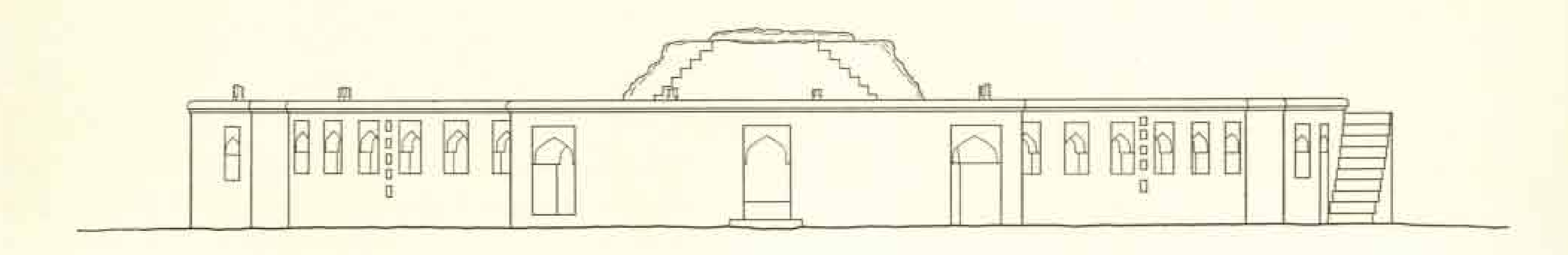




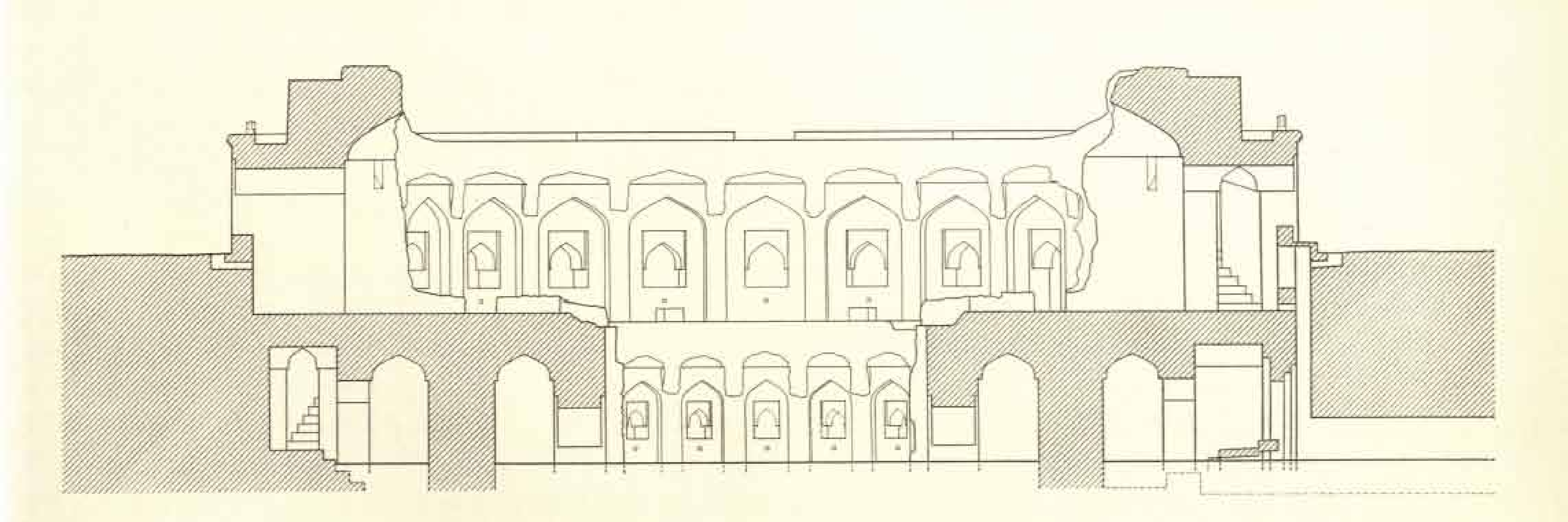
フィーローズ=シャー=コートラの円井戸

平面図　1：150

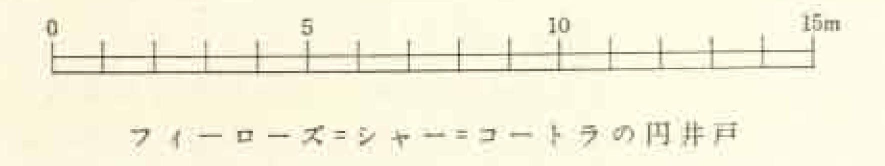




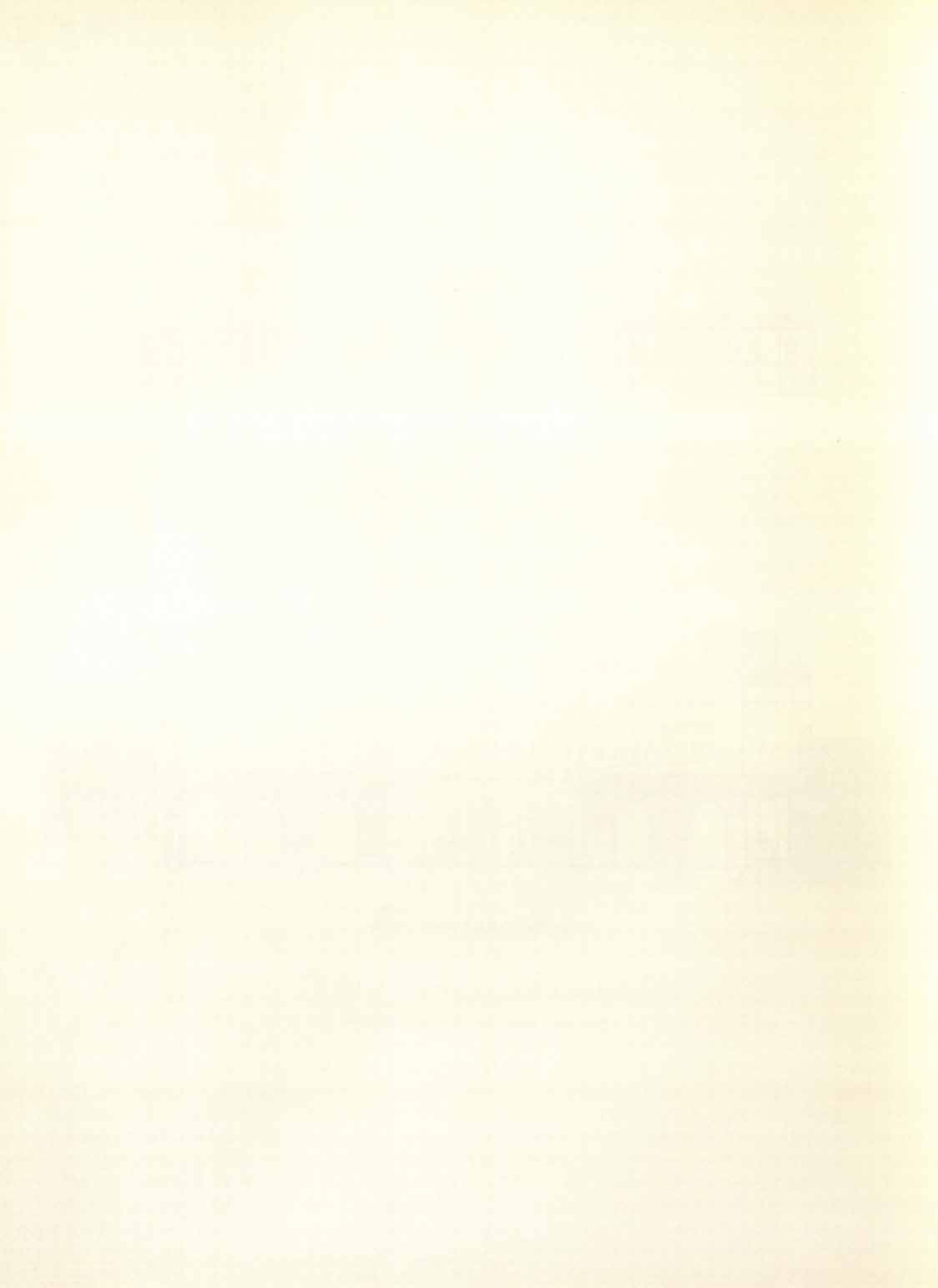
a）東面立面図　1：150



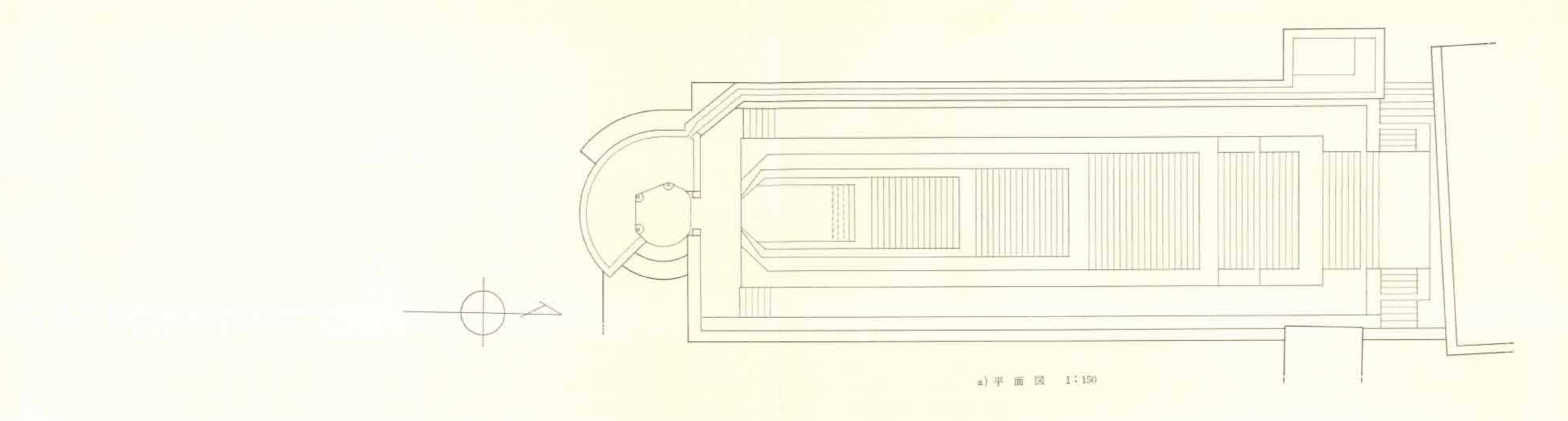
b）東西断面・内部北側立面図　1：150



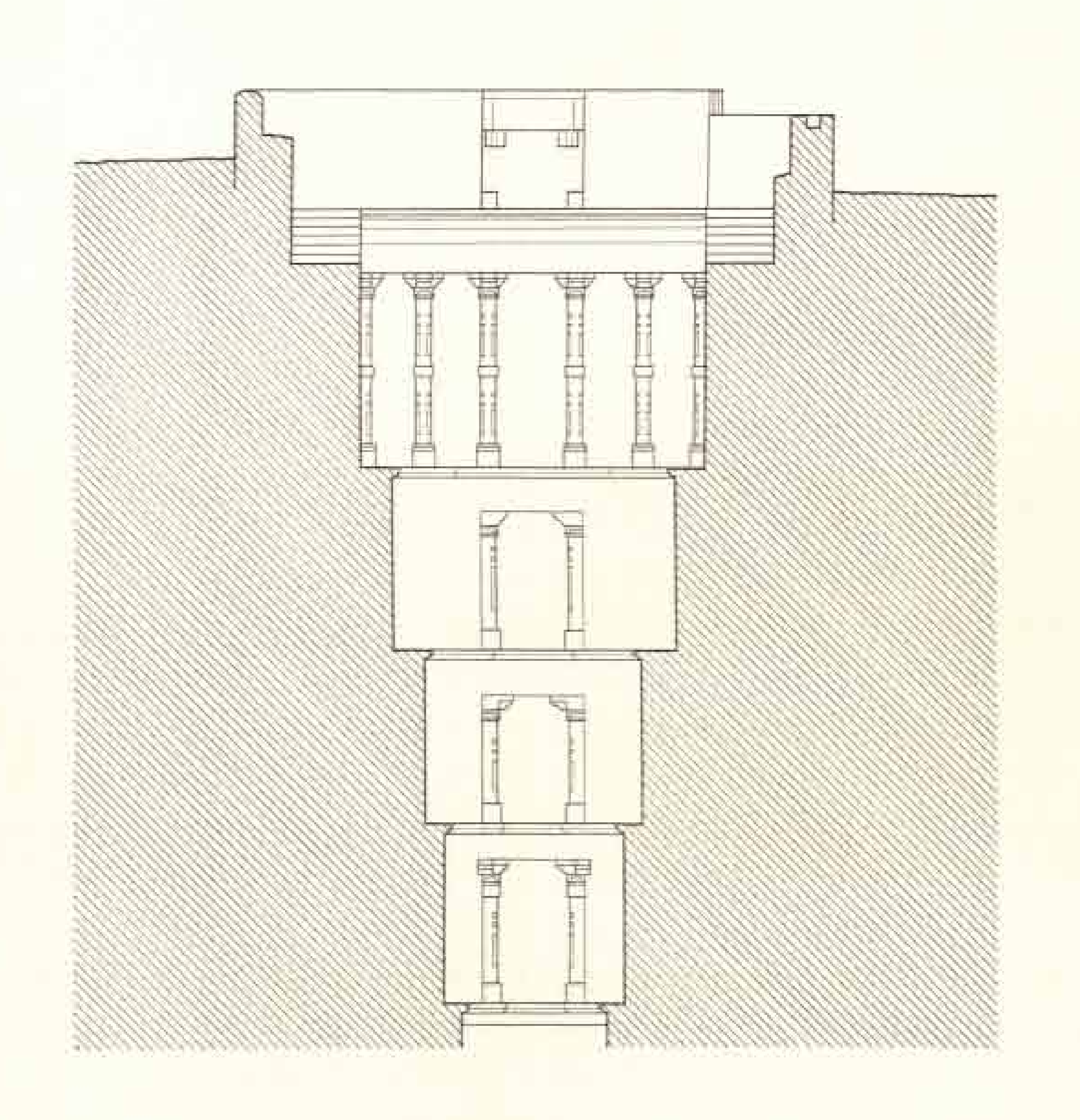
フィーローズ＝シャー＝コートラの円井戸



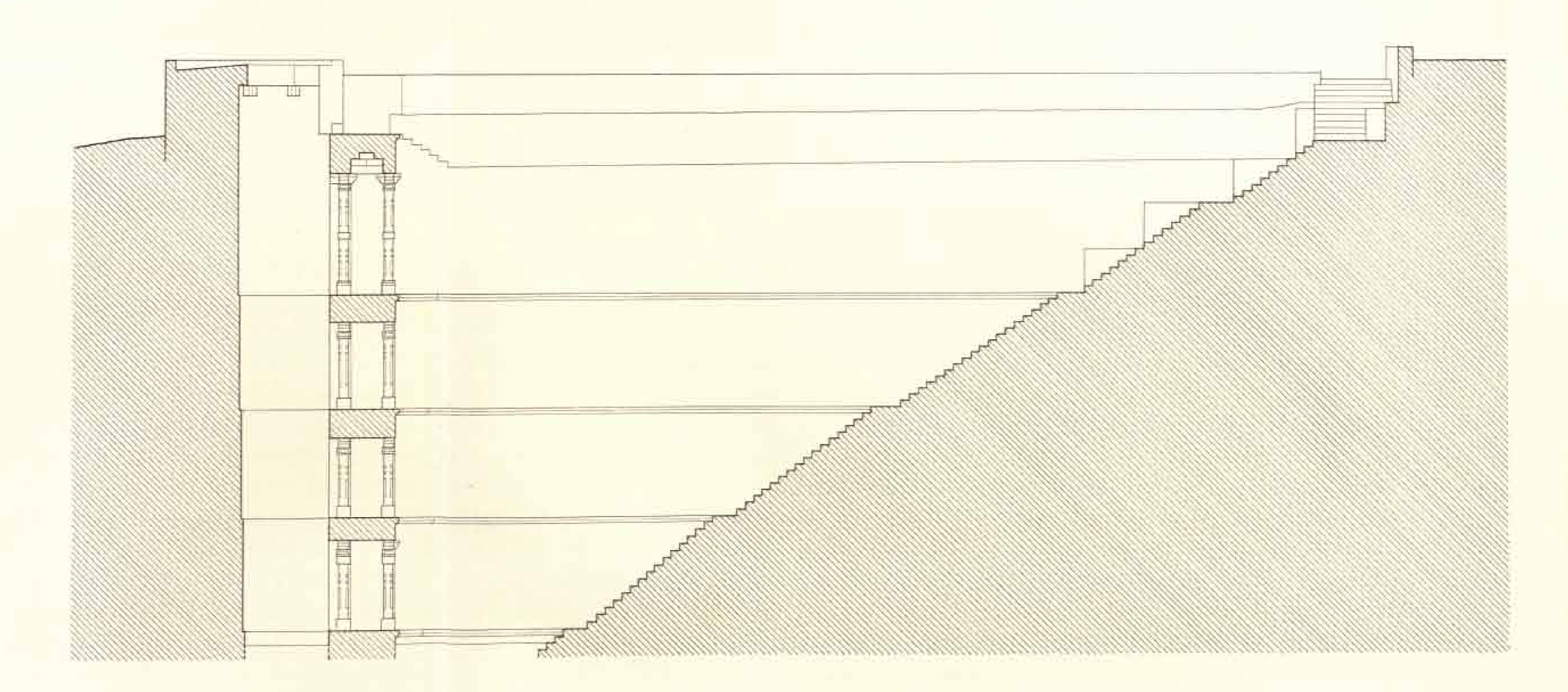




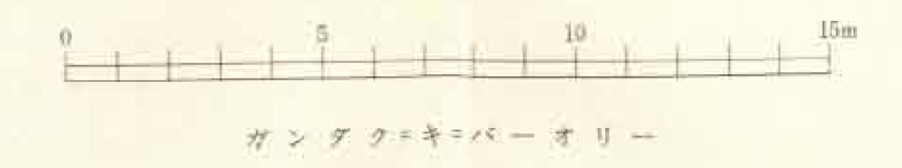
a) 平 面 図　1：150



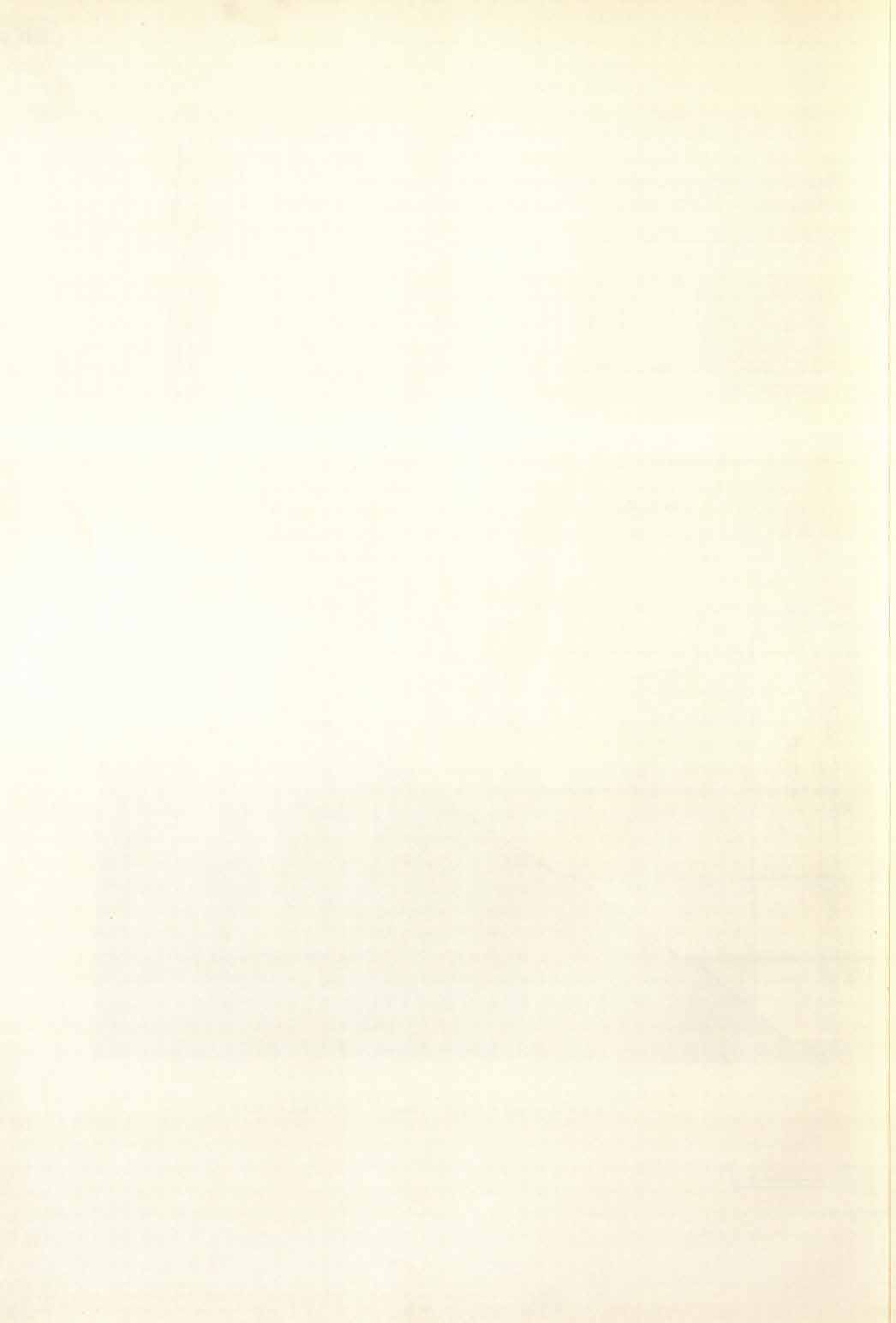
b) 東西断面・内部南側立面図　1：150

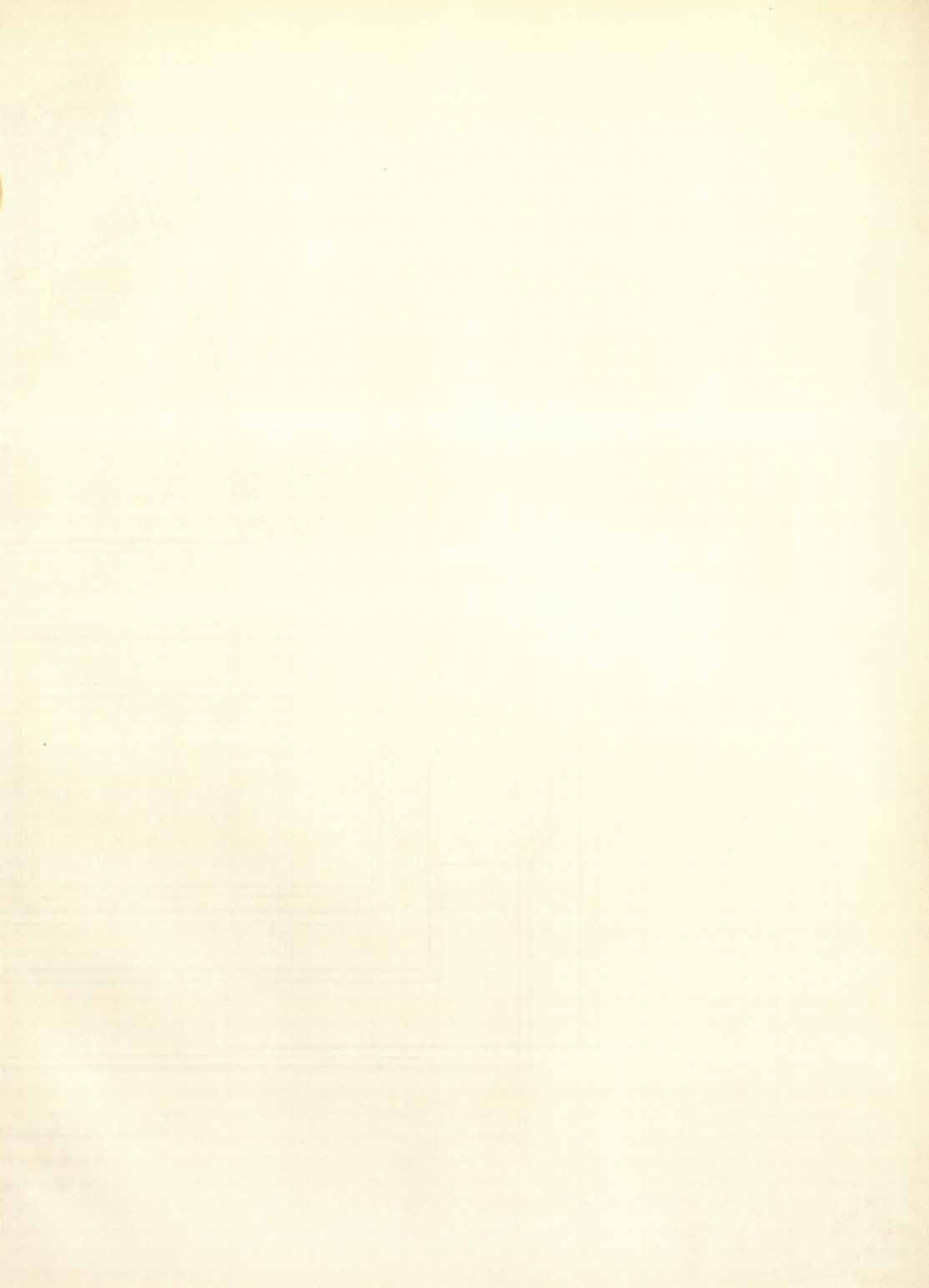


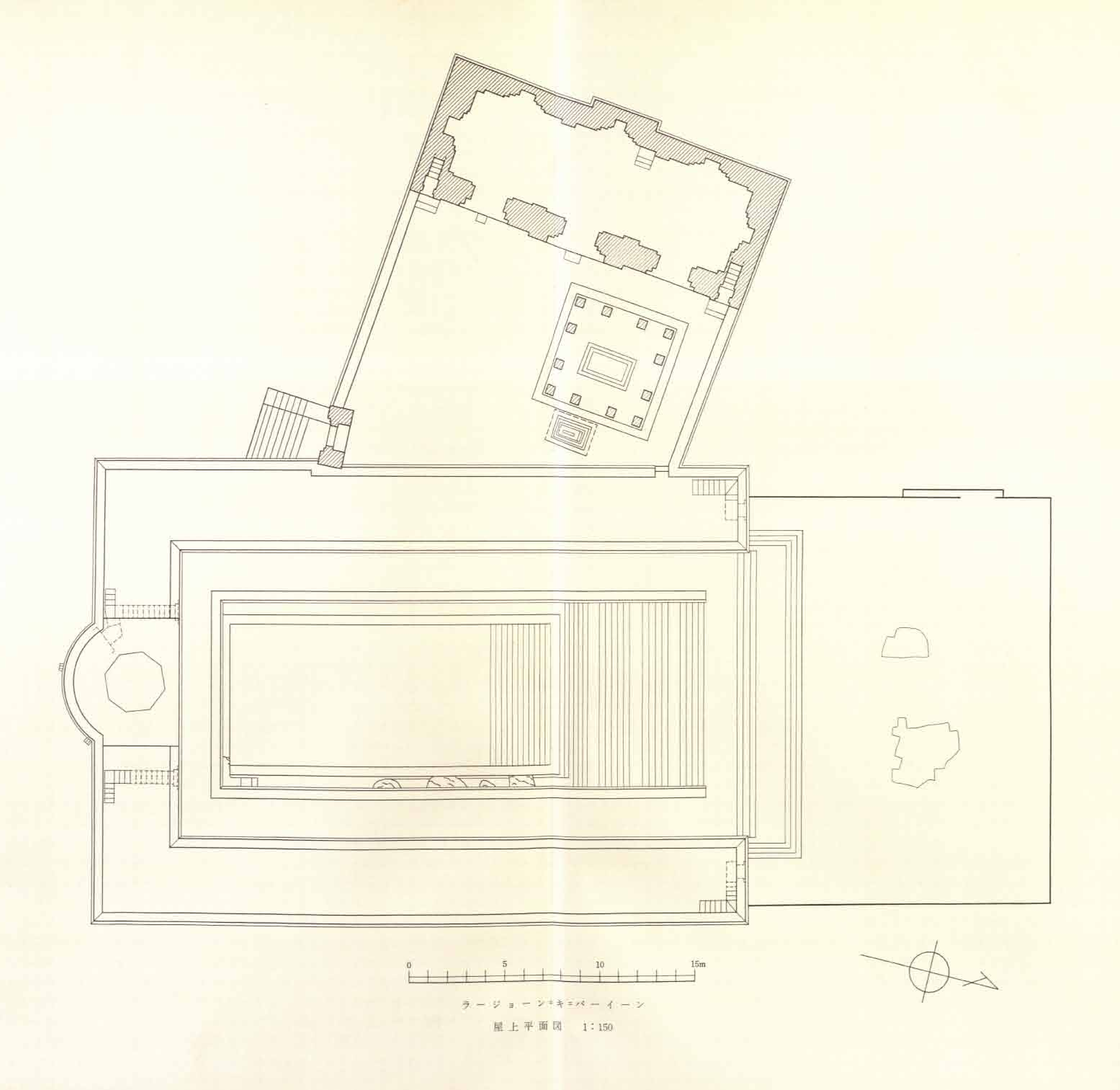
c) 南北断面・内部西側立面図　1：150



ガ ン ダ ク＝キ＝バ ー オ リ ー



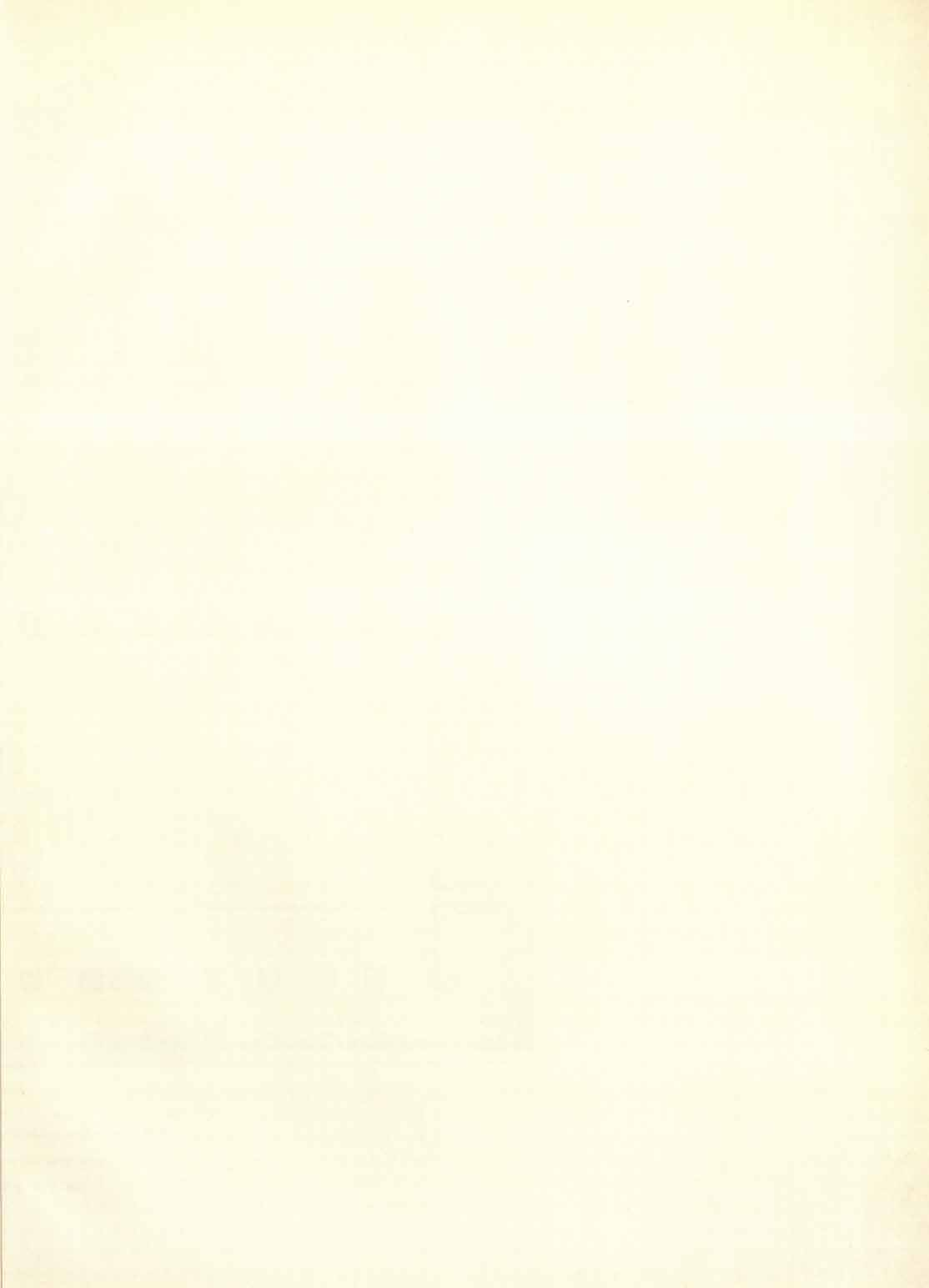


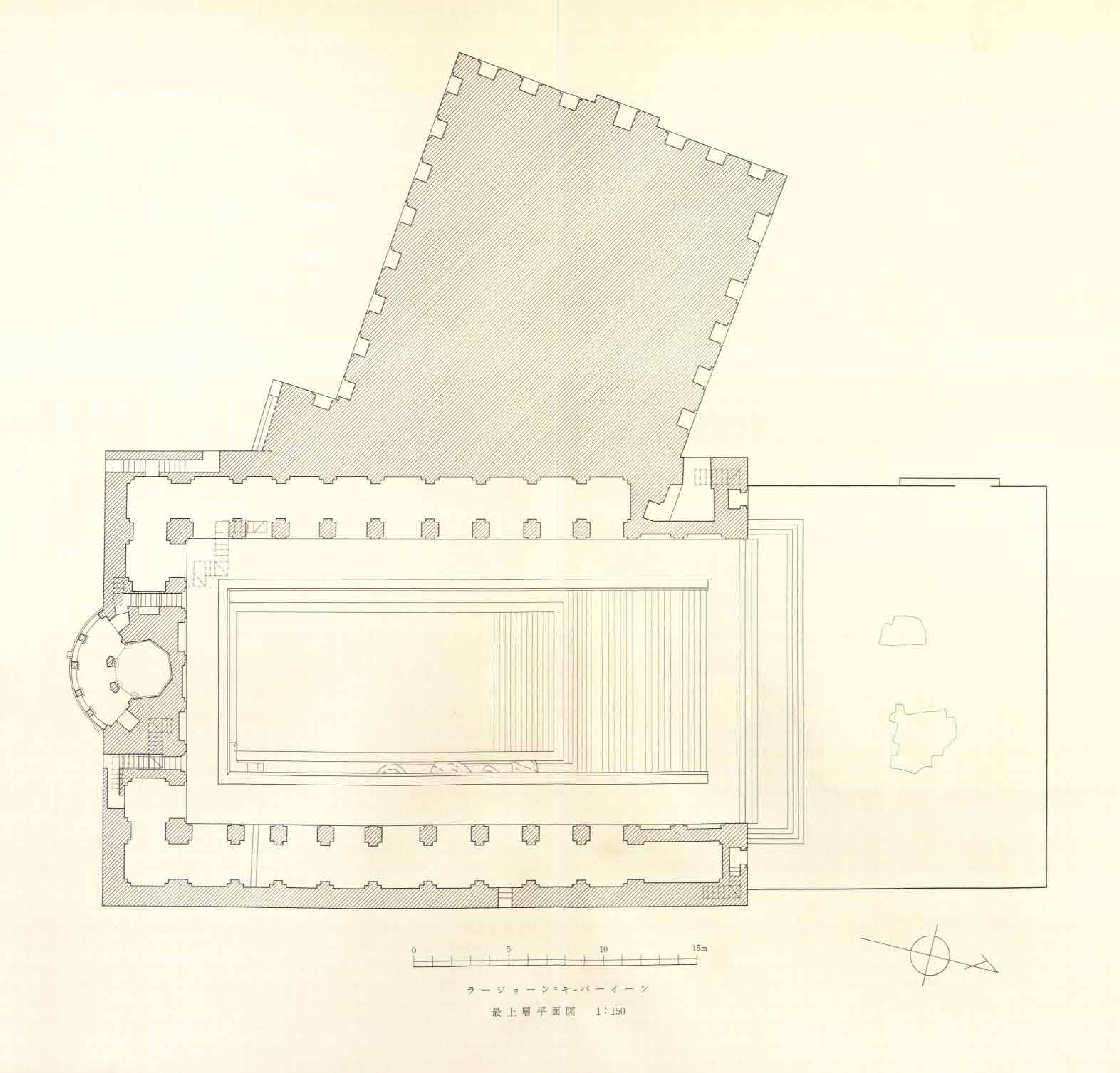


ラージョーン＝キ＝バーイーン

屋上平面図　1：150

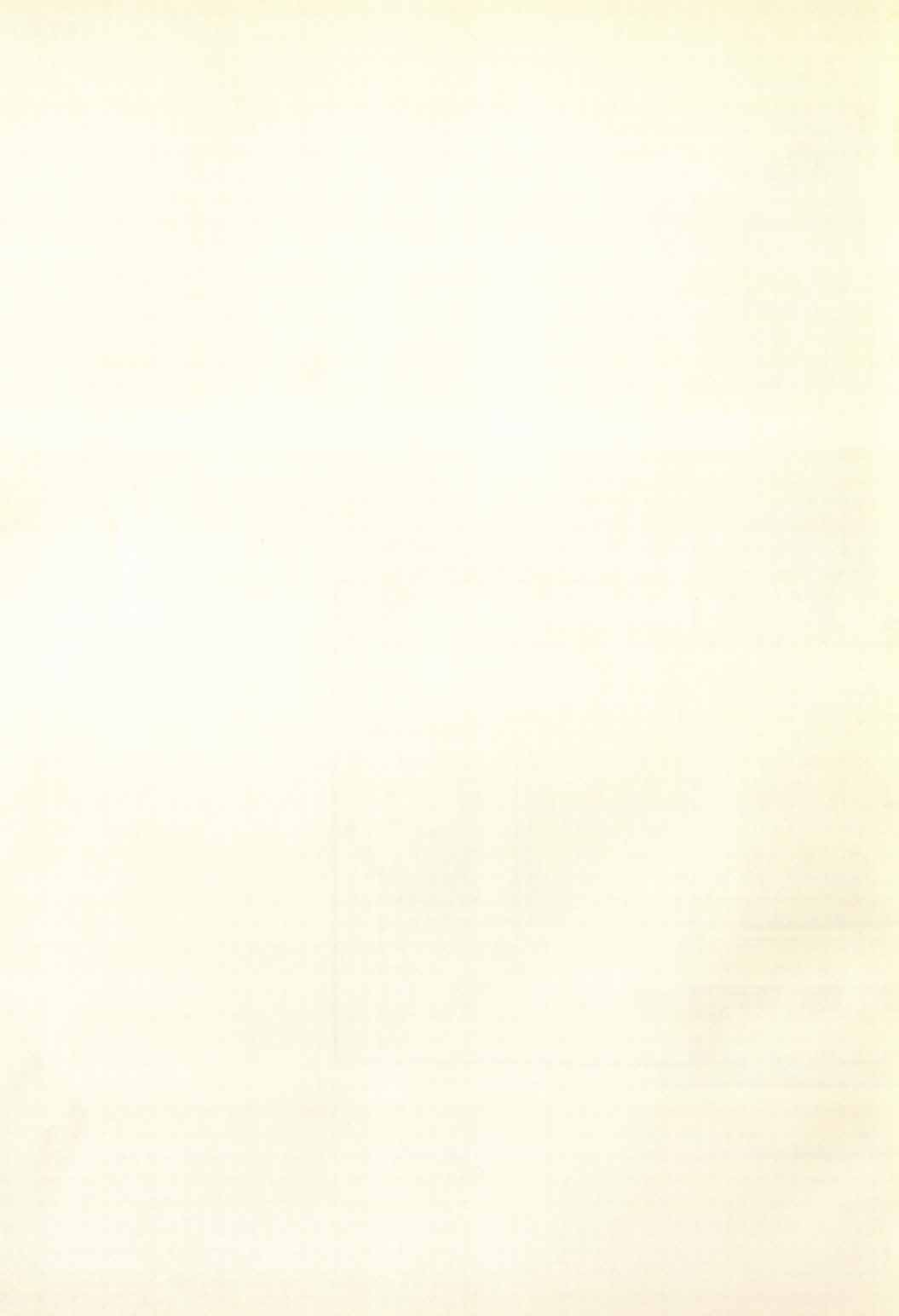


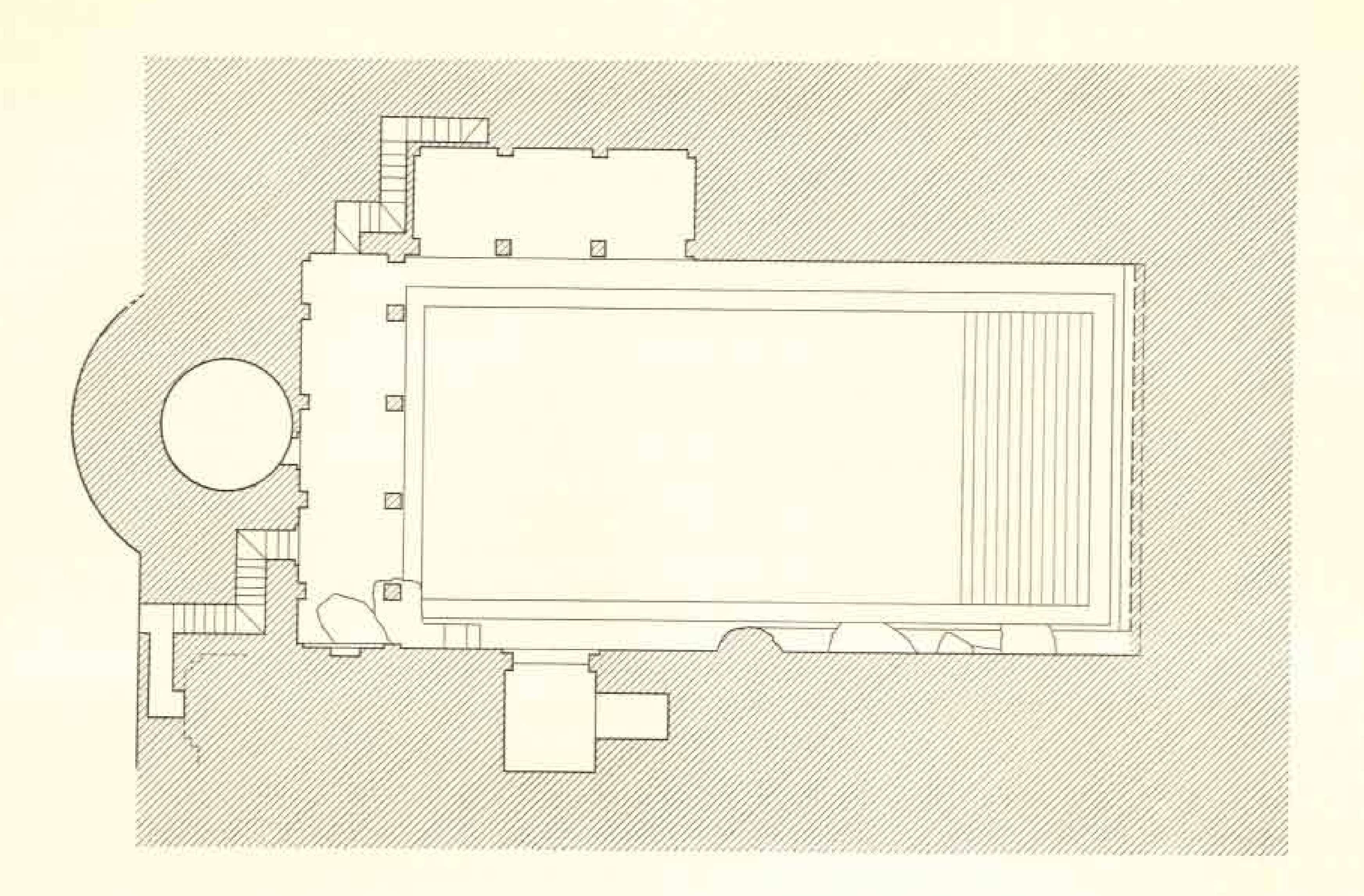




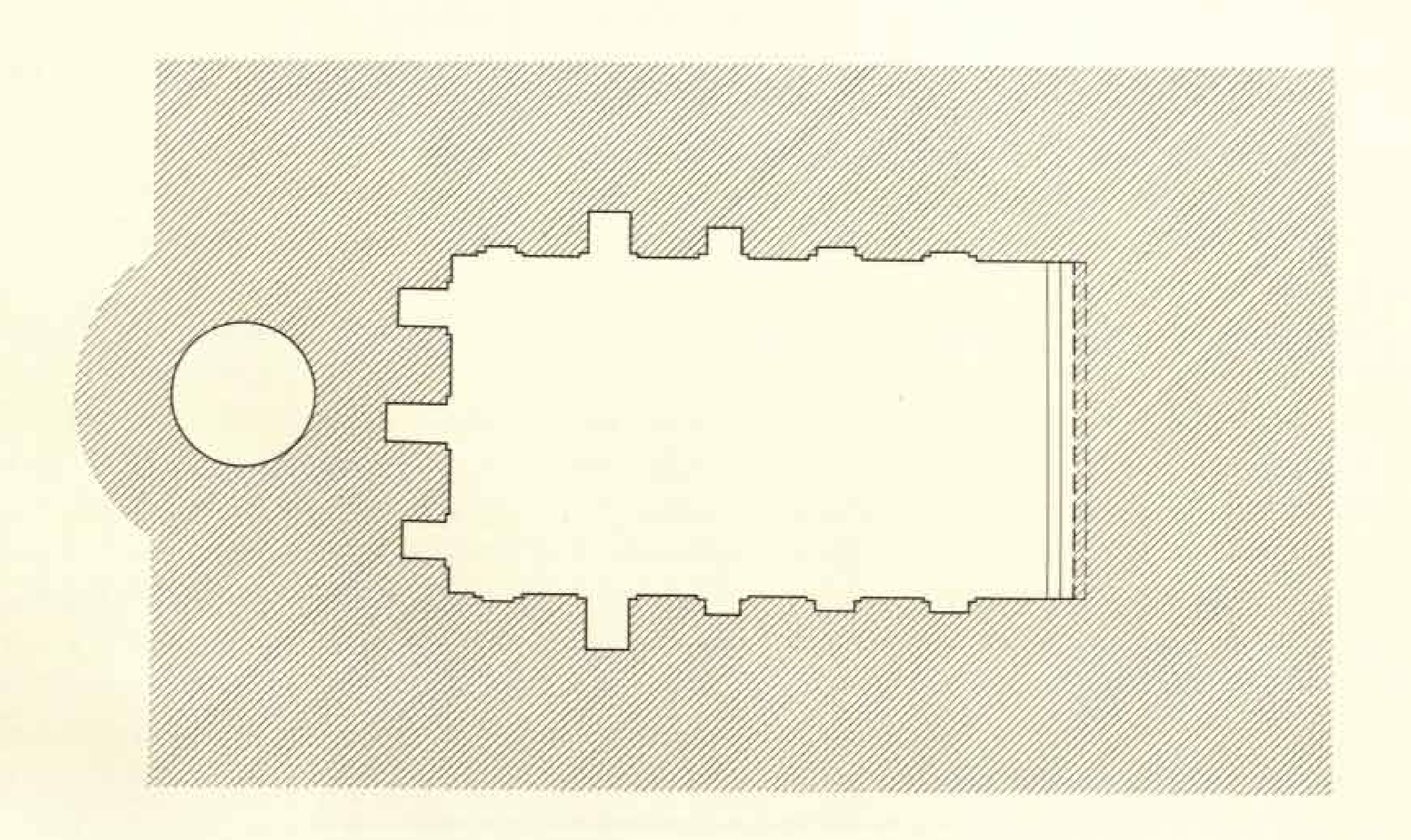
ラージョーン＝キ＝バーイーン

最上層平面図　1：150



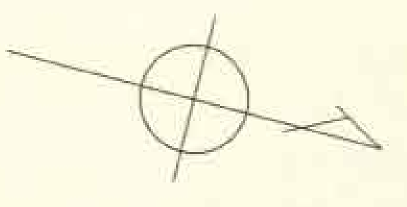


a）第二層平面図　1：150

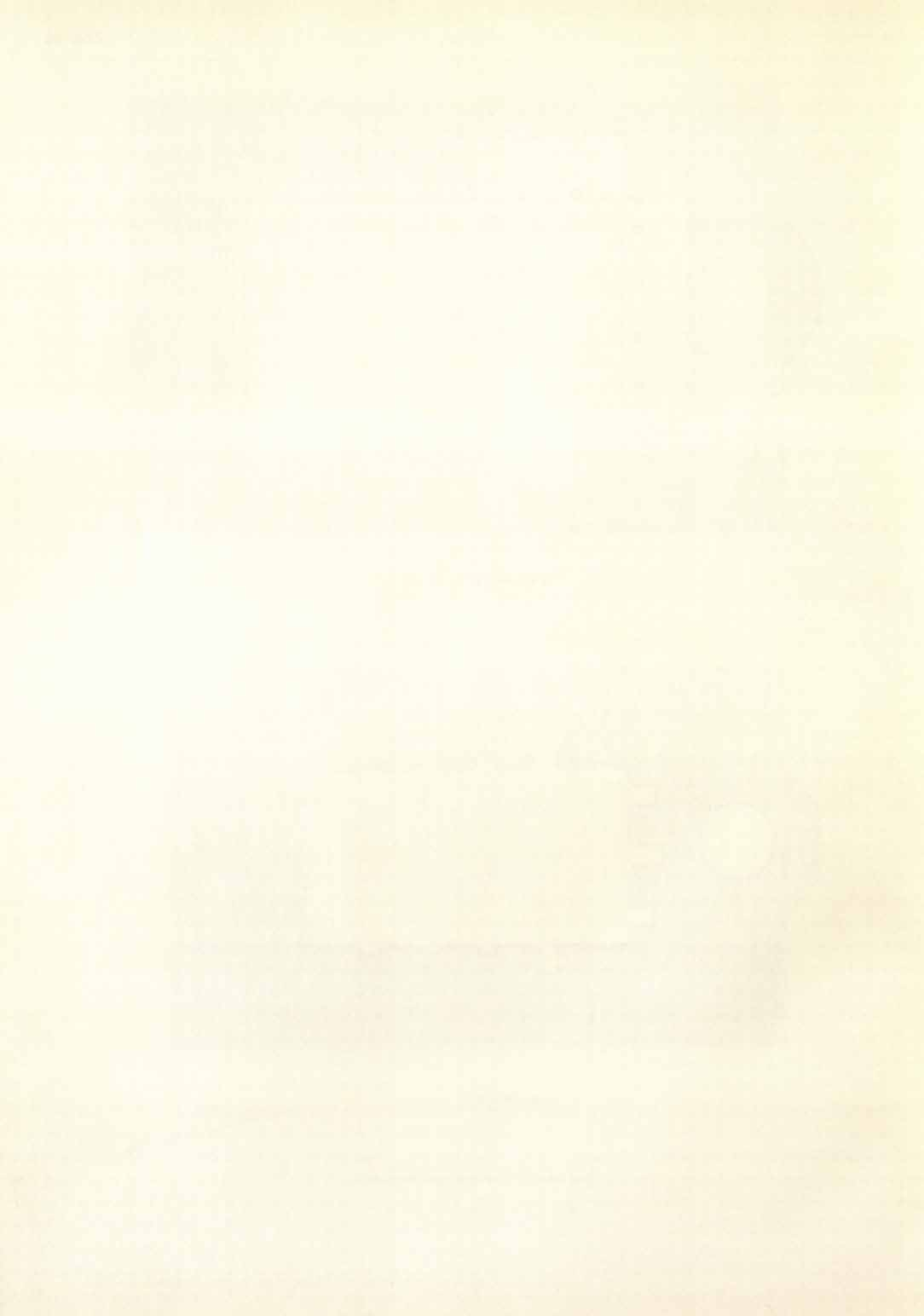


b）最下層平面図　1：150

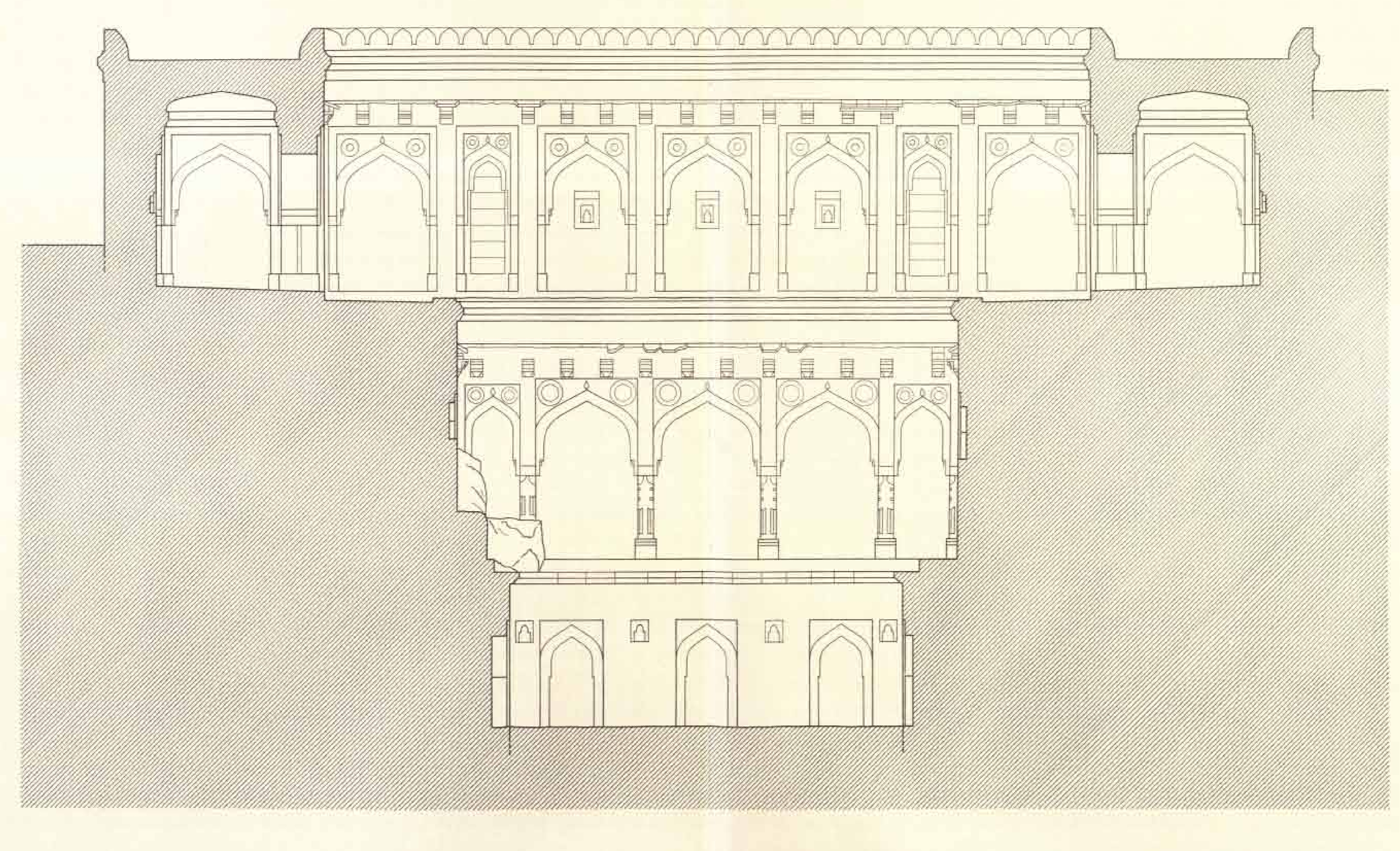


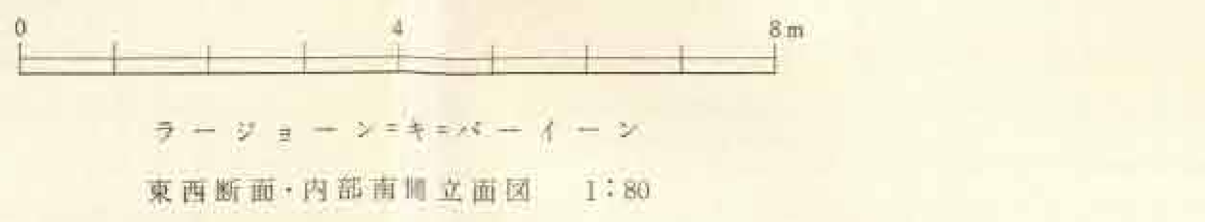


ラージョーン＝キ＝バーイーン



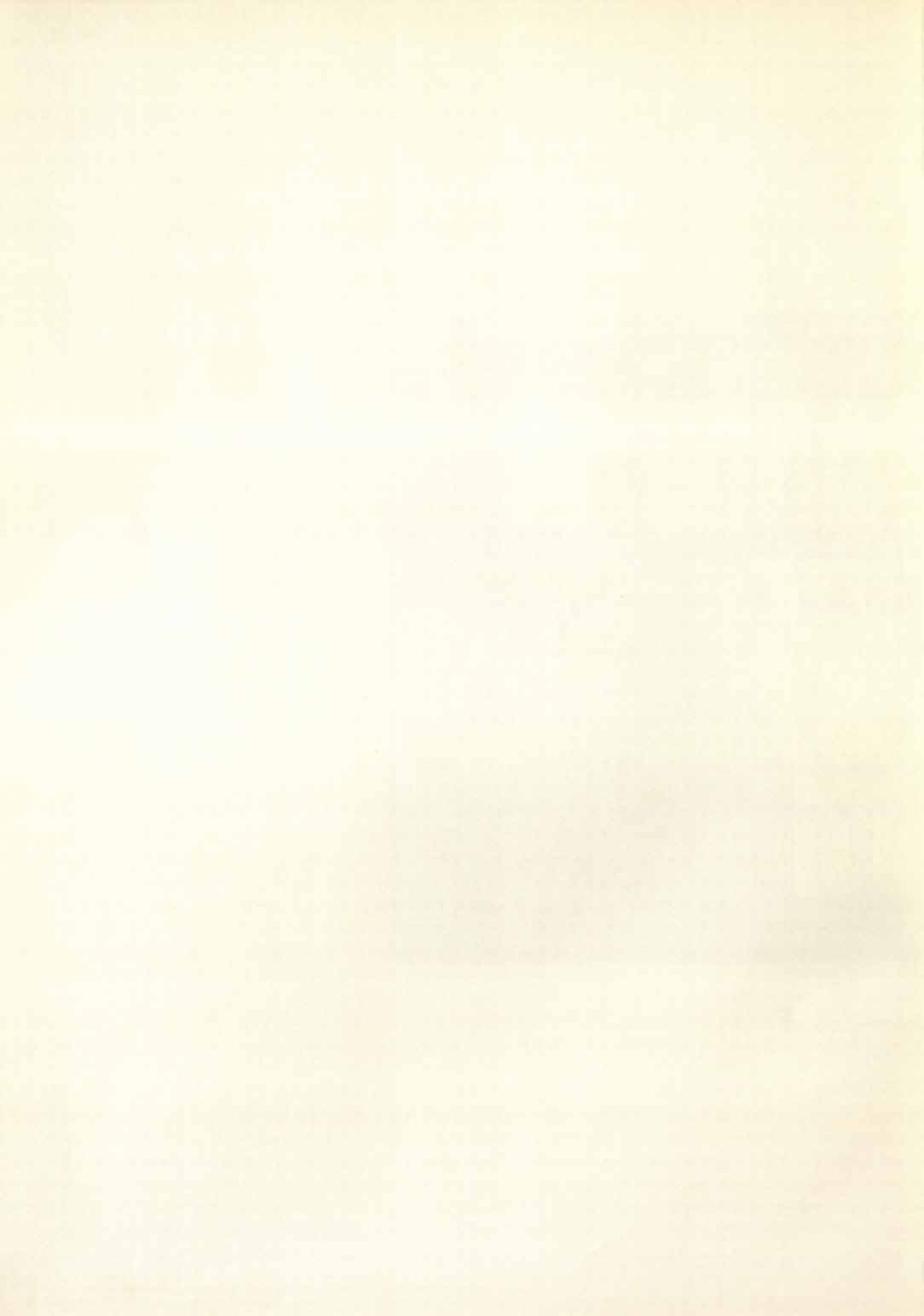


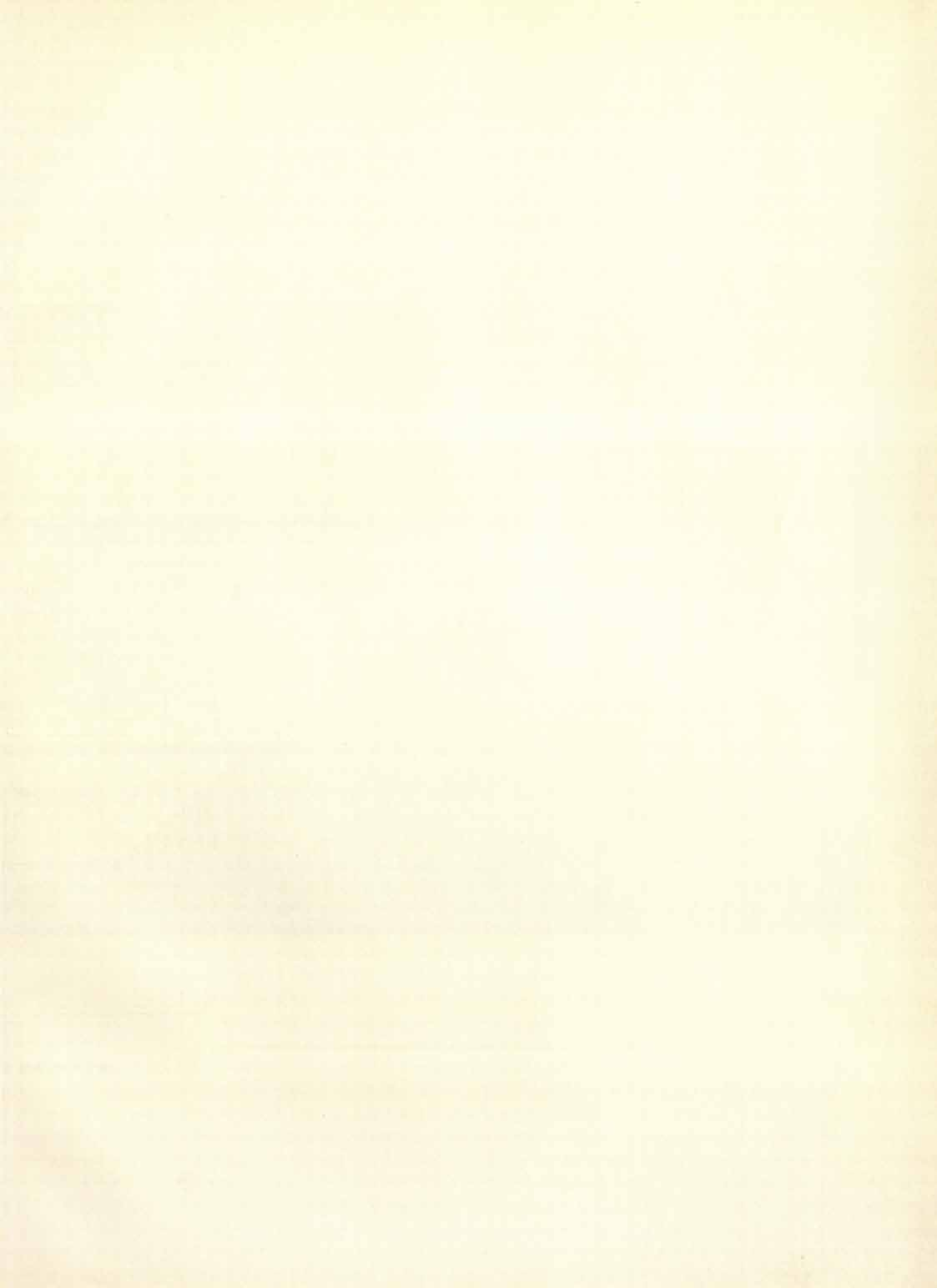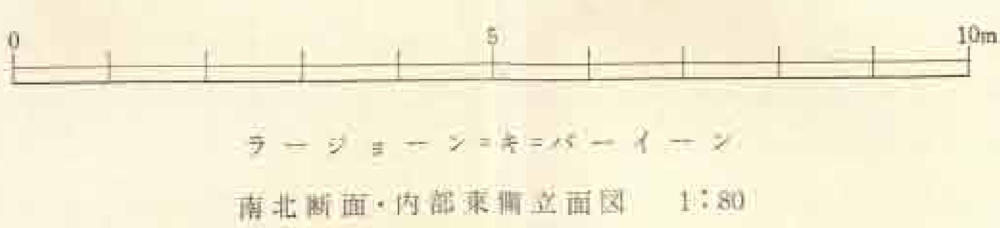




ラージョーン=キ=バーイーン

東西断面・内部南側立面図　1：80

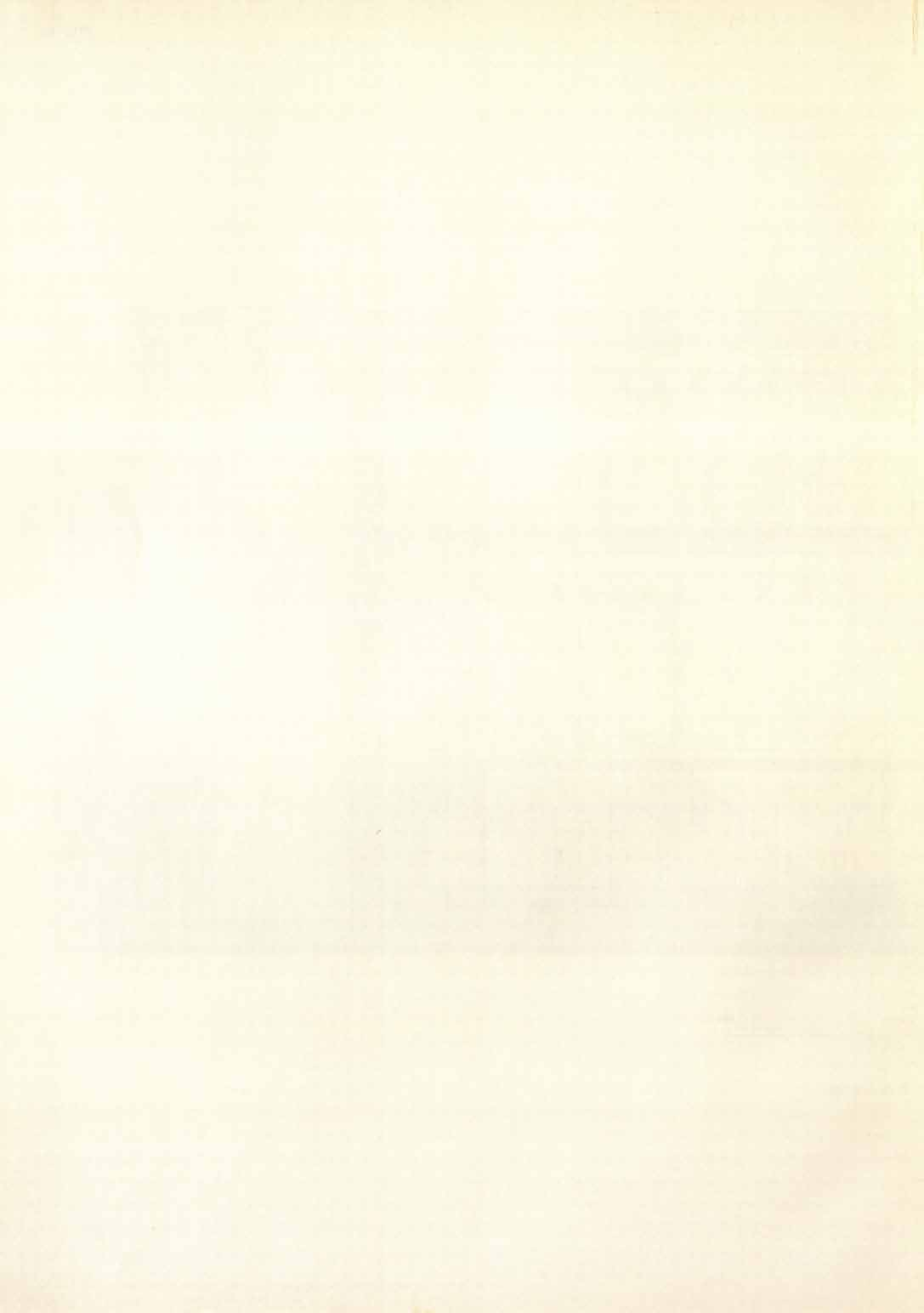


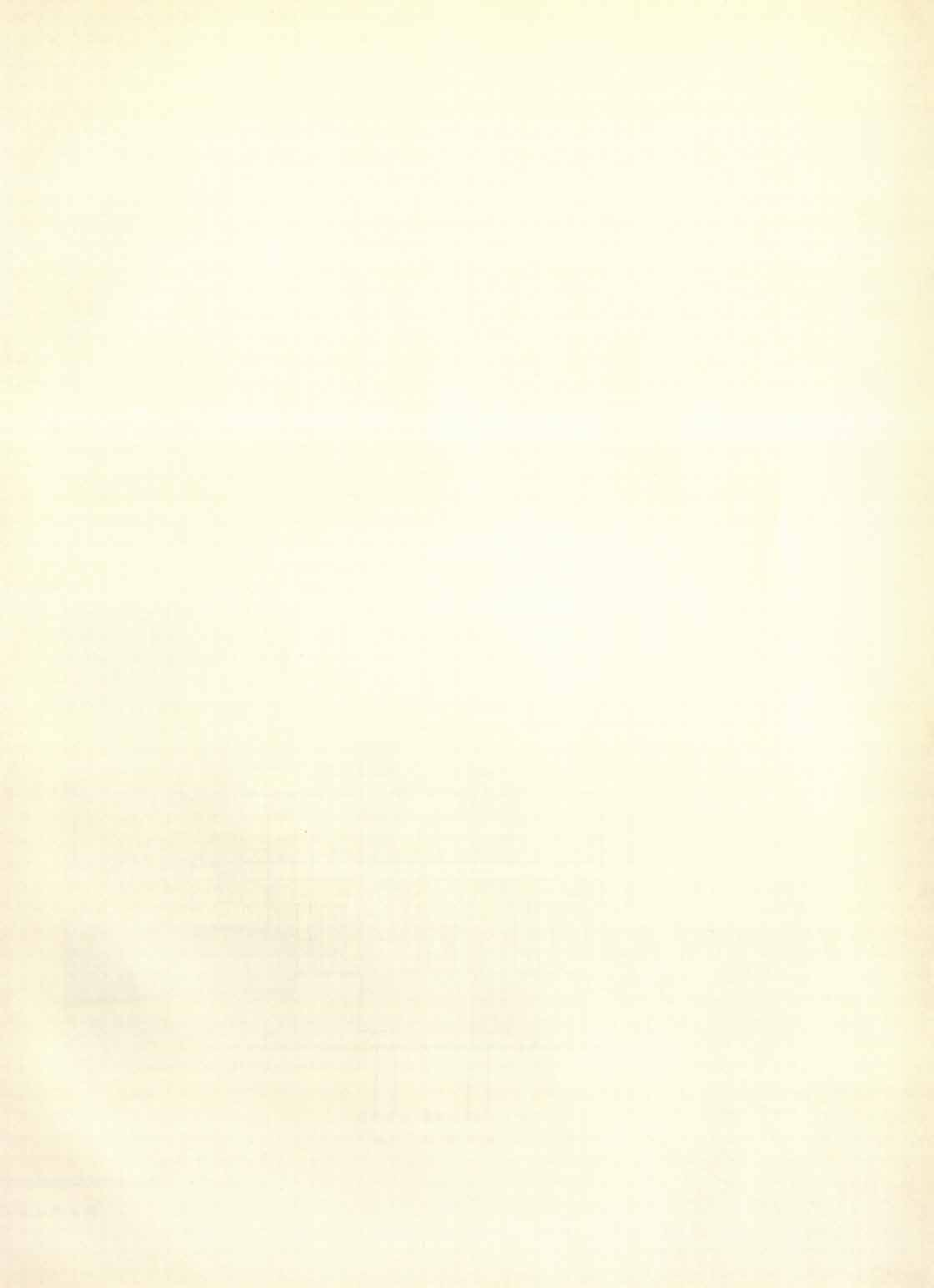


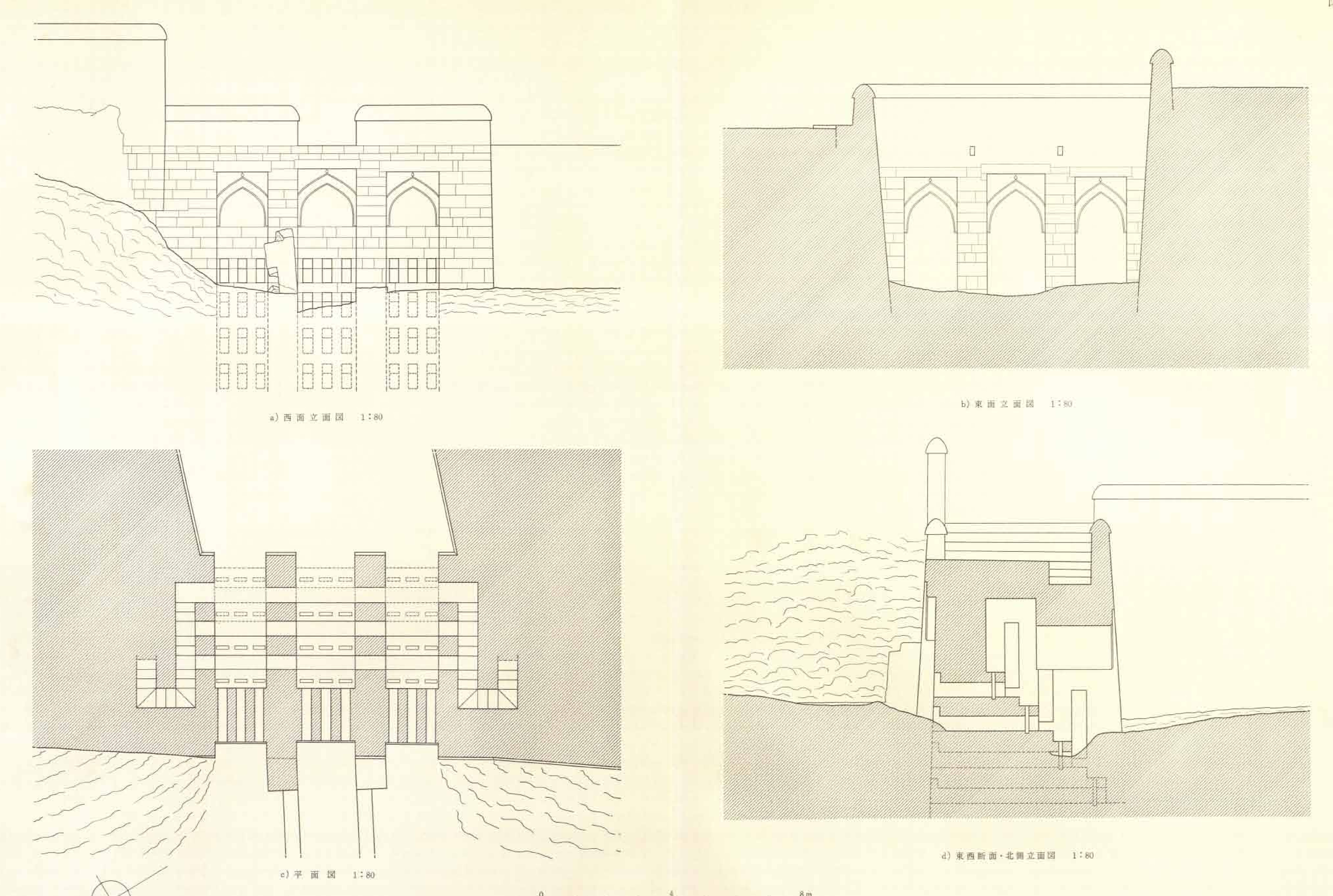


ラージョーン=キ=バーイーン

南北断面・内部東側立面図　1：80







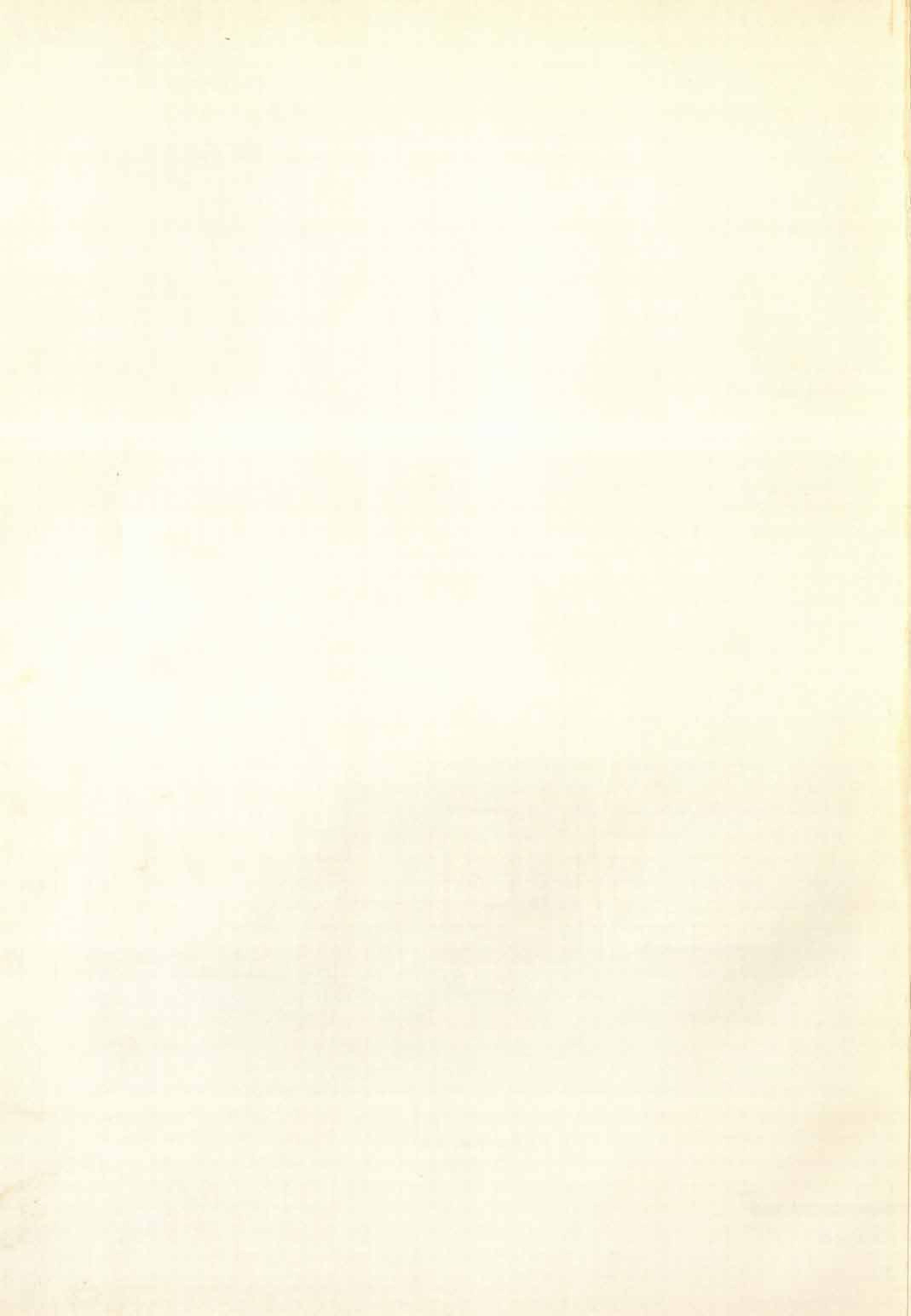
a) 西面立面図 1:80

b) 東面立面図 1:80

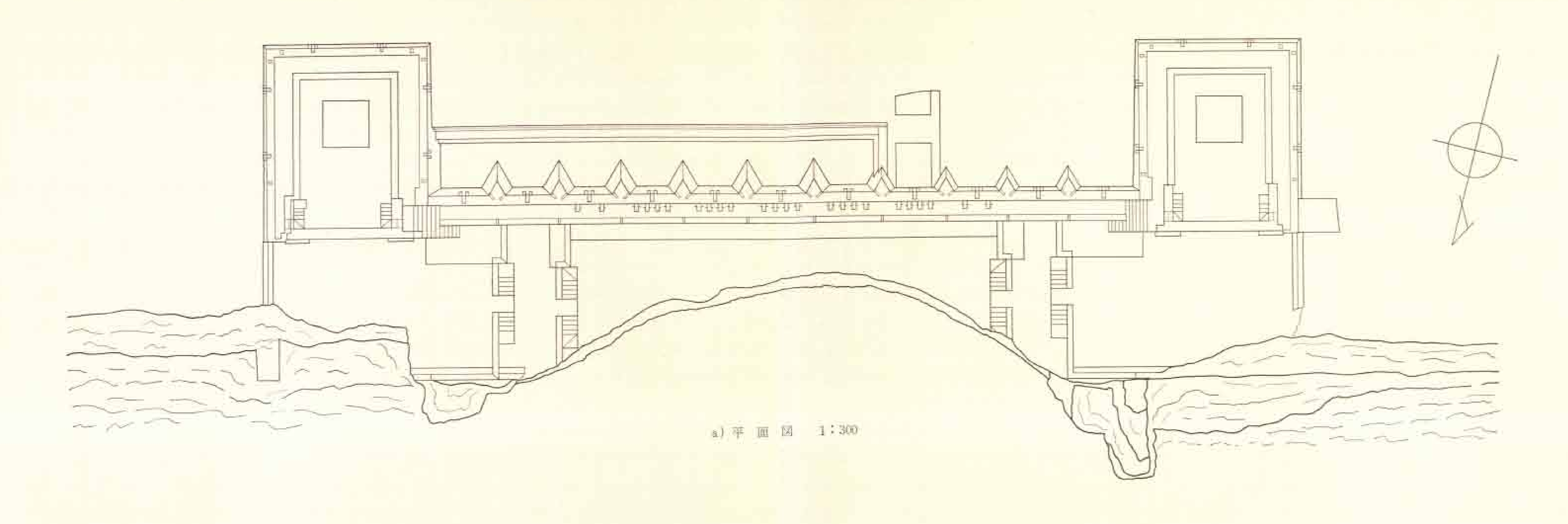
c) 平面図 1:80

d) 東西断面・北側立面図 1:80

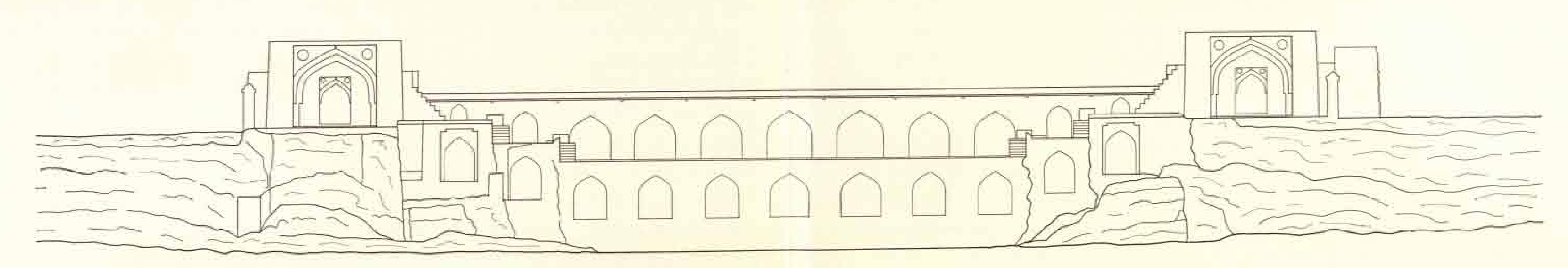
トゥグルカーバードの水門



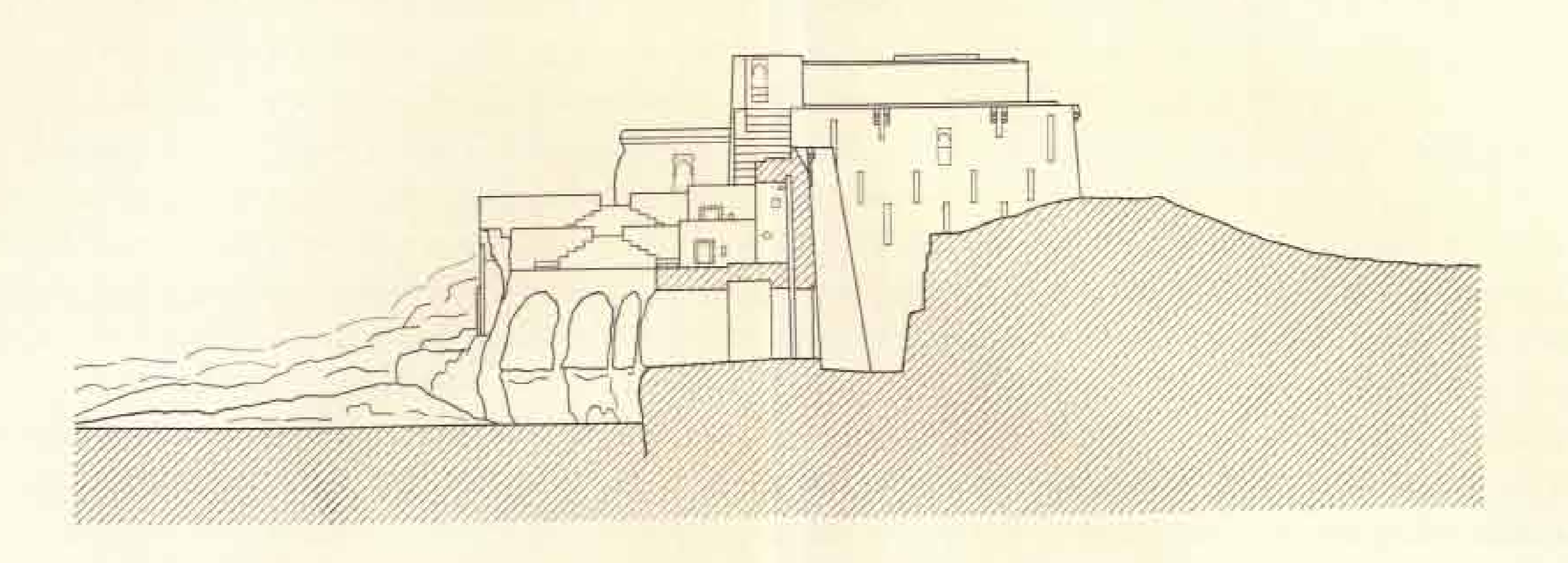




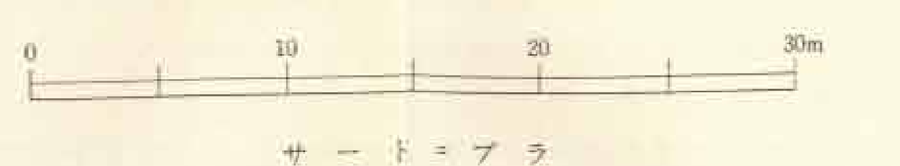
a) 平 面 図　1：300



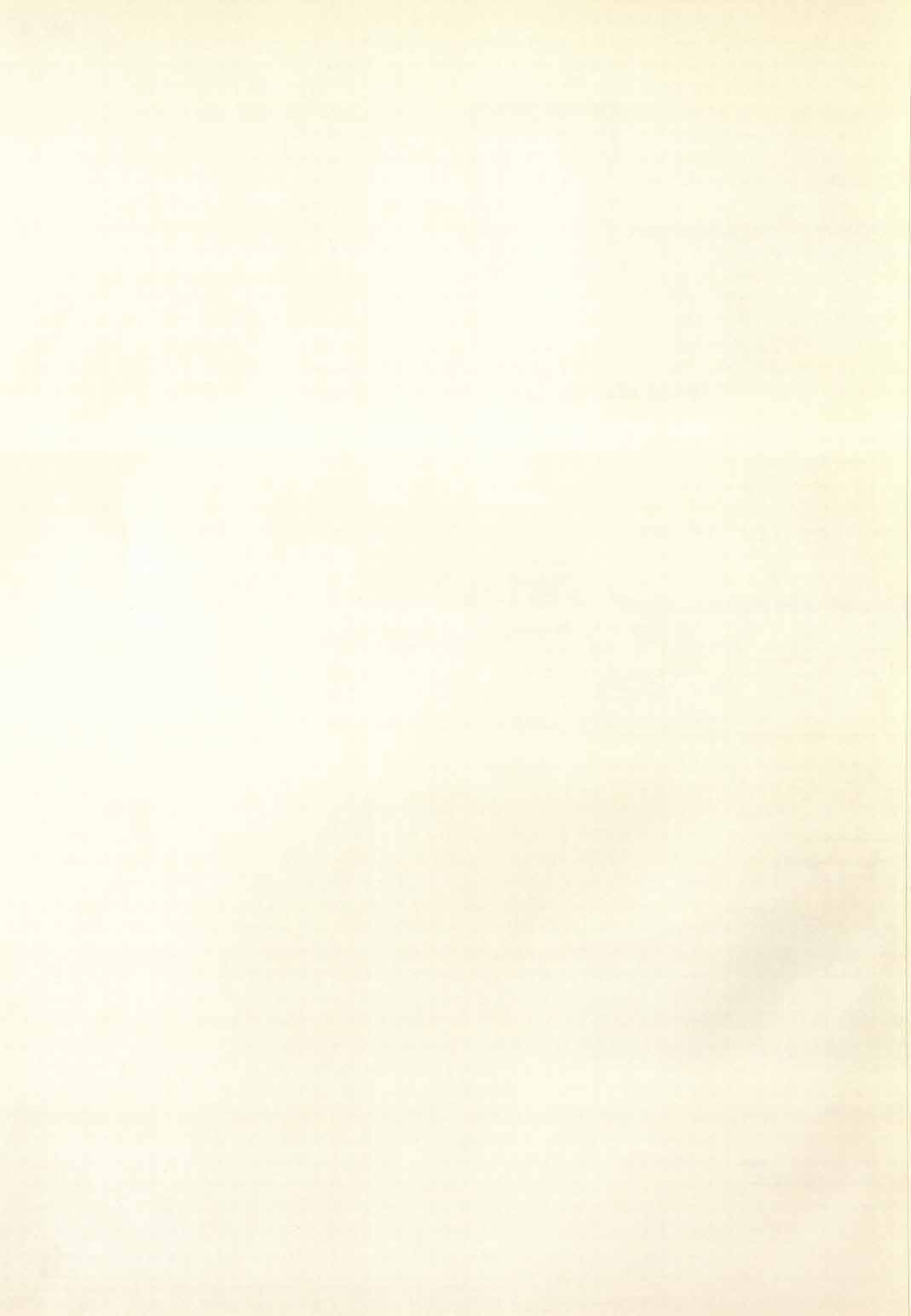
b) 北 面 立 面 図　1：300

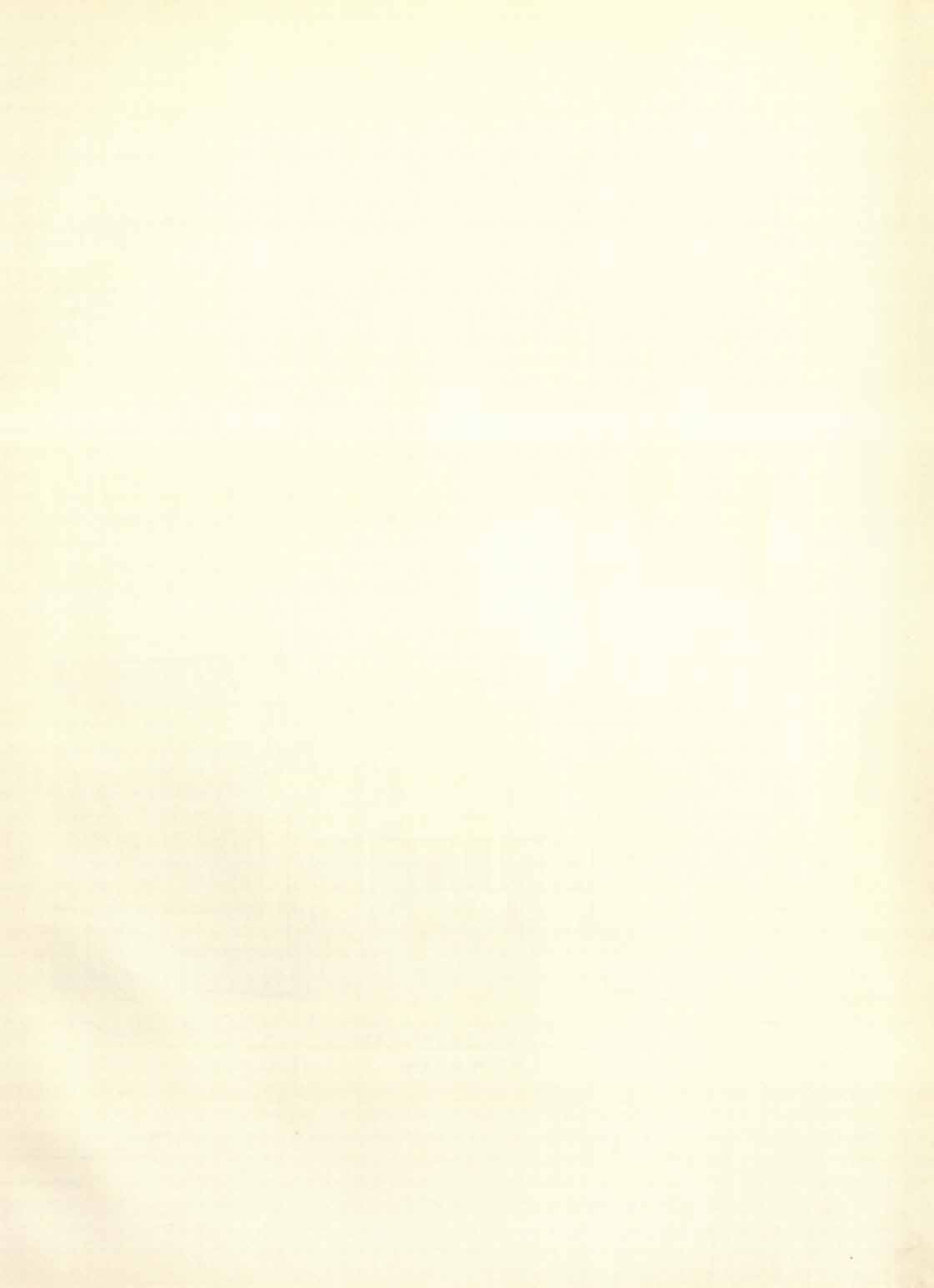


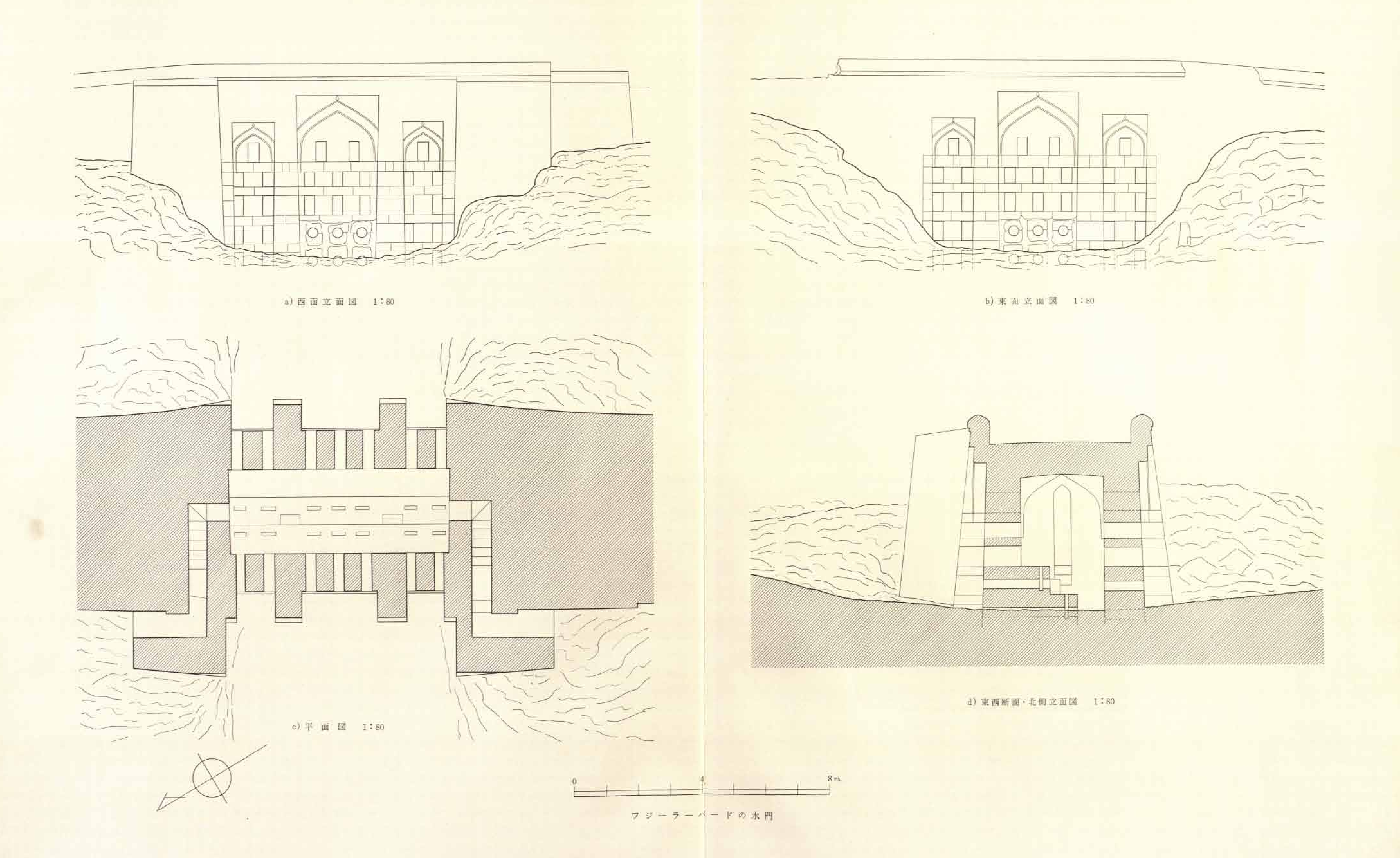
c) 南北断面・東側立面図　1：300



サ ー ド ＝ ブ ラ







a) 西面立面図　1：80

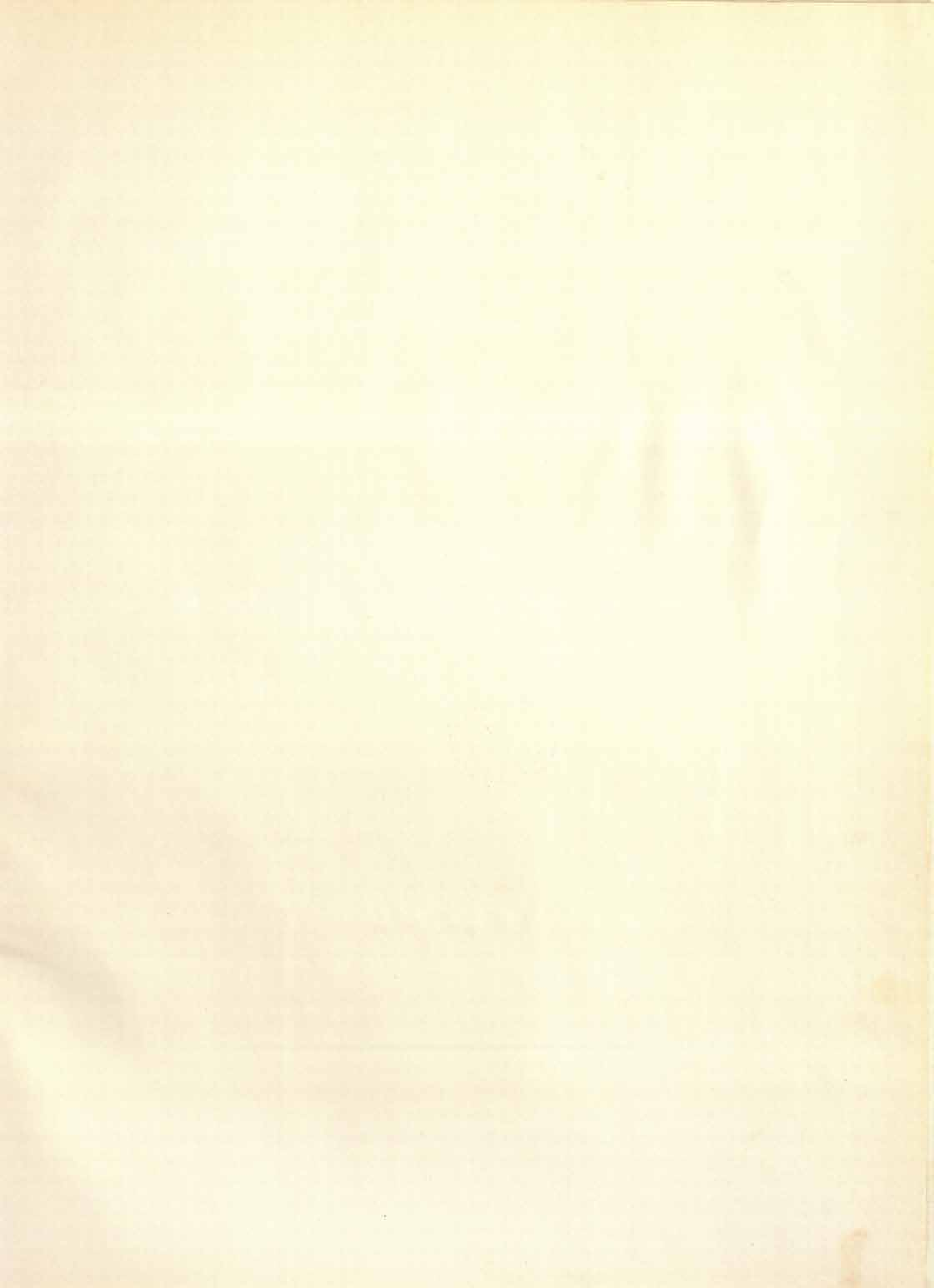
b) 東面立面図　1：80

c) 平面図　1：80

d) 東西断面・北側立面図　1：80

ワジーラーバードの水門

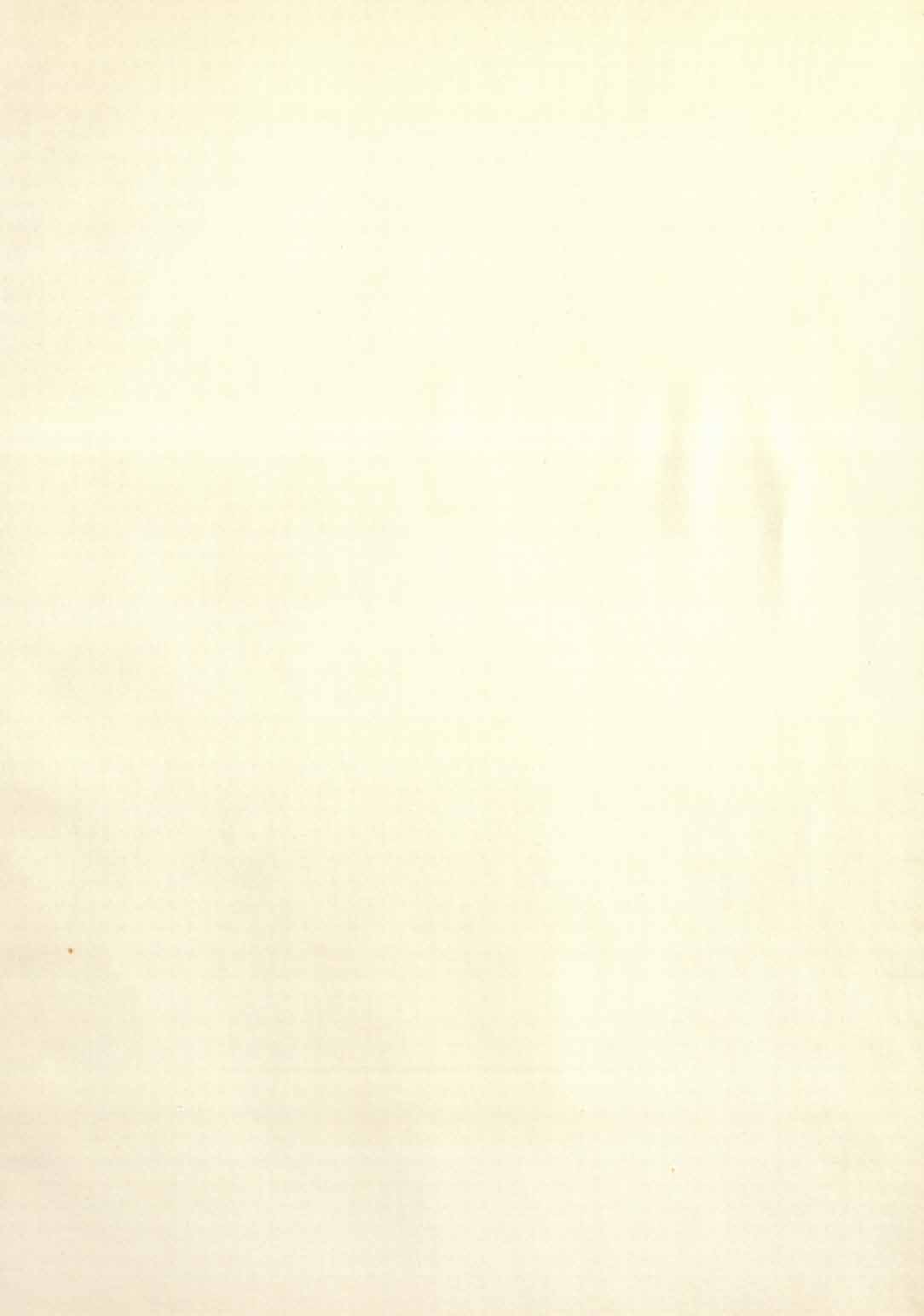

CENTRAL ARCHAEOLOGICAL
New Delhi
LIBRARY

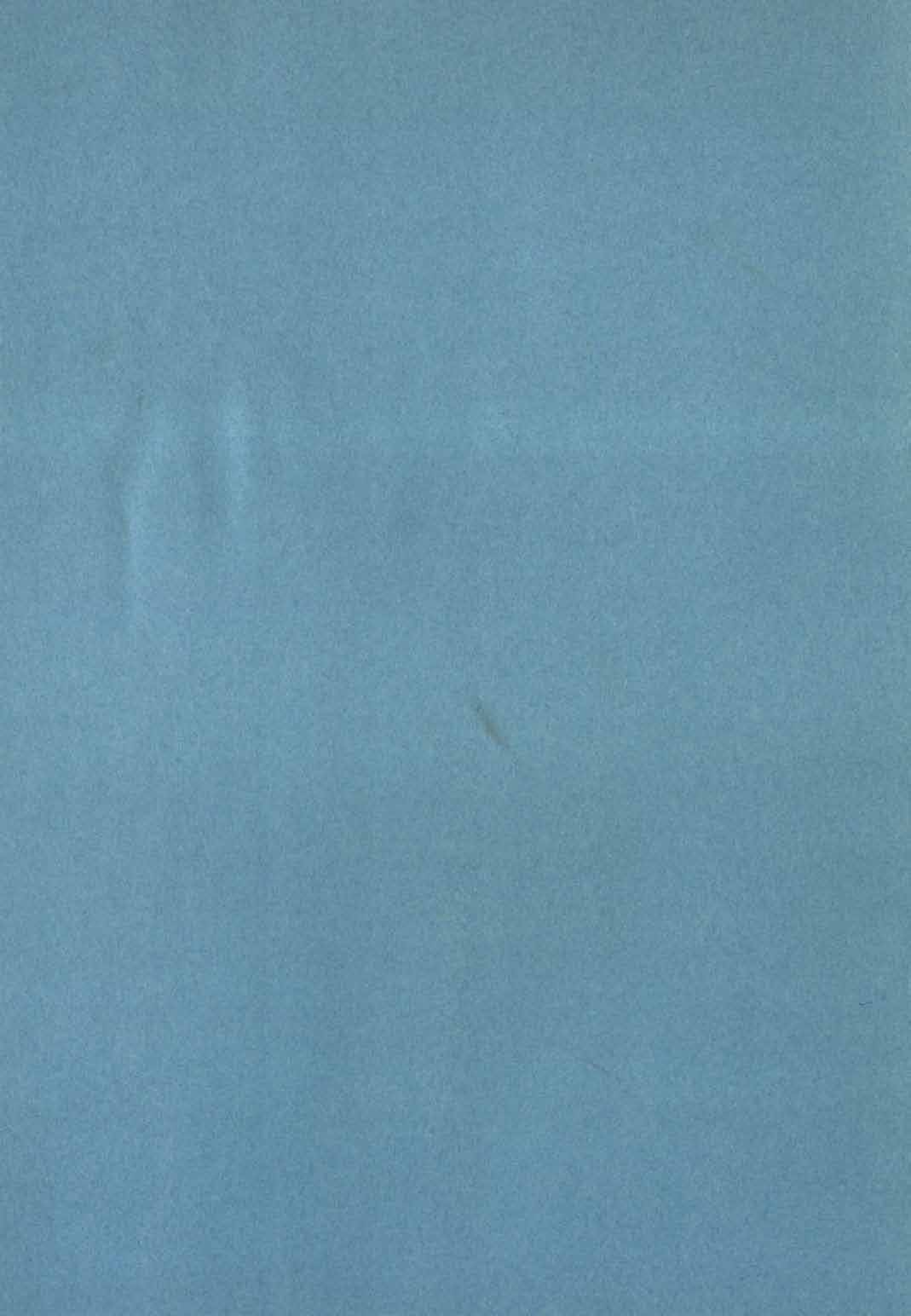


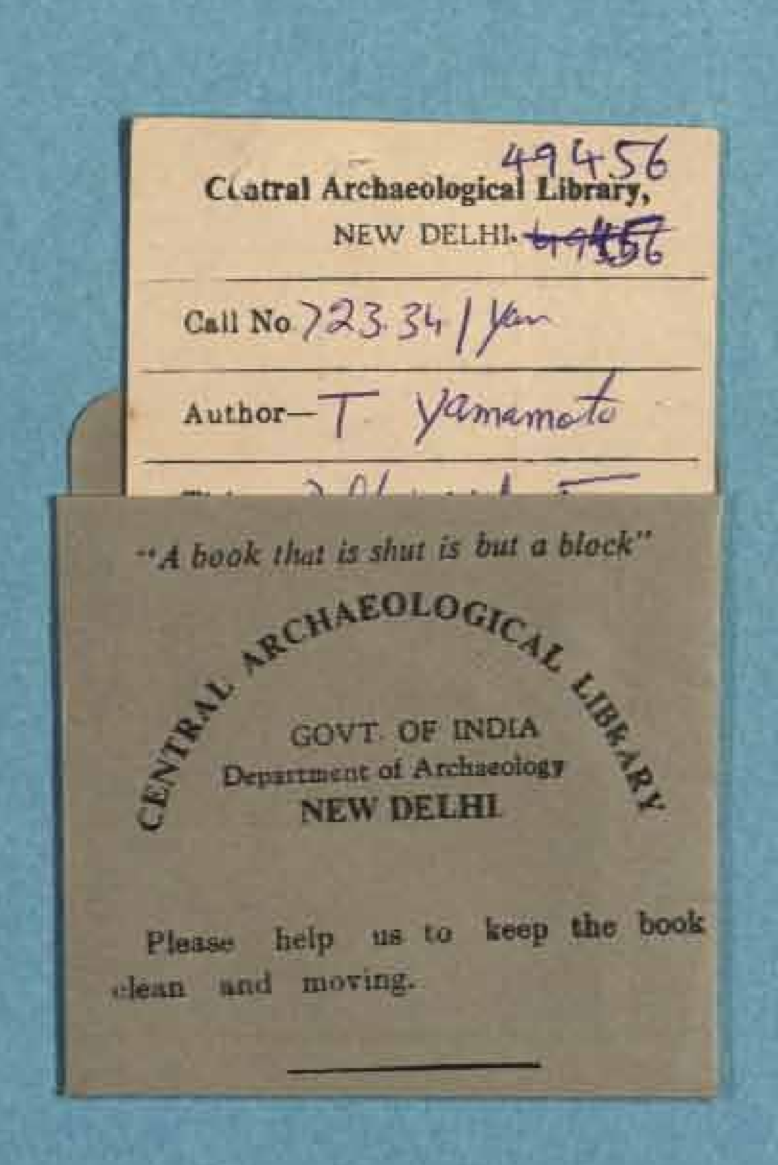
1970年3月20日印刷
1970年3月30日発行
非売品

デリー III 水利施設

発行者 東京大学東洋文化研究所
製作所 財団法人 東京大学出版会






Central Archaeological Library,
NEW DELHI.
49456
Call No. 723.34 / Yam
Author— T. Yamamoto
"A book that is shut is but a block"
CENTRAL ARCHAEOLOGICAL LIBRARY
GOVT. OF INDIA
Department of Archaeology
NEW DELHI.
Please help us to keep the book clean and moving.